

富士川水運資料③

遠藤明子氏寄贈

富士川運輸会社社長

# 遠藤聰知記録

富士川町教育委員会

富士川町郷土資料叢書



口絵1 遠藤聰知 肖像 中丸精十郎 画 (向かって左上にサインがある) 富士川町教育委員会所蔵



口絵2 遠藤隆吉肖像（作者未詳） 富士川町教育委員会所蔵

# 富士川町郷土資料叢書第七集の発刊によせて

富士川町教育長 古 屋 三千雄

二七〇年に及ぶ江戸幕府の時代が終わり、新しい明治の世の中がはじまると、日本中に大きな変革が訪れたのは申すまでもありません。

「下げ米、上げ塩」という言葉に象徴されてきた富士川の水運も、社会の変化に応じて、近代的改革を求められたのです。

この時、甲州三河岸の間屋や商人たち、さらに数百艘にも及ぶ高瀬舟の船頭・乗組員の人々を、「富士川運輸会社」という大きな一つの組織にまとめる中心的な役割を果たしたのが、今回ご紹介する富士川運輸会社社長 遠藤聰知えんどうそうちという人物でした。

彼は、巨摩郡第三十一区（鰍沢・柳川・十谷・長知沢・西嶋・大塩・鳥屋・箱原・久成・平須）の初代区長を務めると同時に、富士川運輸会社の初代社長として、富士川水運の改革に貢献した人物です。また、学区取締として、鰍沢小学校をはじめとした新しい小学校の建設にも尽力しています。

区長というのは、江戸時代の各村の名主・長百姓にあたる戸長・副戸長の上に立って、いくつもの村々の利害を調整し、その広い地域をまとめていく仕事でした。それは、国や県の新しい改革の意向と地域の現実や歴史との間に立って、新しい制度の普及・浸透のために奔走しなければならぬ大変難しい仕事でもありました。その上に、運輸会社の社長も務めるといっわけですから、その苦労は並大抵のことではなかったでしょう。

この記録は、遠藤聰知という一人の人物が、どのように近代を生きたのかを知ることができる記録ですが、それとともに、資料が少ない明治の富士川水運の歴史について、その取扱商品名や数量・金額・運賃や新しい運河の開削などを詳細に知ることものできる、得がたい資料でもあります。

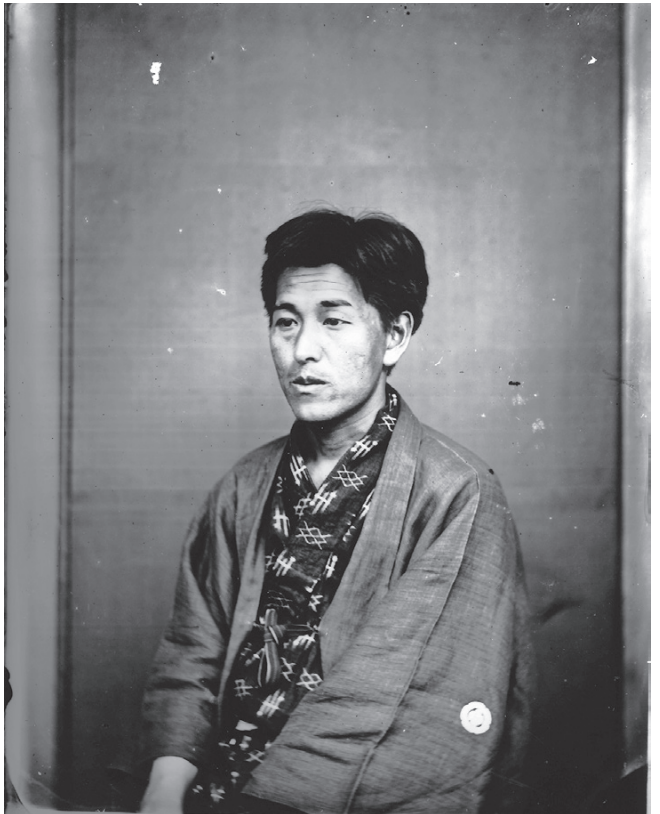
運輸会社の社長は選挙で選ばれたようですが、圧倒的多数の票で選出されていますから、政治力や指導者としての資質だけでなく、人望も厚い人物であったようです。

ちよつと見ると、漢字の多い、少し難しいと思われる資料ですが、現代という大きな変化の時代に生きる私達は、このような明治の先人の生き方から、学ぶ点も大いにあるのではないのでしょうか。

二〇二二年（令和四年）十一月吉日



遠藤聰知写真



# 解説

「遠藤聰知記録」について 本書は、令和四年（二〇二二）二月七日に、遠藤明子氏から富士川町教育委員会に寄贈された諸資料のうち、スクラップブック二十冊に貼り合わされて残されていた、遠藤聰知の手になる「商社記」・「誌」・「運輸会社諸記」などと題された資料のコピーをもとに、『富士川運輸会社社長遠藤聰知記録』と題して活字化し、刊行するものである。ただし、後述するように遠藤聰知は巨摩郡第三十一区区长や第八大学区学区取締、明治十二年（一八七九）の府県会規則による県会議員も務めており、収録されている資料は、必ずしも富士川運輸会社に関わるものばかりではない。また、同社は遠藤聰知没後、養嗣子の遠藤隆吉、その子三郎によって社長が引き継がれているが、資料の大部分は遠藤聰知による記録と考えられる。

このコピーを作成したのは、聰知の曾孫にあたる遠藤隆夫氏で、氏は晩年遠藤家の歴史執筆を志し、その必要から当時教育委員会所蔵の原典をコピーしたのである。

本資料は、昭和三十四年（一九五九）に刊行された旧『鰍沢町誌』の末尾に附されている「富士川水運史資料」（八三七ページ以降）の目録のうち、八四一ページの「90 誌 六冊 明治六年より 遠藤隆男」と「91 運輸会社諸記 二冊 明治十、八 遠藤隆男」（本来は遠藤隆夫である）に該当するものと思われる。同町誌の斉藤良一「富士川水運考」には、本資料の翻刻が多く見られる。同書、青山靖（しずか）氏執筆分は、同年独立して同氏著『富士川水運史』として刊行され、資料もそのまま引用されている。ただし、同書一四二〜四ページなどに遠藤聰知や富士川運輸会社についての言及はあるが、その眼目は近世の富士川水運史であり、遠藤家文書の引用は、「富士川水運史年表」中には限られている。その後、明治百年を記念して昭和四三年（一九六八）十月十五日〜十七日に行われた「富士川水運史資料展覧会目録」にも、出品者遠藤はまじの名で188と213に載っている。また、新『鰍沢町誌』においても、上巻（平成八年（一九九六）刊）の九八七・九九二・一〇〇五ページの三ヶ所に本資料の写真が掲載されている。

このように地元ではよく知られた資料であるが、新『鰍沢町誌』刊行後、二〇二二年九月十二日（月）まで、三十年近く本書の所在は不明であった。歴史

研究の常道からいえば、資料の原典から活字資料は作成されるべきであるが、たとえコピーであっても、近代富士川水運史の典拠となる本書の刊行は重要である。その意味でも、遠藤明子氏の本資料の御寄贈は誠に有難いことであった。また、資料集を作成できるほど、このコピーは丁寧に作成されていた。私たちは、このコピーを元に入稿原稿を作成し、九月十六日（金）に入稿を果たすべく準備をしていた。ところが、入稿直前の月曜日に、町誌編集室内で、突如として薄い色の古い風呂敷に包まれた資料が八冊・状一通が発見されたのである。不思議な運命としか言いようがない。本書の刊行は、ひとえに遠藤明子さんの資料の御寄贈が機縁であり、出版の準備が進んでいた。一方、その準備が進むにつれて、富士川運輸会社初代社長遠藤聰知に、かかる記録が存在することが知られ、その時を待っていたかのように実物の文書が発見されたのである。このため、入稿を五日延ばして九月二十一日（水）とし、これまでスクラップブック二十冊に分けて作成した目次を、新たに出現した八冊と状一通にあわせて再編した。また、二校で原典照合をすることができた。

「遠藤聰知記録」目次 それらは、①商社記五番↓②誌一↓③誌二↓、④誌二号↓⑤誌番号↓⑥運輸会社諸記十号↓⑦運輸会社諸記十一号↓⑧運輸会社諸記二十号、である。ただし、⑨「富士川運輸合資会社利益金配当精算表」のみ未発見である。また、⑩として、慶応三年（一八六七）二月の「乍恐以書付奉歎願候」という鰍沢村凶作のため五百両借用願に関する形状式の文書を掲載した。冊子それぞれには、たとえば①商社記五番であれば、「1-1」のように通し番号を付した。

目次は、月日のわかるものはそれを載せ、不明の場合は（無記載）とした。原題が有るものはそれを掲げ、（ ）に内容を補った。（ ）だけの場合は原題がないことを示す。

遠藤聰知という人 遠藤聰知は、明治二十四年（一八九一）十一月二十二日、五十二歳で亡くなっている（写真1 遠藤聰知墓碑 蓮華寺）。戒名は「三智院耕雨日潤信士」である。リウマチと肺炎を併発したことによるという（旧『鰍沢町誌』三三一ページ）。数えて計算しているとすると、生まれたのは天保十一年（一八四〇）ということになる。家は「醤油屋」の屋号で、父長次右衛門迪知は鰍沢村の有力者遠藤太右衛門義知の次男で、遠藤隆夫氏作成資料によれば、天保八年（一八三七）に分家したという。加部さんのお話では、祖母のはまじさんは、ご近所の方から「醤油屋のおかみさん」と呼ばれていたそうで、



写真1 遠藤聰知の墓碑（蓮華寺）

「本家が酒屋で分家は醤油屋」とも、よく聞いたとのことである。先学の記述では、代々長次右衛門を襲名した、ということであったが、家としては分家した父の名を継いだ二代目ということになる。家族や地元では遠藤聰知（そうち）さんと呼んでいるが、これはあくまでも通称であろう。父の長次右衛門迪知（ただとも）と同様に、聰知を「一とも」と読む諱（いみな）があつたはずであるが、今に伝わってはいない。明治三年（一八七〇）の資料（青山幸太家文書）によると、家族構成は次のようである（蓮華寺の表記は資料のママとした）。

農業 農間稼 酒造 醤油造 質屋 「獵師」（消去）  
持高三拾貳石五斗五升壹合 外他村持高拾石五斗五升三合

小物成米六升五合四夕

日蓮宗当村蓮花寺旦那

「元治元子年長百姓見習」（消去）  
慶応四辰年三月長百姓役入被仰付候 明治三年 三十一才 長次右衛門

慶応四辰年六月甲府柳町忠右衛門娘娶 同 二十七才妻 ゐ と

同 十才女子 つ る

万延元年六月駿州今泉村恵順（お）娘 父後妻娶 同四十五才継母 た そ

⑧ 四人内男三人 女一人

この時（明治三年（一八七〇））三十一歳であるから、同様に数えて計算しているとすると、生まれたのはやはり天保十一年（一八四〇）ということになる。農間稼として、酒造・醤油造・質屋・「獵師」（消去）を挙げたおり、先の「醤油屋」という屋号にも拘わらず、多角的な経営を行っていたことがわかる。消去されているのが、最後の獵師というのは謎である。富士川の川漁であろうか。父は既になく、駿河国の富士郡今泉村（静岡県富士市今泉）から入った継母のたそも入れて一家四人である。この他、奉公人は当然いたはずだが記載されていない。これは【表1】の他家も同様である。

【表1】 鯉沢村村役人一覧 明治3年（1870）

順番	名前	年齢	持高(石)	村内	村外	小物成	職業	農間稼	高瀬舟	馬	旦那寺	家族	男	女	長百姓役入
1	中込清左衛門	61	144.133	91.929	52.204	—	農業	酒造	—	—	蓮花寺	4	2	2	明治3・7・10
2	太郎左衛門	31	15.946	15.946	—	—	農業	質屋	—	—	蓮花寺	6	3	3	明治3・7・10
3	喜平次	52	63.743	63.743	—	0.046	農業	酒造	—	2疋	妙慶寺	4	2	2	嘉永5・3・11
4	岩太郎	61	17.641	9.681	7.960	—	農業	酒造	—	—	妙慶寺	6	3	3	明治3・7・10
5	長蔵	60	0.546	0.546	—	—	農業	—	—	—	経王寺	8	4	4	天保8・6
6	遠藤太右衛門	49	72.883	63.518	9.365	0.007	農業	酒造・質屋	—	—	蓮花寺	5	2	3	万延元
7	三郎右衛門	61	23.678	3.932	19.746	—	農業	塩	8艘	—	蓮久寺	5	3	2	明治3・7・10
8	正蔵	29	50.296	27.096	23.2	0.006	農業	質屋	—	—	蓮久寺	8	5	3	明治3・7・10
9	其右衛門	54	12.406	11.465	0.941	—	農業	酒造・質屋	—	—	蓮久寺	9	4	5	元治元・7
10	長次右衛門	31	43.104	32.551	10.553	0.065	農業	酒造・醤油造・質屋	—	—	蓮花寺	4	1	3	慶応4・3
11	市左衛門	45	5.512	5.512	—	—	農業	—	—	—	蓮久寺	8	4	4	元治元・7
12	糸右衛門	41	19.387	14.040	5.347	—	農業	—	—	—	経王寺	5	3	2	明治3・7・10

\*10 長次右衛門が明治6年（1873）に遠藤聰知と改名する

蓮華寺の表記は資料のままとした（青山幸太家文書による）

村内外を合わせて四十三石余で、同時代の村役人の一覧表【表1】を見ると、村役人の中の長次右衛門家は、持高は全体の五番目、村内持高は四番目で中堅の位置にある。本家の遠藤太右衛門家と合わせると、総持高は一一五石余で村内二番目、村内持高は九十六石余で一番目ということになる。鰍沢村の寛文檢地の際の村高が一十五石余であるから、その一割近くを占めていたことになる。なお、塩を扱う中村屋三郎右衛門（雨宮姓）家は、養嗣子隆吉の実家であるが、八艘の船を所有している。「複数の船を所有する者はほとんどいない」（青山靖「富士川水運の民俗」、と書かれているこれまでの通説とは異なる存在である。はじめ、父の名を継いで長次右衛門を名乗っていたが、明治六年（一八七三）十月になって、遠藤聰知と名乗ることを官に上申し、十月二十八日に許可されている（本書四十一ページ）。新しいことに積極的に取り組む人であったとい、明治前期の写真を残している、その内の八点を掲載した（前掲）。この他、「明治美術会員」の中丸精十郎画伯に依頼した肖像画（口絵1）や、「釜の口絵図」（仮称）を残している。中丸精十郎（天保十一年生まれ）と遠藤聰知の接点は、ともに山梨県出身で同年生まれであること以外に、見つけることはできなかった。

本書の用紙は、①は一般の和紙、②・③は無銘の罫紙、④以降は中央に「遠藤聰知」または「富士川運輸會社」・「山梨縣 運輸會社」、ごく一部「山梨縣 荷質貸付會社」・「巨摩郡 第三十一區」の名前を青く印刷した罫紙が用いられ、稀に「山梨縣」・「鰍沢警察署」の罫紙が見られる。また、実物資料で初めて分かったことは、六冊目の「明治十年八月ヨリ 運輸會社諸記十号」の冒頭、6-1・2の文書が、全文青い染料で書かれていることである。これは、万年筆用のインクを筆に含ませて書いたものではないだろうか。この点は試料を調べてみないとわからないが、いずれにせよ墨一色の時代に、藍色の文書を書いて見せた遠藤聰知の面目躍如といったところであろうか。

**富士川運輸會社と遠藤家** こうした遠藤聰知の生涯の中で、一番の功績は、三河岸の者たちと語らって、明治七年（一八七四）富士川運輸會社を結成し社長となり、明治十年（一八七七）には、荷質貸付會社を設立して積み荷輸送を金融面で支援し、富士川水運の近代化を図ったことである。この会社は、明治二十四年に聰知が亡くなると、養嗣子遠藤隆吉（口絵2参照、明治二十八年死去）、やがて孫の遠藤三郎（昭和十三年・一九三八年、五十一歳で死去）が社長を嗣ぎ、会社発足から大正十一年（一九二二）の解散（異説有）まで、五十年に及ぶ

富士川運輸會社は、社長の遠藤家とともにその時代を生きたのである（隆吉と三郎の間の社長は不明）。ちなみに、中央線の甲府までの開通は明治三十六年（一九〇三）三月、身延線の甲府までの開通は昭和二年（一九二七）六月である。ただし、名主などの村役人・区長・県会議員や運輸會社社長・学区取締という輝かしい肩書きに比して、遠藤聰知のそれぞれの分野における功績を詳しく伝える一次資料が、本書以外に余り残されていないのは残念である。本書にしても、「商社記」は五番と表紙にあるが、前後にこれにつながる番号は見当たらない。「誌一」はこれで完結していると仮定しても、「誌二」と「誌二号」はどこが異なるのか、「運輸會社諸記」は十号・十一号・二十号のみであり、それ以外の冊子は残されていないのである。旧『鰍沢町誌』の段階からこの状態であったと思われるが、元の記録は、少なくとも現在の数倍から十倍に及ぶ分量があったのではないだろうか。

本資料は、近代の富士川水運史を語る上で非常に重要な文書であり、資料すべての翻刻を図ったため、叢書の予定の三倍に近いページ数になってしまった。輸送物資の量や価格、運輸會社の株券の所有者名など言及すべき事項は無数にある宝の山であるが、解説はこのくらいに留め、内容の詳細については、先の青山靖氏の著作や、新『鰍沢町誌 上巻』第四編を参照されたい。そこには、青山靖氏の旧稿や遺稿、さらに編纂室の望月武美氏の新稿も収録されている。遠藤聰知個人については、『山梨百科事典』（山梨日日新聞社）の遠藤聰知の項（青山靖氏執筆）や新『鰍沢町誌 下巻』第十二編（望月武美氏執筆）がある。また、旧版の『山梨県史』や新版『山梨県史』資料編 近世・近現代編にも関連資料が収録されている。通史としては、新版『山梨県史 通史編』近世・現代の該当部分や、増田廣實「富士川運輸會社の創業について」・「富士川運輸會社の発展について」（文教大学短期大学部研究紀要20号・21号）一九七六年・七七年、のち同氏著『近代移行期の交通と運輸』二〇〇九年に収録）がある。なお、増田氏も本資料の原典を見ることができず、旧『鰍沢町誌』に翻刻された部分によって論文を作成した、と述べている。このほか、有泉貞夫「富士川の蒸気船」（『山梨県史研究』第7号）、加藤要一「甲府盆地における甲斐運輸會社の運河開鑿について」（『山梨県史研究』第13号）などがある。報告書としては、山梨県教育委員会『富士川水運』（山梨県歴史の道調査報告書第19集）があり、鰍沢河岸発掘の成果は、山梨県埋蔵文化財センター『鰍沢河岸跡（I）・II・III・IV・V・VI』・鰍沢町教育委員会『鰍沢河岸跡（横町地区）』として刊

行されている。この他、『静岡県史』にも関連資料がある。

なお、ここに収録した遠藤聰知家系図は、遠藤隆夫氏作成のものを、姪の加部公子氏に御提供いただいた。平成十九年（二〇〇七）に八十三歳でなくなった遠藤隆夫氏は、遠藤家の家史を計画され、家族や富士川水運の古写真や絵ハガキ、拓本、富岡敬明の揮毫や関連書籍などを広く収集された。その構想は目次案として残されている。遠藤聰知が社長となった経緯や富士川で使用された高瀬舟のことなど、どれも興味深い内容である。文字には残らない、遠藤家に伝わった逸話も記されることになっていたのである。この記録が完成していたなら、と誠に残念である。ワープロの中に原稿の下書きでも残っていないだろうか。収集された家族写真についても、遠藤聰知・隆吉・三郎の三代について分類されているが、写っている人々の大部分は注釈がなく、その名前は、ある程度ご自身でわかっておられたのではないだろうか。これらの構想と写真のキャプションなどは、遠藤隆夫氏の記憶とともに現在では永久に失われてしまった。

遠藤家の隠居所は、鰍沢町一四二三番地にあった。現在は平地になっている。身延線鰍沢口駅の方から富士川橋を渡り切ったたもと、鰍沢の街に向かって左側の小さな橋を渡った一番手前の家であった（写真2・3・4・5参照）。その前を通って、右手にある山梨交通バスの鰍沢営業所に向かうのであるが、学生時代以来、筆者はそれと知らずに、何度この家の前を、リュックを背負って通ったことだろうか。生前の遠藤隆夫氏にお目にかかれなかったのは、本当に悔しいことである。この屋敷は、明治十年（一八七七）建築の平屋（五〇㎡）と、同三十年（一八九七）建築の二階屋（九一㎡）の二棟で、平屋の方は檜皮ぶきで檜木などの良材が使用された八畳二間、廊下付きの瀟洒な建物、二階建ての方は二階天井が傘を広げた格好の唐笠天井であったという。平成十三年（二〇〇一）に一旦解体され、町の構想ではかさ上げされた後の土地に、舟運資料館やこの建物などを再建して当時の街並みを復元し、周辺を新しい鰍沢町の河岸跡公園にすることになっていたが（『朝日新聞』平成十三年五月五日の記事による）、その後、町村合併もあり、この構想は実現されていない。舟運資料館のみ、現在、別の場所に実現されようとしている。鰍沢河岸の発掘を担当された新津健（たけし）氏によれば、屋敷の松の木が、山梨県立博物館の庭園に移植されて残っている、とのことである。この他、湯村の常磐ホテルに移植された松の太木、菩提寺の蓮華寺に移植された紅葉もあつたという。

なお、遠藤隆夫（たかお）氏の表記については、旧『鰍沢町誌』ではすべて

「遠藤隆男」となっており、『鰍沢河岸跡』を除いて）諸書もこの表記を引いている。実は筆者も数十年來、本資料の所蔵者名をこのように認識してきた。しかし、このたび姪の加部公子さんから遠藤隆夫氏の残された遠藤家に関する資料を借覧し、遠藤隆夫氏ご自身が「隆夫」とされており、加部さんに確認したところ、「遠藤隆夫」と表記していたというお話である。このため、書籍の引用ではそのままの表記を用いたが、その後（実際は「遠藤隆夫」である）と注記した。また、明治百年記念の「富士川水運史資料展覧会目録」における「遠藤はまじ」という表記についても、位牌では「遠藤はまじ」、遠藤隆夫氏作成資料では「遠藤はまに」となっており、読みが様々で確定できなかったが、同様に加部さんに確認すると、ご本人の手紙などは「遠藤はまじ」としてのことである。遠藤隆夫氏の実母であるから、同氏の「遠藤はまじ」やワープロで作成したと思われる一覧表にある「遠藤はまに」を本来の名としておきたいところでもある。菩提寺の過去帳は「遠藤はまじ」として「はまじ」とルビを振っているのが、戸籍上の名前が「はまじ」で、日常生活では「はまじ」を用いておられたのだろうか。名前表記の難しさを痛感したところである。

ともかく、旧『鰍沢町誌』における、「遠藤隆夫」とすべき表記を、六十年以上たつてから訂正することができたのは、今回の収穫といえようか。一方、筆者自身も、資料を記録する者の責任を強く感じた次第である。

なお、口絵の絵画は遠藤家から寄贈を受け、現在富士川町教育委員会所蔵、それ以外の写真はすべて加部公子氏の提供である。

（菊池 邦彦）

#### 遠藤聰知署名

遠藤聰知

のほろり

遠藤聰知

遠藤家

正長

長藤隆夫

のほろり

長藤隆夫

のほろり

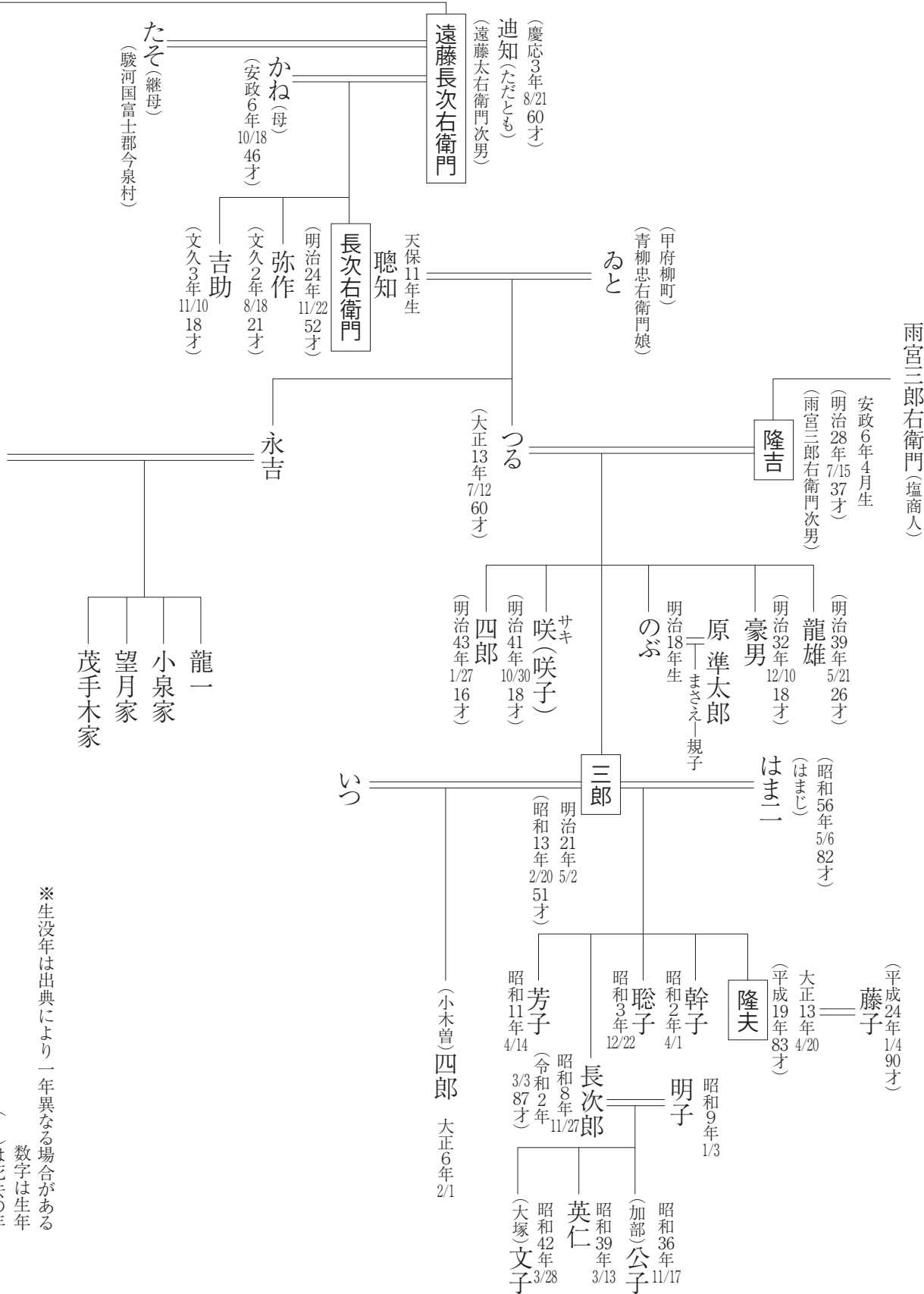
遠藤聰知

正長

# 遠藤聰知家系図

(遠藤隆夫氏作成系図に一部加筆)

遠藤太右衛門  
— 遠藤太右衛門  
.....  
.....  
..... (遠藤太右衛門養女)



※生没年は出典により一年異なる場合がある  
数字は生年  
( )は死去の年



写真2 富士川橋の側から見た遠藤家屋敷  
小さな川にかかる裏門の橋が見える  
奥に見える次の橋が表門に通じる



写真3 (絵画) 玄関に続く表門の橋の絵



写真4 (絵画) 裏門に通じる橋から見た屋敷の絵



写真5 庭から見た遠藤家の屋敷

『遠藤聰知記録』

富士川水運資料③

富士川町郷土資料叢書第七集

目次

口絵1 遠藤聰知肖像 中丸精十郎 画  
口絵2 遠藤隆吉肖像 (作者未詳)

富士川町郷土資料叢書第七集の発刊によせて

富士川町教育長 古屋三千雄

遠藤聰知写真  
解説

『遠藤聰知記録』

富士川運輸会社社長・第三十一区区长・第八大学区学区取締

- ①「商社記五番」・②「誌一」・③「誌二」・④「誌二号」・⑤「誌老号」・
- ⑥「運輸会社諸記十号」・⑦「運輸会社諸記十一号」・⑧「諸記第二十号」・
- ⑨「富士川運輸合資会社利益金配当及損益金精算表」

① 「商社記 五番」

明治4年(1871) 5月～8月

1-1	5	／	(塩買入代金一人当千両宛拜借願) 乍恐以書付奉願上	21	1-15	6	／	27	(柳町入塩取扱人ノ献金) 乍恐以書付見込奉申上候	29
1-2	5	／	28	(鰍沢河岸船頭共塩直買いの旨) 差上申御請書之事	21	1-16	6	／	(入塩取扱人一同ノ献金) 乍恐以書付奉願上候	29
1-3	(無記載)	(登り荷物運賃書上げ) 覚	21	1-17	6	／	7	(岩測河岸の者塩売買正路の取り扱いの旨)	30	
1-4	(無記載)	(甲信両国諸荷物運送新ルート)	22	1-18	6	／	20	(岩測河岸での塩正路の取扱いの旨)	30	
1-5	6	／	(富士川通運送) 会社規則	22	1-19	6	／	20	(静岡藩へ、岩測河岸へ甲府県官員等派遣監督連絡)	30
1-6	6	／	(由比宿荷物引受人) 口演書	22	1-20	6	／	(静岡藩庁ノ岩測河岸の者甲府県庁へ歎願派遣連絡)	31	
1-7	6	／	(三河岸船頭共ノ是迄通り願) 乍恐以書付奉歎願候	23	1-21	6	／	17	(郡中惣代も岩測河岸派遣監督) 乍恐以書付奉申上候	31
					1-22	6	／	18	(岩測河岸心得書提出) 御尋ニ付乍恐以書付奉申上候	31

1-23	6/23 (郡中捻代も岩渕見廻りする旨) 差上申一札之事	31
1-24	8/ (岩渕河岸塩取扱い方) 奉差上御請書之事	32
1-25	8/4 岩渕河岸村請世話役勤方	32

② 「誌一」

明治6年(1873) 7月~明治7年(1874) 3月

2-1	7/勸農世話方人選	33
2-2	7/7 当郡費半高割取集記	33
2-3	7/24 新聞紙御世話願	34
2-4	7/25 (出頭宥免願) 御達二付申上	34
2-5	7/ (食塩弊害是正のため取締方法)	34
2-6	8/4 (鰍沢村) 小学校新築願	35
2-7	8/4 (鰍沢村) 新築小学校用材御下賜願	35
2-8	8/16 (鰍沢村新築小学校用材伐木場所願) 記	36
2-9	8/27 (軍品金屑等なき旨) 御届	36
2-10	9/10 (区长遠藤長次右衛門印鑑札届)	36
2-11	9/12 小学校用材御下願	37
2-12	9/19 (小学校用材最寄り官林にて下賜願)	37
2-13	(無記載) (水車業人名・白数再調査提出)	37
2-14	9/22 (皇城造宮献金願)	37
2-15	9/20 巨摩郡第三十区最勝寺村戸長身分進退見込書	37
2-16	5/古乗駕籠御伺	38
2-17	(9/25) 朱肉用方之儀二付御伺	38
2-18	9/30 (鰍沢蓮華寺を喚集所とする) 御届	38
2-19	10/11 巨摩郡第三十一区正副戸長人名取調書	39
2-20	(無記載) 職猟税金取集上納	39
2-21	10/ (当区内に十七歳の者無き旨)	39
2-22	10/ (当区内に成丁の者無き旨)	40
2-23	10/ (当区内制法読知施行) 御届	40
2-24	10/十谷村正副戸長分出願之義二付見込書	40
2-25	10/十谷村副戸長増員入札之義二付申上書	40
2-26	10/ (改名・金券) 御伺	41
2-27	10/ (遠藤長次右衛門、聰知の実名使用) 御願	41
2-28	10/12 (当区内駕籠・人力車税上納書上)	41
2-29	11/巨摩郡第三十一区藍瓶并絞油税金上納	42
2-30	11/ (鰍沢小学校新築場所蓮華寺境内伐木・下賜) 御願	43
2-31	(無記載) (西嶋村副戸長代人・増員推薦状)	43
2-32	11/存置官林取調書	43
2-33	11/御払下官林箇所取調書	44
2-34	11/ (当区内に英国籠動府博覧会出品物無き旨) 御届	44
2-35	11/ (鰍沢村) 副戸長廢起見込書	44
2-36	12/8 (西嶋村小学校) 開校願	45
2-37	1/18 (鰍沢村新築小学校用材) 伐木願	45
2-38	12/徴兵成丁簿・徴兵免役連名簿	45
明治7年(1874)		
2-39	(無記載) 職猟御鑑札御引換願	46
2-40	1/職猟廢業二付御鑑札御返上願	47
2-41	1/27 (職猟銃願鑑札下付者受書) 記	47
2-42	2/2 郵便取扱人撰見込	47
2-43	2/7 小学校新築用途金御届(献金)	48
2-44	2/ (鰍沢村新築) 小学校用材御下賜願	48
2-45	2/15 箱原村ヨリ西嶋村マテノ間横道取調	48
2-46	2/17 郵便取扱人之義二付申上	48
2-47	2/17 (物産取調并表提出) 御猶予願	49

2	48	2	17	長御免願二付跡戸長役見込書	49	3	17	7	19	(学校生徒試験官動向) 御伺	61
2	49	2	/	(鰍沢駅・切石駅間、区継人足賃差加願) 記	49	3	18	7	/	巨摩郡第三十一区明治六年民費課出捻計	62
2	50	2	24	(鰍沢村新築小学校資用材下賜請取) 記	49	3	19	7	/	巨摩郡第三十一区明治五年民費課出捻計	62
2	51	2	25	(箱原村) 副戸長進退申上	50	3	20	7	24	(駿州往還修繕用材伐採) 御願	63
2	52	(無記載)	(醸造人) 御鑑札名目改正願	51	3	21	7	27	駿河御差免願(出張)	63	
2	53	3	8	(箱原村) 副戸長人撰入札之義二付申上	51	3	22	7	28	(駿州往還道路修繕用松・杉・竹受取請書) 記	63
2	54	3	8	(箱原村) 副戸長人撰見込書	51	3	23	7	30	(高下村) 副戸長当器之もの見込書	64
2	55	3	9	(業種別人数) 商工取調書	51	3	24	8	8	(陸軍諸兵希望者なき旨) 御届	64

③ 「誌 二」

明治7年(1873) 3月~10月

3	1	3	29	(鰍沢村) 小学校新築用途献金願	55	3	28	8	25	小学校資用材伐木御伺	65
3	2	4	4	(久成日清、中教院) 有志之者等級見込書	56	3	29	8	/	(駿州往還道修繕) 橋架其他資用材御下賜願	65
3	3	6	11	国民軍免役簿扣	56	3	30	9	3	(東京鎮台工兵志願者なき旨) 御届	66
3	4	7	4	10 (入塩取扱中金三百円入狂一件見込書)	56	3	31	9	/	(徴兵成丁簿提出)	66
3	5	4	/	(最勝寺村) 正副戸長進退見込書	57	3	32	9	5	(海軍兵学寮入寮志願者なき旨) 御届	66
3	6	3	27	(区長を官等十四等に准じ取扱う旨請書)	57	3	33	9	11	(道路修繕用材不足分) 御願	66
3	7	4	27	(鰍沢村) 郷社祭典之義二付御伺	57	3	34	9	17	(区内久成・十谷に鰍沢小学校分校設置) 御伺	67
3	8	4	29	(鰍沢村) 小学校用材之義二付御伺	58	3	35	9	/	徴兵免役連名簿	67
3	9	5	15	(鰍沢村) 小学校新築用途献金願	58	3	36	9	25	(長知沢村) 戸長人選見込書	68
3	10	5	19	道路修築之義二付御願	59	3	37	9	27	(戸川新築堤に) 桑植付之義二付御願	68
3	11	5	22	区長捻代理人撰書	59	3	38	6	/	巨摩郡第三十一区養蚕捻計	69
3	12	5	/	(入塩取扱中金三百円行違一件解決方) 申上	59	3	39	9	27	駕籠取調書	69
3	13	6	4	(鰍沢村) 小学校資用材伐木願	60	3	40	9	29	(鰍沢村) 副戸長人撰見込書	69
3	14	6	/	(西嶋) 小学校生徒御試検願書	60	3	41	10	3	(依田日寛、中教院) 有志之者等級見込書	69
3	15	7	8	(正副戸長拜命勤務中家督相続) 御伺	61	3	42	9	/	(駿州往還道路修繕資用材御下賜請書) 記	70
3	16	7	/	(中暑予防法配布) 御請書	61	3	43	10	7	(無断合併三ヶ村に奥書すべき哉) 御伺	70

3 44 10/17道路修繕落成御見分願……………71  
3 45 (無記載) 明治七年酒造御免許鑑札造高石数) 記……………71

4 「誌 二号」

明治8年(1875) 4月~11月

4 1 4/(増穂村に一会社設立願)……………72  
4 2 4/12船税御規則中御伺……………72  
4 3 4/12船税取立方ニ付上申……………73  
4 4 4/24(安政二年一月~二月十五日生の者なき旨) 御届……………73  
4 5 5/1(小泉義誕、中教院) 有志ノ者等級見込書……………73  
4 6 5/2(小作人取調) 申上……………74  
4 7 5/5学校献納品御届……………74  
4 8 5/5正副戸長撰挙増員願……………74  
4 9 5/5(大須成村) 旧村名改正称呼御届……………75  
4 10 4/12(官有地五ヶ年拝借)……………75  
4 11 5/14(当区内廃寺取調書類、明治七年差上の旨) 申上……………76  
4 12 5/17駕籠鑑札返上……………76  
4 13 5/24(依田日桓、中教院) 有志ノ者等級見込書……………76  
4 14 5/28当区大須成村正副戸長人撰見込書……………76  
4 15 5/28大須成村元正副戸長人名書上……………77  
4 16 5/31(平民ニシテ有禄ノ者) 御伺……………77  
4 17 5/31(箱原・西嶋間、新道切開) 道路世話方願……………78  
4 18 6/4(建議すべき事なき旨) 申上……………78  
4 19 6/28(鰻沢村常唱堂など堂宇・建具払下入札上申)……………79  
4 20 6/28(区内社寺私墾地原由取調書上)……………79  
4 21 7/6(新道切開岩切請負人植松治作事故不明) 御届……………79  
4 22 7/7(新道切開岩切請負人事故死屍発見) 御届……………79  
4 49 11/2岩割口火御下願……………89  
4 48 11/2(遠藤聰知、草烟草入・洋銀烟管など) 紛失品御届……………89  
4 47 10/28(鰻沢村柳沢久次郎) 至孝具陳書……………88  
4 46 3/20(遠藤聰知) 区長役御差免願……………88  
4 45 10/24(五開村副戸長増員・事務所取立願) 申上……………88  
4 44 10/24(小学校などの番号付与) 御伺……………88  
4 43 10/23(富士川運輸会社船頭共静岡県下賭博取締) 懇願……………87  
4 42 10/15(陸軍教導団生徒志願者なき旨)……………87  
4 41 10/5(鰻沢学校世話方増員願)……………87  
4 40 10/4当区新道切開ニ付用竹御下賜願……………87  
4 39 10/3度量衡売捌人見込書……………86  
4 38 10/3(鰻沢村副戸長人撰見込書)……………86  
4 37 9/3(鰻沢学校世話方願)……………86  
4 36 8/20度量衡売捌人見込書……………86  
4 35 (無記載)(新道切開工事事故による不足分の件) 御伺……………84  
4 34 8/10(元朱黒印除地有之寺社廃合なき旨) 御届……………84  
4 33 8/9(巨摩郡第三十一区物産数)……………83  
4 32 8/7(猪鹿威銃願)……………83  
4 31 8/5(植松治作変死之節搜索入費其他取調書)……………83  
4 30 8/24(戸籍職分寄留捻計) 御伺……………82  
4 29 (無記載)(区内廃寺入札代価内訳)……………82  
4 28 8/2(区内廃寺入札取纏め代価上納)……………82  
4 27 7/30(第三二区戸長・副戸長俸給など取調上申) 記……………82  
4 26 7/28(開闢・富士川凶・川船・難所) 富士川原由記……………80  
4 25 7/27(絞油鑑札取纏返上)……………80  
4 24 7/24(旅行ヒストール持参之義御伺)……………80  
4 23 7/8(石灰・瓦焼営業者なき旨) 御届……………79

4	50	11	2	(焰硝五斤代金上納) 記	89
4	51	11	12	(元鳥屋樋口惣左衛門と大柳川沿寄州境論) 申上	90
4	52	11	18	(遠藤聰知) 社長御差免願	90
4	53	11	18	徴兵国民軍取調方并書式伺	90

〔誌 書〕

明治9年(1876) 1月〜4月

5	1	1	4	(入牢中のため兵卒応召無理) 御届	91
5	2	1	6	(地所取調、鯉沢村は日延願) 御請書	91
5	3	1	12	(鯉沢村孝子へ書状と為換証書届く旨) 御届	91
5	4	1	7	(5・3の書状と為替金の内容)	91
5	5	1	12	(柳川寺で五開村二番組・三番組両組) 小学校開校願	92
5	6	1	12	(五開村小学校に五味昌治) 訓導補助御試験願	92
5	7	1	18	(第三十一区地券) 実地番調記	93
5	8	1	19	(神宮寺久左衛門) 大須成村副戸長人撰見込書	93
5	9	1	31	(区内車税・旅籠屋税上納) 御猶予願	93
5	10	8	12	1 (富岡敬明の名東県権令転出へ挨拶状)	93
5	11	9	2	12 (藤村県令任期延長願) 山梨県令御用召之義二付	93

〔6〕「運輸会社諸記 十号」

明治10年(1877) 8月〜明治11年(1878) 2月

5	12	2	13	(地租改正諸帳簿提出延期願、31区〜33区) 御請書	94
5	13	2	27	(第三十一区産物石数・貫数など書上)	94
5	14	2	20	(遠藤聰知・遠藤太右衛門) 酒類受売営業願	95
5	15	2	27	(区内牛馬売買稼之者鑑札稅數日猶予) 御願	96
5	16	3	2	(志村日淨、中教院) 有志之者等級見込書	97
5	17	3	2	(樋口日慈、中教院) 有志之者等級見込書	97
5	18	3	2	(野沢貞翁、中教院) 有志之者等級見込書	97
5	19	3	4	(遠藤聰知) 区長役御差免願	98
6	12	6	12	(無記載) 嵩物積荷定度改正	107
6	11	8	29	嵩荷物船積定度改正御届	107
6	10	8	28	(遠藤聰知) 学校事務掛御免願	106
6	9	8	18	運輸会社青柳出張所明治十年上半季大勘定	105
6	8	8	4	(運輸会社監督古屋典義免黜) 御届	104
6	7	8	8	明治七年駿州往還新道開築金	104
6	6	8	7	(貸金催促に付遠藤聰知と飯島實と) 約定書之事	104
6	5	8	8	(蒲原駅塩坂兵助への貸金催促を飯島實へ) 委任状之事	104
6	4	8	8	(蒲原駅塩坂兵助への貸金催促を飯島實に代言依頼の旨)	103
6	3	8	3	(遠藤聰知) 学校事務掛御免願	103
6	2	(無記載)	二川分社ニ於テ新造船通船不可行ノ論	102	
6	1	(無記載)	二川分社での新造船中止説論) 惘願	102	
5	31	5	31	(残金三百円追加下渡) 新道切開二付御下金願	102
5	30	3	24	(箱原村天神社境内へ) 新道切開二付御願	101
5	29	3	24	(遠藤聰知、県庁出頭) 御日延願	100
5	28	3	22	(当区内三等表不足分差出方) 申上	100
5	27	3	22	(西嶋、箱原新道開鑿仕払金差支二百円) 御下金願	100
5	26	3	22	勸業世話掛撰書	100
5	25	3	19	(区内長知沢・十谷の荒地調不行届) 申上	100
5	24	3	19	(当区内村等表十三日郵送の旨) 申上	99
5	23	3	13	(伊藤義最、中教院) 有志之者等級見込書	99
5	22	3	14	(五ヶ村分耕耘難易等表提出延期) 申上	99
5	21	(無記載)	耕耘難易運輸便否村等表	98	
5	20	3	10	(遠藤聰知) 区長御免願	98

6-13	9/15	(県庁新築用材大野山へ運輸会社迄運賃) 献金額	108
6-14	9/17	(万沢まで通船路モジリ架設禁止) 御保護願	108
6-15	9/18	(富士川通船富士郡・庵原郡モジリ架設禁止) 御保護願	109
6-16	9/19	(大野山伐出材運搬と先の献金の別問合せ)	109
6-17	10/1	(大野山伐出材運搬と先の献金は別の旨)	110
6-18	11/9	(大野山伐出材運搬に三河岸船頭惣代へ百円献金) 御届	110
6-19	11/12	(蒲原浜出張所等へ船積送券へ押捺印廃止) 御届	110
6-20	11/12	(鰍沢・黒沢と青柳分社迄の運賃改定の旨)	110
6-21	11/13	(右の件青柳出張所担当副社長と協議の為日延) 御願	110
6-22	11/15	(東京麻布田中義廉方へ洋酒運搬) 御請書	111
6-23	(無記載)	秤量拾貫目二付運送賃手数料表	111
6-24	12/6	(地租金代米納所鰍沢・黒沢両河岸で運搬引受) 御願	111
6-25	12/10	(代米納所、青柳河岸も差加) 御願	111
6-26	12/24	(船頭惣代へ県庁新築用材運搬費献納未納督促)	112
6-27	12/25	(右献金即時下渡し願) 献金上納義二付聞申	112
6-28	12/26	(右件不可、至急上納の旨、県庁へ督促)	113
6-29	12/29	(富士川通船休業、下り12/28・上り/31限り)	113
6-30	12/30	(荷賃貸付会社資本金積増方法其他) 決議シタル条件	113
	明治11年 (1878)		
6-31	1/	荷賃貸付会社設立ニ付拝借金ノ利子御引下ケ願	114
6-32	1/12	(蒲原新水道建築経費不足金返済方法) 対談証書之事	114
6-33	1/12	(富士川新水道会社加入金)	115
6-34	(無記載)	富士川改船規則過怠例図	116
6-35	1/29	第二回明治十年七月ヨリ十二月迄 下半季清水港出張所大勘定精算表	116
6-36	1/20	第二回明治十年下半季運輸会社蒲原出張所大勘定	117
6-37	2/7	第六回当社大勘定御届	118
7-1	3/19	(社外の船方へ積ませぬよう) 荷物船積受書之事	122
7-2	3/	(船方負債・船税・川堀金等解消のため置銭依頼) 保護願	122
7-3	(無記載)	(借入金・利金返済方法) 御届	123
7-4	(無記載)	(置銭規則) 方法書	123
	明治11年 (1878)		
7-5	2/7	運輸会社役員御届	124
7-6	2/7	運輸会社社長・副社長御届	124
7-7	2/4	富士川ニ依り物貨運搬営業取締方ニ付回議案	125
7-8	2/3	(小廻船造立) 御検印願ノ義ニ付御伺	126
7-9	(無記載)	小廻船御検印願 (雛型)	126
7-10	2/12	(黒沢河岸当社出張所清算整理中、官員派遣検認) 御願	126
7-11	2/13	釜無川通り御見分願	126
7-12	2/13	(富士川小廻船等届出に戸長奥書必要か) 御伺	127
7-13	(無記載)	(富士川小廻船造立) 御検印願ノ義ニ付伺	127
7-14	(無記載)	小廻船御検印願 (雛型)	127
7-15	2/18	(遠藤聰知荷賃貸付会社社長決定) 御届	128
7-16	2/18	(荷賃貸付会社) 招牌掲方ニ付伺	128
7-17	2/27	当青柳運輸会社大勘定御届	128
7-18	(無記載)	第四回明治十年下半季大勘定	128
7-19	2/27	当社青柳出張所役員御届	130
7-20	2/28	明治十一年青柳出張所役員撰挙点表	130
6-38	1/29	第六回明治十年下半季大勘定	119
6-39	(無記載)	明治十一年運輸会社役員投票点表	120

〔運輸会社諸記 十一号〕

7	21	3	5	船税取立方ニ付御伺	131	明治15年(1882)					
7	22	2	28	(原告の申分難相立) 裁判言渡書	131	8	5	1	7	(羽鹿島村・楠甫村へ富士川運輸会社) 分社設立届	146
7	23	3	17	(運輸会社建築) 御届	132	8	6	1	11	(富士川運輸会社・荷質貸付会社開業年月日等一覽表)	146
7	24	3	14	(当社悉皆取集上納の旨) 船税取立方ニ付聞申	132	8	7	2	18	(静岡県博運会社へ官有地貸渡は不法) 始末書	146
7	25	3	31	(運輸会社蔵方を勸業場蒸気鐘受取派遣) 御届	133	8	8	3	20	(清水港所在山梨県官有地返地猶予願)	147
7	26	3	27	(富士川運輸会社取扱輸出入物貨取調提出命令)	133	8	9	3	23	(明治十四年中實際表提出猶予) 御願	147
7	27	(無記載)		甲斐国河岸場一覽表(雛型)	133	8	10	3	11	(運輸会社と清水港博運会社の定約解約經過報告)	148
7	28	(無記載)		一覽表下調	133	8	11	4	27	第十四回当社勘定御届	148
7	29	4	4	(当社一ヶ年一覽表、運輸会社) 御届	140	8	12	(無記載)		富士川運輸会社第十四回半季實際表	149
7	30	(無記載)		運輸会社一覽表	140	8	13	3	29	諸荷物取扱全数表	149
7	31	4	5	(当社一ヶ年一覽表、荷質貸付会社) 御届	140	8	14	(無記載)		富士川運輸会社蒲原出張所第十回半季實際表	150
7	32	(無記載)		荷質貸付会社一覽表	140	8	15	3	18	諸荷物取扱全数表	151
7	33	4	11	病院基本金利子之義ニ付伺	140	8	16	(無記載)		富士川運輸会社清水出張所第十回半季實際表	152
7	34	4	5	荷質貸付会社設立ニ付拝借金ノ利子御引下ケ願	141	8	17	3	29	諸荷物取扱全数(表)	153
7	35	4	8	拝借金利子上納	141	8	18	(無記載)		清水博運会社ト当清水出張所ト合併セシニ付	153
7	36	3	23	(三河岸船方惣代別紙誓約) 御届	142					当社之損害ヲ来タス要領左ニ	153
7	37	3	22	(船乗営業一同) 誓約書	142	8	19	3	29	(遠藤聰知) 伏テ辞職ヲ乞フ	153
7	38	4	21	(当社所属船乗営業者一同誓約) 御届	143	8	20	4	1	明治十四年從一月至十二月荷質貸付会社	154
7	39	3	22	(別紙通船乗営業者一同誓約) 御届	143					出納實際報告表	154
7	40	3	22	(船乗営業人一同申合) 誓約書	143	8	21	4	1	明治十四年從一月至十二月富士川運輸会社	154
										出納實際報告表	154
						8	22	3	29	富士川運輸会社明治十五年役員御届	155
						8	23	(無記載)		自明治十二年八月三十日至同十四年十二月三十一日	155
8	1	12	31	(静岡県清水町官舎) 建屋使用約定書	144					運輸会社ニ於テ取扱候補船方置錢支出入勘定書	155
8	2	12	31	(運輸会社の平蔵二軒を清水港博運会社へ売却)	144	8	24			明治十三年中船方置錢詳細表(明治十四年中も)	156
8	3	12	31	(清水町売却地敷地図)	145	8	25	3		(富士川通船登り運賃非常の下落対策) 契約書	163
8	4	(無記載)		運輸会社清水出張所用具売払品名	145	8	26	4	7	甲府紅梅町代言人林闔へ宛テ差出ス詳細書	164

〔諸記 第二十号〕

8-27	4/27 (食塩保険受負料五月一日ヨリ変更通告)	164
8-28	4/27 (官員派遣による当社諸帳簿検査疑問) 弁明書	164
8-29	4/27 (坊主岩) 開鑿御見分願	165
8-30	4/27 (清水港当社拝借地返地猶予) 御願	165
8-31	6/7 山梨県下鰍沢河岸富士川運輸会社清水出張所ト 静岡県下清水港波止場博運会社ト合併スル条件左ノ如シ	165
8-32	6/7 山梨県下鰍沢河岸富士川運輸会社清水出張所ト 静岡県下博運会社ト合併スルニ付本紙約定之外 添約スル条件左ノ如シ	166
8-33	6/10 (運輸会社清水出張所、博運会社と合併) 御届	166
8-34	6/11 (蒲原新水道会社と支消金取立方など) 契約書	167
8-35	(無記載) 新水道開鑿資本金表	168
8-36	5/30 (蒲原新水道支消金残額金受取方) 御伺	169
8-37	5/明治十四年九月十日ヨリ同十二月三十一日マテ 当出張所および岩淵分社ニテ取立候食塩諸荷物支消金調査	169
8-38	6/12 (富士川運輸会社蒲原出張所食塩賄方変更通知)	170
8-39	(無記載) 食塩賄方改正仕訳書	170
8-40	6/12 新水道社中申合約定書	171
8-41	6/3 (新水道支消金、全額一先ず上納の事)	171
明治12年	(1879) 8月	
8-42	8/ (富士川新水道開鑿入費償却差支、抵当差入拝借証文)	171
明治15年	(1882) 6月	
8-43	6/19 蒲原新水道株式譲渡シ定約	172
8-44	6/19 (明治十四年当社統計表) 御届	173
8-45	(無記載) (明治十四年) 富士川運輸会社運漕表	173
8-46	6/ (荷質貸付) 会社営業御届	173
8-47	6/22 (荷質貸付会社) 資本金御届	174

8-48	6/22 (明治十四年荷質貸付会社一覽表) 御届	174
8-49	(無記載) 明治十四年荷質貸付会社一覽表	174
8-50	6/20 (新水道支消金仕払これまで通り願) 上申	174
8-51	(無記載) 十四年度下半季精算表	174
8-52	(無記載) 十四年度下半季諸荷物取扱表	175
8-53	6/24 (清水港山梨県官用地・官舎継続貸与) 御願	176
8-54	6/ (博運会社取扱荷物口銭など) 盟約証	176
8-55	6/30 (蒲原新水道支消金取立方、新水道会社と定約) 御届	177

⑨ 富士川運輸合資会社利益金配当及損益金精算表

明治44年	(1911)	
9-1	明治四十四年自一月至十二月壹箇年間決算報告書	178
大正元年	(1912) ~ 大正五年 (1916)	
9-2	10/22 (遠藤三郎他大正二年以降三ヶ年間請負承諾書)	178
9-3	10/22 配当金領収株主人名	178
9-4	大正元年一月ヨリ大正二年六月マデ壹ヶ年半決算報告書	180
9-5	大正二年七月ヨリ大正三年六月マデ壹ヶ年間決算報告書	180
9-6	大正三年七月ヨリ大正四年十二月マデ壹ヶ年半決算報告書	181
9-7	大正五年一月ヨリ十二月マデ壹ヶ年間決算報告書	181
9-8	大正元年一月ヨリ大正五年十二月マデ五ヶ年間総決算報告	182
大正六年	(1917)	
9-9	(遠藤三郎大正六年以降三ヶ年間請負承諾書)	182
9-10	(無記載) 配当金領収株主人名	182

⑩

慶応三年	(1867) 二月 (御伝馬人馬賃錢立替入用など五百兩拝借願) 乍恐以書付奉歎願候	184
------	--	-----

1

(表紙)

五番

明治四年

辛未六月

### 商社記

遠藤 義方

1-1

乍恐以書付奉願上

商社取扱人中込清左衛門外一同奉申上候、御入塩代金当月晦日限り皆上納可仕旨御請書奉差上処、追々直段下落、且売塩商人不正之取計いたし、直段不平ニ而売捌ニ不相成、莫太之損失難渋罷有候、然ル所今般御規則相立議定取極ニ相成候ニ付而者、来ル十日出立、三場所江右御規則ニ基掛合仕行届キ候上者、当差塩直段下ケ詰与見込候間、買付仕度、左候得ば、右塩代金儀も当月下旬二者、入用ニ相成可申、然ル所御入塩代金上納之儀も当月晦日限りニ候得ば、一時ニ多分之金子工入難出来、当惑難渋仕候間、恐多御儀二者候得共、右買入代金壹人当金千両宛拝借奉願上度、尤清水湊ニて買付有時々入用之儀ニ付、差当り拝借仕度御儀二者無之候、右買入用之節者、拝借ニ可願出候間、何卒此段御聞濟被成下置度奉願上候、先般御買塩代金之儀ハ明日も売立次第期限之通上納仕候間、右両様御賢慮を以御聞濟被成下置候ハ、莫大損失之分少し者足し合ニも相成、且者、此節下直之塩買入売捌相成候ハ、順沢<sup>順</sup>国融之一助ニも可相成与奉存候間、此段不願恐奉願上候、何卒右之段被為詔聞召、御聞濟之程奉願上候、以上、

明治四年五月

商社取扱

羽中田豊次郎

中込清左衛門

小野弥左衛門

遠藤太右衛門

1-2

差上申御請書之事

鯉沢河岸船頭深澤政七奉申上候、今般御入塩之儀御規則被 仰出候処、私儀岩瀨河岸売人共与馴合不都合之取計仕候趣御調御座候得とも、私儀右体取計と覚毛頭無御座、萬一馴合候趣申立候もの有之候ハ、申披可仕候、且当河岸船頭共儀、是迄所々ニ而塩其外買入方仕、手船ニ而引揚売捌来候所、御規則被仰出就而者、以来船頭共ニおひても清水湊ニ而直買順着ニいたし、売捌可申旨被仰渡、私儀者承知奉畏候、依而者帰村之上、外船頭とも江も右之趣可申聞候、依之御請証文奉差上候所、如件、

かしか澤河岸

船頭

辛未五月廿八日

深澤 政七

百姓代

川住 儀八

甲府

御役所

1-3

覚

岩瀨通り登り方

一荷物壹駄

此貨錢壹貫八百文  
外二 貳百廿四文

蒲原口前  
由井宿同斷

メ 七拾貳文  
貳貫百文

右同斷

一 荷物八駄

但壹艘積

壹駄ニ付壹貫八百文ツ、

此貨錢拾六貫八百文

外二 五拾貳貫四百八拾六文

メ 六拾九貫貳百八拾六文

岩測河岸今三河岸江運ちん

由井宿今内房村迄

一 荷物壹駄

此貨 貳貫八百文

外二 百四拾八文

メ 貳貫九百四拾八文

由井宿口錢

右同斷

一 荷物八駄

但壹艘積

壹駄ニ付貳貫九百四拾八文ツ、

此貨錢貳拾三貫六百文

外二 四拾三貫七百三拾七文

メ 六拾七貫三百三拾七文

内船村今三河岸迄之運ちん

さし引壹貫九百四拾八文 相減し

一 荷物壹駄

此貨錢壹貫五百文

外二 貳百貳拾四文

メ 七拾貳文

岩測今由井宿迄

蒲原宿口錢

由井宿同斷

内房今岩測迄運ちん割合

メ 貳百六拾六文

差引七拾貳文 相増ス

右之通御座候、以上、

1-4

甲信兩國諸荷物運送之儀、海内各國孰之港今輸出有之候共、十二八・九駿州清水湊へ入津、蒲原浜江瀨取、岩測河岸へ駄送り、夫より富士川通船ヲ以甲州鰍沢・青柳・黒沢三河岸場江輸入仕来候所、自今 御一新弁利筋開拓可心懸之

御時勢ニ至、旧習ニ不泥、清水湊より由比浜江瀨取、入山村通り内房村尾崎河岸迄陸地附取、同所ニ而船入致し曳登七候得ば、富士川四ヶ所之難場を除き、破船之憂苦も少ク、且日数も抄取、賃錢諸掛り者一層相減し、至急之御荷物等必御用弁ニ可被相成与、国益専務ニ心懸ケ、今般運輸会社を結び、諸荷物請繼御賄可仕候間、御運送被仰付候様、奉願上候、

1-5

会社規則

一 諸荷物常々大切ニ取扱、運贈<sup>運送</sup>迅速、着順ニ繼払候者勿論、庭着之節送り状ニ引合七貫目相減し候状、又者濡いたミ乱荷ニ相成、封印等疑敷候ハ、篤与逐検査、其品ニ寄至当之弁金引去、御荷主方ニ損失不相互候様、実意ニ取計可申事、

一 送り状表之月里程ニ不応、無謂延着ニ候ハ、(以下無し)

一 諸懸り之儀、今般取定候外猥ニ増錢等致間敷候、尤諸物価低昂ニ寄増減共、

繼々一同衆義之上相定可申事、

一 富士川通運送方之儀者、都而三河岸之御規則堅相守可申事、

前件仕法を以御運贈<sup>運送</sup>御請負仕候上者、途中差障之筋毛頭無御座、且御荷物ニ付何様之儀出来候共、御荷主方ニ聊御迷惑相掛申間敷候、萬一紛失等御座候節者、急度御弁金可仕候間、右事情篤与御洞察被成下、多少ニ不限御荷物御差向<sup>サシ</sup>被下候様、奉懇願候、以上、

明治四辛未年六月

1-6

口演書

一 商荷運送之儀、従前清水湊今蒲原浜江瀨取、夫今岩測河岸江駄送り、同所今富士川通曳船ニ而鰍沢始メ三河岸江着岸之所、縦令至急之荷物といへとも、

日数存外相掛り、加之清水湊分蒲原浜分運送方、風合ニ寄候而者、数日着浜不相成、荷主方は迄不都合ニおよひ候次第も有之哉ニ承知いたし候、然ル所今般至急之荷物ニ限り、清水湊分由井浜江付、同所分内船村江駄送りいたし、夫分富士川通り曳船ニ而運送致候へば、諸雜費等之儀も相減候而已ならず、岩測河岸分四日相掛り候分、三日ニ而三河岸江着岸ニ相成、右者別紙鹿絵圖之通、同村分岩測迄之大難場四ヶ所相除キ、大弁理筋与奉存候、依而者蒲原・岩測之儀者従前仕来之場所ニ有之候得共、御一新ニ付而者御弁理筋專要与御規則も被為立候折柄ニも粗拜承仕候、假令両所ニ而故障申立候共、子細者有之間敷、誠ニ此程中駄通司御役々様方御通行ニ而脇往還間道等之御調も有之、既ニ由井宿分内房村迄之人馬賃錢奉書上、御採用ニ相成候程之儀ニ御座候間、無程御下知ニも可相成哉ニ奉存候、乍恐其以前内房村迄之間道諸荷物運輸方發行相成候得ば、蒲原・岩測分従前仕来之廉を以故障被申立、可及迷惑も難計、内実者拙者共分御頼申入候儀ニ有之候得共、表向者弁理筋ニ關係各々様方分御頼一札貰請候様仕度、然ル上者蒲原・岩測分何等申懸候共、右一札を以及返答度、左候へ者如何様難題被申候共、由比宿・内房両所之難渋無之儀与奉存候間、此段不悪敷御承諾被成下、前条願之通り御取計被成下候得者、御互ニ御弁理筋相開キ安堵ニ發行仕候儀ニ御座候、依之此段口演書を以申上候、以上、

明治四辛年六月

商荷請方引受人

駿州由比宿

朝日 金平

同

笹間彦三郎

同

稲柴 傳吉

同

桑原半左衛門

17

乍恐以書付奉歎願候

鯀沢・黒沢・青柳三河岸船頭惣代太郎右衛門外五人一同奉申上候、私共三河岸

船稼之者共、駿州岩測河岸江着船平生之通り荷物積渡具候様、同所荷物賄人共江申談事之処、今般甲信両国喰塩之儀、御仕法替之趣ニ而入塩・売塩共元浜并清水湊ニおゐて元船分直買、同所ニ而式俵合ニ縊立、是迄取扱楛梗俵者悪弊ニ付、当五月限り、其後一切不取扱、且三河岸并東西河内領船頭渡世之者共、自己ニ積入候塩荷者、是又悪弊之根元、三河岸ニ而賄者不致共、餘買荷物高平均割合ヲ以、岩測河岸ニおゐて先着順船積運送其外廉々、三河岸塩商人入塩取扱方一同議定取極相成候趣、談事有之、船方之者共江塩荷一切不売渡趣申之、岩測河岸塩納屋都而戸メいたし置、荷物積不申右体之儀ニ而者、其日暮船稼之者共必至与差支、当惑難渋仕候ニ付、乍恐左ニ奉申上候、

一 当国喰塩之内、駿州岩測河岸片浜通分三河岸并東西河内領船頭共買取、当三河岸江為積登、國中江壳捌渡世いたし来候儀之所、清水湊分蒲原浜迄海上纜ニ隔り候場所御座候所、高波之節者日数四十日・五十日位ひ不風ニ而船支之儀時々有之、塩荷瀬取難相成節者、片浜辺商人共小船を以瀬取、岩測江陸附候塩荷買取為引登、國中潤沢相成候様取計来り候儀ニ御座候間、是迄通御立置、手詰不相成様奉願上候、

一 入塩取扱方并三河岸塩商人共依願、今般喰塩御規律之趣者、元浜并二清水湊ニ而直買、同所ニ而不残式俵合ニ縊立、当国江運送壳捌、以来者は迄取扱楛梗俵者一切不取扱趣ニ候、然者一体塩荷物之儀者、諸国元浜ニ而楛梗俵ニ而参り候儀故、買入人何連も楛梗俵を好候儀ニ付、船方取扱塩之儀者、従来之通り楛梗俵御立置被成候様奉願上候、

一 岩測河岸着荷物之分、買荷数高平均割合ヲ以船積可被仰付候由ニ候得共、素々船頭共者手薄之者故、入塩壳塩商人共同様之儀ニ而者、弥以手詰難渋仕候儀ニ付、別律御立被成下、是迄之通塩商ひ出来候様被仰付度、奉願上候、一 入塩壳塩諸荷物与も、岩測河岸江御出役様御詰合被為在、先着順荷船積可被相成御規律之趣者承知仕候得共、船頭共儀岩測着船可積入荷物無之節者、空敷同所ニ滞船罷有候儀難渋ニ付、岩測河岸并片浜通分塩其外駿産之諸品買取、船積帰船致し来り候儀ニ付、別律御立被成下、船頭共積方手詰難渋不相成様被仰付度、奉願上候、

一 諸荷物運送之儀、往返七日積リヲ以定規与し運送罷有候所、風雨之節者日数十日又者十五日、暴風霖雨等大出水之節者廿日より三十日宛も相懸り候儀も有之、尤是迄之儀者右体日数相懸り、難渋之節者船問屋より見繼請候得者、荷物先着順荷之御仕法立相成候上者、商人之内船持具候ものも無之様成行、

実二当惑難渋仕候間、以来如何様ニも御仕法御立被成下、稼方相続相成候様、

奉願上候、

前書奉申上候通り次第第二御座候間、船頭共々何卒御照察被成下、此上厚御仁恤之程、只管奉願上候、以上、

巨摩郡鯉沢河岸

船頭惣代

辛未六月

安藤太郎右衛門

同

石坂 宗八

同 青柳河岸

船頭惣代

笹本 榮八

同飯富村

増田傳右衛門

八代郡黒沢村

同

渡辺市郎左衛門

下八木沢村

名主

芦澤祖右衛門

甲府

御役所

前書之通御歎願奉申上候二付、奥印仕奉差上候、以上、

右青柳河岸

問屋

小河内太郎左衛門

黒沢河岸

問屋

村松茂右衛門

乍恐以書付奉願上候

静岡藩管下駿州庵原郡岩瀨村外六ヶ村惣代、岩瀨村名主松郎・同孫一郎・塩仲買惣代兼小前惣代直七奉申上候、今般甲斐国中下条村羽中田豊次郎・鯉沢河岸商社取扱人雨宮三郎右衛門外九人、当岩瀨河岸江出張塩荷取扱之儀甲府県庁江奉申上、御聞届ニ相成候趣、廉書を以品々掛合有之候所、諸荷物之儀者岩瀨ニ而取扱候而も差支之儀無御座候得共、右廉書之内塩之儀者去ル巳年分御入塩御一手之御主法被 仰出、年来之助成を失ひ候廉、苦情申出候もの有之候得共、御一新之重き御趣意相弁、無差支御賄仕候内、同年冬分入塩壳塩両道御開キ相成、一同生活之力を得、難有仕合奉存候、然ル処今般清水湊ニおひて式儀合縊立御運送可相成旨二付、是又無差支様可仕、併御潤沢弁利第一之御時節、殊ニ岩瀨河岸之儀者從來東西海岸入津塩買取、諸賃銀受取、甲信日用差送り渡世仕来之場所ニ候所、今般右御差止メ之掛合有之候得者、迎も承知取極メ難相成、尤甲州弁利潤沢之趣を以取極候儀を、彼是苦情申立候儀者聊無之、只顧岩瀨仕来之商事、殊ニ甲信誰人なり共買入江対し商事不売渡与申儀者、第一日用弁利取計候場所柄、其上信国迄も往々不潤沢手狭ニ成行候義眼前ニ有之候二付、式合儀并ニ是迄之縊儀与も御運送相成候者、別而潤沢ニ可相成儀与、乍恐 愚案仕候、尤も桔梗儀又者其時ニ臨ミ式重皮ニ縊立候而も買立弁利宜敷、随ひ為積登候得者、是又弁利手広分儀与奉存候、就而者中村・堰沢村右式ヶ村之儀も所産塩渡世罷有候中之郷・木島・南松野・北松野右四ヶ村与も蒲原浜并中村・堰沢村分塩荷牛馬陸附潤を請、夫々渡世仕来候所、前書之次第第二相成候而者、銘々此上生活之業も絶、必至与難渋仕候間、何卒格別之以 御仁慮、岩瀨河岸数年仕候所、商塩前書奉申上候通取扱候様、一同挙而奉歎願候、右願之通被仰付被下置候者、当河岸者勿論、外六ヶ村之者共無難相続方出来、莫太之御仁恤与難有仕合奉存候、依之此段乍恐奉願上候、以上、

明治四辛未年六月

小前惣代

植松与平治

草谷 直七

塩商人

藤田卯右衛門

同

斎藤 喜作

同 望月幸一郎  
同 望月喜太郎  
同 池谷 権三  
同 齋藤縫右衛門  
同 太田茂七郎  
同 天野 傳七  
同 太田 唯助  
同 池谷喜三郎  
同 齋藤安次郎  
同 望月作右衛門  
同 齋藤元兵衛  
同 大村五十郎  
同 田中京次郎  
同 長谷川直吉  
同 齋藤八十八  
同 深澤長三郎

同 長谷川平吉  
同 花田金右衛門  
同 風能吉兵衛  
百姓代  
同 齋藤 吉蔵  
同 望月 元八  
同 望月 長八  
同 多藝六左衛門  
組頭  
同 池上清次郎  
同 花田 幸八  
同 望月廣三郎  
長百姓  
名主  
大村宗一郎  
齋藤億十郎  
同 望月 権一  
同 常盤 松郎  
同 齋藤 住郎  
同 齋藤 縫蔵

同

望月孫一郎

同

齋藤儀三郎

同

常盤弥兵衛

同郡木島村

名主

望月 良平

同

南松野村

名主

木伏松三郎

北松野村

組頭

木内幸三郎

中ノ郷村

名主

若月 宗八

中村

名主

柴川 力蔵

塩商人惣代

塩屋三四郎

堰澤村

名主

内藤勘四郎

商人惣代

久保田半四郎

甲府県庁

御役所

1-9

乍恐以書付奉申上候

郡中捻代奉申上候、当国日用塩之儀、今般塩商之もの共取定候議定之趣者、専務習草之儀二者可有之候得共、右ニ付輸入逼迫致し候儀も有之候而者、国害之儀二候間、篤与勘考之上、見込可奉申上候心得之所、最早市在共塩多分入用之節ニ差向候儀ニ御座候間、売塩分者従前之通り取計置、議定施行之儀者見合候様被仰聞度、奉願上候、以上、

辛未六月十一日

三枝 七内

小尾兵右衛門

深澤平右衛門

桜井 文蔵

河内四郎次

萩原 幸八

間瀬 竹八

大村庄左衛門

土屋宗兵衛

野田次兵衛

河野受一郎

保坂安右衛門

新海又左衛門

新津 幸蔵

三神八右衛門

甲府

御役所

1-10

乍恐以書付奉願上候

商社取扱人一同奉申上候、甲信兩國日用塩主法之儀、御入塩御仕法全国筋專要ニ付、今般売人共右御仕法基規則議定仕奉差上、夫々御取調御採用相成、御書下ケ 御尊判迄も頂戴仕候ニ付、駿州三場所江も規則為談事、出張仕、夫々遂掛合候処、岩渕河岸売塩賄人之者共、場所柄も不弁従前悪弊を以不儀之利慾

掠取候儀も不顧、迷惑杯与不取留趣奉歎願、就而者郡中捻代今も申立候儀二付、私共被召出、右与議論相立候様被仰付御座候間、即郡中捻代江先般御採用相成候規則書写差出し、差支二も可及之廉江下ケ札いたし、其余益筋洩候儀者差加へ致呉候旨、談判仕候得共、右者急速ニ難出来、差向差支も有之候故、是迄姿を以当分取計居り、追々規則取計可申上候挨拶有之候得共、私共ニおひても精細盡力見込奉申上、全国益与御賢慮被為在、御採用相成候御法則之中、岩瀨河岸并船頭共差支之趣申上候而も、右者全悪弊ニ泥ミ候者共ニ而、正路之取計仕候者共ニおひて者、聊可差支儀無御座与奉存候、然ル所郡中捻代之任意ニ規則議論も不遂、無謂今般之規則ハ見合、是迄売塩姿を以当分取扱居り、此期を延し候ハ、正路之規則相潰し、悪弊ニ陥り、国内減闕不少、難ケ敷、第一御上様今頂戴仕候御書下ケ之御尊判之御趣意ニ拘り可申儀与、乍恐奉存候間、国益之規則速ニ貫徹仕、来ル八月塩入用之時節ニ至り、無差支潤沢相成候様取計度奉存候間、捻代今取詰議論被相立、正邪明白ニ相決し候様被仰付度、奉願上候間、御照察被成下置、何卒出格之以御仁恤、御所置奉願上候、以上、

辛未六月

商社取扱

羽中田豊次郎

中込清左衛門

高野孫左衛門

小林七左衛門

遠藤太右衛門

兩宮三郎右衛門代兼

遠藤長次右衛門

海野治左衛門

山口忠右衛門

甲府

御役所

1-11

記

一分塩三拾万俵

是ハ甲信兩國日用塩売塩  
壹ヶ年入荷凡積り

此貫目百六拾五万貫目 但、壹俵二付五貫五百目積り  
一分塩貳拾七万千俵

此貫目百六拾五万三百拾貫目 但、壹俵二付六貫百目積り

差引

貳万九千貳拾俵余 全益筋相成候分

外二金四千五百兩余 右空俵江相懸り候駿州諸懸り富士川運賃共

右者、是迄売塩取計候悪弊相散、今般御規則貫徹仕候得共、壹ヶ年ニ右俵教者勿論、其余諸掛り者空俵江相掛候分相省、且運賃羅積之弊も散し、全国益専務与奉存候間、何卒出格之以御賢慮、御仁恤之御所置被仰付度、奉願上候、以上、

辛未六月

商社

取扱人

1-12

乍恐以書付奉願上

商社取扱人一同奉申上候、去午年九月中今私共被召出、当国日用塩取扱方見込之儀可奉申上旨被仰渡候二付、益筋愚存之見込、追々申立候処、去ル四月ニ至り、入塩御主法ニ基、売塩旧習之悪弊を散シ、国益之規則御差図請取極奉差上候所、御見留之上御奥書御尊判被成下置、御下ケ相成候二付、駿州三場所江之談事向奉伺候所、是又御下ケ紙被成下置候二付、即出張夫々掛合仕候所、岩瀨河岸并二三河岸船頭共今奉歎願、郡中捻代共今も申立候條、去ル十二日私共被召出、右之趣被仰聞御座候間、同十三日以書付奉申上候通り、岩瀨河岸并二船頭共今何様奉歎願候不都合之申立二付、郡中捻代与議論相決し俱ニ談判仕候ハ、速ニ納得可仕儀与奉存、捻代江議論仕候様取詰メ掛合仕候得共、素々其見込無之儀二付、議論も無詮之趣、断ニ有之候間、次第柄御役所江申立候所、即刻捻代御呼込ニ相成、被仰聞之御利解ニ承伏仕、天保九戌年濟口議定之旨取計仕、駿州江御出役奉願上、右江捻代共差添出張、規則取極メ可申旨御請仕候由、私共江被仰聞御座候間、篤与引競仕候所、今般規則書之趣意、天保度之議定ニ懸隔之意味無之哉与愚案等仕候、然ル上者素今名聞利慾を好ミ候心底毛頭

無御座候、只々国益專一、且者当国之商人者安堵ニ商業出来相成候儀ニおひてハ、是迄精細盡力見込申上、奉懇願候国益筋之趣意も相立、聊申分無御座候儀与奉存候間、郡中捻代共願之通り被仰付、乍恐早速駿州三場所江御出役之節、捻代御召連規則御取極被成下置候様奉願上候、就而者来八月入用之塩、敢早買付引当も不仕候而者不相成候得共、先般規則為談事、彼之地江出張仕候得共不行届、今般之次第立至り規則御見合ニ就而者、買入候而も荷物運送不抄取者顯然、且又先般調印仕候売塩商人共江も、岩測河岸并二船方之者は迄惡弊專行仕候儀者不顧、却而惡意差挿為差支候儀、是又顯然与奉存候間、今般出張罷有候、岩測河岸之者共船頭共義、

天保九戌年濟口証文之通り堅相守り、今般規則書連印之者共江、此上不実不法者勿論、聊差支等仕間敷旨之証書差出候様、厚御利解被仰聞被成下置度、左すれハ正路不塞良法貫徹之手段致置、買入安堵ニ取極仕度奉存候間、何卒出格之以 御仁恤、駿州三場所江捻代御召連御出役被成下置、願之通御聞濟被成下候様、奉願上候、以上、

辛未六月

商社取扱

羽中田豊次郎

小野弥左衛門代兼

小林七左衛門

中込清左衛門

遠藤太右衛門 代兼

遠藤長次右衛門

雨宮三郎右衛門

海野治左衛門

高野孫左衛門

山口忠右衛門

甲府

御役所

(貼紙)

「天保度濟口証文之通堅相守可申趣、岩測河岸出張人之者共今我等共江証書差出候様被仰付度奉願上所、右証書之儀者岩測之者今御役所へ差上候儀ニ御座候得ば、其儀ニ不及段被仰聞承知奉畏候、

然ル上者御役所ニおゐて右天保九戌年濟口議定相守り可申旨之御請書御取扱被置候儀ニ候得ば、聊私共ニ申分無之、依之此段下ケ札ヲ以奉申上候、以上、

1-13

乍恐以書付奉申上候

静岡藩管下駿州庵原郡岩測河岸外六ヶ村惣代、同河岸名主松郎外式人奉申上候、岩測河岸塩取扱方之儀ニ付、此度静岡藩今添翰頂戴、当御役所今奉申上候所、其節被仰渡候者、当国郡中惣代并商社取扱人双方談事、右之上可奉申上旨、就而者右捻代之者今沙汰次第罷出、其節私共心附方可申述段被仰渡承知奉畏、然ル所昨十七日惣代詰所今沙汰有之候ニ付罷出候所、談事有之候者、喰塩之儀ニ付而ハ、天保度再議定も有之候所、追々弊習有之候ニ付、不得止事、此程中商人共廉書ヲ以議定談判およひ候儀ニ者候得共、右者当分見合七置、天保度再議定不相振候様、正路ニ取扱可致者勿論、御入塩之儀御仕法之通精々入念取扱可致、就而者御取締として御役所御出役被為在候間、郡中惣代ニおひても岩測河岸其外江不時見廻り可有之候ニ付、不正之取扱無之様可致旨談事有之、逸々承知仕候間、不正之儀不仕者勿論、惣而不実意之取計無之様可仕、若相振候儀仕成候ハ、何様御取計可上候共、可申上様無御座候、依之此段以書付奉申上候、以上、

六月十九日

駿州岩測河岸

常盤 松郎

望月孫一郎

竹谷 直七

甲府

御役所

1-14

乍恐以書付見込奉申上候

巨摩郡鵜沢村入塩取扱人中込清左衛門外四人奉申上候、今般駿州三場所惡弊相散し候ため、御出役被為遊、猶其上不絶御取締被成下、国益專務御所置被成下

置候ニ就而者、入塩取扱方并ニ売塩諸荷取扱候者共身元金献納仕、商法御貸附金之内江御差加へ奉願上、其利金ヲ以、右御入費御遣払被成候上者、国益自然与頭候義ニ付、身元献金之見込可申旨被仰聞、承知奉畏候、篤与勘考仕候所、売塩并ニ諸荷物其益筋厚以御賢慮御取締被成下候上者、買入さへ仕候得ば、安堵ニ乍居商業出来候義ニ付、荷数取扱高多少身元ニ応し献金仕候而如何ニも至当之儀与奉存候得者、此程中売塩規則書私とも連印仕奉差上候所、差支も有之哉ニ申立候者有之候ニ付、暫時御見合相成候故、又々献金之儀私共説得仕候而も得心之程無覚束奉存候、且諸荷物之義者当市中并他国今当座江寄留、又者止宿罷有候商人共重毛取扱荷高多く、夫々仕法ヲ立候ハ、献金出来候見込御座候迎、場所懸隔、手続迂遠、両様共旁兼念可仕候、説得之儀私共不及力儀与奉存候間、他ニ不拘及力候見込申上候、今般一時出金献納仕、商法御貸附金之内江御差加可仕旨被仰聞承知奉畏候得共、一時献金多分之儀ニ而者出金差支当惑仕候間、入塩御仕法ヲ以私共五人ニ而取扱候荷数、壹ヶ年凡三萬俵計者取捌出来可申見込ニ付、右売徳銀之内銀式分積金百兩宛、取扱中年々献金仕度奉存候得共、聊之献金仕、夫而已ニ而始終御取締御出役奉願上、御上様江多分之御入費御損失相懸り候儀者奉恐入候間、売塩諸荷物取扱候者共国益筋相弁へ、御取締御出役奉願上候儀ニおひてハ格別入塩方ニ而者今般一時御出役被成下置、駿州三場所取賄候者共心得違不仕旨被仰付被下置、其上私共買入方并ニ取賄振見届与して始終壹人位者出張も罷在候儀ニ付、其趣乍恐当御役所今静岡御藩江御達し被下置、右取扱候場所々々江右御藩今不実之所業不仕旨被申渡候ハ、御仕法貫き可申儀、右御仕法貫徹仕候上者取扱俵高も追々相増、左すれ者献金も右ニ準シ相嵩候儀与奉存候、依而者下夕方今何様之儀申立候共、私共取扱精懇を盡し、徳分之内相弁献納仕候儀ニ付、他今聊閑係可仕筋無御座候与奉存候、売塩外諸荷物他向取扱候品迄見込、多分之金高申上候而も、萬一兼念不服之時者却而奉恐入候儀与心得、賄金ニ者御座候得共、他ニ不拘銘々取扱候愚案之見込奉申上候間、何卒以御賢慮被仰付候ハ、一層抽丹誠実知ヲ以御仕法広大相成候様取計可仕候、依之以書付奉申上候、以上、

巨摩郡鯉沢村

入塩取扱人

中込清左衛門

雨宮三郎右衛門

右兩人兼

辛未六月廿六日

遠藤太右衛門

遠藤長次右衛門

海野治左衛門

甲府

御役所

1 | 15

乍恐以書付見込奉申上候

入塩取扱人高野孫左衛門外四人奉申上候、今般入塩規則御取締与して駿州江御出役被為在、且先般規則書有之候通り御入費之儀立合可仕候様被仰聞承知奉畏候、然ル所私共五人年内売捌高凡式万俵、右壹俵ニ付売徳銀之内銀式分積凡金六拾六兩余入塩取扱中年々上納仕度、少々計奉恐入候得共、御貸附之内御差加へ奉願上候、尤御規則貫キ売捌俵数相嵩候得者、右振合ヲ以上金献納可仕候、右私共年内売捌見込以書付奉申上候、以上、

柳町

高野孫左衛門

緑町

山口忠右衛門

河原部村

小林七左衛門

同

小野弥左衛門

中下条村

羽中田豊次郎

甲府

御役所

1 | 16

乍恐以書付奉願<sub>レ</sub>歎候

入塩取扱人一同奉申上候、鯉沢村河住忠右衛門儀、先般入塩御用ニ付、駿州清

水湊江罷有候所、不束之儀有之、御取調之上当三月中同村役人共江御預ケ被仰付奉恐縮、其節今遠藤長次右衛門江為相慎置候所、右体之儀仕成候段、先非後悔免明罷有候間、篤与心体見様候所、悔語之体事实相違無之、何とも惘然之至り不見忍奉歎願候、依而者自今右体之儀無之様急度為心付可申候間、今般之儀幾重二も奉蒙御憐恤之御沙汰奉歎願候、何卒厚以御仁恤、右願之通御聞濟被成下置候ハ、一同拳而難有仕合奉存候、以上、

入塩取扱人

小林七左衛門

中込清左衛門

雨宮三郎右衛門

右三人代兼

辛未六月

羽中田豊次郎

高野孫左衛門

小野弥左衛門

山口忠右衛門

遠藤太右衛門

遠藤長次右衛門

海野治左衛門

甲府

御役所

1-17

静岡藩添豫を以岩測河岸之もの共罷出、右者豊次郎始商人共、国益筋ヲ第一とて、不正之塩売買不致、正路之取引いたし度段を以、夫々議定取極メ、右ヲ以掛合方出張いたし候儀ニ而、岩測河岸之者共取扱方依、此上商人共ハ如何可申立哉も難計候得共、眼前国益可相成儀者難差留儀ニ付有之、旁郡中一盤江抱り候儀ニ付、出張ヲ幸ひとて商人共始郡中惣代共江得与談判為致、正路之取計第一ニシテ、塩減貫不相立様取扱方之見込為申立、其上得与取調候様可仕哉、奉伺候、以上、

六月七日

音次

孝作

正五郎

土肥

岩測

1-18

駿州岩測河岸之者共、塩荷取扱方ニ付歎願与して罷出、此程奉伺候上、郡中惣代其外之者共江も得与為引合、双方差支無之様談判可致旨申渡置候所、別紙之通郡中惣代書面差出、且岩測村外六ヶ村惣代共江も右書面之手続を以掛合方行届、是又書面差出申、右之通一同申立候上者、商人共おひても異存無之哉与相聞申、然ル上者官員之者并郡中惣代共時々取締向而已世話いたし、追々悪弊ヲ除之外有之間敷与奉存候、則静岡藩江之返書案相添、此段奉伺候、

辛未六月廿日

音次

孝作

正五郎



1-19

其御管下駿州庵原郡岩測村外六ヶ村惣代、右岩測村名主常盤松郎外式人儀、当管下甲州摩郡中下条村豊次郎外拾人岩測河岸江出張、塩取扱方之儀廉書を以掛合候二付、前書之者共歎願として当庁江罷出度申候二付、願人御差出御申越之趣致承知候、右者願人共儀塩荷取扱方ニ付而者、天保度及出入、議定之趣も有之候所、追々相崩、心得違之者共双方勝手之所業有之故之儀ニ付、尔来右取締として官員之者臨時岩測河岸江出張并二当郡中惣代之者も時々罷越、取扱方見届候上、悪弊等之儀者改正為致候積申渡、帰村申付候、且其時宜ニ依、出張之官員今御打合可及儀も可有之間、兼而御承知置有之度、此段御報旁々申進候也、

辛未六月廿日

甲府県

静岡藩

御中

1-20

当藩管下駿州庵原郡岩淵村外六ヶ村惣代、右岩淵村名主常盤松郎外式人、御管下甲州巨摩郡中下条村羽中田豊次郎外拾人、右村河岸江出張、塩荷取扱之儀其御庁おひて御聞届相成候趣、廉書ヲ以右村方江掛合候儀二付、御庁江歎願致し度旨、別紙之通申候二付、願書并願人差出し申候、可然御取計有之候様可申致存候也、

辛未六月

甲府県庁

御中

静岡藩庁

1-21

乍恐以書付奉申上候

郡中惣代奉申上候、当国日用塩之儀、去ル天保度及出入、濟方相成、其節夫々議定も有之候所、追々悪弊二相成、減弁減貫等相立、其外不正之儀有之、国中難渋仕候儀二付、向後岩淵河岸江不時御出役被為在、御取締被成下候様仕度、然上者郡中惣代之内二而も時々彼地江罷越、見込方可仕候間、此段以書付奉申上候、以上、

明治四未年六月十七日

惣代

問瀬 竹八

小尾兵右衛門

深澤平右衛門

桜井 文蔵

三枝 七内

河内四郎治

古屋十郎左衛門

新海又左衛門

三神八右衛門

甲府

御役所

下ケ札

今般商人共与岩淵河岸役人共与儀定可仕趣二候所、右者天保度議定も有之候得ば、御取締被成下置候上者、別段議定仕候儀二も不及、乍恐奉存候、此段下ケ札を以奉申上候、

1-22

御尋二付乍恐以書付奉申上候

駿州岩淵河岸外六ヶ村惣代、同河岸名主孫一郎外式人奉申上候、今般塩荷物運送取扱方之儀二付、静岡藩分御添翰頂戴、当御役所江罷出歎願書一同奉差上候所、御取上ケ夫々御差図被 仰付、難有仕合奉存候、然ル所私共心得方御尋二付、左二奉申上候、

此段岩淵河岸之儀、小高二而大人數之村方、甲信日用喰塩ハ勿論、諸荷物上下取賄、河岸場潤助を以大人別之者當相統致来候段、難有仕合奉存、且塩荷之儀二付而者、前々之規則も有之、国益御弁利之儀者不及申、岩淵河岸取扱方一同差はまり、正路二取賄可仕、猶此上 御取締として岩淵河岸江御出役被為在、取扱方事实御見届、奉御差図候様仕度奉存候、右御尋二付、乍恐此段以書付奉申上候、以上、

名主

辛未六月十八日

常盤 松郎

同

望月孫一郎

塩仲買惣代

草谷 直七

1-23

差上申一札之事

甲信両国喰塩之儀、天保度規則有之候所、追々相弛ミ、仕法替之儀先般商社人

より廉書ヲ以奉願上候所、右之内船頭・商人共難決之廉も有之候ニ付、先達中御歎願奉申上候所、依願被仰付次第二者御座候得共、勝手自儘之所業不致、正路ニ塩荷買取売捌候儀者、敢而塩渡世之ものは彼是可申謂無之、差支有之間敷、追々法則も可取極ニ付、差当り正路之是迄姿を以売買可致、尤向後御取締として御出役被為在、郡中捻代おゐても時々見廻りとして出張致し、取締方其外御見届之上、不宜義者改方御差図一際潤沢相成候様可仕旨被仰渡、是又承知奉畏候、依之一札差上申処、如件、

辛未六月廿三日

渡辺伊左衛門

芦澤祖右衛門

村松茂右衛門

飯富

増田傳右衛門

名主代兼

小河内太郎左衛門

船頭惣代

安藤太郎右衛門

同

石坂 惣八

1 | 24

奉差上御請書之事

一御入塩大俵拾貳貫目・小俵六貫目、減貫不致様溢立河岸出し仕、船頭立会相渡し可申、萬一減貫相立候ハ、足塩被仰付候旨、承知奉畏事、

但、分塩之義者年来六貫三百目立候間、右立目相直し迄ハ御請出来往仕候事、

御出役様当河岸へ御詰、諸荷物御改印之上為積登可致段、被仰渡候事、  
一御入塩賄之義、村請被仰付候事、

但し、扱人之義ハ所人撰ヲ以可申付旨、被仰付候事、

一御出役様御詰所、早々借受御差支無之様可仕、并二小前之者両三人御差留ヲ請、其働候者二事出し可申段、被仰付事、

但、御手当被下候段、被仰渡候、

右者、今般御出役之上被仰付候廉々、逸々承知奉畏候、然ル上者聊御差支無之様可仕、依之御請書奉差上候処、如件、

駿州岩測河岸

名主

明治四年未八月

常盤弥兵衛

同

同 松郎

組頭

池上清次郎

甲府庁

御出役

御役人中様

1 | 25

岩測河岸

村請世話役勤方

傳兵衛

定吉

用兵衛

五郎左衛門

八月

卯七

惣兵衛

与平二

義兵衛

十月

九月

常藏

善七

惣五郎

清兵衛

十一月

和助  
惣七

右之通、村役人共今名前書差出申候、

八月四日

弥兵衛  
松郎

2

(表紙)

二千五百三十三年明治六年七月ヨリ  
明治七年甲戌三月ニ至ル

誌

一

遠藤

2-1

勸農世話方人撰

巨摩郡第三十一区

大塩村

戸長

佐野徳之丈

同

鰍沢村

副戸長

青柳其右衛門

右者、当器之者ニ付人撰奉申上候、以上、

右区长

遠藤長次右衛門

第七月

山梨県権令藤村紫朗殿

2-2

当郡費半高割取集記

高百十七石四斗九升壹合

一金壹兩壹分三朱永三拾壹文壹分

高百七拾石

十谷村

平須村

一金貳兩貳朱

高四拾八石七斗貳升

一金貳分永百九文

高三百五石三斗九升五合

一金三兩三分壹朱

高七十六石四斗八升八合

一金三分三朱永拾八文六分

高百九十七石五斗三升七合

一金貳兩壹分三朱永三拾貳文七分

高八拾壹石五斗七升八合

一金壹兩永貳拾文

高百九石貳斗三合

一金壹兩壹分永百十五文

高百三十六石七斗四升八合

一金壹兩貳分永貳百九文四分

高九百六拾八石

小以

右之通取纏差上申候也、

明治六年

巨摩郡第三十一区

七月七日

区长

区长捻代理御中

遠藤長次右衛門

2-3

新聞紙御世話願

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤長次右衛門

右奉申上候、先般第百三十六号御達之御旨、当区内会議仕候得共、未示談決兼、右之内鯨沢村之義ハ、則御達之東京日々新聞・日新真事誌・甲府新聞一通ツ、

買求、解話会仕度段申出候得とも、同村ニても度々買求之手数ヲ相患候間、恐

懼之至ニ御座候得共、右新聞類御取寄御配達方共御世話被成下置度、尤代価之

義ハ御沙汰次第御上納可仕候間、此段奉願候、外村々之義ハ未夕頑固ニシテ、

右書類買求メ解話仕候得者、農工商ニ鴻益有ル事、正副戸長於テ着眼不仕候様

覚候間、差向鯨沢村へ解話会相開、右場処へ壹ヶ月三・四度ツ、集会為致、右

書類之鴻益アル事相染候上、猶示談仕度奉存候間、此段御許可被成下置度、奉

願上候、以上、

右

明治六年

遠藤長次右衛門

七月廿四日

九

山梨県権令藤村紫朗殿

(朱)「書面之趣聞届候条、区内一統弥見分候様、世話可致事、」

2-4

御達ニ付申上

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤長次右衛門

右奉申上候、明廿六日可罷出旨之御書付御達奉拜承候得共、四・五日以前分腫物出来相脳罷在候ニ付、甚恐懼之至リニ奉存候得共、不参之段、何卒御宥免被成下置度、此段以書付奉申上候、以上、

右

明治六年七月廿五日

遠藤長次右衛門

山梨県権令藤村紫朗殿

2-5

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤長次右衛門

右奉申上候、此程中ハ屢御談事御座候食塩方法之義ニ付、即今河住忠右衛門被致出張、夫々奉書上候書類之通り、御保護之有無ニより損益有事甚しく、今蒲原今之新開者一朝一夕之儀ニあらずと奉存、其間之損害又少しとせず、因テ御保護ヲ仰カスンハ不可有事情ニ相違無之候得共、御官員而已定詰相願候而も商法上之義ニ付、実地并取扱向弁知之者、其任ニ拳ケ担当為致置、御出役之義ハ年内二三・四度臨時御見廻リ被成下候ハ、御取締之条理速ニ可相立与奉存候間、私見込ニテ者実地ヲ弁知し取扱向ニ注意致し、弊害之筋者庄倒も可致、実ニ大事業之役務たり、因テ右忠右衛門義者、是迄食塩之義ニ付而者実粉骨碎身不厭、仮ニも賄路等江不掛、勉メテ研究仕候者ニ付、右当器たりといへとも、昨年未年五月中今当河岸ニ而者河住忠右衛門、青柳河岸ニ而大木幸八郎、黒沢河岸ニ而者望月清右衛門、食塩世話方被仰付居候義ニ付、右三人被召出、御試檢之上今般更ニ志人者御取締附属ニ被命、外式人者世話方被置御申付、尽力為致候ハ、食塩賄会社并ニ船会社等其業体之者説諭および、蒲原開業以前ニ其方法も可相立、勤惰正邪明かなる時ハ、奮勉も又速ならん奉存候間、此段以書面見込奉申上候、以上、

右

遠藤長次右衛門

明治六年

七月

山梨県権参事

富岡敬明殿

216

小学校新築願

巨摩郡三十一区

鰺澤村

副戸長

中込太郎左衛門

同

中嶋 正蔵

右区长

遠藤長次右衛門

右奉申上候、当区鰺澤村小学校之義、新ニ建築隆盛相図リ可申段、厚御説諭ニ付、談示仕候処、銘々承諾いたし、因テ別紙絵図面相添奉伺候間、何卒至急御指令被成下置度、以書付奉願候、以上、

右

中込太郎左衛門

中嶋 正蔵

遠藤長次右衛門

明治六年

八月四日

山梨県権令

藤村紫朗殿

217

新築小学校用材御下賜願

一松合三百本

杉 内訳

桧 七拾本

杉 七拾本

同大木 式本

合百四拾式本、是者巨摩郡二十九区平林村高尾寺上知官林ニ於テ、

桧 拾五本

杉 拾五本

同大木 三本

合三拾三本、是者巨摩郡三十区高下村妙祐寺上知官林ニ於テ、

桧 拾本

杉 五拾五本

松 六拾本

合百式拾五本、是者巨摩郡三十区小室村妙法寺上知官林ニ於テ、

右者、当区鰺澤村小学校新築之義、材木ヲ除之外資用金大概出来致候得共、木品之手当更ニ無之、左ニ而木品共買求候義ニ而者、資用金相嵩、新築延延遺憾之余り奉存候間、恐懼之至ニ御座候得共、社寺上知相成候御官林、前書之場所々々ニテ木品御下賜被成下置度、奉願候、以上、

218

明治六年  
八月四日  
山梨県権令  
藤村紫朗殿

巨摩郡三十一区  
区长

遠藤長次右衛門

御願木数三百本之内  
一本数式百四拾九本

記

内訳

檜三拾九本

但目通周径自式尺六寸至五尺六寸

長自式間至六間

杉三拾本

但目通周径自三尺式寸至五尺七寸

長自三間至六間

右六拾九本者、巨摩郡第二十九区平林村鷹尾寺上知ニ而極印御打渡し之分

桧式拾式本

但目通周径自式尺六寸至四尺六寸

長自式間至五間

杉五拾壹本

但目通周径自三尺五寸至六尺五寸

長自三間至六間

檜拾四本

但目通周径自四尺五寸至七尺

長自五間至六間

松六拾三本

但目通周径自四尺三寸至七尺

長自四間至七間

右百五拾本者、巨摩郡第三十区小室村妙法寺上知ニ而極印御打渡し之分

桧拾九本

但目通周径自三尺至六尺五寸

長自三間至八間

杉四本

但目通周径自三尺六寸至六尺五寸

長自六間至八間

檜五本

但目通周径自四尺五寸至六尺五寸

長自四間至六間

檜式本

但目通周径自五尺至五尺五寸

長自式間至三間

右三拾本者、巨摩郡第三十区高下村妙祐寺上知ニ而極印御打渡し相成候分  
ハ、追而御沙汰之上、伐木可致旨御談示有之、承知奉畏候、

右者、当区鯉澤村新築小学校資用材下賜候分、前書上知之場所ニ而今般極印御  
打渡し相成、正ニ奉請取候、且先般御願木数右場所々々ニ而引足不申、此分不  
日外上知之場所見立御願奉申上度、依之御請書旁奉申上候也、

巨摩郡第三十一区

明治六年  
第八月十六日

学区取締兼

区长

遠藤長次右衛門

山梨県御出役

内山光親殿

219

御届

当区所産之軍品金屑等之義取調候処、更ニ無之段、毎村今申出候間、  
此段御届奉申上候、以上、

巨摩郡三十一区

区长

遠藤長次右衛門

山梨県権令藤村紫朗殿

明治六年八月廿七日

210

(貼紙)

(朱)「区长」 巨摩郡第三十一区

印鑑

鯉澤村

遠藤長次右衛門

西三十三年五月

明治六年一月十四日拜

(朱)「右印鑑札九月十日御県庁江差出候事、」

2-11

小学校用材御下願

巨摩郡第三十一区

学区取締

鯀沢村

遠藤長次右衛門

右奉申上候、当区鯀沢村小学校新築用材、先般奉願木数三百本之内、木数貳百四拾九本者、平林村鷹尾寺・小室村妙法寺・高下村妙祐寺、右三ヶ所上地ニ而御渡被成下、難有奉存候、就而者残木数五十沓本身延久遠寺・大野村本遠寺上地之内ニおゐて御見分之上、御下賜被成下度、以書付奉願候、以上、

右

明治六年九月十二日

遠藤長次右衛門

2-12

巨摩郡第三十一区

学区取締鯀沢村

遠藤長次右衛門

右奉申上候、当区鯀沢村小学校用材之内、木数五十一本御下賜奉願候処、今般粟倉村外式ヶ村御官林ニ於テ御渡相成候段、被仰聞、難在奉存候得共、右御場所迄ハ里数遠隔ニて運輸之入費多分御掛り、恐懼之至リニ御座候得共、当地ニ於テ買入候より余程高価ニ相当り候様存候間、右場所ニ而御渡し之義御免被成下置度、猶追而最寄御上知御官林之内承り合セ御願奉申上度候間、此段以書付奉申上候、以上、

右

明治六年九月十九日

遠藤長次右衛門

土木御掛御役人中様

2-13

本年七月第四百一十一号ヲ以御布達相成候、水車業人名并白数取調短冊先般差上置候処、御県庁控人名簿江照準不致候ニ付、右御控壺冊并当春以来右業体水車輪径ヲ以テ御聞届相成候人名簿追加共、御渡被成再調方御達之趣、承知仕候、依テ御請申上候、以上、  
本簿壺冊受取、  
来ル三十日限り取調可差上候、  
遠藤長次右衛門

2-14

巨摩郡第三十一区

鯀沢村

遠藤太右衛門

一金沓円五十銭

一金沓円五十銭

小以金三十六円

右者先般奉願候、

皇城御造営之内へ献金御聞届相成候ニ付、前書之通上納仕候、以上、

右区长

明治六年九月廿二日

遠藤長次右衛門

山梨県権令藤村紫朗殿

2-15

巨摩郡第三十区最勝寺村戸長身分進退見込書

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤長次右衛門

右奉申上候、最勝寺村戸長志村七右衛門義、拜命以降御布告書類各戸江順達不仕、并開墾願等之義ニ付不良之廉々小前者共分奉出訴混雜罷在候ニ付、治り方見込可申上旨御達ニ付、探索仕候処、御布告書各戸江通達不致候分過半ニおよび、然ル処、副戸長之内ニも各戸江順達不致候而者不相濟義与心附ヶ候ものも

有之候得共、戸長七右衛門義ハ同村内ニ而者第一身元宜敷もの故、右ニ恐怖致し、重而心附候義難及、其儘因循荏苒之由、且同人義ハ身元宜敷ニ慢り、尊大之所置而巳多く、乍去同人義戸長御差免相成、跡役戸長ニ任し堪候もの副戸長之内ニ無御座候、村内共和無覺束奉存候、尤右七右衛門義ハ戸長役ニ不堪ト申ものニも無之義ニ付、前件不都合之段御県庁ニ於テ御督責御教諭相成、其区々長よりも時々懇ニ説得いたし候ハ、常明改心精勤も可仕、左候ハ、治り方之一端与も奉存候、且前件所行御瞭察之上、戸長役被免候義ニ御座候ハ、跡役之義ハ同村農志村佐次兵衛江被仰付候ハ、同人義尊実之上御用弁ニも相成、且人望有之候ものニ付、村内共和治理可仕与奉存候間、此段以見込書奉申上候、以上、

右

明治六年九月廿日

遠藤長次右衛門

山梨県権令藤村紫朗殿

217

朱肉用方之義ニ付御伺

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤長次右衛門

右奉申上候、従来諸御願伺届等ニ黒肉相用來候処、以来朱肉相用候而も宜敷御座候義、此段以書付奉伺上候、以上、

右

遠藤長次右衛門

山梨県権令藤村紫朗殿

(朱)「書面勝手ニ可相用事、

明治六年九月廿五日

216

古乗駕籠御伺

巨摩郡第三十一区

鰍沢村

日蓮宗

一古乗駕籠 志挺

右者、当村経王寺従前ヨリ持来居候処、悉及破損、即今持用ニ不相立候得共、如何取計候か宜敷義、此段以書付奉伺候、以上、

右区

区长

遠藤長次右衛門

山梨県権令藤村紫朗殿

明治六年西五月

218

御届

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤長次右衛門

今般百三十一号御達相成候ニ付、喚集所之義者当区鰍沢村蓮華寺ニおゐて、左之日限之通取計度、

来ル十月十三日

鰍沢村 戸数七百七十七

同 十四日

長知沢村 鳥屋村 十谷村 柳川村

箱原村 大塩村

同 十五日

全戸数四百八十六

西嶋村 久成村 平須村

前書日割之通為読聞度奉存候間、兼而御達之通区内毎村江御布達奉願度、此段以書付御届奉申上候、以上、

右

明治六年九月三十日  
山梨県権令藤村紫朗殿

遠藤長次右衛門

山梨県権令藤村紫朗殿

2  
19

巨摩郡第三十一区正副戸長人名取調書

鰻沢村

戸長

遠藤太右衛門

副戸長

中込清左衛門

中込太郎左衛門

青柳其右衛門

青柳岩太郎

早川糸右衛門

雨宮三郎右衛門

中嶋 正藏

樋口源五左衛門

望月和市郎

望月万右衛門

望月茂右衛門

堀口文右衛門

樋口嘉兵衛

笠井源兵衛

笠井正三郎

佐野甚左衛門

佐野源三郎

佐野徳之丈

地場藤右衛門

佐藤重郎右衛門

佐野太郎右衛門

大森作兵衛

深沢 万吉

幡野 力弥

神宮寺興右衛門 深沢永兵衛

右者、当区内正副戸長人名取調奉書上候、以上、

明治六年十月十一日

右区長  
遠藤長次右衛門

2  
20

職猟税金取集上納

金壱円

柳川村

深沢長右衛門

依田忠兵衛

同

長知沢村

樋口与左衛門

同

重右衛門

同

久右衛門

望月丈右衛門

同

貞兵衛

同

川口源右衛門

望月儀右衛門

樋口 嘉吉

同

久成村

佐野仙太郎

同

齊藤彦右衛門

大塩村

佐野定右衛門

同

利右衛門

地場佐右衛門

渡辺仙左衛門

平須村 深沢 徳藏 幡野金四郎 神宮寺糸右衛門 増田廣兵衛

小以金式拾円

右取集奉上納候、以上、

右区長  
遠藤長次右衛門

2  
21

山梨県権令藤村紫朗殿

当区内於テ当年十七歳相成候者取調候処、前書之通鳥屋村外七ヶ村ニ成丁之  
もの更ニ無之旨、戸長兼副議員等ノ届出候間、猶篤与取調候処、相違無御座候  
間、進退仕候、以上、

明治六年十月

山梨県戸籍掛

御中

巨摩郡第三十一区  
区長兼議員  
遠藤長次右衛門

2-22

当区内於テ当年十八歳以上四十歳迄相成候者取調候処、前書之通長知沢村外四ヶ村ニテ成丁之もの更ニ無之旨、戸長兼副議員等ハ届出候間、猶篤与取調候処、相違無御座候間、進達仕候、以上、

巨摩郡第三十一区

区长兼議員

明治六年十月日

遠藤長次右衛門

山梨県戸籍掛

御中

2-23

御届

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤長次右衛門

右奉申上候、御制法毎村毎戸江読知施行之義、当区内ハ兼而御達之通、当二十一日ヨリ二十三日ニ至、三日之間読知施行了済候間、此段御届奉申上候、以上、

右

遠藤長次右衛門

明治六年十月

山梨県権令

藤村紫朗殿

2-24

十谷村正副戸長ハ出願之義ニ付見込書

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤長次右衛門

右奉申上候、当区内十谷村正副戸長ハ同村農望月只兵衛ヲ相手取奉願上候、条件之義者書面ニテ御瞭察も可有御座候、全体只兵衛義者尋常心得方不宜我意ヲ以压倒いたし、且村内頑民共ヲ申薦メ、動揺ヲ醸候義ヲ好ミ候ものニ付、今般

之場合ニも立至、私共おゐても種々説得仕候得共、何分我意申募り候ニ付、探索仕候処、正副戸長之願立ニ相違無之、且戸長望月孝右衛門義ハ誠ニ篤実之ものニ付、詐偽ヲ以出願いたし候ものニ無之ニ付、前件御瞭察之上只兵衛被召出、嚴重御取糺無之候而者、猶我意申募り後來村方治り方不相成義与奉存候間、此段以書付見込奉申上候、以上、

右

明治六年十月

遠藤長次右衛門

山梨県権令藤村紫朗殿

2-25

十谷村副戸長増員入札之義ニ付申上書

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤長次右衛門

右奉申上候、当区内十谷村之義、山間嶮岨手広之義ニ付、正副戸長三人ニテ者勤務不行届義ニ付、副戸長増員奉願候処、御聞届相成、右ニ付撰挙入札いたし可差出旨御指令ニ付、当六月頭入札いたし、当方エ差出し有之ニ付預り候処、右入札ニ付種々之混雜相生し、其由ヲ起候処、既ニ撰挙ニも可相成、貞兵衛・勝右衛門与申もの有之、右兩人義者右村ニても重立候ものニ付、貞兵衛江随從之もの過半、勝右衛門江随從之もの過半、右兩派ニ分裂ニテ入札相始候様子、素々兩派ニ相別レ居候義、御趣意ニ悖り、何分共和不仕候ニ付、同村正副戸長ニても右様不体裁之入札ニテ者不宜段、懇々説得いたし候処、表者承伏之様子ニテ、然ル上者銘々之存意ヲ以入札いたし可申段申居、然ル処右貞兵衛・勝右衛門兩親類之もの罷出、右様貞兵衛・勝右衛門之為メニ混雜相生し候而者不宜義ニ付、右兩人義者相除キ、余人ヲ撰挙可致与対談之上入札いたし候由、然ル処貞兵衛親類且随從之もの者前対談之旨ヲ固守し、勝右衛門親類之もの者随從之もの与申合、右貞兵衛派之ものヲ欺キ、勝右衛門一途ニ撰挙入札いたし候趣ニ付、不思一層混雜ヲ醸し、実ニ不都合之義ニ付、私共於テも伍長其他之ものと面会、種々碎心治り方説得仕候得共、前件之次第ニ立至り候ニ付、何分不行届、無余義人撰封書其俣奉差上候間、何卒前件御瞭察被成下、一端増員御聞届相成候義ニ者有之候得共、此上開札増員被仰付候而者、猶一層混雜之基イ、且

一人相増候得者、村費も相嵩候ニ付、先般入札之義一端御聞届相成候義二者御座候得共、村方治り方ニも抱り、且入費相増候義ニ付、右入札封書之儘御聞届無之段被仰渡、御下ケ相成候様奉懇願候、以上、

右

明治六年十月

遠藤長次右衛門

山梨県権令

藤村紫朗殿

(朱貼紙)

「先般副戸長増員願出候節、聞届候趣及指令置候処、詮議之次第も有之、難聞届条、此旨更ニ相達候事、

但、入札ハ封之儘下戻候事、

明治六年十月三十一日 山梨県符

奉願上候、

右

明治六年十月

遠藤長次右衛門

山梨県権令

藤村紫朗殿

2-27

御願

巨摩郡第三十一区

区長

遠藤長次右衛門

右奉申上候、私義通称長次右衛門、実名聰知相名乘印形之義ハ実名彫刻相用來候処、今般第二百廿二号御布達奉承知、右ニ基印形之文字与一定相成候様、実名相用度、此段奉願上候、以上、

右

明治六年十月

遠藤長次右衛門

山梨県権令藤村紫朗殿

2-26

御伺

巨摩郡第三十一区

区長

遠藤長次右衛門

一此度御頒布相成候御制法御ケ条中、

付組合死生縁組改名田畠山林売買譲与其外廉立出入有之ハ、其度々戸長へ

相届、戸長分区长へ相届、戸籍へ可書記事、

右御ケ条中改名与有之、右者先般改名不相成旨御布達も有之、然ル処御ケ条

中之改名ハ先代亡嫡子相続之節、先代之通称ニ改名いたし度もの共、且同名

等多分有之班雜ニ亘り候段ヲ以改名之義届出候ハ、篤与取糺情実不得已分

者承り届、戸籍江記載いたし候而宜敷義ニ御座候義、

一第二百二十三号御布達、西京・大坂其他為換会社発行之金券、当四月一日分

九月三十日マテ引換方御布達、且特別之御詮議ヲ以当十一月三十日迄御引換

延期相成、十二月一日ヨリ断然通用令停止候御旨、御布達相成候義、

右金券之義者何れノ種品ニ御座候義、

右廉々区内毎村より訊問被致差支候ニ付、奉伺候間、至急御指令被成下置度、

2-28

巨摩郡第三十一区

鰍沢村

第二十五号

自用

中込清左衛門

此税金式十五銭

第二十八号

一同 一挺 自用

青柳其右衛門

此税金二十五銭

第二十七号

一同 一挺 自用 中嶋 正蔵  
此税金二十五銭  
第二十六号

一同 一挺 自用 寫田 洞仙  
此税金二十五銭

第二十九十一号  
一同 一挺 自用 海野次左衛門  
此税金二十五銭

第二十九十二号  
一同 一挺 自用 青柳 太蔵

第二十九十三号  
一同 一挺 自用 雨宮三郎右衛門  
此税金二十五銭

第二十九十号  
一同 一挺 自用 青柳道十郎  
此税金二十五銭

第二十八十八号  
一同 一挺 自用 原田弥市右衛門  
此税金二十五銭

第二十八十九号  
一同 一挺 自用 河住忠右衛門  
此税金二十五銭

第二十八十七号  
一同 一挺 自用 遠藤長次右衛門  
此税金二十五銭

第三百四号 三百五号 三百六号 三百七号 三百八号 三百九号  
三百十号 三百十一号  
一宿駕籠 八挺 稼 駅方持  
此税金壹円 但老挺二付金十二銭五厘  
小以金三円七十五銭  
第百七十一号

一人力車 一輛 自用 遠藤長次右衛門  
此税金壹円  
合金四円七十五銭

右者、当区内駕籠・人力車税、前書之通取集メ奉納候、以上、  
明治六年十月十二日 右区长 遠藤長次右衛門  
山梨県権令藤村紫朗殿

2129

巨摩郡第三十一区藍瓶并絞油税金上納  
一藍瓶五十六 鰺沢村  
此税金壹円十二銭 青柳與次兵衛

一同 式十 同 青柳太郎左衛門  
此税金四十銭

一同 四十五 同 青柳長兵衛  
此税金九十銭

一同 式十四 同 青柳文次郎  
此税金四十八銭

一同 式十二 同 望月 万吉  
此税金四十四銭

一同 式十 同  
此税金四十銭 深沢彦右衛門

一同 十 未夕御願濟不相成候二付除之 西嶋村 笠井喜平次  
此税金二十銭

一絞油五升絞式ツ 鰺沢村  
此税金壹円 原田弥十郎

一同 六升絞壹ツ 同  
五升絞式ツ

此税金式円六十銭 一ノ瀬平右衛門  
小以金三円六十銭

合金八円十六銭

前書之通取集奉上納候、以上、

明治六年十一月

右区長

遠藤長次右衛門

山梨県権令藤村紫朗殿

(朱貼紙)

「 瓶十六 箱原村

三十二銭 樋口茂平太

同二十 同村

四十銭 宮崎三左衛門

┌

2-30

御願

巨摩郡第三十一区

区長

遠藤 聰知

右奉申上候、当区鯉沢村小学校新築場処、蓮華寺境内端杉小木目通り壹尺廻りヨリ壹尺五寸廻りマテ十本、同式尺廻りヨリ三尺廻りマテ八本、合拾八本生立有之、右生木之義幼童通校ニ差支候間、伐木之上通路新ニ築広仕度段、先日御掛御見分之節奉申上置候義ニ御座候間、何卒伐木御許可奉願上度、且伐木品之義者、同寺境内ニ御座候ニ付、以御仁恤同寺江御下賜奉願上度、此段以書付奉懇願候、以上、

明治六年十一月

山梨県権令藤村紫朗殿

2-31

巨摩郡第三十一区

区長

遠藤 聰知

右奉申上候、当区西嶋村副戸長佐野源三郎跡代人当否之大見込可申上旨御達ニ付、推考仕候処、同村農佐野只兵衛江被仰付度、且副戸長増員之義者、佐野勝右衛門へ被仰付度、右兩人義御用弁ハ勿論、人望も有之、当器之ものと奉存候間、此段以見込書奉申上候、以上、

右

遠藤 聰知

山梨県権令藤村紫朗殿

2-32

存置官林取調書

字 源氏山 御殿山  
ワル沢 ほうの木原

甲斐国巨摩郡

十谷村

一反別不詳 但嶮岨

東 十谷村耕地

西 湯嶋村境

南 大原乃村境

北 平林村境

東西凡二十丁

南北凡二里

「 東 十谷村小物成林境

西 湯嶋村林深山并平林官林境

南 大原乃村小物成境

北 平林村小物成境

東西凡八丁

南北凡二里

立木桧凡五十本 但目通り凡二尺廻りヨリ五尺通り迄曲木多し

同 榎凡四百本 但目通り凡四尺廻りヨリ八尺廻り迄曲木多し

同 樺凡五十本 但目通り凡四尺廻りヨリ八尺廻り迄曲木多し

同 赤松凡四百本 但目通り凡四尺廻りヨリ八尺廻り迄曲木多し

同 雑木立凡四千百本 但目通り凡四尺廻りヨリ八尺廻り迄曲木多し

一下草冥加米永等上納無御座候、

一大柳川水源ニ関シ候ニ付、一ハ土砂流出ヲ恐レ、一ハ流水乾涸ヲ恐レ候間、

存シ置度奉存候、

右者、当区官林之内将来御立置相成度、見込之分取調候処、書面之通御座候、以上、

巨摩郡第三十一区

区长

明治六年十一月

遠藤 聰知

山梨県権参事

富岡敬明殿

(貼紙)

「前書当区内存置官林取調書差上候二付、奥印仕候、以上、

右区长

遠藤 聰知

三月廿日奥印いたし遣し候事

2-33

御払下官林箇所取調書

字岩崎

甲斐国巨摩郡

西寫村

一反別四反四畝歩 但平地

東 富士川

東西凡十一間

西 西嶋村耕地

南 西嶋村耕地

南北凡百十六間

北 富士川

立木松壺本 但目通り五尺廻り曲木

同 櫻壺本 但目通り五尺五寸廻り曲木

竹凡式千式百三十本 但目通り三寸廻りヨリ七寸廻りマテ

一下草冥加米永等上納無御座候、

右者、当区官林之内将来御払下相成、故障無之見込之分取調候処、書面通御座

候、以上、

巨摩郡第三十一区

区长

明治六年十一月

遠藤 聰知

山梨県権参事

富岡敬明殿

2-34

御届

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤 聰知

右奉申上候、甲第二百四十号御達相成候、英国龍動府博覧会出品物之義、当区取調候処、更ニ無御座候間、此段以書付御届奉申上候、以上、

右

明治六年十一月

遠藤 聰知

山梨県権参事

富岡敬明殿

2-35

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤 聰知

右奉申上候、当区内鯉沢村之義ハ、馱場・河岸場ニ属シ、御公用・村用トモ繁劇ニ因テ、御規則分正副戸長役員増加願上候次第二付、方今物事至重之御世話被為在候義ヲ感體いたし、固陋姑息ナル小前之者ニ勸善懲惡ヲ専務トシ、懶惰ヲ脱シ生業勉勵可致様解話いたし、瞬時開明進歩之一挙ヲ起スヘキ職務ニアリナカラ、物ニ就キ事ニ触レ旧習洗滌セス、当今之御政体江注意不致者両三輩有之、其レカタメ奮勉之心掛ケアル者も自然其弊押移り、怠惰ニ流レ、一村開化ニ後レ候而已ナラス、他村ニ笑ヲ受ケ候義、実ニ遺憾之除リ、殊ニ自村之不体裁有之候而者、区内ト雖モ他村ノ不体裁不注意ヲ挙ル不能、因テ別紙二名ヲ廃止、更ニ一名副戸長被命度、一体右之者疾ニも撰挙致度存候得共、是迄担当之事務有之、不得止事情ニ而遷延罷在候処、右担当之事件も漸々貫通之運ヒニ至リ候間、能キ機会ニ付至急撰抜一変イタシ候ハ、自村者勿論、区内迄勉強之

楷梯ニも相成、カナラス時日ヲ不移、風化も一変いたし、御趣意も貫通可仕与  
奉存候間、別紙見込之通速ニ被仰付度、此段以書付奉申上候、以上、

明治六年十一月

右 遠藤 聰知

山梨県権参事

富岡敬明殿

副戸長麿起見込書

巨摩郡三十一区

区长

遠藤 聰知

右奉申上候、当区（赤川）歟沢村副戸長青柳（赤川）・早川（赤川）右二名義、別紙具状書御瞭  
察之上被廢、同村農河住（赤川）江副戸長被仰付度、此段以見込書奉申上候、以上、

明治六年十一月

右 遠藤 聰知

山梨県権参事

富岡敬明殿

2-36

開校願

巨摩郡三十一区

学区取締

遠藤 聰知

右奉申上候、当区内西嶋村小学校之義、開校相願度段同村正副戸長ヨリ申出候  
二付、本日開校被成下置度、此段以書付奉願候、以上、

明治六年十二月八日

右 遠藤 聰知

山梨県参事富岡敬明殿

2-37

伐木願

巨摩郡三十一区

区长

遠藤 聰知

右奉申上候、当区歟沢村新築小学校用材之義、先般高尾寺・妙法寺・妙祐寺、  
右三ヶ所ニ於テ御下賜相成候处、右之内巨摩郡三十区高下村妙祐寺之義ハ、除  
地御改済之上伐木可仕段、御請書奉差上置外両所之分ハ大概伐木済、右二付妙  
祐寺之生木へ取掛り伐木いたし度、此段奉伺候間、何卒至急御指令被成下置度、  
奉願上候、以上、

明治七年一月十八日

右 遠藤 聰知

山梨県権令藤村紫朗殿

(朱)

「 伐木不苦事ニ相成、土木掛り  
検印ノ済候分可伐取事、

戊一月十八日 三谷恒承ル〇

2-38

巨摩郡三十一区

徴兵成丁簿

当区内ニ於テ明年徴兵年齢相当之者一名有之候段、戸長兼副議員ヨリ届出候  
間、篤卜取調候处相違無御座候間、及進達候也、

明治六年十二月

巨摩郡三十一区  
区长兼議員

遠藤 聰知

山梨県

戸籍掛御中

巨摩郡第三十一区  
徴兵免役連名簿

当区内ニ於テ明年徴兵年齢相当之者、別冊之通五十一名免役御規則ニ相当り候旨、簡条書ヲ以村之戸長兼副議員等ヨリ届出候間、篤卜取調候処相違無御座候間、及進達候也、

巨摩郡第三十一区

区长兼議員

明治六年十二月

遠藤 聰知

山梨県戸籍掛

御中

村之文

当村ニ於テ明年徴兵年齢相当之者取調候処、一名御座候ニ付、此段御届申上候、以上、

右村

戸長兼副議員

明治六年十一月

遠藤太右衛門

当区区长御中

当村ニ於テ明年徴兵年齢相当之者取調候処、免役御規則ニ当り候者、前書之通拾九名御座候ニ付、夫々簡条書ヲ以テ、此段御届申上候、以上、

右村

戸長兼副議員

明治六年十一月

遠藤太右衛門

当区区长御中

巨摩郡第三十一区

当区内於テ明年徴兵年齢相当之者取調候処、徴兵成丁簿并免役連名簿ノ外、本籍ハ勿論寄留人ニ至迄一切書載候者無御座候、以上、

右区长兼議員

遠藤 聰知

明治六年十二月

山梨県戸籍掛

御中

煩ニ付代  
副戸長

河住忠右衛門

2  
39

職獵御鑑札御引換願

巨摩郡第三十一区

柳川村

深沢長右衛門

依田忠兵衛

十谷村

望月源右衛門

同 貞兵衛

樋口 嘉吉

長知沢村

樋口与左衛門

久成村

佐野仙太郎

斎藤彦右衛門

大塩村

佐野定右衛門

同 利兵衛

右之もの共職獵銃旧御鑑札取纏メ奉返上候間、新御鑑札御下ケ渡被成下置度奉願候、以上、

右区长

遠藤 聰知

山梨県権令藤村紫朗殿

職胤廢業二付御鑑札御返上願

巨摩郡第三十一区

平須村

深沢 徳藏

幡野金四郎

神宮寺糸右衛門

増田広兵衛

十谷村

望月儀右衛門

長知澤村

樋口重右衛門

同 久右衛門

望月丈右衛門

大塩村

地場佐右衛門

渡辺仙左衛門

右之もの共義、老衰并眼疾等ニテ職胤難相宮候ニ付、廢業之義、村々戸長ヨリ申出候間、取調候処相違無之ニ付、御鑑札取纏メ奉返上候間、何卒御聞届被成下置度、此段奉願候、以上、

右区长

遠藤 聰知

山梨県権令藤村紫朗殿

明治七年一月

記

巨摩郡第三十一区

長知沢村

願人

樋口与左衛門

十谷村

願人

樋口 嘉吉

望月貞兵衛

川口源左衛門

柳川村

願人

依田忠兵衛

深沢長右衛門

大塩村

願人

佐野利兵衛

佐野定右衛門

久成村

願人

斎藤彦右衛門

佐野仙太郎

右者、当一月ヨリ十月迄職胤銃御願仕候処、御許可被成下御鑑札御下渡相成、正ニ奉受取候、且胤業之義者御規則相守可申様、前書名前之者共今可申聞候、依御受書奉差上候、以上、

右区

区长

遠藤聰知代

巨摩郡第三十区

区长

田中佐兵衛

山梨県権令藤村紫朗殿

明治七年一月廿七日

郵便取扱人人撰見込

巨摩郡第三十一区

鯉沢村

副戸長

雨宮三郎右衛門

右者、当区内鯉沢村江郵便所御設立之趣ニ付、右之もの義取扱人二人撰見込奉申上候、以上、

明治七年二月二日

右区長  
遠藤 聰知

2  
43

小学校新築用途金御届

巨摩郡第三十一区

鯉沢村

一金四十円 中込清左衛門  
 一金三十円 中嶋 致恭  
 一金二十五円 雨宮三郎右衛門  
 一金二十円 遠藤太右衛門  
 一金三円 牧野 紋蔵  
 一金二円 海野次左衛門  
 一金二円 中村 武八  
 一金二円 青柳 幸吉  
 一金五十円 遠藤 聰知

右之もの共義、当区鯉沢村小学校新築用途之内江頭書之通献金仕候間、此段以書付御届奉申上候、以上、

明治七年二月七日

山梨県権令藤村紫朗殿

右区長  
遠藤 聰知

2  
44

小学校用材御下賜願

巨摩郡第三十一区

区長

遠藤 聰知

右奉申上候、当区鯉沢村新築小学校之義、先般木数式百四十九本御下賜被成下置候ニ付、夫々伐木用途ニ当候処、小柱ニ引当候分無之二付、奉再願候間、巨摩郡第三十区小室村妙法寺上知官林ニ於テ、杉目通三尺廻りヨリ同四尺廻リマテ之内式拾五本、以御仁恤御下賜被成下置度、此段以書付奉願上候、以上、

明治七年二月

右区長  
遠藤 聰知

山梨県権令藤村紫朗殿

2  
45

箱原村ヨリ西嶋村マテノ間横道取調

(朱消去線)

(朱)「是者不差出候事」

箱原村

一箱原村分内小物成

依田半左衛門持

一十谷村分内小物成

樋口茂平太持

依田半左衛門持

一西嶋村分内小物成

依田甚右衛門持

西嶋村

五十間計り之間

村持

十谷村

笠井角兵衛持

外者岩山ニテ無税ニ御座候、

右之通取調候処、相違無御座候、以上、

楠甫村

望月弥兵衛持

明治七年二月十五日

巨摩郡第三十一区  
区長  
遠藤 聰知

2  
46

郵便取扱人之義ニ付申上

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤 聰知

右奉申上候、先般当区内畝沢村郵便取扱人撰見込奉申上候処、右見込之通雨宮三郎右衛門江取扱被仰付候処、同人病氣ヲ以御歎願申上候二付、猶当器之見込可申上旨御達二付、別紙之通人撰見込奉申上候、以上、

右

遠藤 聰知

明治七年二月十七日

山梨県権令藤村紫朗殿

巨摩郡第三十一区

畝沢村

副戸長

中嶋 致恭

右之もの義、郵便取扱当器之もの二付、人撰見込奉申上候、以上、

右区长

遠藤 聰知

明治七年二月十七日

2-47

御猶予願

(朱消去線)

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤 聰知

右奉申上候、物産取調并表共去十五日マテ取纏メ可奉差上候処、区内村々ヨリ取調書受取候分、未夕半ニ至り兼候間、再三村々江促シ置候得共、前件之次第二付、来ル<sup>(金目)</sup>日迄御猶予被成下置度、此段以書付奉願上候、以上、

右

遠藤 聰知

明治七年二月十七日

山梨県権令藤村紫朗殿

2-48

戸長御免願二付跡戸長役見込書

巨摩郡

第三十一区

遠藤 聰知

右奉申上候、当区畝沢村戸長遠藤太右衛門義、風毒症ニテ役義難相勸段奉願、右二付戸長役御差免相成候上者、跡戸長役人撰可奉申上旨被仰聞、右二付跡役之義ハ副戸長中込清左衛門江被仰付度、此段以見込書奉申上候、以上、

右

遠藤 聰知

明治七年二月十七日

山梨県権令藤村紫朗殿

2-49

記

一金拾七円二十六銭 但畝沢駅ヨリ切石駅マテ里程二里二十八丁

右者、壬申十一月二日ヨリ明治六年十月廿九日迄、区継人足賃前書之通二御座候、尤別紙詳細証書之写相添奉差上候間、御差加被成下度、此段願上候也、

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤 聰知

明治七年二月

区长総代理

御中

2-50

(欄外)「一番分」記

一 杉壺本

但 長四間半  
目通り三尺廻り

一 同壺本

但 長四間半  
目通り尺七寸廻り

一同壺本 但長六間  
目通り三尺八寸廻り

一同壺本 但長四間半  
目通り三尺廻り

一杉壺本 但長三間半  
目通り式尺八寸廻り

一同壺本 但長四間半  
目通り三尺六寸廻り

一同壺本 但長五間  
目通り式尺六寸廻り

一同壺本 但長四間  
目通り四尺廻り

一同壺本 但長四間半  
目通り四尺式寸廻り

一同壺本 但長四間  
目通り四尺廻り

一同壺本 但長四間  
目通り四尺廻り

一同壺本 但長五間  
目通り三尺式寸廻り

一同壺本 但長四間半  
目通り三尺廻り

一同壺本 但長五間  
目通り三尺五寸廻り

一同壺本 但長六間  
目通り四尺式寸廻り

一同壺本 但長三間半  
目通り三尺八寸廻り

一同壺本 但長四間  
目通り三尺式寸廻り

一同壺本 但長五間  
目通り四尺五寸廻り

一同壺本 但長四間半  
目通り三尺八寸廻り

一杉壺本 但長六間  
目通り三尺五寸廻り

一同壺本 但長六間  
目通り三尺式寸廻り

一同壺本 但長六間  
目通り三尺式寸廻り

一同壺本 但長五間  
目通り三尺式寸廻り

一同壺本 但長三間半  
目通り三尺八寸廻り

右者、当区鯉沢村新築小学校資用材御下賜候、前書之木数巨摩郡第三十区小室村妙法寺於上知御官林、今般極印御打渡し被成下、正ニ奉請取候、依之御請書奉差上候、以上、

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤 聰知

明治七年二月廿四日

土木御掛御中

2-51

副戸長進退申上

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤 聰知

右奉申上候、当区箱原村副戸長依田甚右衛門義、眼病之趣ヲ以免役願仕候ニ付、情実詳細可申上旨、御達シ有之、右甚右衛門義、眼病者勿論、殊ニ固修ニて御用弁不相成候ニ付、同人義ハ免役被仰付度、然ル上者一人相減候へ者、跡役不被仰付候而者御公用・村用とも手廻り兼候ハ顕然与奉存候間、同人役義御差免

相成候上者、跡役之義ハ樋口左門江被仰付度、左候得ハ御用弁之運ヒ相立可申  
与奉存候間、此段以書付奉申上候、以上、

明治七年二月廿五日

山梨県権令藤村紫朗殿

右

遠藤 聰知

(朱)「右書面差上置候得共、御県庁不見当趣ニ付、猶別紙差上候事、」

2-52

御鑑札名目改正願

巨摩郡第三十一区

鰺沢村

醸造人

長次右衛門事

遠藤 聰知

私義、是迄通称ヲ以テ御鑑札頂戴營業罷在候処、実名ニ改正仕、尤戸籍御掛り  
へ御願濟ニ相成候間、何卒酒造并醬油共御鑑札御書替被成下度、依之両様御鑑  
札相添、此段奉願候、以上、

右

明治七年

遠藤 聰知

戸長

遠藤太右衛門

(朱)「右書面江調印いたし、三月六日御鑑札四枚差遣し候事、尤、清酒造高百  
六十石・醬油造高五石ニ有之、順平殿へ、」

2-53

副戸長人撰入札之義ニ付申上

巨摩郡第三十一区

区長

右奉申上候、当区内箱原村副戸長依田甚右衛門義、本月二日病ヲ以役義御免奉  
願上候処、跡役被仰付候上者、御差免可相成旨御指令ニ付、即跡役人撰入札取  
纏メ申出候間、入札封書相添添申上候、以上、

明治七年三月八日

山梨県参事富岡敬明殿

右

遠藤 聰知

2-54

副戸長人撰見込書

巨摩郡第三十一区

区長

遠藤 聰知

右奉申上候、当区内箱原村副戸長依田甚右衛門義、役義御差免相成候上者、跡  
役人撰見込可申上旨被仰聞候ニ付、右跡役之義者樋口左門江被仰付度、同人義  
者御用弁ニも可相成奉存候間、人撰見込書ヲ以奉申上候、以上、

右

明治七年

遠藤 聰知

三月八日

山梨県参事

富岡敬明殿

2-55

商工取調書

鰺沢村

一穀商	二十一人	一塩商	十二人	一紙商	一人
一酒造	十二人	一醬油	五人	一酢	三人
一質屋	五人	一太物商	二人	一小間物	九人
一魚商	二十五人	一煉油商	二人	一荒物	七人
一菜種商	一人	一油商	式人	一絞油	二人



一古衣	五人	一菓子や	六人	一楮商	十人
一砂糖商	三人	一鉄物や	一人	一綿商	七人
一生姜商	二人	一白土商	一人	一材木や	一人
一旅籠や	十三人	一豆腐や	六人	一牛馬商	十六人
一湯屋	二人	一水車	三十六人	一飴屋	一人
一煮売	十一人	一船宿	二人	一馬宿	一人
一算盤工	一人	一船頭	百六十一人	一大工	六十三人
一船大工	七人	一桶工	二十人	一建具工	五人
一畳工	五人	一綿打工	十二人	一傘工	十五人
一鑄物師	一人	一硯工	二人	一提灯工	二人
一表具工	一人	一鍛冶工	十四人	一轆轤工	一人
一壁塗工	三人	一杣	二十九人	一仏師	一人
一石工	二十七人	一裁縫工	一人	一染工	一人
一茅大工	十八人	一仕立工	五人	一菓子工	一人
一附木工	一人	一髮結	七人	一木挽	十八人
一九六鋏工	十六人	一紙漉工	百八十人	一銃獵	十人

明治七年 甲斐国巨摩郡第三十一区諸業表

明治七年	甲斐国巨摩郡第三十一区諸業表	合算
名村	鰻長 澤知 屋鳥 十 柳箱 川原 西大 久平 須	村町數 十ヶ村
酒造	十二	十五
醬油	五	五
絞油	二	二
藥種	一	一
質屋	五	七
古鐵		

紙	一	十六	十七
穀	五	一	二十三
醬物	七	二	九
酢造	三		三
塩商	五		十二
木物商	二		六
漆物商	九		九
魚商	五		三
煉油業	二		二
油商	二		二
陶器商	二		二
帳面屋	一		一
烟草屋	二		三
紺屋	七	二	十
古道具	八	二	十
乾物屋	五		五
古衣	二		五
菓子	六		六
楮商	一	九	十
砂糖商	一		三
鉄物屋	一		一
綿商	二	五	七

巨摩郡 第三十一区



別紙当区内工商業取調候処、相違無之候、以上、

右

区长

明治七年三月九日

遠藤 聰知

勸業世話方

青柳其右衛門

山梨県参事

富岡敬明殿

3

(表紙)

明治七年甲戌三月ヨリ

同十月二至ル

誌

二

遠藤

3  
1

小学校新築用途献金願

一金十円

鰻沢村

井上長右衛門

一金十円

同

青柳與次兵衛

一金十円

同

中村 清七

一金五円

同

早川和市郎

一金一円五十銭

同

早川 金作

一金一円

同

中沢市郎右衛門

一金一円

同

深沢 延平

一金一円

同

望月周兵衛

一金一円

同

青柳伊勢左衛門

右之もの共義、当区鰻沢村小学校新築用途之内江、頭書之通献金仕度段申出候  
ニ付、以書付奉申上候間、何卒御許可被成下度、奉願候、以上、

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤 聰知

明治七年三月廿九日

山梨県参事富岡敬明殿

書面奇特之至、聞届候事、

第三月廿九日

3-2

上書

中教院	区长
御中	遠藤聰知

有志之者等級見込書

巨摩郡第三十一区

久成村

圓妙寺住職

久成日清

当三十四年六ヶ月

人望 上

学識 中  
篤志 上

弁舌 上

品行 中

右五科差等見込、上中下ヲ以申立候通、相違無之候也、

明治七年四月四日

区长

遠藤 聰知

3-3

国民軍免役簿扣

鰍沢村	十七名	長知沢村	壱名
鳥屋村	無之	十谷村	壱名
柳川村	壱名	箱原村	壱名
西嶋村	七名	大塩村	七名
久成村	三名	平須村	四名

村々奥書

当村ニ於テ、明年十七歳相成候者取調候処、免役御規則ニ相当り候者、前書之通幾名御座候二付、夫々箇条書ヲ以、此段御届申上候、以上、

巨摩郡第三十一区

何村

明治六年十一月

戸長兼副議員

何ノ誰

当区区长兼議員

御中

奥書

当区内於テ、明年十七歳相成候者取調候処、免役御規則ニ相当り候者、前書之通四十二名有之候旨、村々戸長兼副議員等今夫々箇条書ヲ以届出候間、猶篤与取調候処、相違無御座候間、進達仕候、以上、

巨摩郡第三十一区

区长兼議員

明治六年十一月

遠藤 聰知

山梨県戸籍掛御中

巨摩郡第三十一区

当区内ニ於テ、明年十七歳相成候者取調候処、免役連名簿之外、本籍者勿論、寄留人ニ至ルマテ、書載候者一切無御座候、以上、

右

区长兼議員

遠藤 聰知代

河住忠右衛門

明治六年十一月

山梨県戸籍掛御中

3-4

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤 聰知

右奉申上候、当区内鰍沢村遠藤太右衛門分山梨郡市河村古屋喜兵衛江懸り、入塩取扱中金三百円入狂之義、去ル辛未年中奉出訴候一件、去三月中私御呼出相成、右一件此上仰御公裁ヲ候事情ニ至り候而者、互ニ不宜事義、殊ニ右金員ニ就而者厚思召も御座候旨被仰聞ニ付、遠藤太右衛門江も悉説得仕候得共、素出

訴仕候程之情実ニ有之故、速ニ承伏者不仕、併私ニおみてハ前件厚御諭示之旨難黙止奉存候間、古屋喜方ニ而御説諭承伏仕候上者、太右衛門江者何様ニも説得相加へ、金百五十円二十五年賦ヲ以弁返納可為致、尤も太右衛門入塩取扱中綿種并玄米之運賃金御立換仕御下ケ可相成金員之分者、今般御下ケ被成下置度、乍去喜兵衛何分承伏不仕義而者、不得止仰御公裁之外無御座義与奉存候、依之愚存之見込以書付奉申上候、以上、

右

明治七年四月十日

遠藤 聰知

山梨県参事富岡敬明殿

3-5

正副戸長進退見込書

巨摩郡第三十区

区长

田中佐兵衛

同郡第三十一区

区长

遠藤 聰知

右奉申上候、当三十区最勝寺村元戸長志村七右衛門義、不良之廉ニ依テ役義被免候ニ付、跡役志村佐次兵衛江被仰付度、以見込書奉申上候処、速ニ同人江被仰付候ニ付、漸々村内治穩ニ至、然ル処、同人義者先年不幸ニして嗣子ヲ失ヒ、殊ニ多病老衰およひ現今戸長役勤務無覺束、尤同人江戸長役被命度見込書ヲ以申上候ハ、一時村内治り方ヲ図リ、無余義申上候義ニ而、往々之勤務ニて者、前件之次第ニ付、御公用先借等有之候而者私共於テモ恐懼仕候間、何卒前件御瞭察之上、同人戸長役御差免被成下、跡戸長役之義ハ同村副戸長志村政治江被仰付度、同人義人望ハ勿論、御用弁ニ可相成存候間、此段奉申上候、然ル上者跡副戸長役も御取立不相成候而者公私用不行届義ハ顯然与奉存候間、同村農志村十七吉江跡副戸長役被仰付度、右御採用相成候上者、同村是迄之陋風ヲ脱シ、一際開明ニ進候義者瞬時ト奉存候間、以見込書奉申上候間、速ニ御変換被仰付度、以見込書奉申上候、以上、

右

明治七年四月

田中佐兵衛

遠藤 聰知

山梨県権令藤村紫朗殿

3-6

区长

自今官等十四等ニ准シ取扱候事、

右御達之趣、謹而御請申上候、以上、

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤 聰知

明治七年三月廿七日

権令藤村紫朗殿代理

山梨県参事富岡敬明殿

3-7

郷社祭典之義ニ付御伺

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤 聰知

右奉申上候、当区郷社祭典之義、当四月三十日ニ相当り候ニ付、舊例ヲ追ヒ同日午後一時分祭神誉田和氣尊・大國主命、両尊之御幣ヲ御輿ニ勸請シ、同社ヨリ鯉沢村内者勿論、字富士川端水神森迄御幸仕候義ニ而、祠官并正副戸長供仕、社前者勿論、同所ニ於テ治国平天下并富士川通船安全之祈念執行仕、午後第四時帰社ニ相成、且鯉沢村内五ヶ所ヨリ従来之飾車ヲ御輿之跡江添引出し候旧例ニ御座候間、先規之通施行いたし候而宜敷御座候哉、此段奉伺候、以上、

右

明治七年四月廿七日

遠藤 聰知

山梨県権令藤村紫朗殿



一金二円 矢崎友次郎  
一金二円 早川新兵衛  
一金二円 仙洞田岩兵衛  
一金二円 遠藤 老藏  
一金二円 野澤和兵衛  
一金二円 海野忠左衛門  
一金二円 早川糸左衛門  
一金二円 依田清右衛門  
一金二円 樋口 日慈

右之もの共義、当区鯉沢村新築小学校用途之内江、頭書之通献金仕度段申出候  
二付、以書付奉申上候間、何卒御許可被成下度、奉願候、以上、

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤 聰知

明治七年五月十五日  
山梨県権令藤村紫朗殿

書面神妙之至、聞届候事、

明治七年五月十七日

3  
10

道路修築之義二付御願

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤 聰知

右奉申上候、道路修築之義、先般ヨリ厚御諭達奉拝承、今般当区内鯉沢村ヨリ  
西郷村マテ之間、駿州往還行程二里半余之処、損壞之場所多分有之、右之内先  
般奉願候新道切開之場所、凡三十丁除之、其他悉皆高低屈曲ヲ除シ、平坦之道  
路ニ修繕相加度、区内村々ヲ勸奨仕候処、一同協力仕、聊不仰官費修繕仕度段、  
村々ヨリ申出候二付、此段奉願候間、何卒御許可被成下置度、然ル上者至急御  
見分御差図被成下度、此段以書付奉願候、以上、

右

明治七年五月十九日  
山梨県権令藤村紫朗殿

区长

遠藤 聰知

(朱)「書面為見分早々官員可差遣候事、  
明治七年五月廿二日

3  
11

区长捻代理人撰書

区长副捻代理

新海 吉弥

右区长捻代理当器ト奉存候間、人撰奉申上候、以上、

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤 聰知

五月廿二日

山梨県権令藤村紫朗殿

(上部欄外、朱)「前書之事、」

(上部欄外、朱)「区长捻代理人撰封書、巨摩郡第三十一区区长遠藤聰知」

3  
12

申上

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤 聰知

右奉申上候、入塩取扱中遠藤太右衛門ヨリ市川村喜兵衛工掛り金三百円之行違  
二付、先般夫々見込書ヲ以申上候処、喜兵衛方ニテ承服不仕候趣二付、今般更  
ニ右金員其他金百円余、都合金四百円余、当鯉沢会所ニおゐて不足金および候  
義ニ付、会所取扱人其他右工関係之もの共ニテ償却之方法見込ヲ以可申上旨、  
被仰聞候得共、右方法之義者、当方ニテ迎も不及義ト奉存候、尤会所取扱人其  
他右工関係人者、厚薄モ有之候間、右ヲ御瞭察之上、被仰聞候義有之候ハ、

太右衛門丈ケハ何様ニモ被仰聞ニ從ヒ説得モ可仕候、併先般奉書上置候綿実其他運賃諸入費御立換之分、更ニ御下ケ不相成旨被仰聞之趣承知仕候得共、一先般被仰聞之旨説得仕候ニモ、右金員ハ御下ケニモ可相成趣申聞、夫ヲ年賦上納基立ニ取見込申上候義ニ付、今般限テ運賃金之分ハ御下ケ不相成次第ニ成行候テハ、前書会所關係之者償却方法之見込ニモ其目途ヲ失ヒ候様当人モ苦情申居リ、私ニおゐてモ一端御下ケ相成候趣申聞置、今般右者捨置、更ニ償却之見込而已説得仕候義、些困却仕候間、御立換金モ御下ケ金相成候様、然ル上者償却金モ弁納いたし候様説得仕度、何卒御寛典之御処分奉願度、此段以書付奉申上候、以上、

明治七年五月

山梨県権令藤村紫朗殿

右

遠藤 聰知

(書簡、挟み紙)

「過日者昇館御馳走難有奉存候、然者其節御相談申上候戸長見込書御案文、早速御廻被成下候処、御尤之次第第二奉存候間、何卒御清書調印之上、御渡被成下度、左候得者、僕調印之上、不日御庁江御届可申候間、此段御依願申上候、敬白、

四月廿二日

追テ

戸長

志村 政治

副戸長

志村七右衛門伴 志村十七吉

右兩人ニ而可然奉存候、

3 | 13

小学校資用材伐木願

巨摩郡第三十一区

区長

遠藤 聰知

右奉申上候、当区内鯉沢村小学校新築用材トシテ、巨摩郡第三十区高下村妙祐

寺除地ニ於テ、内山光親殿御出役ニテ木数三十本、極印御打渡相成処、右場処其後何レノ所為ニ候哉、右極印御打渡生木之根元工墓所々々石碑多分持運ヒ、墓地ニ紛敷相見、猶又先般墓地ニ御組込相成候哉承知仕候得共、一旦極印御打渡相成候義ニ付、伐木いたし不都合有之間敷哉、此段以書付奉候、以上、

明治七年六月四日

山梨県権令藤村紫朗殿

遠藤 聰知

3 | 14

小學校生徒御試檢願書

巨摩郡第三十一区

西嶋学校生徒

西嶋村

八級

佐野栄太郎

佐野熊吉

当九年四月

当十年

川上徳太郎

笠井幸作

当十一年七月

当九年

佐野常松

望月友甫

当九年八月

当九年十月

笠井乙市

笠井太吉

当九年十月

当八年一月

笠井慶甫

荒川のふ

当八年四ヶ月

当九年十一月

笠井千代

七級

佐野次郎吉

笠井市甫

当十二年

当十年二ヶ月

佐野長松

当十三年

以上十四名

右教則第八章・第十一章之通、四課学業習熟仕候ニ付、御試檢被下度、此段奉

願候也、

明治七年六月

西嶋学校訓導試補

川上藤三郎

同村戸長

笠井源兵衛

区长

遠藤 聰知

山梨県権令藤村紫朗殿

3 | 15

御伺

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤 聰知

右奉申上候、正副戸長拜命勤務中、子男へ家督相譲り隠居ニテ役務其儘勤続之義、其即時御県庁エ願出御許可之上、隠居勤務仕候而宜敷義ニ御座候哉、又者御准見ヲ不得、家督相譲り隠居ニテ役務罷在候段、御届奉申上候テ宜敷義ニ御座候哉、右奉伺候間、至急御指令奉願候、以上、

右

遠藤 聰知

明治七年七月八日

山梨県権令藤村紫朗殿

(朱)「書面正副戸長勤役中家督譲り候共、別段願出ニ不及、戸籍法之通可相心得、尤役義ハ右ニ不拘相勤候義ト可相心得事、

明治七年七月十日

3 | 16

御請書

一中暑予防法

三百五十七部

内

巨摩郡第三十一区

百五十二部

鰍沢村

十部

長知沢村

十二部

鳥屋村

二十四部

十谷村

十二部

柳川村

十三部

箱原村

七十一部

西嶋村

二十九部

大塩村

十八部

久成村

十六部

平須村

一貴翰

壹通

右之通下シ賜り、則区内村々江配達候処、難在頂戴一同服膺仕候、依而御受書、如件、

右区长

遠藤 聰知

明治七年七月

山梨県権令藤村紫朗殿

3 | 17

御伺

右学校生徒御試検トシテ、昨十八日御県庁御出立、当村ヨリ万沢迄御舟行被遊候御旨、右ニ付御乗船之義手配可致置段、御達拝承仕候、昨今両日夫々手配仕置候処、尔今御着車無之、右者御見合又者御日延ニ相成候義ニ御座候哉、此段奉伺候間、至急御沙汰奉願候、以上、

区长

鰍沢村

遠藤 聰知

七年七月十九日

山梨県学務御掛御中

## 巨摩郡第三十一区明治六年民費課出捻計

一 道路堤防橋梁修繕費	金七十三円四十四銭八厘七毛
一 御布告并御布達類費	金六十八円五十一銭八厘壹毛
一 諸御用ニ付御庁工	
正副戸長等出頭旅費	金百三円四銭壹厘貳毛
一 郷社修繕并祭典費	金三十八円二十六銭三厘八毛
一 正副戸長以下ノ給料	金三十一円六銭壹厘六毛
一 村社祭典并遙拜式費	金五円六十五銭
一 御貢米金取集ヨリ納済諸費	金四円二十三銭壹厘
一 地券調費	金四百四十円四銭八厘三毛
一 徴兵下調費	金五十一銭壹厘五毛
一 道路掃除費	金二円四十六銭九厘五毛
一 用悪水道費	金十三円十二銭八厘
一 提灯張替費	金九十九銭
一 揭示場建築費	金七円八十銭貳毛
一 新聞紙費	金二円二十六銭七厘五毛
一 炭油筆墨紙其外村会所費	金七十五円三拾銭壹厘五毛
一 入会山諸費	金二円八十二銭
一 村定使給料	金四十八円五十八銭八厘
一 野守給料	金十二円六銭三厘四毛
一 猪鹿威火薬其外諸費	金四円四十七銭五厘
一 官御普請弁金	金四十円二十五銭

右者、明治六年民費課出捻計取調候処、前書之通相違無御座候也、

明治七年七月

区长捻代理御中

右区长  
遠藤 聰知

## 巨摩郡第三十一区明治五年民費課出捻計

一 道路堤防橋梁修繕費

金百四十六円五十銭七厘三毛

一 御布告并御布達類入費

金百十五円十七銭五厘六毛

一 諸御用ニ付御県庁へ

    正副戸長等出頭旅費

金百七十八円二十一銭六厘

    後一 村社修繕費

金三十六円三十銭七厘壹毛

    一 村社祭典并遙拜式費

金二十二円三十五銭四厘七毛

    前一 正副戸長以下ノ給料

金三十七円壹銭九厘七毛

    一 御貢米金取集ヨリ納済諸費

金四十九円五十一銭九厘六毛

    一 地券調費

金十二円三十七銭六厘四毛

    一 戸籍調費

金三十九円三十五銭壹厘三毛

    一 徴兵下調費

金五円二十三銭四厘貳毛

    一 道路掃除費

金七円六十九銭五厘

    一 用悪水道費

金百八十五円六十三銭壹厘壹毛

    一 暴漲水防費

金二十四円三十一銭貳厘五毛

    一 郷宿賄料

金八十七円二十二銭三厘壹毛

    一 紙改入給料其外取締方諸費

金二十六円八十八銭三厘四毛

    一 揭示場費

金三円五十一銭七厘六毛

    一 提灯張替費

金七円六十九銭貳厘五毛

    一 炭油筆墨紙其外村会所諸費

金二百六円七十六銭壹厘三毛

    一 入会山費

金三円五十二銭四厘三毛

    一 定使給料

金二十三円二十銭八厘七毛

    一 野守給料

金三十円五十三銭四厘三毛

    一 野守古屋修費

金六円五十七銭八厘

    一 猪鹿威火薬其外諸費

金九円九十二銭七厘四毛

    一 官御普請弁金

金百五円四銭八厘八毛

    一 山守給料

金三円八十一銭八厘六毛

    一 警女浪人其外賄料

金二十七円九十六銭六厘壹毛

    一 静岡外式ヶ宿助合諸費

金六円九十六銭五厘貳毛

    一 山林調費

金五円五十九銭貳厘三毛

    一 陸運会社設立費

金二円二十五銭三厘壹毛

右者、明治五申年民費課出捻計、

前書之通相違無御座候也、

明治七年七月

右区长  
遠藤 聰知

3  
20

御願

一 杭柵延長千式百四間

内 三尺之場所 七百四間  
五尺之場所 五百間

此杭三千拾本 但、老間ニ付送り三本ツ、積り

内 九尺杭 千式百五十本  
六尺杭 千七百六十本

右者、近隣ニ上知官林之場無之二付、当区十谷村分内公有地ニ生立有之候松木凡目通り四・五尺廻り三十本、箱原村天神社上知ニ於テ十本、都合四十本御下ケ賜奉願度候、

(貼紙)

「本文柵杭ニ相用候相応之生木無之二付、本文之木数御下賜奉願、恐懼之至リニ奉存候得共、右ヲ売却之上、右代価ヲ以柵杭ヲ買換相用度、此段下ケ札ヲ以奉願候、」

一 橋十ヶ所 但、鰍沢村地内小柳川、箱原村地内五ヶ所、  
西嶋村地内四ヶ所

右用材トシテ目通り四・五尺廻り之松木十六本

内箱原村天神社上知ニ於テ拾式本・西嶋村諏訪社上知ニ於テ四本、御下賜奉願度候、

一 柵柴竹凡壹万四千五百本

右者八代郡十四区岩間村官林・当区西嶋村官林、右両所ニ於テ御下賜奉願度候、

右者、当区内駿州往還道路修繕之義、先般奉願御許可相成候場処、新橋架杭柵等ニ相用候、前書之竹木右場所々々ニ於テ御下賜被成下置度、区内村々正副戸長ヨリ申出候ニ付、此段以書付奉願候、以上、

巨摩郡第三十一区

区长

明治七年七月廿四日  
山梨県権令藤村紫朗殿

遠藤 聰知

3  
21

駿河御差免願

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤 聰知

右奉申上候、今般新水道建築并運輸会社工関係之義ニ付、駿州工出張断然相遂掛合旨、重キ御達シ奉拜畏即可罷越候得共、当今新築小学校未夕開校之期ニ至リ兼、且駿州往還道路修繕之義も、三・四日之内ニ取掛り可申段区内村々ト極議仕置候義ニ而、実多奉願義恐懼之至ニ奉存候得共、当区村々之義ハ、陰ニ旧慣姑息ヲ主張之候村々ニテ小学校落成も漸々遅延ヲヨヒ、殊更道路修繕之義も此ノ度ヲ失ヒ候而者落成無覚束奉存候間、何卒寛典之御仁慮ヲ以今般駿河之義御差免被成下度、此段以書付奉願候、以上、

右

遠藤 聰知

明治七年七月廿七日  
山梨県権令藤村紫朗殿

(朱)

「書面之趣聞届候条、中込清左衛門・秋山源兵衛両人間出張致候様申談可致事、  
甲戌七月廿七日」

3  
22

記

一 松木拾式本 但、目通り三尺五寸廻りヨリ、同七尺廻りマテ

一 杉合八拾五本 但、杭木

右者、当区箱原村天神社上知官林ニ於テ、

一 松木四本 但、目通り五尺五寸廻りヨリ、同七尺廻りマテ

右者、当区西嶋村諏訪社上知官林ニ於テ

一竹三千三百本 但、目通り三寸廻りヨリ、同七寸廻りマテ  
右者、当区西嶋村官林之内ニ於テ

右竹木数之義、当区駿州往還道路修繕資用トシテ今般前書之場所々々ニ於テ極  
印御打渡御下賜被成下置、正ニ奉受取、右代価之義者追而御沙汰次第可奉上納  
候、依而御請書奉差上候、以上、

巨摩郡第三十一区

区長

明治七年七月廿八日

遠藤 聰知

土木御掛御中

3  
23

副戸長当器之もの見込書

巨摩郡第三十一区

区長

遠藤 聰知

右奉申上候、第三十区高下村副戸長樋口亀藏義、役義被免候ニ付跡役当器之も  
の見込可申上旨御達ニ付考練仕候処、同村戸長望月新左衛門方圭太郎義、当器  
之ものト奉存、然共親子勤之義如何トモ奉存候得共、右ヲ閣候得者絶テ当器之  
もの不相見候間、此段不得止以書付見込奉申上候、以上、

右

遠藤 聰知

明治七年七月三十日

山梨県権令藤村紫朗殿

3  
24

御届

巨摩郡第三十一区

区長

遠藤 聰知

右奉申上候、乙第百号ヲ以御達相成候、陸軍諸兵生徒御撰抜ニ付、志願之もの  
取調可願出旨御達ニ付、夫々取調候処、当区内於テ更ニ無御座候間、此段以書

付御届奉申上候、以上、

右

遠藤 聰知

明治七年八月八日

山梨県権令藤村紫朗殿

3  
25

正副戸長黜陟見込書

巨摩郡第三十一区

区長

遠藤 聰知

右奉申上候、当区内歟沢村正副戸長之内不開化之老人有之、御趣意認奉不仕姑  
息ニ流候ニ付是迄種々督責仕候得共、旧慣洗滌不行届困却罷在候折柄、今般正  
副戸長因循ニ付黜陟之義見込ヲ以可奉申上段御談ニ付、別紙之通人員考練黜陟  
奉申上候間、何卒速ニ被仰付度、此段奉申上候、以上、

右

遠藤 聰知

明治七年八月十二日

山梨県学務御掛御中

役義被免度者左ニ

戸長

遠藤 義方

副戸長

中込清左衛門

同

雨宮三郎右衛門

同

青柳其右衛門

役義被命度者左ニ

副戸長

中込太郎左衛門

戸長被命度

遠藤太右衛門

同 中込延太郎  
同 雨宮英一郎  
同 青柳詢一郎

3  
26

會議御開ニ付申上

乙第六十三号ヲ以御布達有之候処、即今建議可致条件無御座候間、此段奉申上候、以上、

巨摩郡第三十一区

区長

遠藤 聰知

明治七年八月十四日

山梨県権令藤村紫朗殿

3  
27

御届

甲第五百五十八号ヲ以歩兵召集之義、御布達相成候ニ付、区内村々取調候処志願之もの無御座候間、此段以書付御届奉申上候、以上、

巨摩郡第三十一区

区長

遠藤 聰知

明治七年八月廿一日

山梨県権令藤村紫朗殿

3  
28

小学校資用材伐木御伺

巨摩郡第三十一区

区長

遠藤 聰知

右奉申上候、当区鰍沢村小学校新築用材トシテ巨摩郡第三十区高下村妙祐寺除地ニ於テ先般木数三十本極印御打渡相成候処、右場処工其後墓所石碑多分持運

ヒ墓地ニ紛敷仕成、然ル処右事情御糺之上詐偽判然ニ付、夫々御所置濟ニ相成候段承知仕、然ル上者先般極印御打渡相成候分ハ伐木致候テ不都合有之間敷哉ト奉存候間、此段奉伺候、以上、

明治七年八月廿五日

山梨県権令藤村紫朗殿

3  
29

橋架其他資用材御下賜願

鰍沢村其外西嶋村箱原村橋懸樋合拾三ヶ所用木

一松杉取合尺ノ百七拾本

内 松木四十八本

是者先般極印御打渡御下賜相成候分

残凡百貳拾貳本

不足

一松木六本 但シ、目通り六尺廻りヨリ四尺廻り迄

右者箱原村天神社上知ニ於テ今般御下賜奉願度之分

一松杉合三十本 但、目通り六尺廻りヨリ八尺廻り迄

右者八代郡十四区楠甫村神明社・諏訪社、右両社ニ於テ今般御下賜奉願

度候分

右者、当区内駿州往還道路修繕資用材トシテ先般御下賜相成候分、夫々伐木引

当仕候処、前書之通橋々其他資用材及不足候ニ付、何卒右箱原村天神社・八代

郡十四区楠甫村諏訪社其他ニ於テ御下賜被成下置度、此段以書付奉願候、以上、

巨摩郡第三十一区

道路修繕世話方

西嶋村

佐野只兵衛

同 箱原村

樋口 左門

同 鰍沢村

中込太郎左衛門

区長

山梨県権令藤村紫朗殿

遠藤 聰知

明治七年九月

当区

区长御中

(朱)「区奥文言」(欄外上部)

当区内ニ於テ嘉永二酉年出生成丁之者、別冊之通幾名有之候段戸長ヨリ届出候間、篤与取調へ候処相違無御座候間、及進達候也、

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤 聰知

明治七年九月

山梨県戸籍掛御中

(朱)

「嘉永二・三・四、三ヶ年分同文言、尤壹ヶ年ツ、一括ニいたし候事、

酉年成丁三名 戌年成丁三名 亥年成丁六名

」

右 遠藤 聰知

明治七年九月三日

山梨県権令藤村紫朗殿

3-31

(朱)「区分」

巨摩郡第三十一区  
徴兵成丁簿

(朱)「村々之分」

巨摩郡第三十一区  
何村  
徴兵成丁簿

当村ニ於テ嘉永二酉年出生成丁之者取調候処、前書之通幾名御座候間、此段御届申上候也、(朱)「村々奥文言」(欄外上部)

巨摩郡第三十一区

何村

戸長

3-32

御 届

甲第百六十九号ヲ以御達し相成候、海軍兵学寮生徒入寮志願之者取調候処、村々於テ無御座候段戸長ヨリ申出候間、此段御届奉申上候、以上、

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤 聰知

明治七年九月五日

山梨県権令藤村紫朗殿

3-33

御 願

当区道路修繕ニ付橋架其他資材之義、当区鳥屋村伊勢社并天狗之森ニ於テ木数三十三本御下賜奉願候処、昨日御改御極印御打渡相成候処、右場所生木之義至テ小木ニテ入用材ニ比較いたし候処、猶不足およひ候ニ付、右足木として当区鵜沢村西光寺上知ニ於テ木数式十本御下賜被成下置度、此段奉願候、以上、

道路世話方

明治七年九月十一日

鯨沢村

戸長

中込太郎左衛門

区長

遠藤 聰知

山梨県権令藤村紫朗殿

3-34

御伺

当区内久成村・十谷村、右二ヶ村へ小学校二校設立可致旨先般御達相成候ニ付、是迄建設之義懇々説得仕候得共、右両村江所屬之村々ハ凡二十五町余も懸隔いたし居故、共ニ山間之僻邑ニテ資本金募り方些少、殊ニ一村内ト雖山沢ヲ越へ十町余も存在罷在候村度ニ付迎も小学校ハ難及ト存候間、当区鯨沢村小学校之分校ニいたし候而も宜敷義ニ御座候哉、此段奉伺候、以上、

巨摩郡第三十一区

区長

遠藤 聰知

明治七年九月十七日

山梨県権令藤村紫朗殿

(朱)「書面伺之通り、校則教方等注意可致事、

第九月十九日

3-35

(朱)「区表書」

巨摩郡第三十一区

徴兵免役連名簿

(朱)「村々之表書」

巨摩郡第三十一区  
何村

徴兵免役連名簿

(朱)「奥書村々之文」

当村ニ於テ嘉永二酉年出生之者取調候処、前書之通幾名御座候処、免役御規則ニ相当り候間、夫々箇条書ヲ以此段御届申上候也、

巨摩郡第三十一区

何村

戸長

明治七年九月

当区区长御中

印

(朱)「区奥文言」

当区内ニ於テ嘉永二酉年出生之者別冊之通幾名免役御規則ニ相当り候旨、箇条書ヲ以村々戸長ヨリ届出候間、篤与取調候処相違無御座候間、及進達候也、

巨摩郡第三十一区

区長

遠藤 聰知

明治七年九月

山梨県戸籍掛御中

(朱)「嘉永二酉年七十九名 同三戌年七十三名 同四亥年六十九名

右壱ヶ年同文之認方」

巨摩郡第三十一区

当区内ニ於テ嘉永二・三・四、三ヶ年出生之者取調候処、徴兵成丁簿并免役連名簿之外、本籍ハ勿論寄留人ニ至迄一切書載候者無御座候、以上、

右

区長

遠藤 聰知

明治七年九月

山梨県戸籍掛御中

戸長人撰見込書

巨摩郡第三十一区

長知沢村

副戸長

樋口源五左衛門

農

望月善兵衛

右之もの義、同村戸長山下米兵衛役義被免候ニ付、跡役当器之もの人撰見込書ヲ以奉申上候、以上、

明治七年九月廿五日

山梨県権令藤村紫朗殿

山梨県権令藤村紫朗殿

遠藤 聰知

願之趣ハ堤裏ニ限桑植付聞届候条、堤防妨害不相成様可致注意事、

明治七年十月七日

桑植付之義ニ付御願

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤 聰知

同 鰍沢村

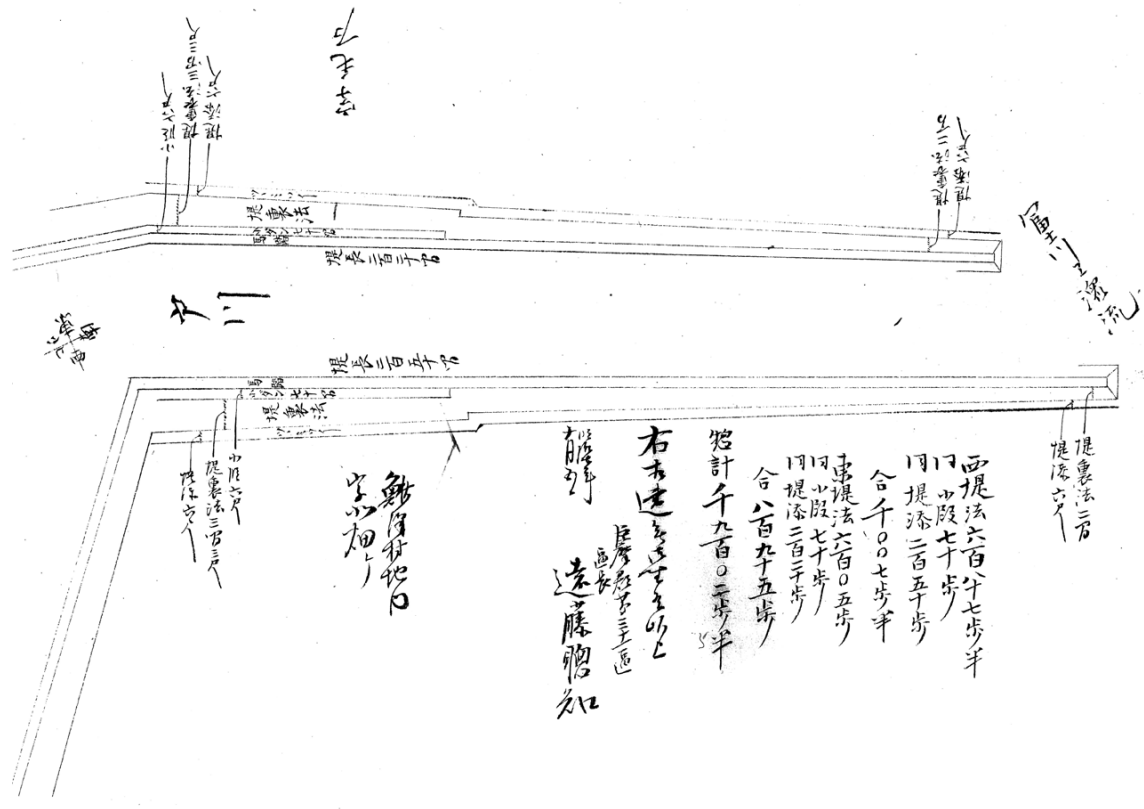
戸長

中込太郎左衛門

右奉申上候、当区鰍沢村地内字北畑ト毛戸之間ニ先年戸川流末水路御模様替新築御堤御築立相成候処、片側凡三百間余、右御堤之義者肥土ヲ以御築立相成候義ニて、両御堤川面ヲ相除キ裏両側工桑苗植付候ハ、忽チ繁茂可致見込ニ存候間、右工植付繁茂之上者利益ヲ折半シ、半ヲ以小学校資本金之内江年々差加学資ヲ補ヒ、半ヲ以培養之手当ニいたし度存候、尤御堤之義者聊不相弛様精々注意者勿論、自然繁茂ニ随ヒ根ヲ以堤心ヲ綱置シ、猶堅牢ニも相成可申与奉存候間、何卒前件御瞭察之上桑植付之義、御許可被成下置度、奉悃願候、以上、

明治七年九月廿七日

中込太郎左衛門



3 | 38

巨摩郡第三十一区養蚕捻計  
惣戸数千五百八十五戸

養蚕家九十八 内新規開業五十五戸

此掃立蚕種原紙五十一枚

此収穫繭拾石七斗壹升

内

正繭七石六斗八升

玉繭壹石五斗八升

屑繭壹石四斗五升

右相違無之候也、

右

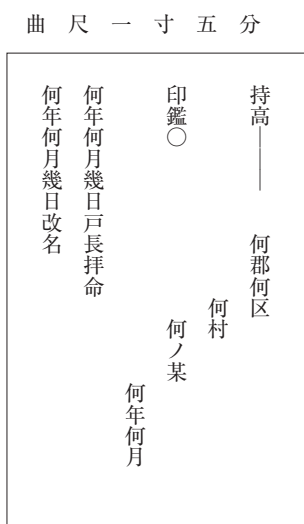
区长

遠藤 聰知

明治七年六月  
山梨県権令藤村紫朗殿

曲尺四寸五分

印鑑雛形



3 | 39

駕籠取調書

第二十五号

駕籠 乘 自用

第二十八号

駕籠 乘 自用

巨摩郡第三十一区

第二十六号

駕籠 乘 自用

第三百四号 三百一十一号迄

山駕籠 八挺 稼

ノ十二挺

右之通相違無御座候、以上、

巨摩郡第三十一区

区长

明治七年九月廿七日

遠藤 聰知

3 | 40

副戸長人撰見込書

鯉沢村 農

井上長右衛門

右之者義、副戸長河住忠右衛門跡代副戸長当器之者二付、人撰以見込書奉申上候、以上、

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤 聰知

明治七年九月廿九日  
山梨県権令藤村紫朗殿

3 | 41

有志之者等級見込書

巨摩郡第三十一区  
大塩村

薬王寺住職

依田日寛

当二十八年二ヶ月

学識中ノ上

弁舌中ノ中

品行中ノ上

人望上 篤志上

右五科差等見込上中下ヲ以申立候通、相違無之候也、

区长

明治七年十月三日

遠藤 聰知

中院御中

3-42

記

一松木三拾本

但 目通り二尺廻りヨリ  
同 六尺廻りマテ

右者当区鳥屋村神明社上知官林ニ於テ

一松木三本

但 目通り三尺式寸廻り

右者同村天狗ノ森上地ニ於テ

一松木式拾本

但 目通り三尺廻りヨリ  
同 五尺廻りマテ

右者、当区鯉沢村西光寺上地官林於テ

右木数之義、当区駿州往還道路修繕資用材トテ、今般前書之場所ニ於テ極印御打渡御下賜被成下置、正ニ奉受取、右代価之義ハ、追而御沙汰次第可奉上納候、依而御請書奉差上候、以上、

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤 聰知

明治七年九月

土木御掛御中

3-43

御 伺

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤 聰知

右奉申上候、戸数反別些少之村々ハ最寄便宜合併いたし冗費可相省旨追々御布

達ニ付、当区内之義、現今村々ト会議中之処、十谷村・鳥屋村・柳川村三ヶ村之義、当方へ一応之談シモ無之既ニ御県庁へ出願御指令済之趣ニ付、奥書可致段談有之候得共、右三ヶ村協議合村願之義、区内一同協議之上最寄便宜之村々ト合併いたし候而者旧先公事出入等もいたし、且何村ト組合候得者、自然正副戸長も其村へ被居、以前之村権相衰へ候様旧事之慣習ヲ主張シ候ヨリ相起り候義ト推考仕候、何トナレハ会議中之処談事も無之前件出願及ヒ候次第、然レ共、右奥書之義御指令も御座候ニ付、即奥書可仕候処、右三ヶ村而已奥書差出し候得者、最寄小村合併組込方不便ヲ生シ困却仕候間、奥書之義者、村之最寄協議行届候上ニ無之候而者、難致段申断置候処、当節ニ至り右三ヶ村之義御指令之趣も有之ニ付、区长奥書不致候ハ、其旨ヲ以、猶御出願も可仕杯激論粉々いたし、外村々合併之会議ニも差障可申哉も難計、心痛苦心罷在候義ニ而、右者当区内一同会議折衷合村決極之上ニ無之候而者奥書難致段申断、萬一御県庁へ猶奉出願候ハ、恐懼之至りニ候得共、区内遂協議出願可致段御教諭奉願候方可然義ニ御座候哉、又ハ右三ヶ村之願も懷腹者如何御趣意體認ニも相当り候ニ付、其意ニ任セ奥書いたし差出候而可然哉、此段奉伺候間、至急御指令奉願候、以上、

右

遠藤 聰知

明治七年十月七日

山梨県権令藤村紫朗殿

記

高八十一石壹斗七升三合三夕

鳥屋村

戸数五十八軒

高百十七石四斗九升五合

十谷村

戸数百十八軒

高七十六石四斗八升八合

柳川村

戸数五十八軒

(朱)「書面願書等江奥印之義ニ就テハ、兼テ相達置候通、願意不都合ト心得候も、強テ奥印受度義申出候ハ、其不都合之旨趣奥書致し候坎、又ハ添書ヲ以可申立義ト可相心得事、

明治七年十月九日

(\*以下の文書は、次の「4 誌二号」の裏表紙として糊付けされていたものが剥がれて読めるようになったため、3-44としてここに収録する。)

3-44

道路修繕落成御見分願

巨摩郡第三十一区

(朱)「二十一日見分之事」

区長

遠藤 聰知

道路世話方

中込太郎左衛門

右奉申上候、当区駿州往還道路修繕之義、漸々出来仕候、然ル処其内橋式ヶ所者当節專取掛り居候義之処、右橋共落成ヲ相待候得共、外場所修繕中人馬止モ願上置候義ニ付、往来旅人之憂患ヲ厭候義ニ付、右ヲ除之外至急落成之御見分被成下置度、此段奉願上候、以上、

右

明治七年十月十七日

遠藤 聰知<sup>㊟</sup>  
中込太郎左衛門<sup>㊟</sup>

3-45

(裏)

記

明治七年御免許鑑札造高石数

一米七拾石

内式拾石 明治八年一月廿二日減石願御聞届相成候分

残米五拾石 但元石壹石ヲ以醸造壺石壹斗ヲ殖済ス

此清酒五拾五石

右仕訳

底径五尺五寸

桶壺本

但口径六尺

酒深四尺式寸

此清酒拾六石九斗式升式合

底径六尺

桶壺本 但口径六尺五寸

酒深四尺式寸

此清酒式拾式石八斗四升八合

底径五尺五寸

桶壺本 但口径六尺

酒深三尺式寸

此清酒拾式石八斗九升三合

(以下記載無し)

明治八年自四月  
同 至十一月

誌

二号

遠藤

4-1

開明ノ進歩ニ随ヒ、人智益開テ人々其方向ヲ知り、其業ヲ勉ムル事ヲ知ルト雖トモ、財本ニ乏シキ時ハ其用ヲ達スル能ハス、巨摩ノ地タルヤ土地膏腴ニシテ信駿兩國ノ間ニ際シ、加フルニ富士川ノ至便ヲ以テス、商業ノ大一国ニ冠絶スト謂ヘシ、而テ農人ノ如キハ常々其ノ培養ノ資金ニ苦シミ、商人ノ如キハ他ノ勝算アリト雖トモ、金銀融通ノ不便ニ苦シミ、各々其目途ヲ達スル能ハサル者少カラス、依テ今般同志ノ者戮力株金ヲ募リ、増穂村ヘ一会社ヲ設立シ、其融通ヲ助ケ、其利益ヲ興シ、以テ此地ノ繁盛ナラム事ヲ欲シ、延テ全国ニ推及サントス、其方法規則ノ如キハ、追テ上申可仕候間、何卒会社設立ノ義御許可被成下度、依之一同連署奉懇願候、以上、

巨摩郡第三十区

増穂村

副戸長

明治八年四月

小林五左衛門

同

芦澤重右衛門

同

秋山源兵衛

同

志村十七吉

4-2

山梨県令藤村紫朗殿

船税御規則中御伺

甲第六十八号御達第四則中、四月前ノ解船・破船及ヒ四月後ノ新規造船ハ、其年納税不及候得トモ、其時々相届ケ、造船之分ハ第一則ノ通り検印受置可申事、右御規則左ニ奉伺候、  
右御規則中、譬ヘハ本年一月御検印相願、同四月前ノ内ニ解船・破船御届済之分ハ、納税ニ不及義ニ御座候哉、  
四月後新規造船御検印相願、同年十二月前ニ解船・破船御届済之分ハ、納税ニ不及義ニ御座候哉、  
右件々奉伺候間、至急御指令奉願候、以上、

同

磯野新太郎

同

秋山文太郎

戸長

小林小太郎

区長

田中佐兵衛

同郡第二十九区

副区長

新津 幸蔵

同郡第二十八区

副区長

北村 延脩

同郡第三十一区

区長

遠藤 聰知

巨摩郡第三十一区

区長

明治八年四月十二日  
山梨県令藤村紫朗殿

遠藤 聰知

(朱)「書面之趣何之通、

明治八年四月十四日□□

4-3

船税取立方ニ付上申

富士川小廻船ノ義ハ、無事ニ運送致シ候テ満一ケ年半ヲ保ツマテノ疎工ノ造船、殊ニ無事ニ運送致シ候ト雖トモ、一ケ年ニ兩三度モ修覆相加不申候テハ保チ不相成義ニテ、故サラ一ケ年ノ内四月前・十二月前兩度解船御届済ノ上、御検印ノ板子丈ケ切抜御返上仕候上、右船猶修覆相加へ、其翌年ニ至リ御検印相願候得ハ、其年納税不仕候テ宜敷哉ニ存、且前書順序ニ運ヒ候得ハ、連年無税同様ニ成行可申義、然ルトキハ前書御検印相願置候場処丈ケ切抜返上仕候義モ、素々疎工ノ造船ニ付些少ノ入費ニテ切抜ノ上、猶修覆等マテモ行届候義ニ有之、然リト雖御検印相願候場処ニ限り、求メテ修覆致候義ニ無之、惣体ニ修覆相加へ候義ニテ、其毎度御検印相願置候場処ヘモ相掛リ候義ニ有之、前件ノ次第二テハ税金取立方四月前後ノ区別御規則ニテハ自然無税ニ属シ候様覚候間、別紙ノ通税金取立方上申仕候間、御瞭察被成下置、至急御指令奉願候、以上、

巨摩郡第三十一区

区長

明治八年四月十二日

遠藤 聰知

山梨県令藤村紫朗殿

(朱)

「書面一旦検印ヲ受ケタル船破壊シテ、全ク廢物トナリ、再用難相成向ハ検印切抜上納可致トノ主意ニシテ、修覆ヲ加ヘ再用可致船ヲモ、右様検印上納可致トノ儀ニハ無之、尤修覆ノ都合ニ寄り検印存在難致向ハ、其旨具状、更ニ検印可申受義ニ候得共、右等ハ新規造船トハ難見做義ニ付、税納ハ四月前後ニ不抱、全分収入可致義ト可相心得事、

但、四月前検印済ノ船、同月後十二月迄ニ解船ノ向ハ、規則之通全分ノ税納収入可致義ト可相心得事、

明治八年四月十四日

一富士川小廻船ノ義、一ケ年間ニ解船・破船御届、新規造船検印幾度願届候トモ、小廻船運送ヲ以テ營業向來ニ及ヒ者ハ、其月ヲ不問一船ニ関シ候分ハ、譬へハ新造船検印相願、右船修覆又ハ解船・破船致シ、右ヲ廢捨、其跡新船へ検印願候分ヲ云フ、御規則ノ一艘税金全年分税納可致事、  
一船頭疾病廢疾、且船持転業ニ付解船休業ノ御届ノ節ハ、御規則第四則ニ照準納税可致事、

4-4

御届

当区ニ於テ安政二卯年一月一日ヨリ二月十五日マテニ出生ノ者取調候場、別紙之通無之段村々戸長ヨリ申出有之候間、此段御届奉申上候也、

巨摩郡第三十一区

区長

明治八年四月廿四日

遠藤 聰知

山梨県戸籍掛御中

4-5

有志ノ者等級見込書

巨摩郡第三十一区

五開村二番組

龍仙寺住職

堀口日廣徒弟

小泉義誕

当二十年四ヶ月

学識中ノ上 弁舌上 品行中ノ上  
人望中ノ上 篤志中

右五科差等見込上中下ヲ以申立候通、相違無之候也、

区長

明治八年五月一日  
中教院御中

遠藤 聰知

明治八年五月二日  
山梨裁判所長  
三好權少判事殿

遠藤 聰知

4-6

申上

巨摩郡第三十一区 鯉沢村地内未新田之内同村野中代右衛門所持地式畝歩、同人ヨリ八代郡第十二区豊和村保坂六兵衛工質地渡、開発金之義ニ付、右六兵衛ヨリ奉出訴候ニ付、右地所小作人取調可奉申上旨被仰聞候ニ付、即小作人取調、左ニ、  
(貼紙)「旧式畝歩之処、現地凡六畝歩有之候」

慶応二丙寅年ヨリ同三丁卯年迄

鯉沢村

二ヶ年

小作人 野中代右衛門

同村

明治元戊辰年

壹ヶ年

小作人

(望月久右衛門  
望月徳右衛門)

明治二己巳年ヨリ同三庚午年迄

同村

二ヶ年

小作人

(望月徳右衛門  
望月重兵衛)

同村

明治四辛未年ヨリ本年ニ至ル

小作人 望月重兵衛

前書地先官有地ヲ六兵衛蚕食貪候分、現地凡五畝歩小作人取調、左ニ、

鯉沢村

慶応三丁卯年

壹ヶ年

小作人

依田宗十郎

同村

明治元戊辰年

壹ヶ年

小作人

(望月久右衛門  
望月徳右衛門)

同村

明治二己巳年

壹ヶ年

小作人

(望月徳右衛門  
望月十兵衛)

右小作人取調候処相違無御座候ニ付、此段奉申上候、以上、

巨摩郡第三十一区

区长

4-7

学校献納品御届

(朱)「聞置候事、

明治八年五月六日 □

一日章旗 壹

山梨郡第三区

但 豎壹丈

横壹丈八尺

八日町二丁目  
保坂徳兵衛

此代価金六円

右ノ者ヨリ当区鯉沢学校へ献納致度段申出有之候ニ付、此段御届奉申上候、以上、

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤 聰知

明治八年五月五日

山梨県令藤村紫朗殿

4-8

(朱)「書面無余儀相聞候ニ付、

聞届候条人選入札可差出事、

明治八年五月七日

正副戸長撰拵増員願

巨摩郡第三十一区

大須成村

右奉申上候、先般合村奉願上候処、本年四月十二日御聞届之段御指令済相成、正副戸長撰拵之義モ合村之高ニ応シ、規則之通更ニ人撰可致旨御指令奉承畏候処、当村之義山頂山腹数ヶ所ニ散在之村落ニ付、御規則之人員ニテハ御公用難務、且合村之際諸事手運ヒ等差支候間、当分之内戸長壹人・副戸長八名被仰付

度、尤給料之義ハ御規則之定員金ヲ以至当ニ配給致、入費不相嵩候様取計可申候間、何卒前件御瞭察之上、厚垂御仁恤、正副戸長増員被仰付度、此段奉悃願候、以上、

右村之内

元大塩村

戸長

明治八年五月五日

佐野徳之丈

副戸長

佐藤重郎右衛門

伍長捻代

地場源次郎

元久成村

戸長

松田良左衛門

副戸長

佐野太郎左衛門

同

大森作兵衛

伍長捻代

大森半五郎

元平須村

戸長

深澤 萬吉

副戸長

神宮寺與右衛門

同

深澤永兵衛

伍長捻代

深澤傳左衛門

山梨県令藤村紫朗殿

4-9

旧村名改正称呼御届

巨摩郡第三十一区

大須成村

右奉申上候、今般合村御聞届相成候ニ付、旧村名ヲ廃シ、別紙之通改正番号ヲ以相称度、此段御届奉申上候、以上、

右村之内

元大塩村

戸長

明治八年五月五日

佐野徳之丈

元久成村

戸長

松田良左衛門

元平須村

戸長

深澤 萬吉

山梨県令藤村紫朗殿

(朱)「聞置候事、

明治八年五月七日

改正壹番組

改正二番組

改正三番組

元久成村

元平須村

元大塩村

4-10

大柳川通り

字長見山裾

一反別四反五畝歩

此拝借料金式拾五銭

同川通り

巨摩郡第三十一区

鰻澤村

字アラヒ山裾  
一反別九反歩

此拝借料金五拾銭

私トモ村々御官有地当八年ヨリ五ヶ年季拝借ノ義奉願候処、場所御検査ノ上水  
行差障無之二付、猶御詮議ノ上拝借可被仰付、尤年季中タリトモ、御用ノ節ハ  
何時ニテモ返附可致旨、被仰渡承知仕候、此段御受申上候、以上、

右村

副戸長

明治八年四月十二日

中込清左衛門

4-11

申上

当区内廃寺取調書類、尔今差出無之段、御達奉恐畏候、右廃寺取調書類之義ハ、  
明治七年乙第十八号御達書ニ照準取調、明治七年三月廿八日御県庁へ奉差上候  
義御座候間、此段奉申上候、以上、

巨摩郡第三十一区

区長

遠藤 聰知

明治八年五月十四日

山梨県戸籍御掛御中

4-12

駕籠鑑札返上

一御鑑札十一枚

巨摩郡第三十一区

当区駕籠鑑札収集奉返上候、以上、

右

区長

遠藤 聰知

明治八年五月十七日

山梨県令藤村紫朗殿

御鑑札番号

第二十六号 第二十八号 第二百九十三号 第三百四号  
第三百五号 第三百六号 第三百七号 第三百八号  
第三百九号 第三百十号 第三百十一号

4-13

有志ノ者等級見込書

(横線抹消)

(朱)「不差出シテ戻シ」

巨摩郡第三十一区

鰺沢村

妙成寺

住職

依田日桓

当五十二年十ヶ月

学識下

弁舌中ノ下

品行中ノ下

人望上ノ中

篤志中

右五科差等見込上中下ヲ以申立候通相違無之候也、

区長

遠藤 聰知

明治八年五月廿四日

中教院御中

4-14

当区大須成村正副戸長人撰見込書

第一番組

戸長

松田良左衛門

当五十年

副戸長

佐野太郎左衛門

当四十二年

同

大森半右衛門

当五十六年

第二番組

同

深澤 万吉

4 | 15

当四十七年  
 同 深澤永兵衛  
 当三十七年  
 同 神宮寺與右衛門  
 当五十三年  
 第三番組  
 佐藤十郎右衛門長男  
 同 佐藤周兵衛  
 当二十四年  
 佐野徳之丈長男  
 同 佐野與左衛門  
 当三十三年  
 同 佐野甚右衛門  
 当三十二年  
 右正副戸長当器之者二付、人撰見込ヲ以奉申上候、以上、  
 巨摩郡第三十一区  
 区长 遠藤 聰知  
 明治八年五月廿八日  
 山梨県令藤村紫朗殿

大須成村元正副戸長人名書上  
 元久成村 戸長 松田良左衛門  
 副戸長 佐野太郎左衛門  
 同 大森作兵衛  
 元平須村 戸長

4 | 16

深澤 万吉  
 副戸長  
 深澤永兵衛  
 同 神宮寺與右衛門  
 同 幡野 力弥  
 元大塩村 戸長  
 佐野徳之丈  
 副戸長 佐藤重郎右衛門  
 同 地場藤右衛門  
 右元正副戸長人名奉書上候、以上、  
 巨摩郡第三十一区  
 区长 遠藤 聰知  
 明治八年五月廿八日  
 山梨県令藤村紫朗殿

御 伺  
 明治八年五月三十一日  
 山梨県令藤村紫朗殿  
 (貼紙)  
 「書面平民ニシテ有禄云々ハ、平民ニシテ華士族ノ如ク官ヨリ若干ノ  
 禄ヲ支給シ置モノハ、華士族同様禄税ヲ收入スルトノ主意ニ候条、  
 甲第百六十四号ヲ以御布達相成候、平民ニシテ有禄ノ者ト有之、更ニ了解シ難  
 久、此段奉伺候間、至急詳解之御指令奉願候、以上、  
 巨摩郡第三十一区  
 区长 遠藤 聰知

此旨可相心得事、

明治八年六月二日□

4 | 17

道路世話方願

巨摩郡第三十二区

八日市場村

戸長

望月真兵衛

同

伊沼村

副戸長

深澤寅之丈

同

切石村

戸長

遠藤 重道

同

寺沢村

戸長

河西 栄蔵

幡野政右衛門

同

夜子沢村

渡邊磯右衛門

同

第三十一区

副戸長

中嶋 致恭

同

五開村

戸長

望月庄兵衛

同

西寫村

副戸長

佐野只兵衛

同

大須成村三番組

依田 定八

地場源次郎

同

同 壹番組

戸長

松田良左衛門

右之者義、巨摩郡第三十一区箱原村ヨリ西寫村マテノ間、新道切開世話方被仰

付度、奉願候、以上、

巨摩郡第三十二区

区長

明治八年五月三十一日

同 第三十一区

区長

遠藤 聰知

山梨県令藤村紫朗殿

4 | 18

申上

今般会議御発会ニ付テハ、御箇条ヲ以御達シ相成、且ヘ夫々見込書ヲ以可奉申  
上段被仰渡奉拜畏候、然ル処性庸劣ニシテ思慮難及ハ勿論、別テ建議可申上義  
無御座候間、此段以書付奉申上候、以上、

巨摩郡第三十区

区長

明治八年六月四日

同 第三十一区

田中佐兵衛

区長

遠藤 聰知

山梨県令藤村紫朗殿

明治八年七月六日

邏卒屯所御中

遠藤 聰知

区長

巨摩郡第三十一区

之哉、碎岩ト共ニ富士川ニ勿入候ニ付、迅速西寫村正副戸長指揮ヲ以、船并船頭雇入水中探索仕候得トモ、未夕不見当候ニ付、此段不取敢御届申上候也、

4-19

当区内鰍沢村廃寺常唱堂外ニヶ寺、堂宇・建具御扨下ケニ付入札被致可差上旨、御達ニ付即別封入札十通取纏メ封込奉差上候、以上、

巨摩郡第三十一区

区長

遠藤 聰知

明治八年六月廿八日

県令藤村紫朗殿代理

山梨県参事富岡敬明殿

4-22

御届

当区内五開村五番組ヨリ西寫村マテノ開新道切開ニ付、岩切甲府堅近習町植松治作義、昨六日十二時西寫村地内ノ岩山へ穴ヲ鑿チ焰硝ヲ込メ、火道管ニ火ヲ點シ候折節、火道管ヨリ瞬時ニ火葉ニ移リ、忽チ破烈致シ、遁去之間合無之哉、碎岩ト共ニ富士川ニ勿入候ニ付、迅速西寫村正副戸長指揮ヲ以、船并船頭雇入水中探索仕候得共、不見当候ニ付、猶今七日船并人足数人雇入探索仕候処、八代郡第十六区元帯金村地内ニ死屍相羅リ居候ニ付、見届サセ候処植松治作之死屍ニ相違無之ニ付、夫々手配致シ、南部屯所へ至急御届仕候義ニ御座候、依テ不取敢此段御届奉申上候、以上、

巨摩郡第三十一区

区長

遠藤 聰知

明治八年七月七日

山梨県参事富岡敬明殿

4-20

乙第四十四号社寺私懇地ノ原由詳細取調可差出旨御達ニ付、即当区内取調書取纏メ奉差上候、以上、

巨摩郡第三十一区

区長

遠藤 聰知

明治八年六月廿八日

県令藤村紫朗殿代理

山梨県参事富岡敬明殿

4-23

御届

乙第六十八号御達シ相成候石灰瓦焼其他区内取調候処、営業之者無御座候間、此段御届奉申上候、以上、

巨摩郡第三十一区

区長

遠藤 聰知

明治八年七月八日

県令藤村紫朗殿代理

4-21

御届

当区内五開村五番組ヨリ西寫村マテ開新道切開ニ付、岩切請負人甲府堅近習町植松治作義、今六日十二時西寫村地内ノ岩山エ穴ヲ鑿チ焰硝ヲ込メ、火道管ニ火ヲ點シ候折節、火道管ヨリ瞬時ニ火葉ニ移リ、忽チ破烈致シ、遁去之間合無

4 | 24

旅行ヒストール持参之義御伺

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤 聰知

右奉申上候、他国旅行ノ節兼テ御届済番号御打渡シ相成候用心銃ヒストール短銃・六連発持参致シ、万一危急ノ外患防禦仕度、右者駿州地ニ於テハ近時モ持兇器ノ賊ノ為メニ殺害被致候者モ有之趣承り及ヒ、恐懼此事ニ御座候、扱テ彼地抔へ旅行之節ハ、其身為保護右銃持参致候而宜敷御座候哉、此段奉伺候、以上、

右

遠藤 聰知

明治八年七月廿四日

県令藤村紫朗殿代理

(朱)

「書面旅行之節護身之為メヒストール持参之義者不苦儀ト可相心事、<sup>得火</sup>

明治八年七月廿五日□

4 | 26

富士川原由記

富士川通船開闢者、慶長元年申年城州嗟峨ノ人隅倉了以来テ水利舟楫ヲ起シ、慶長六丑年功ヲ竣へ通船相始り候、通船乗始メハ、慶長六丑年遠州天龍川ノ船頭水主トモノ内茂兵衛・権八・五郎兵衛・藤助、四人ノ者呼寄、鰍沢村農ニ御取立、通船乗始メ候、

船寸法

長七間  
幅六尺

以前下り船

積荷壹艘ニ付四百八拾貫目

但、三重皮俵米三斗六升入三拾式俵積

同 上り船

積荷壹艘ニ付貳百八拾八貫目

但、十式貫目俵ニテ貳拾四俵積

現今下り船

積荷壹艘ニ付三百六拾貫目

但、拾五貫目俵ニテ貳拾四俵積

同 上り船

積荷壹艘ニ付貳百八拾八貫目

但、拾式貫目俵ニテ貳拾四俵積

以前ノ難場十ヶ所

箱原地地先

天神ヶ瀧

高瀬并暗礁

飯富村地先

屏風岩

岩暗礁

同

早川尻

深流

角打村地先

釜

曲岩

大寫村地先

浮洲森

岩

南部村地先

獅子山

岩

十寫村地先

ヲポー寫

岩

駿州

内房村地先

糸尻

岩

松野村地先

俵岩

岩

木寫村地先

尼ヶ渕

突曲岩

4 | 25

絞油鑑札取纏返上

鰍沢村

第千九百五十三号

原田弥十郎

一同 免許鑑札壹枚

同人

右取纏メ奉返上候、以上、

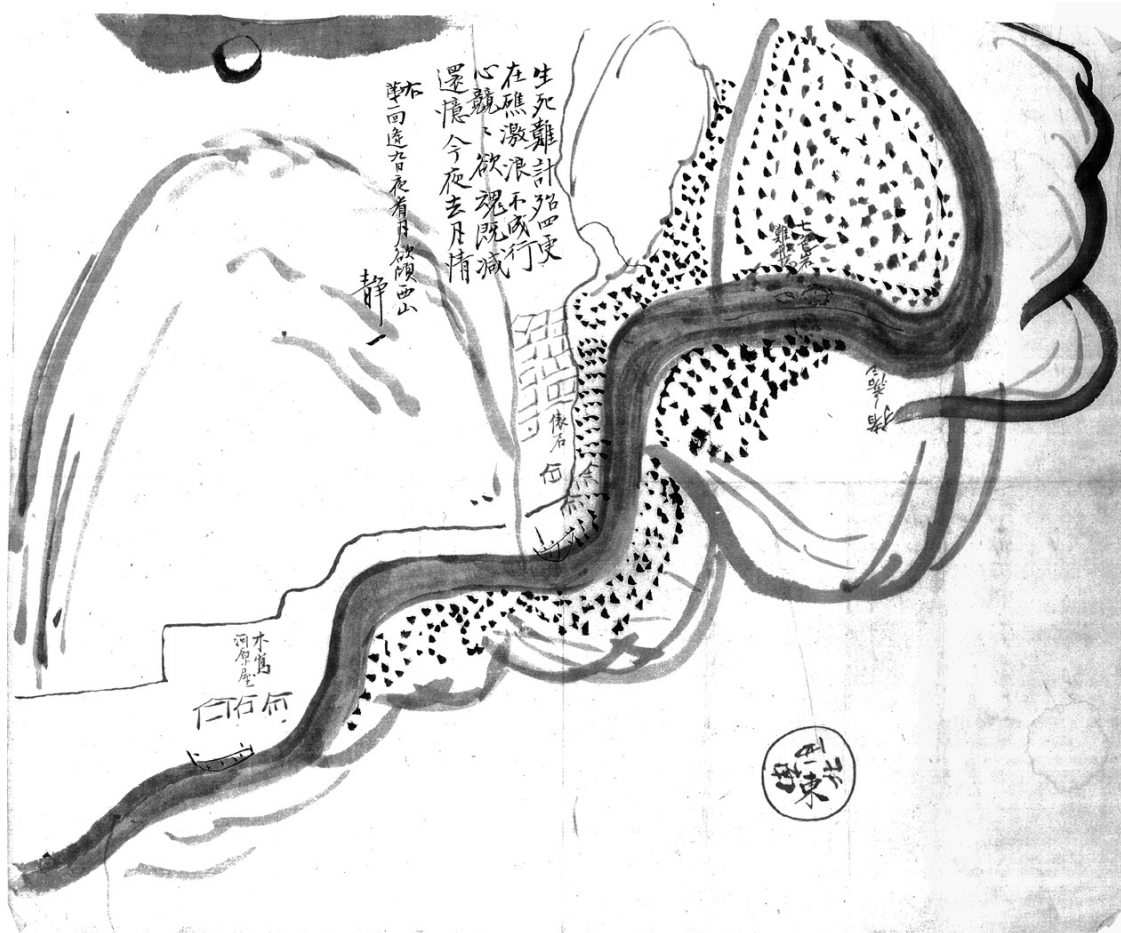
巨摩郡第三十一区

区长

遠藤 聰知

明治八年七月廿七日

県令藤村紫朗殿代理



以前ヨリ連続現今難場三ヶ所  
駿州 釜口村地先 釜

羽鮒村地先 芝川戸  
松野村地先 七色岩

岩  
深流岩  
暗礁

右取調申上候、以上、

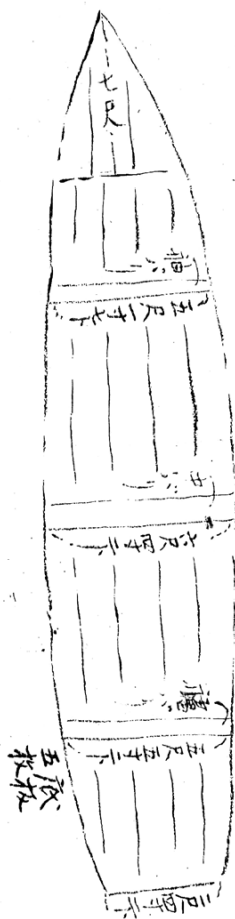
明治八年七月廿八日

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤 聰知

室川十廻取詳細書



記

一 巨摩郡第三十一区  
村数四ヶ村

戸長四人 俸給 金六十八円

副戸長二十三人 同 金百九十二円五十銭

一同郡同区

東西 三里十八丁

南北 四里二十町

右取調奉申上候、以上、

右

区长

遠藤 聰知

明治八年七月三十日  
県令藤村紫朗殿代理

山梨県参事富岡敬明殿

当区内廃寺入札取纏メ差上候処、左記之人名へ落札相成候ニ付、代価取立上納可致段御達相成候ニ付、左之人名へ代価上納之義通達及ヒ候処、右之者共先般之入札扣等持参上納方申出候得共、代価積リニ付了解致兼候廉々有之、取立方ニ差支候間、左之廉々江代価御書記被成下候上、御下渡之程奉願候、以上、

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤 聰知

山梨県戸籍御掛御中

明治八年八月二日

(朱)「書面朱書員数之通可相心得事」

戸籍掛

鯉沢村

眞如庵

(朱、以下同)

一堂 代価「金貳円五十銭八厘」

同村落札人

杉山作兵衛

一 畳床障子雨戸 代価「金壹円八十五銭」

同断

杉山 庸造

一 障子 代価「金三十四銭」

同断

望月 定八

同村

三光庵

一 庵門半戸 代価「金三円五十三銭五厘」

同村落札人

青柳 幸吉

一 床障子 代価「金十四銭」

同断

雨宮英一郎

一 堂三光堂畳 代価「金六円九銭」

障子徳利戸

早川清右衛門

同村

常唱堂

一 堂障子雨戸畳 代価「金三円十四銭」

同村落札人

戸田 直藏

御伺

本年乙第六十六号戸籍職分寄留捻計御雛形ヲ以御達相成候処、右御雛形中寄留総計之義、区内ヨリ他ノ管轄へ寄留、他ノ管轄ヨリ区内へ寄留ト有之、右ハ他ノ管轄寄留出入之総計而已ニテ、国内寄留出入ノ捻計ハ無之候テ宜敷御座候哉、他ノ管轄出入寄留総計ノ義、毎月取調一ヶ年十二冊相認差上可申義ニ候哉、戸籍職分寄留捻計トモ正副二冊ツ、相認メ差上可申義ニ御座候哉、右廉々奉伺候、以上、

巨摩郡第三十一区

区长

明治八年八月四日

遠藤 聰知

県令藤村紫朗殿代理

山梨県参事富岡敬明殿

(朱)「第一条何之趣者、戸籍編製法第四条中第二十八条ニ照準取調可差出事、  
第二条・三条何之通、

明治八年八月五日

4  
31

植松治作変死之節搜索入費其他取調書

一金貳円八拾貳錢

是者帯金村ニテ搜索人九拾四飯賄代同村へ相払候分

但壹飯ニ付三錢ツ、

一金四円也

是者同村ニテ酒三斗・明俵八十・繩十房、薪代共代払

一金貳拾六錢

是ハ同村ニテ界紙壹束、其他旦紙壹束代同村江相払渡候分

一金貳円八拾壹錢貳厘五毛

是ハ楠甫村船頭喜代兵衛外四人雇入搜索致ニ付賃金払渡候分

一金貳拾七錢

是ハ鰍沢村ヨリ帯金村マテ往返三度飛脚賃払渡候分

一金壹円三拾七錢五厘

是ハ八人足十一人搜索之節雇入右賃金払渡シ候分

但壹人ニ付金拾貳錢五厘ツ、

一金貳円六拾錢

是ハ帯金村ニテ夜番人足貳拾六人賃払渡シ候分

但壹人ニ付金拾錢ツ、

一金四拾五錢四厘

是者早川・帯金兩渡船往返渡船賃払渡候分

一金六拾錢

是者甲府飛脚賃政五郎外壹人へ払渡シ候分

一金四拾錢

是者右同断同人賄代渡シ候分

合金拾五円五拾九錢壹厘五毛

外人夫多分相遣ヒ候得共、此分者両区義務ニテ相勤申候、

右者、当区内元箱原村ヨリ西嶋村マテ之間、新道切開ニ付岩切之節、植松治作  
変死致候節之諸入費取調奉申上候、尤右入費之義ハ当区并巨摩郡第三十二区  
村々ニテ割合課出仕候間、此段御届奉申上候、以上、

区长矢寄圭造代兼

巨摩郡第三十一区

区长

明治八年八月五日

県令藤村紫朗殿代理

山梨県参事富岡敬明殿

4  
32

猪鹿威銃願

五開村 九人

大須成村十四人

右者、私区内村々威銃等別紙之通奉願候間、相糺候処相違無御座候間、御許可  
被成下度、此段奉願候、以上、

巨摩郡第三十一区

区长

明治八年八月七日

山梨県令藤村紫朗殿

遠藤 聰知

(朱)「書面聞届候条、其旨本人共へ相達可申事、

明治八年八月七日

4  
33

巨摩郡第三十一区

鰍沢村 五開村 西寫村 大須成村 合四ヶ村

物品	石数ノ部	員数	代価	一石当り
蚕豆	二百二十石		金三百九十六円	金壹円八十銭
豌豆	五十五石八斗		金百円〇四十四銭	金壹円八十銭
醬油上	三十八石		金二百二十八円	金六円
同 中	四十石		金二百十二円	金五円三十銭
同 下	六十石		金二百十円	金三元五十銭
貫数ノ部				
物品	員数	代価	一貫目当り	
味噌	五千五百貫目	金八百八十円	金十六銭	
木炭	四千貫目	金五十二円	金壹銭三厘	
筍	百四十五貫目	金四円三十五銭	金三銭	
薪	一万九千二百五十貫目	金九十六円二十五銭	金五厘	
枚数ノ部				
物品	員数	代価	一枚当り	
松板	二千枚	金五十八円	金二銭九厘	
蕨	三百七拾枚	金五円五十五銭	金壹銭五厘	
反数ノ部				
物品	反数	代価	一反当り	
白木綿	三百五十反	金百二十九円五十銭	金三十七銭	
縞木綿	六百五十反	金三百七十円〇五十銭	金五十七銭	
束数ノ部				
物品	束数	代価	一束当り	
檀紙	十万二千束	金五千百円	以九十枚為一束	金五銭
粘入紙	四千束	金千〇四十円	以百八十枚為一束	金二十六銭
半切紙	五千束	金三百五十円	以九十六枚為一束	金七銭
小半紙	十万二千束	金五千百円	以二百枚為一束	金五銭
粗紙	千束	金二十円	以三十八枚為一束	

禽類  
金二銭

鶏 千九百五十羽 金百九十五円 一羽二付金十銭  
 家鴨 五十羽 金十円 一羽二付金二十銭  
 鶏卵 一万八千 金百〇八円 一ツ二付金六厘  
 魚類  
 鮎 千八百 金十八円 一疋二付金壹銭  
 竹木類

桂 三百本 金二十壹円 一本二付金七銭  
 竹 千八百本 金十二円六十銭 一本二付金七厘

右者、明治七年十二月ヨリ明治八年五月マテ諸物品出産員書面之通書上申候也、  
 巨摩郡第三十一区 区长 遠藤 聰知

4-34  
 御届  
 明治八年八月九日  
 山梨県令藤村紫朗殿

乙第七十五号ヲ以、元朱黒印除地有之社寺之内、去明治元年ヨリ当八年五月迄  
 廃合相成候分取調可差上旨、御達ニ付取調候処、当区内二者無御座候間、此段  
 御届奉申上候、以上、  
 巨摩郡第三十一区 区长 遠藤 聰知

4-35  
 御伺  
 明治八年八月十日  
 山梨県令藤村紫朗殿

区长矢寄圭造代兼  
 巨摩郡第三十一区

區長

遠藤 聰知

右奉申上候、当区元箱原村ヨリ西寫村マテノ間、新道切開石工請負人植松治作義、右場所切開中變死及ヒ候ニ付、渡金且同人借用等取調、既ニ切開相成候ケ所工賃金相積リ并同人所持之道具売払計算仕候処、別紙之通不足及ヒ候ニ付、世話方一同遂協議候処、何分決兼候ニ付奉伺候、右不足之分ハ御下金之内ニテ仕払候テモ宜敷御座候哉、此段奉伺候間、至急御指揮被成下置度、奉願候、以上、

右

明治八年八月廿日

遠藤 聰知

山梨県令藤村紫朗殿

石工植松治作へ相渡候金員且同人負債之分取調書

六月十五日渡シ

一金拾五円

同 廿日渡シ

一金拾円

同 廿八日渡シ

一金拾円

小以金三拾五円

是者御下金之内ニテ相渡シ候分

同人負債之分今般取調候処、左ニ、

一金壹円貳拾七錢五厘

是者道具新調之分、西嶋村新四郎分借用之分

一金九円拾四錢壹厘八毛

是者右同断、同村金左衛門分借用之分

一金三拾四錢

是者飯料代、同村幸助ヨリ借用之分

一金四拾六錢五厘

是者人足賃、同村笠井喜三郎へ可相払分

一金壹円九拾四錢

是者右同断、同村大森長兵衛へ可相払分

一金壹円三拾九錢四厘貳毛

是者右同断、同村笠井政五郎へ可相払分

一金貳拾六錢八厘

是者右同断、同村笠井市郎右衛門へ可相払分

一金壹円六拾貳錢

是者治作外人、六月十三日ヨリ七月五日迄宿泊料

西嶋村笠井好右衛門へ可相払分

一金拾三円七拾五錢貳厘五毛

是者火藥代払不足之分

小以金三拾円拾壹錢六厘五毛

渡金・借用共

合計金六拾五円拾壹錢六厘五毛

内

岩切拾七坪五分七厘

此石工八拾七人九分

賃金拾七円五十八錢 但壹人ニ付金貳拾錢

焰硝貳拾七斤四分五厘

此金七円八拾七錢壹厘 但壹斤ニ付金三十三錢貳厘五毛

石積三坪四分

此人足拾人貳分

賃金壹円五十式錢 但壹人ニ付金拾五錢

小以金貳拾六円九拾七錢壹厘

鐵鑿七本 長六寸五分ヨリ貳尺一寸マテ 量目貳貫四百八十目

此金壹円八拾貳錢五厘 但百目ニ付金七錢三厘六毛

同大鑿壹本 長三尺四寸 量目壹貫六百五十目

此金壹円貳拾壹錢四厘 但百目ニ付右同断

同焰硝詰棒式本 量目三百廿目

此金貳拾三錢六厘 但百目ニ付右同断

同カキ出シ棒四本 量目貳百七十目

此金拾九錢九厘 但百目ニ付右同断

同カキ出シ棒四本 量目貳百七十目

此金拾九錢九厘 但百目ニ付右同断

真鍮詰棒壹本

量目百目

此金拾貳錢三厘

但百目ニ付金拾貳錢三厘

鐵遠州鍬二挺

量目六百九十目

此金五拾九錢貳厘

但百目ニ付金八錢五厘八毛

同ツルパン二挺

量目壹貫三百目

此金壹圓拾壹錢五厘

但百目ニ付右同斷

焰硝拾七斤四分六厘

但壹斤ニ付金三拾三錢貳厘五毛

此金五圓八拾錢五厘

小以金拾壹圓拾錢九厘

差引

合計金三拾八圓〇八錢

4 | 36

度量衡売捌人見込書

巨摩郡第三十一区

鰺沢村

河住 瀧造

右見込ヲ以奉申上候、以上、

右

区长

遠藤 聰知

明治八年八月廿日

山梨県令藤村紫朗殿

4 | 37

鰺沢学校世話方願

巨摩郡第三十一区

鰺沢村

副戸長

雨宮英一郎

4 | 38

鰺沢村副戸長人撰見込書

巨摩郡第三十一区

鰺沢村

青柳與次兵衛

当四十八年

深澤 寅平

当三十五年

青柳喜兵衛

当二十六年

右之者義、副戸長当器之者ニ付人撰見込ヲ以奉申上候、以上、

区长

遠藤 聰知

明治八年十月三日

山梨県令藤村紫朗殿

右之者義、学校世話方担任当器之者ニ付奉申上候間、何卒御瞭解之上右名前之者へ被仰付度、奉願候、以上、

右

区长

遠藤 聰知

明治八年九月三日

山梨県令藤村紫朗殿

伍長

早川和一郎

青柳 太造

4 | 39

度量衡売捌人見込書

巨摩郡第三十一区

鰺沢村

量売捌人

河住 瀧造

(横線末消)

同村  
度衡売捌人 喜作  
右売捌人撰奉申上候、以上、

明治八年十月三日  
山梨県令藤村紫朗殿

区长  
遠藤 聰知

4  
40

当区新道切開ニ付用竹御下賜願

一竹七百本 但目通り三寸ヨリ七寸廻りマテ  
右者、当区五開村之内元箱原村ヨリ西寫村ノ間、新道切開着手既ニ半ニ至リ、然ル処橋架等数ヶ所有之、右石積根堅メ籠其他之用竹ニ差与候間、何卒前件御瞭察被成下置、右用竹西寫村御官林ニ於テ御下賜被成下置度、此段奉願候、以上、

明治八年十月四日  
山梨県令藤村紫朗殿

巨摩郡第三十一区  
区长  
遠藤 聰知

4  
41

鰍沢学校世話方増員願

巨摩郡第三十一区  
鰍沢村  
原 吉太郎  
右者、去月鰍沢学校世話方担任之者被仰付度、奉願候処、即事務方壹名・世話方二名被仰付、然ル処、右三名ニテハ学校事務多端之際行届兼候間、猶一名右名前之者当器ニ付世話方ニ被仰付度、此段奉願候、以上、

明治八年十月五日  
山梨県令藤村紫朗殿

右区长  
遠藤 聰知

4  
42

陸軍教導団生徒御撰拔ニ付、志願之者有無当区内取調候処、別紙之通無之段村々戸長ヨリ申出候ニ付、此段御届奉申上候、以上、

明治八年十月十五日  
山梨県令藤村紫朗殿

巨摩郡第三十一区々々  
遠藤 聰知

4  
43

懇願

該社附属船数百艘之船頭・水主トモ義、静岡県下蒲原・木寫・松岡其他止宿所ニ於テ、当節賭博等専ラ被行候由、及伝聞、右者其船泊之場所ニ於テ相催誘導致シ候者モ有之由、然レハ船頭・水主共義ハ廉恥ヲ知サル者ニ付同徒へ相接リ、識ラス知ラス破業ノ者も有之哉ニ及承、心痛困却ニ不堪、然ルヲ其儘捨置候ハ、往々悪業ハ浸染延蔓致シヤスク、一同相弊ル、ハ顕然ニ付、防未然ニ禦キ度存候ヘトモ、私力ノ可及義ニ無之候間、何卒前件御賢察之上、右場所々々厚御取締御保護之義、静岡県御庁へ御掛合被成下置度、此段奉願候、以上、

明治八年十月廿三日  
山梨県令藤村紫朗殿

山梨県下  
富士川運輸会社々々長兼  
区长  
遠藤 聰知

静岡県下ニ於テモ邏卒巡回有之候ヘトモ、稀々之義、殊ニ巡回先タリトモ時トシテ賭博現行ヲ見通シ候義も有之由、蒲原ニ於テハ旧幕中有名ノ三平窩主ニ相立候由、同人方ノ企催ニ有之節ハ、邏卒モ遠ク避ケ候由も伝聞仕候、賭博之徒之通言ニ賭博会ヲ学校ト唱へ、彼ノ地ニ於テハ白中公然ト集会談言も致シ候義ニ御座候由、此段御賢慮奉願上候也、

明治八年十月廿三日  
山梨県警察御掛高橋安誉殿

遠藤 聰知

4-44

御伺

小学校・屯所・諸会社之類、一棟区域ヲ成シ候分ハ番号標札之義、毎戸之順序ニ抛テ押番相掲ケ候テ宜敷御座候哉、奉伺候、以上、

巨摩郡第三十一区々長

明治八年十月廿四日

遠藤 聰知

山梨県令藤村紫朗殿

(朱)「書面伺之趣、小学校・邏卒屯所・諸会社之類ハ総テ番号外ト可相心得事、

明治八年十月廿五日□

」

4-45

申上

当区五開村ヨリ、今般事務多忙ニ付、副戸長増員奉出願候ニ付、奥書ハ差出シ申候ヘトモ、同村之義ハ先般増員モ奉願、既ニ過分之増員御聞届ニモ相成候義ニ付、右之段同村正副戸長へ懇ニ申談候ヘトモ、何分可願止様無之ニ付、不得已奥書差出シ申候、此段御賢察被成下置度、且山腹山頂ニ散在ノ居村ト雖トモ、村落中央へ事務扱所取建候上者、聊差支等無之哉ニ相考候ニ付、其段モ深ク示談仕候得共、不行届義ニ付、此段御賢含被成下、出願罷在候ハ、事務所取建候様御説諭奉願度、此段上申仕候、以上、

巨摩郡第三十一区々長

明治八年十月廿四日

遠藤 聰知

山梨県令藤村紫朗殿

4-46

区长役御差免願

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤 聰知

右奉申上候、私義去明治六年一月区长拜命以降、職掌勉勵可罷在候処、性素庸

劣、加之寒暑之變転ニ際シ宿痾留飲且風毒之症一層相発、職務姑息ニ流レ、恐懼此事ニ御座候、且身ニ体シ候ヘハ自然活計之道ニ相迫リ、困迷ニ不堪候間、何卒前件御瞭解被成下置、格別之垂御仁恤、区长役御差免被成下度、此段奉願候、以上、

右

明治八年三月廿日

遠藤 聰知

山梨県令藤村紫朗殿

前書奉願候ニ付、奥書印形仕候、以上、

区长総代理

穴水朝次郎

名取善十郎

新海吉哉代印

(朱)「書面之趣ハ無余儀相聞候得共、詮議次第モ有之、難聞届条、精々保養ヲ加へ勉勵可致事、

明治八年三月廿日

」

4-47

至孝具陳書

巨摩郡第三十一区

鰍沢村百七十六番地

柳沢孫兵衛長男

柳沢久次郎

当十七年六ヶ月

右久次郎父孫兵衛ハ家内六人暮ニテ極貧ノ身ナレトモ、農間少許ノ魚類或ハ野菜類等ヲ売鬻シテ過活ヲ営居処、元今病身加フルニ明治元辰年今重病ニ罹リ活計始難立、貧困益加リ、一家将ニ饑餓ニ迫ラントス、久次郎僅々十歳ノ幼童ニシテ、更ニ風雨ノ厭ヒナク晝ハ餅菓子類等ヲ売歩行キ、其贏利ヲ以テ父ノ菜餌ノ料ニ供シ、以テ一家ノ過活ヲ助ケ、夜ハ又家ニ在テ病父ノ側ヲ離レス、始終心ヲ尽シテ看護スル事更ニ大人ニ劣ル事ナシ、之ヲ見ル者皆賞嘆セザルハナシ、

且久次郎幼ニシテ母ヲ失ヒ、父ノ繼妻ヲ娶る、以来之ニ事ルニ又孝ヲ以テシテ更ニ実母ニ異ナラズ、又祖母アリ齡已ニ七十、性煙草ヲ喫スル事ヲ嗜ム、久次郎則チ日々所得ノ内ヲ以テ購求シテ之ヲ与フ、如斯ノ善行美跡屈指スルニ亦暇ナシ、父母又祖母ニ至孝ニシテ二弟ヲ慈愛シ、人ハ変ルニ信実ヲ以テシ、数年ノ間未ダ曾テ一日怠惰アル事ナク、如何ナル疾風迅雨酷暑嚴寒モ厭ハズ職業ニ出精勉勵スル事衆人ノ遠ク及ハザル所、如斯シテ歲月ヲ経ル中、不幸ニシテ父孫兵衛去ル明治五年壬申ノ二月頃ヨリシテ眼病ニ罹リ、百方看護薬用ニ手ヲ尽スト雖トモ終ニ応効ナク両眼明ヲ失フテ盲目トナリ、尔来貧困愈々加ハルト雖トモ、久次郎更ニ屈撓ノ色ナク、益精ヲ勵マシ業ヲ勉メ、一家ノ過活依テ亦少シク安キヲ得、然ルモ、父孫兵衛ハ久次郎カ斯ク幼年ノ身ヲ以テ日々苦辛勞動スルヲ憫然ニ想ヒ、一日久次郎ニ向ツテ曰ク、我不幸ニシテ今盲目トナリ、カ、ル困苦ヲ尔等ニ掛ケ傍觀致居事甚ダ本意ニ背ケリ、故ニ今ヨリ按摩師トナリ、聊尔等ノ困苦ヲ助クヘシト、久次郎之ヲ肯ヘンセズシテ曰ク、兎不肖大人ヲシテ此言ヲナサシム不孝身ヲ容ル、ニ地ナシ、抑モ大人之ヨリ羸弱ノ身、加フルニ俄カニ盲目トナリタルナレハ、今又カ、ル賤業ヲナシテ醜体ヲ世間ニ顯サハ、徒ニ兎ノ罪ヲ増スノミナラズ、兎亦何ノ面目アリテ世ニ立ツヲ得ン、兎今ヨリ一層精ヲ勵マシ夜ヲ以テ日ニ繼ギ、出精勉強必ズ大人ヲシテ泰山ノ安キニ置カシ、大人必ズ深慮ヲ勞スル勿レト、懇ニ言ヲ尽シテ或ハ諫メ或ハ慰め、聞ク者ヲシテ覺ヘズ感涙ヲ催サシム、尔来或ハ馬ヲ追ヒ、或ハ車ヲ引キ、或ハ人ニ雇ハレ、更ニ風雨ノ厭ヒナク出精勉勵スル事実ニ筆紙ニ尽シ難シ、且又往年自村ニ学校ノ設立アルヤ、己レ貧苦ノ中ニ成立シ、眼ニ一丁字ナキノ不自由ヲ歎ジ、且又朝恩ノ優渥ナルニ感ジ、奮然衆ニ率先シテ、二弟榮太郎・平作ヲシテ入学セシメ、紙筆其外一切ノ費用ノ如キ皆己レ所得ノ内ヲ以テ之ニ供スル等ノ如キ、其行状ノ奇特ナル事、大人モ遠ク及ハザル所、如斯スル事数年未タ片言艱苦ヲ訴フルノ色ナク、益勵精奮發、見ル者賞譽セザルハナク、聞ク者感称セサルハナシ、斯ク父母亦祖母ニ孝養ヲ尽クシ二弟ヲ慈愛シ、剩ヘ紙筆ヲ与ヘテ入学セシムル等ノ如キ行状ノ奇特ナルモノハ、到底一村ノ奨勵全国ノ模範トモ可相成ト存候ニ付、其行状ノ概略ヲ書記シ、謹奉具陳候也、

右

区长

遠藤 聰知

明治八年十月廿八日

山梨県令藤村紫朗殿

4-48

紛失品御届

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤 聰知

一 模様付草烟草入 壹ツ

一 洋銀烟管 壹本

一 右烟草入ノ中名刺其他書類入

右者、昨一日午後七時頃連雀町ヨリ魚町通り紅梅町マテ通行之節、呆然紛失致候間、此段御届奉申上候、以上、

右

明治八年十一月二日

遠藤 聰知

山梨県令藤村紫朗殿

4-49

岩割口火御下願

一口火百本

右者、当区元箱原村ヨリ西寫村ノ間、新道切開岩割之義着手為仕度存候間、火薬割口火御下ケ渡被成下度、奉願候、以上、

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤 聰知

明治八年十一月二日

4-50

記

一金壹円七拾壹錢貳厘五毛

但焰硝五斤代

右金員奉上納候、以上、

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤 聰知

明治八年十一月二日

4-51

申上

当区内五開村ノ内元鳥屋樋口惣左衛門ヨリ私有地ト字大柳川沿寄洲之場所ト境界之義ニ付、先般出願及ヒ候始末、篤ト説得濟方為致ヘク旨被仰聞候ニ付、即同人并副戸長ヘ懇ニ示談之末、右寄洲之場所凡八畝歩有之、然ル処右場所ニ厚薄有之、惣左衛門所持地続者厚肥ニテ漸々薄地ニ及候ニ付、右八畝歩之地味厚薄ヲ見均シ、厚地三畝歩・薄地五畝歩ト分割シ、右三畝歩・五畝歩之内孰レ成惣左衛門所持地続之故ヲ以、同人ヘ受領被致、残地者勿論公有地ニ有之ニ付、前段ヲ以濟方可致談示候処、副戸長於テ者承服モ有之候得共、惣左衛門義ハ何分我意申募、濟方之心得更ニ無之、何分濟方難及候間、此段奉上申候、以上、

巨摩郡第三十一区々長

明治八年十一月十二日

山梨県地券御掛御中

遠藤 聰知

4-52

社長御差免願

富士川運輸会社

社長

遠藤 聰知

右奉申上候、本年一月富士川運輸会社々長拜命、然ル処同社ノ義開業ノ際ニ付、精神ヲ勉マシ規則踐行徹底致度、短慮庸劣ヲ顧ミス奔走シテ、会社ヘ障碍ト患考仕候塊物ヘハ大小ヲ不論突当シテ、碎破スヘキハ碎破シ、消スヘキハ消シ、洪着之分ハ摩耗シ度、浅慮ヲ以テスルト雖トモ、目途一トシテ符合貫通スル能ハス、之ニ加フルニ会社ノ名分ヲ陋落シ、既ニ岩淵村新規打立通船之義掛合決極等遷延、且会社役員ヘノ指揮不行届ハ毎拳スル能ハス、前段ノ次第二付会社維持者勿論、自然私トモ奉職之為メ衰墮及ヒ候ハ顕然、今更鈍慮ノ及ハサルヲ悔悟、身容ル、処ナリ、不顧恐懼奉願候間、何卒前件御瞭察被成下置、特別ノ以御仁恤社長御差免被成下置度、奉願候、以上、

明治八年十一月十八日  
山梨県令藤村紫朗殿

右

遠藤 聰知

(朱)「右書面差出候間種々御説諭有之、其儘御下ケ相成候事、」

4-53

徴兵国民軍取調方并書式伺

徴兵令第六章第十二条并徴兵令参考第二十八条ニ照準シ、明年満十七歳ニ相成候者取調、成丁簿ノ野紙ヘ可認義奉了承候ヘトモ、右認方警戸主嗣子独孫其他不具ノ者タリトモ、満十七歳ノ者ニ有之候ヘハ悉皆順序ニ認込候テ宜敷義ニ御座候哉、

徴兵取調方ハ徴兵令第六章第十三条并同令参考第十七条第一式・第三式ニ照準シ、村々限り取調、同書式ニ倣ヒ成丁ノ者ハ第一式、免役ニ適スル者ハ第三式ノ野紙ニ為認、一区取纏メ、区長ハ別紙添書ヲ相附差上候テ宜敷義ニ御座候哉、右奉候候、以上、

巨摩郡第三十一区

区長

遠藤 聰知

明治八年十一月十八日

山梨県令藤村紫朗殿

(朱)

「第千百六十九号

書面伺ノ趣、左之通可相心得事、

第一条伺之通、

但、他府県ヘ寄留現今不在之者等者、参考第廿九条之通備考ヘ詳細書載可

致事、

第二条之趣ハ取調之都合モ有之ニ付、一区限り取調、各村戸長者紙末ニ連署、区長ハ添書ヲ以進達可致事、

明治八年十一月十九日

県令藤村紫朗代理

山梨県参事西村亮吉

5

(表紙)

明治九年自一月  
至四月

誌

号

遠藤

明治九年一月六日  
山梨県令藤村紫朗殿

右申上候、地所御取調実地御丈量ニ付、御書付頂戴御派出相成候趣被仰聞、区内村々成功相成候得共、鯉沢村之義、尔今成功相成兼、何トモ奉忍入候得トモ、本月八日マテ御日延被成下度、然ル上者、右御日限之通り皆出来御派出先へ御届可仕候、依之御請書奉差上候、如件、

右区长

遠藤 聰知代

樋口 静一

5-3

御届

当区内鯉沢村孝子柳澤久次郎へ、東京府下第一大区十四ノ小区蛸売町壹丁目三番地寓居竹内泰雄ヨリ、別紙写之通書状へ金式拾銭ノ為換証書一枚相添、郵便ヲ以惠贈有之候段、久次郎ヨリ申出候ニ付、此段御届奉申上候、以上、

巨摩郡第三十一区々長

遠藤 聰知

明治九年一月十二日  
山梨県令藤村紫朗殿

5-1

御届

巨摩郡第三十一区

鯉沢村

第一後備軍兵卒

雨宮 昇

右之者義、本日発着之御達シ承畏仕、然ル処同人義、山梨裁判所ニ於テ御差押相成、当時入牢中ニ付、召集御日限者勿論、本人江通達難及存候間、通行御免状相添、此段御届奉申上候、以上、

右

区长

遠藤 聰知

明治九年一月四日

山梨駐在

陸軍少尉北岡吉秋殿

5-4

前略、御仁恕可被下候、陳者小生義ハ先年飾磨県下姫路ヨリ内用ニテ出京罷在候、甚失敬之至ニ候ヘトモ、絵入新聞第四百四十三号ヲ拝読之上、郵便ヲ以御祝儀申入候、貴君御幼稚ヨリ父弟ニ孝愛之道ヲ尽シ、実ニ奉かんふ候、且僕モ早ク父母ニ離レ弟妹モ有之候ニ付、是ヨリハかいしん致シ弟妹共へでんきう可致候間、先御祝儀まで金式拾銭壹ツ贈送仕、宜敷御笑納可被下候、猶父君ヲ御大切ニ可有之候様、恐々謹言、

東京府下

第一大区十四ノ小区

蛸売町壹丁目三番地

寓居

竹内 泰雄拜

巨摩郡第三十一区々長

遠藤 聰知

5-2

御請書

巨摩郡第三十一区々長

遠藤 聰知

明治九年第一月七日

午前第八時認メ

山梨県下巨摩郡鰍沢村

柳澤久次郎君

遠藤 聰知

郵便為替金式拾銭      リ三〇七号証書壹枚添有之

(朱)「第三〇〇号

書面之趣聞置候事、

明治九年一月十二日

山梨県令藤村紫朗

5-6

訓導補助御試檢願

八代郡第十区

豊富村三番地

五味算義

甥

五味 昌治

当二十七年五ヶ月

右之者義、御試檢之上、当小学校訓導補助被命度、此段奉願上候、以上、

巨摩郡第三十一区

五開村

副戸長

依田孫兵衛

同

望月 駒吉

明治九年一月十二日

山梨県令藤村紫朗殿

前書訓導補助御試檢奉出願候二付、奥書仕候、以上、

同 望月 駒吉

区长

遠藤 聰知

5-5

小学校開校願

巨摩郡第三十一区

五開村

二番組

三番組

当村二・三番兩組小学校之義、当分二番組柳川寺ヲ以テ小学校ニ相定候間、本月十七日開校被成下置度、此段奉願上候、以上、

右

副戸長

依田孫兵衛

同

望月 駒吉

山梨県令藤村紫朗殿

(朱)

「第三六〇号

書面聞届候事

明治九年一月十二日

山梨県令藤村紫朗

前書開校奉出願候二付、奥書仕候、以上、

区长

山梨県令藤村紫朗殿

明治九年一月十二日

当区内五開村二・三番組小学校訓導補助御試檢奉出願候二付、御試檢之上当器之者二候ハ、二等訓導補助以下二被仰付度、此段奉申上候、以上、

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤 聰知

5-7

実地番調記

巨摩郡第三十一区

- 一 凡八千番 鰯沢村
- 一 八百番 元長知
- 一 千四百五十九番 元鳥屋
- 一 四千六百八十二番 元十谷
- 一 式千六百八十八番 元柳川
- 一 千式百八十九番 元箱原
- 一 四千四百四番 西寫村
- 一 三千九百四十一番 元大塩
- 一 五千九百五十番 元久成
- 一 式千九百九十九番 元平須

区长

遠藤 聰知

明治九年一月十八日

地券御掛

御中

5-8

大須成村副戸長人撰見込書

巨摩郡第三十一区

大須成村二番組

神宮寺三右衛門

長男

神宮寺久左衛門

当三十三年

右之者義、元副戸長神宮寺與、右衛門跡役副戸長当器之者ニ付、人撰見込ヲ以奉申上候、以上、

区长

遠藤 聰知

明治九年一月十九日

山梨県令藤村紫朗殿

5-9

御猶予願

当区内車税・旅籠屋税、本日マテニ取纏メ上納可致御達拝承、兼テ上納期限ニ付、村々へ督促致シ候ヘトモ、未夕取纏メ兼候間、先キ五・六日ノ間御日延御猶予被成下度、此段奉願候、以上、

巨摩郡第三十一区々長

明治九年一月三十一日

遠藤 聰知

山梨県

収税御掛御中

5-10

明治八年十二月一日朶訥拜呈

当県御発車名東県へ御入県以降益々御健寧御座被為遊候義、雀躍不過之奉存候、扱当県御発車之節ハ兼テ命令ヲ蒙リ蒲原水路開鑿入費支消方之為談判、静岡県下へ派出中ニ付、不奉拝尊願、是マテ御厚恩ニ預リ被罷在、御発車之祝詞モ不申上、残念是事ニ御座候、今般書面ヲ以奉窺候義、恐縮之至リト覚悟仕居候ヘトモ、御発車之節不奉拝尊願残念之余リ、不得已、此段御宥恕被成下置度、奉願候、敬白、

黒沢村之義モ、福地公始メ西尾・須田両公ヨリ厚御説諭ヲ下シ候処、同村之者共当社へ抵触之萌不相脱、同村之者申立方電ノ如クニテ、何分承服無之様相見候処、御説諭之厚キニ依リ漸ク改心、先頃分社設立之御許可ヲ蒙リ、当節ハ高添隆三ヲ黒沢河岸出張被致、村松市太郎俱ニ諸事務ニ取掛リ候義ニテ、該社之基礎是事ニ御座候、依テ別紙之通支消金取立方奉出願候処、速ニ御許可相成、取立方之仕組ヲ計リ居候次第ニ御座候、此分ニテハ当闔国便益ハ勿論、随テ水道入費支消之義モ速ニ行届可申義と存候間、永々御尊慮ヲ煩ハシ候一端ヲ奉慰度、不顧恐愚書ヲ以奉申上候間、此段御宥恕被成下置度、恐々謹言、

山梨県下巨摩郡

第三十一区々長

名東県権令

富岡敬明殿

閣下

遠藤 聰知

5-11

山梨県令御用召之義ニ付歎願書

山梨県下人民総代

甲斐国巨摩郡第四区

竜王村

百十三番地

新海 吉哉

同郡第三十区

増穂村八百七十九番地

田中佐兵衛

同郡第三十一区

鰍沢村十六番地

遠藤 聰知

謹テ奉申上候、去月下旬御省ヨリ本県令藤村紫朗殿御用被為在、至急御出京被命候趣之処、御病中ニ付、参事西村亮吉殿代テ御上京之趣拝承仕候、右御用之趣ハ微賤之私共固ヨリ可伺存儀ニ者無之候得共、爾来街説紛々或ハ御転任可相成哉之臆測ヲ以人心疑惑ヲ生シ、日夜案勞、果シテ巷説ノ如ク、万一他へ御転任可相成御都合ニモ被為在候テハ、大ニ本県内之盛衰人心之嚮背ニ關係致シ可申、深く心痛仕、御用之趣モ拝承不仕、猥ニ前以奉願上ハ恐懼之至ニ不勝候得共、本県内之時態大畧左之通りニ有之候ニ付、今後三・四年ヲ限り、是非トモ今県令御在任奉願度候、

本県之地勢連山四境ヲ限り、道路艱難ナルヲ以他州ト往来稀ニシテ、交際自ラ不広人情、為之固陋ニ安シ候国柄ニ候処、去明治六年二月中今県令御入県、爾来百方告諭萬端誘奨、土風ヲ矯正シ俗習ヲ改良セシムルノ一途ニ励精セラレ候ニ付、学校・道路ヨリ以テ物産工業ニ至マテ凡百之事業着手仕、民心一年者一年漸々開明之他ニ嚮フヲ弁知シ、従前之弊風習俗者数年ヲ期シテ革面可致哉

ニ被存候、然処、今日ニ方リ候テハ該事業皆其半途ニシテ一モ成功ニ至リ候者無之、此時ニ際シ万一県令御転任相成候様之儀有之候ハ、人心一時ニ倦怠、従前着手之事業教化捻テ廢弛解體ニ属シ可申儀ト深く心痛仕候、今日ニ方リ学校之建築ハ稍々県内ニ普キ體ニハ候得共、其永遠維持之方法未タ確立不致、況シテ其他地租改正ヨリシテ道路堤防水陸通運物産工業等之事務ニ至候テハ、或ハ其功半ニ至ル者有之、或ハ現今始テ着手之者有之、或ハ今後之指画ニ属シ候者有之、右等凡テ人民自奮作興之義務ニ出ツヘキ筈ニ候得共、地位未タ斯ニ至ラス、一二県令鼓舞勸誘之治術ニ出候事ニ候間、万一県令御転任ニモ相成候ハ、人氣荒怠、三年来之辛苦勉力ハ徒勞冗務ニ属シ可申、甚以歎敷至リニ存候、前条之事業教化年来之順序ヲ追ヒ、今後数歳之日月ヲ積ニ至候ハ、民志之方向確定致シ、自鞭發揮、人々奮テ百事必効ヲ可期候得共、今ニシテ県令御転任候ハ、水ヲ涉リテ中流楫ヲ断チ、病ヲ療シテ半途医ニ離シ候如ク、其覆没セサランヲ欲シ候トモ不可得勢ニ有之候、今県令ニシテ猶御在任候ハ、従前着手之事業今後化育之治務歩ニ順序ヲ追ヒ、着々成効ヲ遂ケ、所謂文明之域ニモ進歩之程期可有之、尤萬止ムヲ得サル御都合被為在、情願終ニ水泡ニ属スル不幸有之ニ於テハ、必ス新県令臨治セラレ、先蹤繼述可被為在ハ必然ニ可有之候得共、今日ノ体ヲ以見ルニ必ス一時人心解弛、其勢ハ実ニ如何トモ救フベカラサルモノニテ、一度氣鋒ヲ挫ク時ハ之ヲ挽回スルハ甚難ク、仮令新県令ノ智徳容事ニ復セラル、モ、萬般更始ノ姿ト相成、措置自ラ順序ヲ異ニスルノ儀モ可有之、於然ハ上旨下情或ハ矛盾ヲ生シ、方向ヲ錯リ候様成行可申哉ト深く心痛仕候、乍然大政府御政務上ノ御都合モ可被為在候得ハ、微賤之私共推テ願上候ハ萬々恐懼之至ニ不勝候得共、何卒前陳之事情御諒察被成下、格別之御詮議ヲ以、猶今後三・四年間本県ニ御在任相成候様仕度、県民一同ニ相代リ不取敢出京、此段奉懇願候、誠恐誠懼聞死謹言、

明治九年二月十二日

右

遠藤 聰知

田中佐兵衛

新海 吉哉

内務卿大久保利通殿

御請書

地租改正二付、等級収糶總計其他諸帳簿差出方之義、兼テ各村御請書差出置候  
処、今以遷延之分モ有之、蒙御督責取纏方相運ヒ候様可取計旨了承任、尚一層  
嚴談、来ル十六日マテニ無相違差出候様、精々可取計、自然右日限ニ至リ出来  
兼候分ハ其事扣、各村ヨリ一蓮寺取調所へ直ニ上申、諸帳簿持参、村吏担当人  
共一同差出可申、此段御受申上候也、

巨摩郡第三十三区・三十一区代兼

第三十二区々長

明治九年二月十三日

矢寄 圭造

山梨県地券掛御中

巨摩郡第三十一区

鰯沢村 五開村

西寫村 大須成村

合四ヶ村

石数ノ部

代価

一石当り

物品	員数	代価	一石当り
米上	百十石	金四百七十五円八十六銭	金四円三十二銭六厘
同中	九百四十石六斗	金三千九百十六円六十五銭	金四円十六銭四厘
同下	三百二十石	金千式十九円式十九銭	金四円四銭四毛
大麦上	四百五十石	金千百七十円	金二円六十銭
同下	二千五百六十五石	金五千八百九十九円五十銭	金二円三十銭
小麦上	二十五石	金九十二円七十五銭	金三円七十一銭
同下	三百五十五石五斗	金千二百〇八円七十銭	金三円四十銭
大豆上	百十石	金四百五十八円三十七銭	金四円十六銭七厘
大豆下	四百三十石	金千七百二十七円七十四銭	金四円一銭八厘
小豆上	二十五石	金百円	金五円

貫数ノ部

代価

一貫目当り

物品	員数	代価	一貫目当り
味噌	五千五百貫目	金八百二十五円	金十五銭
大根	二万六千五百五十貫目	金五百二十三円	金二銭
人参	五百十貫目	金十五円三十銭	金三銭
馬鈴薯	五百貫目	金五円	金壹銭
麻	十八貫目	金五円四十銭	金三十銭
秋葉	八千五百貫目	金二百十二円五十銭	金二銭五厘
牛蒡	五百八十貫目	金式十円三十銭	金三銭五厘
芋	壹万五百貫目	金三百十五円	金三銭
甘藷	三万八千五百貫目	金千三百四十七円五十銭	金三銭五厘
茄子	二千九百貫目	金二十円三十銭	金七厘
木瓜	百貫目	金壹円五十銭	金壹銭五厘
綿	千九百五十貫目	金千七百五十五円	金九十銭
西瓜	百五十貫目	金七円五十銭	金五銭
白瓜	七十貫目	金式円十銭	金三銭
小豆下	九十石六斗	金四百二十五円八十二銭	金四円七十銭
粟	百六十石一斗	金四百六十四円二十九銭	金二円九十銭
稗	二百九十三石八斗	金二百九十六円七十三銭	金一円壹銭
黍	五十五石	金八十八円	金壹円六十銭
蜀黍	六石五斗五升	金九円八十二銭五厘	金壹円五十銭
大角豆	三十五石	金百四十円	金四円
蕎麦	二百四十五石	金八百五十七円五十銭	金三円五十銭
清酒上	三百五十石	金千七百五十円	金五円
同中	七百石	金三千百五十円	金四円五十銭
同下	五百十五石	金千五百四十五円	金三元
醬油上	三十五石	金二百四十五円	金七円
同中	五十石	金二百七十五円	金五円五十銭
同下	四十石	金百八十円	金四円五十銭
酢	二十石	金八十円	金四円

柚 三百五十貫目 金八円七十五銭 金二銭五厘

柿生 九千九百五十貫目 金二百五十八円七十銭 金二銭六厘

柿乾 千五百貫目 金百〇五円 金七銭

林檎 五百貫目 金七円五十銭 金壹銭五厘

桃 二千九百五十貫目 金四十四円二十五銭 金壹銭五厘

藍 五百式十貫目 金八十三円二十銭 金十六銭

葉烟草 百二十貫目 金二十四円 金二十銭

蒟蒻 五百貫目 金四十円 金八銭

生姜 三千五百貫目 金九十四円五十銭 金二銭七厘

薯蕷 千五百貫目 金百〇二円 金六銭八厘

木炭 四千貫目 金四十四円 金壹銭一厘

薪 四万五百貫目 金二百〇二円五十銭 金五厘

葱 千八百貫目 金五十四円 金三銭

三ツ又 三千五百貫目 金六百三十円 金十八銭

楮 九十貫目 金十八円 金二十銭

枚数ノ部

物品 員数 代価 一枚当り

松板 三千枚 金八十四円 金二銭八厘

蕨 九百五十枚 金十七円十銭 金壹銭八厘

蘆 三百枚 金十円五十銭 金三銭五厘

反数ノ部

物品 員数 代価 一反当り

縞木綿 千五百反 金八百二十五円 金五十五銭

白木綿 三百七十反 金百二十九円五十銭 金三十五銭

束数ノ部

物品 束数 代価 一束当り

檀紙 八千五百束 金三百八十二円五十銭 以九十枚為一束

粘入紙 二千五十束 金五百五十三円五十銭 以百八十枚為一束

半切紙 三千五百束 金二百二十七円五十銭 以九十六枚為一束

小半紙 八万五千束 金四千二百五十円 以二百枚為一束

粗紙 千五百束 金三十三円 以三十八枚為一束

鶏卵 卵ノ部 二万五百 金百二十三円 一ツ金六厘

鮎 魚ノ部 五千八百 金五十八円 一尾二付金壹銭

柱 竹木ノ部 三百本 金三十三円 壹本

竹 三千本 金二十四円 壹本

右者、明治八年六月ヨリ同年十一月マテ諸物品出産員書面之通書上申候也、

右 区长

明治九年二月廿七日 遠藤 聰知

山梨県令藤村紫朗殿

酒類受売営業願

巨摩郡第三十一区

鰍沢村

遠藤 聰知

5 | 14

— 96 —

遠藤太右衛門  
右奉申上候、私卜モ義、酒類受売営業致シ度、何卒御許可之上御鑑札御下ケ渡  
シ被成下度奉願候、以上、

明治九年二月廿日

右  
遠藤 聰知  
遠藤太右衛門

前書之通奉願候ニ付、奥印仕候也、

戸長

中込太郎左衛門

山梨県令藤村紫朗殿

(朱)「第三一六七号

書面之趣聞届候条、明治八年甲第七十九号布達之通可相心得事、

明治九年二月廿二日

山梨県令藤村紫朗□

5  
15

御願

当区内牛馬売買稼之者、当九年分鑑札税本日限り取纏メ上納可仕旨御書付拜  
承、区内村々へ再度相促シ候得共、未夕取纏メ行届兼候間、先キ三・四日間御  
猶予被成下度、此段奉願候、以上、

巨摩郡第三十一区々長

明治九年二月廿七日

遠藤 聰知

山梨県第三課

収税御掛御中

5  
16

有志之者等級見込書

巨摩郡第三十一区

鯉沢村蓮久寺看守

学識下 弁舌中 品行中

人望上 篤志上

右五科差等上中下ヲ以申立候通、相違無之候也、

区长

遠藤 聰知

明治九年三月二日

日蓮宗中教院御中

5  
17

有志ノ者等級見込書

巨摩郡第三十一区

鯉沢村妙臺寺看守

樋口 日慈

当三十八年三ヶ月

学識中 弁舌中 品行中  
人望中 篤志上

右五科差等上中下ヲ以申立候通、相違無之候也、

区长

遠藤 聰知

明治九年三月二日  
日蓮宗中教院御中

5  
18

有志ノ者等級見込書

巨摩郡第三十一区

鯉沢村蓮華寺看守

野沢 貞翁

当二十三年一ヶ月

学識中 弁舌下 品行中

人望上 篤志上

右五科差等上中下ヲ以申立候通、相違無之候也、

区长

明治九年三月二日

日蓮宗中教院御中

遠藤 聰知

5-20

区长御免願

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤 聰知

5-19

区长役御差免願

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤 聰知

右奉申上候、私義去明治六年一月区长拜命以来職掌勉勵可罷在候処、性質庸劣ニシテ職務上他区ニ後レ恐懼之至ニ不堪、依テ昨八年三月中役義御差免奉願候処、御詮議モ有之、御聞届難相成御旨御指令ニ付、爾来押テ勉強可仕存意ニ者候得トモ、性質之賤劣不能補、驚馬ニ自鞭スル如クニシテ、独リ当区ニ限リ事務上一トシテ不進、随テ区内村々進歩之日ヲ期シ難ク、当時運ニ際シ庸劣之私トモ此儘奉職罷在候時ハ、本県ニ於テ啻一区而已別異域ヲ成シ候ハ必然ナリ、然ル上ハ御政務之障碍ニモ可相成、恐懼之至リ深ク痛心仕候間、何卒前陳之事情御洞察被成下置、格別之以御詮議区长役御差免被成下度、此段奉願候、以上、

右

明治九年三月四日

同郡廿七区々長

保坂安右衛門

山梨県令藤村紫朗殿

前書奉願候ニ付、奥印仕候、以上、

区长捻代理

新海 吉哉

尾澤 孝治

5-21

区长御免願

巨摩郡第三十一区

区长

遠藤 聰知

右奉申上候、私義去明治六年一月中区区长拜命以来、該務之如キハ是マテ勉強從事罷在候処、昨八年一月ヨリ運輸会社々長ヲモ兼務被命候ニ付、両務是マテ奉職罷在候得トモ、両務ニテハ何レモ事務半途ニ流レ、恐懼此事ニ御座候、一体該社之義ハ草創之際諸般多端、向後一社維持之方法ヲモ確定不致候ハテハ、静岡県分支社等ニ対シ不都合モ有之候ニ付、当分区長之職務御免被成下度、然ル上ハ一層該社務ニ勉強仕候間、何卒前陳之事情御洞察之上御聞届被成下置度、此段奉願候、以上、

右

明治九年三月十日

山梨県令藤村紫朗殿

遠藤 聰知

前書之通申越候間、奥印仕候、以上、

巨摩郡第三十二区々長

矢寄 圭造

5-21

(表紙)

「

耕耘難易  
運輸便否  
村等表

巨摩郡第三十一区

」

甲斐國巨摩郡第三十一區一表等村

一等	鵜澤村
二等	
三等	西島村
四等	箱原村
五等	大塩村
六等	長智村
七等	平須村
	鳥屋村
	久成村
	十谷村

山梨縣甲斐國  
巨摩郡第三十一區  
區長 遠藤聰知  
高三十一區

甲斐國巨摩郡第三十一區一表等村

一等	鵜澤村
二等	
三等	
四等	大塩村
五等	柳川村
六等	鳥屋村
七等	久成村
	十谷村
	平須村
	長智村
	箱原村

山梨縣甲斐國  
巨摩郡第三十一區  
區長 遠藤聰知  
高三十一區

甲斐國巨摩郡第三十一區一表等村

一等	鵜澤村
二等	西島村
三等	
四等	
五等	久成村
六等	柳川村
七等	平須村
	鳥屋村
	大塩村
	長智村
	箱原村

山梨縣甲斐國  
巨摩郡第三十一區  
區長 遠藤聰知  
高三十一區

5-22

申上

当区内村々耕転難易其他取調書、每村伍長以上連署之書面相添、表面ヲ製シ可奉差上御書付二付、即整頓可差上候処、未夕長知沢村・鳥屋村・柳川村・十谷村・平須村、右五ヶ村之義ハ、御庁下へ正副戸長其他地券担当人等不残出張、帳簿総計其他等取調中ニ付、右取調連署之書面未夕出来兼候段申出有之候ニ付、右五ヶ村之分ハ婦村次第取纏メ奉差上候、其餘出来之分、鵜沢村外四ヶ村分へ区内村等其他見込之表面相添奉差上候間、長知沢村外四ヶ村之分者婦村マテ御猶予之義奉願上度段申出候ニ付、此段奉申上候、以上、

明治九年三月十四日

山梨県地券御掛

御中

巨摩郡第三十一區々々長

遠藤 聰知

5-23

有志ノ者等級見込書

巨摩郡第三十一區

五開村柳川寺看守

5-24

申上

当区内村等三表其他調書可差出御書付拝承仕候、右村等表其他取調書之義ハ、去ル十三日郵便ヲ以差上候義ニ御座候間、此段奉申上候、以上、

明治九年三月十九日

山梨県地券御掛御中

巨摩郡第三十一區々々長

遠藤 聰知

明治九年三月十三日

日蓮宗中教院御中

右五科差等上中下ヲ以申立候通、相違無之候也、

區長

遠藤 聰知

学識中 弁舌中 品行中  
人望上 篤志中

伊東 義最  
当三十五年二ヶ月

堀口日廣

徒弟

5-25

申上

長知澤村之義者、小作人并荒地等無之段申出候間、此段申上候、  
十谷村之義ハ、小作人者無之段申出候得共、荒地取調之義ハ同村正副戸長并  
地券調当人不残御序下へ出張二付、未夕取調不行届趣申出有之候間、此段  
申上候、  
右奉申上候、以上、

巨摩郡第三十一区々長

明治九年三月十九日

山梨県地券御掛御中

遠藤 聰知

5-26

勸業世話掛撰挙書

巨摩郡第三十一区

大須成村

依田 定八

右ノ者義、勸業世話掛当器之者二付、撰挙奉申上候、以上、

巨摩郡第三十一区

西寫村

副戸長

佐野 只兵衛

大須成村

副戸長

佐藤 清明

五開村

戸長

望月庄兵衛

鯉澤村

戸長

中込太郎左衛門

区長

山梨県令藤村紫朗殿

遠藤 聰知

5-27

御下金願

巨摩郡第三十一区

区長

一金貳百円

右奉申上候、当区内西寫村ヨリ元箱原村マテノ間、新道開鑿岩切之場所切開方

着手仕、来ル四月卅一日迄二落成之見込ヲ以渡方致候二付、夫々請負人へ仕払

金之差支候間、何卒御下賜相成度、金員今般御下渡被成下置度、此段奉願候、

以上、

右

明治九年三月廿二日

山梨県令藤村紫朗殿

遠藤 聰知

5-28

申上

当区内三等表差出方二付、再三御達相成、拝承仕候、右三等表之義ハ、去ル十  
四日郵便ヲ以奉差上候、其他各村不足之分ハ、二日ヲ過、五開村戸長望月庄兵  
衛ヲ以奉差上候義ニ御座候、前般出頭可奉申上ノ処、四・五日前ヨリ病氣ニテ  
出頭難及、恐懼之至ニ奉存候ヘトモ、此段以書面奉申上候、以上、

巨摩郡第三十一区々長

明治九年三月廿二日

山梨県地券御掛御中

遠藤 聰知

5-29

御日延願

巨摩郡第三十一区

区长遠藤聰知代

樋口 静一

右奉申上候、遠藤聰知江御談儀有之、今廿四日午前十時出庁可致御旨御書付拝承仕、今廿四日出頭可仕之処、三・四日前ヨリ腹痛病ニテ引籠リ居候ニ付、今日出頭ハ難及存候間、何卒格別ノ御仁恤ヲ以、三・四日之間御日延御猶予被成下置度、此段奉願候、以上、

右

樋口 静一

明治九年三月廿四日

山梨県令藤村紫朗殿

5-30

新道切開ニ付御願

巨摩郡第三十二区々長

矢寄 圭造

巨摩郡第三十一区々長

遠藤 聰知

同区五開村之内元箱原

副戸長

樋口 光豊

右奉申上候、巨摩郡第三十一区西寫村ヨリ元箱原村マテ新道切開之義、先般奉出願切開御許可ヲ蒙リ、漸次着手仕候処、当節ニ至リ十二シテ八分通出来仕、然ル処元箱原村地内字天神ノ森坂道之義、凡壺丈式・三尺堀割下ケモ不致候ハテハ、前後之新道へ取付ケ方不都合有之、且古道ヲ堀下ケ候テハ坂道ヲ除クノ術ナク、不得已天神社現境内へ関リ、新道切開仕度、別紙絵図面相添奉出願候間、何卒前陳之事情御洞察被成下置、天神社現境内へ関リ、新道切開之義御許可被成下置度、此段奉願候、以上、

右

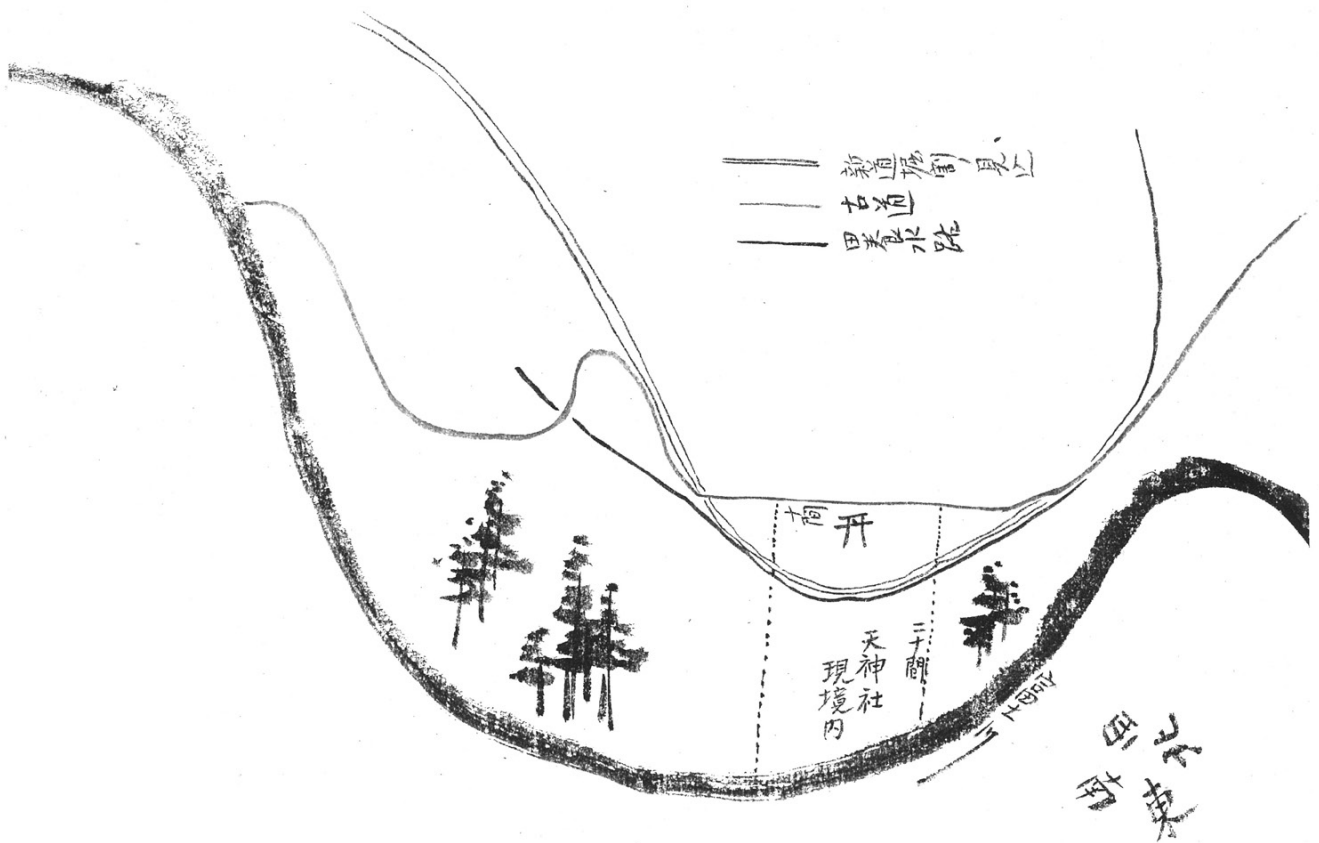
明治九年三月廿四日

樋口 光豊

遠藤 聰知

矢寄 圭造

山梨県令藤村紫朗殿



## 新道切開ニ付御下金願

巨摩郡第三十二区々長

矢寄 圭造

同 郡第三十一区旧区長

遠藤 聰知

右奉申上候、巨摩郡第三十一区西寫村ヨリ元箱原村マテノ間、新道切開之義、旧参事富岡敬明殿ヨリ厚御懇諭ニ付、同区并同郡第三十二区村々人力ヲ以切開奉出願、御許可ヲ蒙リ、其先新道切開出願ニ至ルマテ、人力而已ヲ以開鑿難及場所数多有之ニ付、刻苦焦慮仕、旧参事富岡敬明殿へ事情奉願候処、其節之御口達ニ人力ヲ以切開難及場所者、既ニ身延久遠寺ヨリ金五百円献金も有之ニ付、右金五百円下渡候間、難場之義ハ右ヲ以可切開、厚御口諭ニ付、人民之幸、何之ニ過キス、御許可ヲ得、初テ着手之節、右御下金之内金貳百円内賜相成、当今ニ至七・八分通り出来ニ付、残金三百円御下渡之義奉出願候処、先般新道切開之節金員御下渡可相成証無之上者、即時御下金不相成御旨被仰聞、今更恐愕之至リ、素ヨリ御下金可相成証等ハ更ニ無之、前陳之次第ニテ旧参事殿之御厚諭ニ抛リ、区内協議戮力着手致候義ニテ、此期ニ至リ、万一右金員御下渡無之上ハ、新道切開半途ニシテ相止ムノ外無之、実ニ残念此事ニ候、何卒特別之御詮議、先般御下賜可相成トノ御口達之通、残金三百円即時御下渡被成下置度、此段奉願候、以上、

明治九年四月二日

遠藤 聰知

矢寄 圭造

山梨県令藤村紫朗殿

(表紙)

明治十年八月ヨリ

## 運輸会社諸記 十号

遠藤 聰知

惘願

二川分社ニ於テ、該社へ一応ノ協議モナク、新規造船ノ上通船可致趣粗承リ、該社所属ノ船頭トモ屢々不平ヲ鳴シ、二川分社ヨリ通船スル上ハ船頭一同該社ノ所属タルノ名義ヲ削リ、自由独立ヲ以活業可致杯、該社へ矛盾ノ嘆訴ヲ以爲相迫、該社ニ於テ百方説諭稍々鎮止ノ姿ニハ候ヘトモ、此上二川分社ノ新造通船スル上ハ、該所属ノ船頭一時揺動可致ト憶想仕、(遺志)然ル上ハ、該社維持ニ関係而已ナラス、官ノ厚キ御保護ヲ蒙リ、我輩微力ヲ盡シ、漸ク該社維持水路入費支消金等取立ニ着手、既ニ盛昌、今日ノ姿ニ至リ、此儘永遠ニ及ヒ候ハ、官ノ御保護ノ実功ヲ奏シ可申存居候処、豈料ラン、僅ニ二川分社ノ造船ニ依テ万一該社一変モ致スヘク立至リ候テハ残念此事ニ候、依テ別紙通船行不行ノ愚論相陳奉申上候間、御洞察ノ上、二川分社ニ於テ新造通船ハ相止ミ候様、御説諭被成下置度奉願候、以上、

二川分社ニ於テ新造船通船不可行ノ論

第一、新造通船スルニ、船頭・水主ナカルベカラス、其船頭・水主ハ鰍沢・青柳・黒沢三河岸ノ所属タル者ニシテ、其他本県内ニ船頭・水主タル者ナ

キハ疑ヲ容レサル所ナリ、又之レヲ他管ヨリ雇入船乗セシムルニハ、其  
経費本県内船乗ノ入費ヨリ果シテ幾層ナルヤ量ルベカラス、抛テ行ハレ  
サルト憶想スルナリ、

第二、誠ニ本県内ニ船頭・水主ヲ求メントスルニハ、鰍沢・黒沢・青柳三河岸  
所屬ノ者ニ限ルヘシ、然ハ必ス有余ノ船頭ハ之レナキ筈ノ処、其船頭ヲ  
雇入船乗セシムルニハ、右三河岸ノ船数ヲ減シ、二川分社へ新船造設ス  
ルトモ、運輸ノ便利ヲ成スニハ至ラス、加フルニ従来所屬タル域内ヲ脱  
シ、二川へ雇ハル、者ハ、必ス多財ヲ貪ルカ、且奸曲ノ者ナラデハ之レ  
ナク、然ル上ハ運輸ノ便利ヲ振起スル志念ニシテ、二川分社ニ於テ造船  
スルト雖トモ、之マテノ船数ヨリ多数ニ至ルニ及ハス、只々居ヲ移スマ  
テニシテ、運輸ノ便利モ成サス、殊ニ寄レハ船頭トモ二川分社ヨリ船代  
ヲ借請、終ニ消却ノ途モ不立、奸欲ニ走り、決極ニ二川分社ノ大損毛ヲ釀  
成スルカ、又ハ船頭逃去スルカ、此二個何レカ弊ル、必然、依テ行レサ  
ル所以ナリ、

第三、鰍沢・黒沢・青柳三河岸ニ抛ラス、二川分社ヨリ静岡県下岩淵・蒲原其  
他へ諸貨運輸スルト雖トモ、運賃諸掛リヲ比較スレハ、豪毛ノ差異アル  
ノミ、何トナレハ、三河岸へ次テ運輸スル上ハ、積荷ノ多少ニ寄り、船  
頭ノ人員ニ寄り、運賃諸掛リヲ減スルナリ、別ニ運賃諸掛比較表ニテ明  
瞭ナリ、

(貼紙)

「 本社ヨリ下蒲原マテ  
上リ 沓里 金貳拾六錢三厘貳毛  
下リ 沓里 金貳拾錢七厘貳毛  
本社ヨリ上二川マテ  
上リ 沓里 金拾九錢  
下リ 沓里 金拾六錢

6-3

学校事務掛御免願

第十五区鰍澤村

遠藤 聰知

去七月廿七日、第十五区鰍澤村小学校事務掛拜命、謹テ事務勉勵可仕之処、目  
今諸貨運輸之便ヲ興張スルノ事業ニ従事、運輸会社々長ヲ負担致居、然レ共素  
私立之会社ニ付、社長ヲ断黙致シ、命令之事務掛ニ従事勉勵可致義本意トハ存  
候得共、当国へ対シテハ、諸貨運輸之便ハ不可虧義ト存、碎身焦慮社務旺起ス  
ルノ期ニ当リ、進力ヲ緩シ、万一中止スルノ義ニモ至リ候テハ遺憾維ニ谷リ、  
且当国へ対シ自然不幸モ生成候テハ不相成哉ニモ相考、彼是刻苦ニ堪ユル不能、  
依テ今学校事務掛ヲ奉職致候ハ、何レカ有名無実ニ至ルハ勿論ト恐懼仕、然  
シテ目今鰍沢学校之景況ヲ憶想スルニ、学区取締アリ、幹事事務掛アリ、一校  
ノ全備幸又幸タル不俟論、何ソ別ニ庸劣之私トモ事務掛ニ奉職スル上ハ、譬百  
千ヲ以テ成スト雖トモ、学校事務ハ必ス整理スル度無之、完全ノ事務へ姑息ヲ  
加添スル疑ヲ容レサル義ト奉存候、然トモ兩三年ヲ経テ、運輸会社維持確乎タ  
ル上ハ、必ス私共学僕ニ換テ、学校事務ニ従事仕候間、何卒前件公明之御洞察  
ヲ以、学校事務掛御差免被成下置度、此段奉願候也、

右

明治十年八月三日

遠藤 聰知

山梨県令藤村紫朗殿

(朱)「第一卷二六五号

書面之趣学区取締并戸長・学校幹事等連署之上、更ニ可申出事、

明治十年八月八日

用紙無地美濃紙

山梨県令藤村紫朗

6-4

山梨県第壹区  
甲斐国山梨郡  
三日町平民

原告代言人

飯島 實

右、静岡県第三大区一小区、駿河国庵原郡蒲原駅平民塩坂兵助へ係リ、貸金催  
促之義、私ヨリ御願可申上之処、事務多忙ニテ難罷出ニ付、飯島實へ代言相頼  
候、然ル上ハ同人ヨリ申上候事柄并御申請申上候事柄共、後日ニ至リ私ヨリ異議  
申上問敷候、

山梨県第十五区  
甲斐国巨摩郡

鰍沢村

運輸会社

社長

明治十年八月

遠藤 聰知

6-5

(朱)「用紙証券界紙」

委任状之事

一拙者義、貸金之事件ニ付、山梨県第壹区甲斐国山梨郡三日町平民飯島實ヲ以、  
部理代人ト相定、拙者之名義ヲ以、左之権限之事ヲ為致代理候、  
一静岡県第三大区一小区駿河国庵原郡蒲原駅平民塩坂兵助へ掛ル貸金催促ノ事、  
一右事件濟方相成候迄ハ、臨機為取計候、依テ該件ニ関スル証書類相添、委任  
候事、

右代理之委任証、仍如件、

山梨県第十五区

甲斐国巨摩郡

鰍沢村

運輸会社

社長

遠藤 聰知

明治十年八月

飯島實殿

(朱)「右二通相認め、一通ハ宛名ナシニテ差遣し候、」

一該件濟方相成候上ハ、貸金額元利受取高式拾分ノ一(即百円ニ付金五円)ヲ  
謝金トシテ差出可申候事、

一往復旅費之義ハ、甲府ヨリ静岡迄ノ里数ヲ算シ、一里金拾錢宛差出可申事、

但、乗船スルト否ラサルトヲ不問、陸路ノ里数ヲ以テ之ヲ積算ス、

一被告へ掛合ヲ始ムルヨリ濟方マテ、都テ滞在日当一日金五拾錢ツ、且出願

相成、訟庭へ臨ムノ日ハ金式拾五錢ヲ増シ、濟方ノ後計算出金可仕事、

右之通り相定ムル上ハ、後日違季仕間敷候、依之約定書、如件、

運輸会社

社長

明治十年八月七日

三日町

遠藤 聰知

飯島實殿

6-7

明治七年駿州往還新道開築金

一金千式拾四円式拾九錢壹厘五毛

五開村

内訳

金百三拾四円五拾九錢四厘

旧長知沢村

金百式拾円四拾九錢四厘

旧鳥屋村

金三百八拾式円三拾式錢三厘五毛

旧十谷村

金百七拾円五拾八錢四厘

旧柳川村

金式百拾六円式拾九錢六厘

旧箱原村

右之通、調書差上候也、

鰍沢村

明治十年八月八日

遠藤 聰知

6-6

約定書之事

今般、拙者ヨリ静岡県下庵原郡蒲原駅平民塩坂兵助へ掛リ貸金催促ノ事件、貴  
殿へ部理代人委任仕候ニ付、左ニ約定取結候、

6-8

御届

運輸会社監督

古屋 典義

右監督古屋典義、当社ノ都合ニ依リ今回免黜致候間、此段御届奉申上候也、

明治十年八月四日

右副社長

青柳詢一郎

社長

遠藤 聰知

山梨県令藤村紫朗殿

619

運輸会社青柳出張所明治十年上半季大勘定

一株金千七百拾七円五拾錢

内訳

金千四百三拾円

元株金

此百四拾三株

内 金千四百貳拾貳円

現収入

金八円

未納

金貳百八拾七円五拾錢

増募株

此貳拾八株七分五厘

内 金貳百三拾五円

現収入

金五拾貳円五拾錢

未納

合株百七拾壹株七分五厘

内現収入株百六拾六株九分

此単株九百八拾八株七分

当季純益金百五拾九円七拾六錢九厘

単壹株当り

金拾六錢壹厘五毛九絲

受方

株金千六百六拾九円

支消取立金貳百貳拾三円三拾三錢一厘

予備金九円四拾九錢五厘

預り金八拾四円五拾九錢四厘

学校献金預り金三元

当季予備金拾五円九拾七錢七厘

当季純益金預り金百五拾九円七拾六錢九厘

總計金貳千六百六拾五円拾六錢六厘

渡方

蒲原渡金貳百円

舊修繕金貳百四拾壹円拾四錢

納屋建築費金百拾八円三拾三錢貳厘

蒲原貸金拾六円

開鑿金貳拾三円九拾七錢六厘

船方貸金四百五拾円

諸荷物立換金八百九拾七円拾壹錢四厘

楮幣有高金貳百拾八円六拾錢四厘

總計金貳千六百六拾五円拾六錢六厘

損益勘定

益ノ部

諸荷手数料金金貳百五拾六円拾三錢一厘

食塩手数料金四拾四円九拾三錢

利子溜金百四拾四円六拾九錢八厘

人員乗船手数料金七円三拾壹錢四厘

蒲原純益金拾九円三拾七錢

總計金四百七拾貳円四拾四錢三厘

損ノ部

役員給料金百八拾九拾九錢

役員派出日当金三元

備人足賃金貳拾三円三拾三錢三厘

器具代金七円九拾六錢壹厘

当費金五拾八円六錢三厘

利子払金貳拾三拾五錢

学校献金三円

通計金貳百九拾六円六拾九銭七厘

当季予備金拾五円九拾七銭七厘

当季純益金百五拾九円七拾六銭九厘

通計金百七拾五円七拾四銭六厘

總計金四百七拾貳円四拾四銭三厘

諸荷物取扱全数

食塩壹万〇五百三拾貳俵

此手数料額金五拾貳円六拾六銭

砂糖九千五百五拾六俵五分九厘

此同 金七拾六円四拾五銭三厘

魚 千貳百七拾俵四分三厘

此同 金拾貳円七拾銭四厘

茶 貳百九拾五俵四分

此同 金貳円三拾六銭三厘

藍玉百五拾三俵四分

此同 金壹円貳拾貳銭七厘

穀七千六百貳拾七俵

此同 金六拾壹円壹銭六厘

綿五百五拾壹俵

此同 金四円四拾銭八厘

豆類五百俵

此同 金四円

烟草六百九拾三俵

此同 金五円五拾四銭四厘

雜荷壹万三千三百四拾八俵壹分四厘

此同 金百六円七拾八銭五厘

總計四万四千五百貳拾六俵九分六厘

手数料額總計金三百貳拾七円拾六銭

手数料収入

食塩手数料金四拾四円九拾三銭  
諸荷手数料金貳百五拾六円拾三銭一厘

通計金三百壹円六銭壹厘

差引

金貳拾六円九銭九厘 未納

明治十年八月十八日

6 | 10

学校事務掛御免願

第十五区鯉澤村

遠藤 聰知

去七月廿七日、第十五区鯉沢村小学校事務掛拜命、謹テ事務勉勵可仕之処、目今諸貨運輸ノ便ヲ興張スルノ事業ニ従事、運輸会社々長ヲ負担致居、然レトモ素私立ノ会社ニ付、社長ヲ斷黙致シ、命令ノ事務掛ニ従事勉勵可致義本意トハ存候ヘトモ、当国ヘ対シテハ、諸貨運輸ノ便ハ不可虧義ト存、碎身焦慮社務ヲ旺起スルノ手段ヲ関ラスルノ際ニ付、学校事務掛ヲ奉職致居、事務両端ニ跨リ、万一社務中止スルノ義ニモ至リ候テハ遺憾、維ニ谷リ、且当国ヘ対シ自然不幸モ生成候テハ不相成哉ニモ相考、彼是刻苦ニ堪ユル不能、依テ今学校事務掛ヲ奉職致候ヘハ、何レカ有名無実ニ至ルハ勿論ト恐懼仕、然シテ目今鯉沢学校ノ景況ヲ憶想スルニ、幹事アリ、事務掛アリ、一校ノ全備幸又幸タル疑ヲ容レサル処ナリ、然ルヲ別ニ庸劣之私共事務掛ヲ奉職スル上ハ、前条具述スル如ク有名無実ニ至ルハ必至、豈他ノ勉強力ヲ挫折スルノ弊害ヲ醸成スル等ノ義モ有之候テハ、万恐懼ニ不堪、然レトモ兩三年ヲ経テ、運輸会社ノ事業確乎タル上ハ、必ス私トモ学僕ニ換テ、学校事務ニ従事仕候間、何卒前件公明之御洞察ヲ以、学校事務掛御差免被成下置度、此段奉願候也、

明治十年八月廿八日

右

遠藤 聰知

右村担当

戸長

中込太郎左衛門

学校

幹事

山梨県令藤村紫朗殿

前書願上候二付、奥印仕候也、

学校

青柳與次兵衛

事務掛

青柳喜平次

但、南部改船所へモ可届置事、

明治十年九月四日

山梨県令藤村紫朗

6  
12

嵩物積荷定度改正

一唐綿

量目十貫目ヨリ十一貫目箇マテ

二十六箇ヲ以テ 壹艘積トス

量目式十貫目ヨリ式十式貫目箇マテ

十式箇ヲ以テ 壹艘積トス

一青筵

量目十貫五百目以上十式貫目箇マテ

式十四箇ヲ以テ 壹艘積トス

但十貫五百目未滿ハ式十六箇ヲ以テ壹艘積トス

一天草

量目十貫五百目ヨリ十一貫目箇マテ

式十四箇ヲ以テ 壹艘積トス

一紙

量目式百四十五貫ヨリ式百五十貫目

マテヲ以テ 壹艘積トス

一茶

量目九貫目ヨリ八貫五百目箇マテ

三十箇ヲ以テ 壹艘積トス

一櫛柑

量目凡式百六十四貫目ヲ以テ壹艘積トス

一生魚

量目式百四十五貫目ヨリ式百五十貫目

マテヲ以テ 壹艘積トス

一塩魚

一干魚

6  
11

嵩荷物船積定度改正御届

運輸会社

嵩荷物船積定度之義、明治九年一月御許可ヲ得、是マテ運輸致シ来リ候処、今

回嵩荷物船積之量目増加運搬致シ、各貨主へ便益ヲ與へ度、別紙之通嵩荷物船

積定度改正致候間、此段御届奉申上候也、

右

副社長

青柳詢一郎

社長

遠藤 聡知

山梨県令藤村紫朗殿

(朱)

「第壹式四壹五号

書面聞置候事、

量目十貫五百目ヨリ十一貫目箇マテ

二十四箇ヲ以テ 壹艘積トス

但塩魚タリトモ、蒲原出張所出荷ハ、三日三時間曳

岩渕水神岩本社ヨリ出荷ハ、三日曳ヲ以テ

運送スル荷物ハ生魚ノ量目ヲ以テ壹艘積トス

右之外荷物ハ悉皆拾式貫目箇式十四箇ヲ以テ 壹艘積トス

6 | 13

献金願

第十五区鰍沢河岸

運輸会社所属小廻船百五十五艘

船頭惣代

一金四拾九円〇八錢貳厘

同区青柳河岸

同社所属同七十七艘

船頭惣代

一金拾八円四拾七錢七厘

第二十一区黒沢河岸

同社所属同百七艘

船頭惣代

一金三拾貳円四拾四錢一厘

高野 常吉

右ハ今般当御県庁新築ニ付、大野山ヨリ御伐出シ之御用材、同所ヨリ当運輸会

社マテ之間運搬賃之内へ寡少ニハ候得共、頭書之通献金仕度奉存候間、何卒御

許容被成下置度、奉懇願候也、

明治十年九月十五日

安藤太郎右衛門

渡邊 林蔵

山梨県令藤村紫朗殿

前書之通運搬賃之内へ献金之義、奉出願候ニ付、奥書印仕候也、

運輸会社

副社長

村松 通喜

同 磯野 忠博

同 青柳詢一郎

社長

遠藤 聰知

(朱)

「第壹三三六四号

書面之趣奇特之義ニ付、聞届候事、

明治十年十月三日

山梨県令藤村紫朗□

6 | 14

御保護願

運輸会社所属船頭

惣代

安藤太郎右衛門

御県下富士川当運輸会社ヨリ富河村ノ内旧万沢マテノ間、通船路、往昔ハ富士川沿村々ニ於テ漁器モジリヲ架設漁業致シ候ニ付、通船往々右モジリニ触破船致シ、至重ノ人命ヲ毀害候義聞々有之、右ニ付富士川通船路へモジリ架設嚴禁被仰出有之、然ル処目今ニ至リ別紙之ケ所々々ニ於テモジリ架設有之、戰慄之至リニ存候間、何卒御保護上ノ特典ヲ以、通船路へモジリ架設不致候様、漁業人へ御嚴令ヲ下シ、漁器取払方被仰付、平穩ニ通船相成候様奉懇願候也、

明治十年九月十七日

安藤太郎右衛門

高野 常吉

鰍沢

警察御署

前書之通奉出願候ニ付、奥書印仕候也、

運輸会社

社長

遠藤 聰知

(朱)「竹籬沈<sup>モシトリ</sup>レメテ 水ニ取<sup>ル</sup>レ魚ヲ具」

漁業器モジリ架設之場所左ニ

箱原村地先

楠甫村地先

字天ヶ神瀧

田養水メ切続

下山村地先

帯金村地先

字大六天前通り

字梨ノ木下通り

波木井村地先

和田村地先

同所小廻船休泊所上通り

字蛙石前通り

清子村地先

大島村地先

字藪ヶ瀧上通り

字藪ヶ瀧下通り

中野村地先

内船村地先

字三軒屋下通り

字伊勢岩前

南部村地先

内船村地先

字戸栗川下通り

字獅子山下通り

井出村地先

字横狩岩前

字不動ノ瀧前通り

万沢村地先

字帽子岩向

字帽子岩向

6 | 15

御保護願

山梨県猷沢

運輸会社

御県下富士川通船路、往昔ハ同川沿村ニ於テ漁器モジリヲ架設漁業致候ニ付、通船ノ節右モジリニ触レ破船致シ、至重ノ人命ヲ毀害候義間々有之、右ニ付昨九年十月中静岡御県へ奉出願、通船路ニ於テモジリ架設漁業御禁止奉願候処、

速ニ御聞届相成、然ル処目今ニ至リ別紙之ヶ所々々ニ於テモジリ架設有之、戦慄ノ至リニ候段、船頭トモヨリ申出有之候ニ付、何卒御保護上ノ特典ヲ以、通船路ヘモジリ架設不致候様漁業人へ御厳令ヲ下シ、漁器取払方被仰付、平穩ニ通船相成候様、奉懇願候也、

右社

社長

遠藤 聰知

副社長

青柳詢一郎

明治十年九月十八日

静岡県北松野

改船所御中

漁器モジリ架設ノ場所左ニ

庵原郡内房村地先

字蛇ヶ岩

字神楽石

字糸尻岩前通り

同郡北松野村地先

字流綱上通り

富士郡長貫村地先

字瀬穴前通り

6 | 16

別紙猷金願書相指出之処、大野山より伐出候材運搬ハ最寄区内分引受之事ニ協議致し置候間、御社所属船頭共へも以来分り、右之割合相か、り可申候、此度之猷金ハ一切右等之事ニ無係、特別を以願出候訳ニ可有之哉、一応為御問合候条、至急様子御申越相成度候也、

山梨県

第三課属印

十年九月十九日

運輸会社社長

遠藤 聰知殿

6-17

大野山ヨリ御伐出シ之用材運搬賃之内へ別紙献金願ノ義ハ、兼テ最寄区内ニ於テ引受相成候趣ハ委承致シ、然トモ右区内引受之内へ、当社所属船頭トモ別段献金致シ引受、区内之力ヲ補ヒ、然シテ全ク最寄区内之引受完全致シ候義ニ有之、別紙献金ハ船頭トモ於テ二重ノ力ヲ起シ献金致シ候義ニ御座候間、此段奉申上候也、

運輸会社々長

十年十月一日

遠藤 聰知

山梨県第三課

御中

6-18

御届

一金百円

本年九月鯉沢河岸船頭惣代安藤太郎右衛門

豊和村ノ内旧黒沢河岸船頭惣代高野常吉

増穂村ノ内旧青柳河岸船頭惣代渡邊林蔵

ヨリ大野山ヨリ御伐出シ之具材運搬賃ノ内へ献金之分

此仕払

大野村河岸ヨリ当河岸マテ運送

材木五拾八艘四分五厘 但壹艘ニ付本部四本五分積

此運賃金百円 但壹艘ニ付運賃金壹円七十一錢一厘

大野山御伐出シ之御具材運搬賃之内へ、過般前記之船頭惣代三名ヨリ献金奉願、即御許可ヲ得候ニ付、右金員即時御具庁へ奉上納、且御下渡奉願候上、仕払可仕之処、運搬賃仕払至急ニ付、前件順序経伺ヲ得ヌ取計候間、此段御届奉申上候也、

運輸会社々長

明治十年十一月九日

遠藤 聰知

山梨県

第三課出張所

御中

6-19

御届

御県下蒲原浜当社出張所并各分社ヨリ輸出之諸貨物、船積送券面運賃之条へ運賃監定之印是マテ押捺致シ来リ候処、今回当社之都合ニ依リ、右監定印押捺之義更ニ廃解致候間、此段御届奉申上候也、

山梨県下鯉沢

運輸会社々長

明治十年十一月十二日

遠藤 聰知

同

蒲原出張所詰

副社長兼

勘定方

樋口 静一

静岡県

松野

改船御所

6-20

今般其社所属船頭共ヨリ、鯉沢・黒沢ヨリ青柳分社迄ノ距離凡半里余ノ処、運賃ニ於テハ差異無之運賃定則不公平ノ義ニ付、右定則ヲ改正致度、就而者其旨該社へ諭示願度旨、惣代安藤太郎右衛門外壱名ヨリ及出願候義ニ付、篤ト談示ノ筋有之候条、明後十四日午前第十時勸業場へ出頭有之度、此段申入候也、

七等属城山静一

十年十一月十二日

運輸会社々長

遠藤 聰知殿

6-21

御願

当社并黒沢出張所分青柳出張所里程半里余距離ニ付、運送賃之差異ヲ生シ改正致シ度段、当社所属船頭惣代安藤太郎右衛門外壱名ヨリ奉出願候ニ付、明十四

日午前十時出頭可致旨御達奉拜承、即出頭可仕之処、前件二付テハ青柳出張所担当副社長磯野忠博ト篤ト協議之上出頭不仕候テハ御用弁ニモ不相成哉ニ相考候ニ付、明後十五日マテ出頭之義御日延御猶予被成下置度、此段奉願候也、

運輸会社々長

明治十年十一月十三日

遠藤 聰知

山梨県第二課

城山静一殿

6-22

御請書

今般東京麻布新網町壹丁目廿四番地田中義廉方へ洋酒類御差立ニ付、右荷物当社へ運送取扱方被仰付、然ル上ハ荷物取扱方深ク注意致シ、左記之運賃手数料ヲ以清水港マテ至急運搬致シ可申、清水港ヨリ東京マテ之運賃其他ハ東京着之上ニ無之候テハ確乎相分リ兼候、仍テ取扱請書奉差上候也、

運輸会社々長

明治十年十一月十五日

遠藤 聰知

山梨県第二課

御中

6-23

前 運送賃手数料表  
後 秤量拾貫目ニ付

二川分社ヨリ鰍沢マテ

運賃金 壹錢壹厘六毛六

鰍沢ヨリ蒲原マテ

手数料金五厘三毛三

同

金三錢六厘六毛六

同

金五厘三毛三

同

金壹錢三厘三毛三

同

金五厘三毛三

外清水港出張所手数料

金五厘三毛三

6-24

御願

合金八錢貳厘九毛七絲

山梨県第十五区

鰍沢河岸

運輸会社

遠藤 聰知

本年甲第三百二十二号御布達、地租金代米納御差許相成候ニ付、代米納所ハ第十五区鰍沢河岸并第二十一区黒沢河岸ト御確定相成候段了承仕、右二付テハ代米海川路運搬并諸取扱方等当社へ被仰付度、此段奉願候也、

右

社長

明治十年十二月六日

遠藤 聰知

副社長

青柳詢一郎

山梨県令藤村紫朗殿

(朱)

「第一六八四三号

書面海川運搬等之義ハ方今難及指揮、尤河岸場へ積立之義ニ付取扱方望有之ハ、蔵番賃其他ノ入費及取締方法等取調、更ニ可申出事、

明治十年十二月六日

山梨県令藤村紫朗

6-25

御願

第十五区巨摩郡増穂村之内

青柳河岸

運輸会社

当河岸之義、往古ヨリ御廻米御用且諸物貨運搬ヲ以鰍沢・黒沢ト共二三河岸ノ

一タリシカ、去ル明治六年運輸会社設立之際、鰥沢ト共ニ先鞭ヲ着シ、官ノ保護ヲ得、旧来ノ弊害ヲ洗除シ、其ノ方法ヲ改革シ、大ニ世人ノ信憑ヲ受ケ、賈勉從事罷在候処、今般田方半額代米上納被仰出、該納所ハ鰥沢・黒沢ノ両所タルヘシトノ御達シ拜誦愕然驚入候、夫レ会社ノ義ハ、地方ノ便ヲ以テ設置スル所ニシテ、当河岸之便ナル素ヨリ衆人ノ知レル所ナリ、然ルヲ青柳河岸而已御用不被仰付候テハ、当社ハ何等ノ失却アツテ然ルナラント他ノ想像ヲ受ケ、衆庶ノ依信ヲ失シ、後來ノ衰微ヲ醸シ候段、実ニ慨歎ニ不堪候、何卒前条之旨趣御憐察被成下、代米納所ニ御差加ヘヲ蒙リ、応分之御用被仰付度、然ル上ハ郡中一般ノ便益ヲ図リ、聊カ不都合無之搓勉強仕候間、請願御採用被成下度、此段奉悃願候、以上、

右青柳河岸

運輸会社船頭惣代

明治十年十二月十日

渡邊 林蔵

同

副社長

磯野 忠博

村惣代

中込八五郎

右村担当

戸長

井上 與平

運輸会社

社長

遠藤 聰知

前書出願ニ付奥印仕候也、

第十三区

区长

竹内 源蔵

第十四区

区长

保坂安右衛門

山梨県令藤村紫朗殿

(朱)

「第壹六九六八号

書面之趣ハ、代米納情願ノ多寡ニ依テ壹ヶ所或ハ數所へ積置候義モ可有之候得共、未タ積立石數等未定ニ付、願之趣何分之指揮難及事、

明治十年十二月十日

山梨県令藤村紫朗□

6-26

其会社所屬船頭惣代安藤太郎右衛門外式名ヨリ、県庁新築ニ付、用材運搬費之内江金百円献納候分未納ニ付、来ル二十八日迄ニ上納候様御取計有之度、此段及御達候也、

明治十年十二月廿四日

山梨県八等属岩崎奇一印

第十五区鰥沢村

富士川運輸会社

社長

遠藤 聰知殿

6-27

献金上納義ニ付聞申

第十五区鰥沢

運輸会社

当社所屬船頭惣代安藤太郎右衛門外式名ヨリ御県材運搬費ノ内へ過般金百円献金之分未納ニ付、来ル廿八日マテニ上納方可取計旨御達拜承仕、右献金之義ハ、過般運送賃仕払至急ニ迫り候ニ付、其時之仕払致し、即別紙写之通去月中御届申上候義ニ付、猶今回更ニ上納致候ニハ、右仕払ヲ取纏メ上納致し可申義ニ立至り、困却不過之奉存候間、特別之御執計ヲ以右金員一段上納、然シテ即時御下渡相成候義ニ御見做願上度、此段不顧恐奉聞申候也、

右

明治十年十二月廿五日

山梨県八等属  
岩崎奇一殿

社長

遠藤 聰知

静岡県北松野

改船御所

6-28

御社所属船頭惣代献金之義、庁材運送費ニ御仕払之旨御申越之處、右者献金願  
出之節区費ヲ助ケ候趣意ニ候哉、又ハ特別献金願出タル訳ニ候哉之旨、御問合  
ニ及ヒ候處、区費ニ係リ候義無之旨御申越之通ニ付、富士川沿区内引受ヲ以運  
搬庁材之費用ニ御仕払可相成筋無之、已ニ其心得ヲ以改築費精算モ相済、只今  
ニ至リ御申越之通取計候義難被行事ニ付、至急上納致シ候様御取計相成度、此  
段再回及御懸合候也、

十年十二月廿六日

遠藤聰知殿

八等属岩崎奇一〇

追テ十一月九日附之御届書披見不致、何等之間違ニ可有之哉、尚御取調有之度  
候也、

6-29

本月廿六日当社所属船富士川通船休業ノ義、御届申上候處、其文意不明瞭ニテ  
趣旨徹底不仕候間、今回更ニ改正決定之条件、左ニ掲ケ御届奉申上候也、  
当県下富士川下り通船之義ハ、将来毎年十二月廿八日限り発船差止、  
静岡県下出張所并各分社ヨリ上リ曳船之義ハ、将来毎年十二月卅一日限り発  
船差止、年々一月一日・二日之両日ハ真ノ通船休業タルヘシ、

但、公事ニ関シ非常之義ハ限外ノ発船アルヘシ、  
右奉聞申候也、

明治十年十二月廿九日

山梨県下鰍沢

運輸会社々長

遠藤 聰知

6-30

荷質貸付会社資本金積増方法其他締盟上ニ付、本日社中集會ヲ行ヒ決議シタル  
条件左ニ掲ケ、

第一脱社ヲ許サ、ルノ条ヲ明ス

一資本社入募金蔵ニ金八千円ヲ以荷質貸付会社ヲ設立、既ニ開業セリ、然ル上  
ハ之社将来不撓ノ策ヲ起シ、積増金ノ方法ヲ議定スルニ付、第二条ニ掲クル  
資本積増金八千円ニ充ツルマテハ必ス脱社ヲ許スヘカラス、

但、不得已事故アツテ脱社ヲ乞フ者アルトキハ、社中商議ノ上脱社ヲ許  
ハ限外タルヘシ、

第二資本積増ノ条ヲ明ス

一資本金積増ハ金百円壹株ニ付、壹ケ年金五円卜定メ、月割ヲ以毎月一日ヲ限  
リ株主ヨリ直ニ会社ヘ収納スヘシ、

但、月割出金ハ連年壹株ニ付、一月ヨリ十一月マテノ間ハ每一ケ月金四  
十錢、十二月ハ金六十錢ヲ株主出金タルヘシ、

第三社中金員融通ヲ明ス

一社中金員融通ヲ請フ時ハ、其本人入社株高ノ五分マテヲ定限トシテ、無抵当  
貸付ヲ許スヘシ、

第四帳簿検閲ノ条ヲ明ス

一帳簿証券等検閲ハ毎月一日ヲ定日トシテ、左ニ記名ノ順序ヲ追ヒ、回環シテ  
必ス検閲スヘシ、然シテ各自ノ見認印ヲ帳簿ニ押捺シテ、検閲正シキヲ表ス  
ヘシ、

中寫 致恭

雨宮英一郎

遠藤太右衛門

島田 義浩

青柳詢一郎

第五日当ヲ明ス

一派出日当一日金四十錢、滞留金三十錢タルヘシ、

右商議決定ノ条件ハ、将来違約無之ノ証拠タルニ付、各自記名調印スル者也、

明治十年十二月卅日

社中

中島 致恭

雨宮英一郎

遠藤太右衛門

島田 義浩

青柳詢一郎

遠藤 聰知

6-31

荷質貸付会社設立ニ付拝借金ノ利子御引下ケ願

山梨県第十五区

鰺沢村

運輸会社々長

遠藤 聰知

同副社長

青柳詢一郎

同社中

中島 致恭

同

雨宮英一郎

同

遠藤太右衛門

同

島田 義浩

昨明治十年五月荷質貸付会社設立ニ付、拝借金奉願候処、連々御許可相成御庇  
蔭ヲ以即時開業罷在候、抑此会社ノ性質タル、曩ニ富士川運輸会社開設以降官  
御保護ノ厚キト同社規則ニ当ヲ得ルトニ拠リ、諸貨物ノ運搬一ノ淹滞ナキハ不  
俟論、加之運賃モ亦從テ低廉ニ至リ、其方法稍完全ノ域ニ進マントス、然ル処

該社事業中ニ荷質貸付・荷為換等ノ方法無之ニ付、昨十年五月其方法ヲ起シ、  
拝借金奉願開業以來其事業ノ實際ヲ經驗スルニ、両社併行車ノ両輪ノ如ク実ニ  
偏廢スヘカラサル者ト謂フヘシ、故ニ荷質貸付会社設立ノ旨趣ハ敢テ高利ヲ貪  
ラス、便利ヲ諸貸主ニ與ヘ、一ツハ以テ融通ノ道ヲ開キ、一ツハ以テ運輸会社  
ヲ贊助スルノ至念ヨリ釀成シ設立スルモノニ付、其貸付モ成丈低利ヲ以貸付方  
施行罷在、然ル処本年甲第二百五十三号利息制限ノ御達拝承之ヲ以之ヲ考フル  
ニ、不義ノ高利ヲ貪ホル者ヲ制シ、金融之道ヲ洞開セントノ御趣意奉感銘候、  
依テハ本社ノ貸付モ其御趣意ヲ奉体シ、猶此上一層低利ヲ以貸付飽マテ諸貸主  
ノ至便ヲ成シ度、然ニ曩ニ拝借金之利子月壹分ヲ以御貸下ケ相成、今回利息制  
限千円以上年壹割貳分ノ御達ニ付、拝借金ノ利子ト御制限ノ利子ト同等ニシテ、  
拝借之分ハ全無間断月壹分ノ利子ヲ上納致シ、貸付金ハ一ケ年中順環貸付ヲ  
為スト雖トモ、創業ノ際ニ付、或ハ游金モ有之、到底御制限ノ利子年式割ヨリ  
壹割貳分ヲ平分シテ貸付ルト見ルモ、矢張拝借金対等ノ利子ナラテハ收入不致、  
尤今一兩年ヲ經テ追々盛大ニ相成候上ハ、多分ノ収利モ有之見込ナレトモ、目  
今ノ処着手ノ日猶淺キヲ以テ未夕見込通參リ兼候都合モ有之、前陳ノ實際ニテ  
甚困却罷在候、就テハ恐懼之至リニ候得共、前陳之事情御洞察之上、御貸下ケ  
金員ノ利子何程歟御引下ケ被成下置道ハ有之間敷哉、奉懇願候間、御保護上ノ  
特典ヲ以御指揮被成下度、奉願上候也、

右

明治十一年一月

島田 義浩

遠藤太右衛門

雨宮英一郎

中島 致恭

青柳詢一郎

遠藤 聰知

山梨県令藤村紫朗殿

6-32

対談証書之事

先般蒲原新水道建築ニ付、該経費之内金千円余之払不足金員有之、今般御融通  
及御依頼候処、水道社入金トシテ御渡シ被下、正ニ受取申候、就テハ右金員抵

当証書差入可申処、即今間ニ合兼候ニ付、来ル二月十五日無相違差入可申候、然ル上ハ来ル明治十二年四月已後ノ支消金該金千円ニ満ルマテ運輸会社ヨリ返金可致候、且又此報酬金トシテ別紙支消方法書之通、私共方受取可申金高之割合ニテ無甲乙報酬金上納可仕候、万一此支消法ニ付、如何様之障碍有之候トモ、発起人一同ニテ別紙引受抵当書差入置候上ハ、聊無差支返納可致候、仍テ一同連署対談書差入置申処、如件、

静岡県下

第三大区一小区

駿州庵原郡蒲原宿

新水道発起人

佐藤信次郎

塩坂長兵衛

右兩人代兼

平岡久兵衛

明治十一年一月十二日

右発起同社中

山梨県第廿四区

甲斐国八代郡

御代咲村

古屋 典義

同県第二十三区

同国同郡上黒駒村

武藤 藤太

同県第二区

同国山梨郡住吉村

坂本 敬義

福地隆春殿

本文加入金返弁之義、来ル明治十二年四月已降、運輸会社於テ取立処之支消金ヲ以皆済致し、且報酬金割合ニ組入候義承諾いたし候也、

旧興益社々長

第十国立銀行頭取

明治十一年一月十二日

栗原 信近

旧興益社長

運輸会社々長

遠藤 聰知

6-33

別紙福地隆春殿富士川新水道会社加入金之義ハ、拙者共発起已降尔今至ル迄之諸経費取調漏レ、或ハ武田弘造ニ関ル訴訟入費惣額ニシテ、素ヨリ本株ニ見做目今可受取權利無之、然ルニ拙者共於テ操替可致資力ニ乏敷、故ニ其助成ヲ仰ク者ニ付、先般利益分配之約定中ニ組入割合候義ヲ、新株主一同及興益社へ依頼いたし候義ニ相違無之、且返納方之義ハ名取善十郎外十名之手続キニ依準取扱候義、是亦一同之承諾スル処ニ相違無之間、其証トシテ別紙本証書ニ奥書及御依頼候也、

静岡県下

第三大区一小区

駿州庵原郡蒲原宿

新水道発起人

佐藤信次郎

塩坂長兵衛

右兩人代兼

平岡久兵衛

明治十一年一月十二日

右発起同社中

山梨県第二十四区

甲斐国八代郡

御代咲村

古屋 典義

同県第二十三区

同国同郡上黒駒村

武藤 藤太

同県第二区

同国山梨郡住吉村

坂本 敬義

第十国立銀行頭取

栗原信近殿

運輸会社々長

遠藤聰知殿

6  
34

富士川改船規則過怠例図

上下通船県税三銭六厘過怠料式拾倍ヨリ百倍迄

式拾倍	七拾式銭	一人	壹箇以上	拾五貫目	以上
三拾倍	壹円八銭		貳箇以上	貳拾五貫目以上	
四拾倍	壹円四拾四銭	二人	三箇以上	三拾五貫目以上	
五拾倍	壹円八拾銭		四箇以上	四拾五貫目以上	
六拾倍	貳円拾六銭	三人	五箇以上	五拾五貫目以上	
七拾倍	貳円五拾式銭		六箇以上	六拾五貫目以上	
八拾倍	貳円八拾八銭	四人	七箇以上	七拾五貫目以上	
九拾倍	三円式拾四銭		八箇以上	八拾五貫目以上	
百倍	三円六拾銭	五人	九箇以上	九拾五貫目以上	

一過怠例図ノ内一次二科及ヒ三科ヲ犯ス者箇物、木綿・寒天ノ類、貫目輕クトモ風体

大ナル物ハ、一般二十四箇ヲ限ル器ニ付、通算ノ節一箇十五貫目ヲ以テ通算ス、貫目米・塩・

竹木・鉄石ノ類風体小ナリト雖モ目方重キ物ハ、貫目ヲ以テ通算ス、人員満十歳以上ハ男女ヲ

論セス老人拾六貫目ト見做ス、又七歳未滿ハ総テ半数トス、共合算シ貫目ニ依リ重キニ

随テ過怠料ヲ科ス、

一第四条・第五条ニ違反シ、箇物或ハ人員ヲ乗組スト雖トモ、定規ニ過貫セサル分ハ例図ノ半数ヲ科ス、減シテ式拾倍ヨリ少ナキトキハ、式拾倍ノ過怠料ヲ全科ス、

一例図ノ科目ニ依ラザル夜中通船或ハ船頭欠員等ノ類者ハ情ヲ量リ式拾倍ヨリ百倍迄ノ過怠料ヲ科ス、

一前条ニ依テ罰スル者ハ、改船所ニ於テ直ニ口供ヲ取り、追テ其口供ノ罰文ヲ書シ下附ス、尤過怠料ハ日数廿日ノ内村吏ヲ經テ県庁江上納セシム、

6  
35

第二回明治十年七月ヨリ十二月迄

下半季清水港出張所大勘定精算表

受方

株金八百円
借り金百円
預り金三百六拾四円〇四銭三厘
当季予備金四円拾式銭三厘
總計金千式百六拾八円拾六銭六厘

渡方

諸貨物立換金三百三拾壹円拾壹銭五厘
貸 金百八拾八円拾銭九厘
印税立換金式円
損 金百三拾八円三拾式銭壹厘
諸納屋代金五百三拾九円五拾壹銭九厘
貨幣有高金六拾九円拾銭〇式厘
總計金千式百六拾八円拾六銭六厘

損益勘定

益ノ部

諸貨手数料金四拾三円六拾七銭四厘
利子 金式拾式円七拾九銭五厘
口銭 金拾九円六拾八銭八厘
總計金八拾六円拾五銭七厘

損ノ部

日当払金式拾六円式拾式銭六厘
渡船賃金式円拾銭
修繕費金式円三拾壹銭
炭石油代金七円五拾四銭五厘
当費金六円七拾四銭
小計金四拾四円九拾式銭壹厘

当季予備金四円拾貳錢三厘  
 当季純益金三拾七円拾壹錢三厘

小計金四拾壹円貳拾三錢六厘

總計金八拾六円拾五錢七厘

第二回純益金割賦表

株金八百円

此株八拾株

当季純益金 三拾七円拾壹錢三厘

壹株当り金四拾六錢四厘

諸貨取扱金数

昇諸貨物千四百貳拾八俵七分五厘

此手数料額金拾壹円四拾三錢

降り諸貨物四千四百四拾四俵五分五厘

此同金三拾三円拾五錢六厘

總計五千五百七拾三俵三分

手数料合金四拾四円五拾八錢六厘

外未納前季越高金五円五拾三錢四厘

合金五拾円〇拾貳錢

内

手数料現収入金四拾三円六拾七錢四厘

差引金六円四拾四錢六厘未納

明治十年七月ヨリ同十二月迄下半年季運輸会社清水出張所大勘定ノ義、本日社中  
 集会ノ上諸帳簿ト突合候処、別紙清算表之通り違算相違等無之ニ付、各記名調  
 印シテ後日ニ供スル者也、

明治十一年一月廿九日

十株以上

連印

第二回明治十年下半年季

運輸会社蒲原出張所大勘定

株金千六百九拾壹円九拾九錢貳厘

此株百六拾九株貳分

当季純益金三百貳拾貳円八拾九錢貳厘

壹株当り金壹円九拾錢八厘

受方

株金千六百九拾壹円九拾九錢貳厘

支消取立金三拾六円拾五錢壹厘四毛

借入金四百五拾円

預り金九百七拾壹円七拾六錢三厘三毛

予備金貳拾六円五拾錢

当季予備金三拾五円八拾七錢六厘

当季純益金三百貳拾貳円八拾九錢貳厘

總計金三千五百三拾五円拾七錢四厘七毛

渡方

諸荷立換金貳千貳百八拾六円八拾八錢九厘七毛

水路修繕立換金三拾三円

納屋并諸器代價金五百五拾五円

貸金貳百八拾七円八拾九錢壹厘

貨幣有高音三百七拾貳円三拾九錢四厘

總計金三千五百三拾五円拾七錢四厘七毛

損益勘定

益ノ部

入塩手数料金五百拾九円九拾六錢壹厘

諸荷手数料金六百貳拾六円六拾九錢九厘

利子溜り金五拾六円四拾四錢貳厘

切符売捌両替德其他手数料金五拾四円〇壹錢

藏敷料金貳拾五円六拾貳錢貳厘

總計金千貳百八拾貳円七拾三錢四厘

損ノ部

諸役員月給金貳百五拾貳円〇三錢壹厘

役員増給金貳拾九円五拾三錢貳厘

派出日当雇人給金百七拾九円八拾四錢五厘

土藏納屋建築其他修繕金貳百四拾四円六拾六錢九厘

當費金百八拾三円三拾四錢三厘

利払金三拾四円五拾四錢六厘

小計金九百貳拾三円九拾六錢六厘

當季予備金三拾五円八拾七錢六厘

當季純益金三百貳拾貳円八拾九錢貳厘

小計金三百五拾八円七拾六錢八厘

總計金千貳百八拾貳円七拾三錢四厘

諸貨取扱全數

食塩拾貳万三千五百四拾八俵

此手數料額金五百五拾五円九拾六錢六厘

魚 壹万三千三百拾俵六分

此 同 金百三拾三円拾錢六厘

穀 貳万六千五百五拾貳俵

此 同 金貳百〇九円貳拾壹錢六厘

豆類四千九百九拾三俵五分

此 同 金三拾九円九拾四錢八厘

砂糖三千三百貳拾七俵七分

此 同 金貳拾六円六拾貳錢貳厘

烟草貳百七拾九俵

此 同 金貳円貳拾三錢貳厘

茶 三百三拾貳俵四分

此 同 金貳円六拾五錢九厘

藍玉三俵

此 同 金貳錢四厘

綿 百六拾三俵五分

此 同 金壹円三拾錢八厘

雜荷三万四千百拾俵七分五厘

此 同 金貳百七拾貳円八拾八錢六厘

總計金貳拾万六千貳百貳拾俵四分五厘

手數料額合金千貳百四拾三円九拾六錢七厘

外未納前季越高金八拾四円三拾錢三厘貳毛

合金千三百貳拾八円貳拾七錢〇貳毛

内手數料現収入

食塩手數料金五百拾九円九拾六錢壹厘

諸貨手數料金六百貳拾六円六拾九錢九厘

小計金千百四拾六円六拾六錢

差引

金百八拾壹円六拾壹錢〇貳毛未納

明治十年七月ヨリ同十二月マテ、下半年運輸会社蒲原出張所大勘定ノ義、本日社中集會ノ上諸帳簿ト突合候処、別紙清算表之通違算相違等無之ニ付、純益金三百貳拾貳円八拾九錢貳厘ハ資本金高之分割配當可致ニ議決致シ候ニ付、各記名調印シテ後日ニ供スル者也、

明治十一年一月廿日

蒲原社中連印

本社拾株以上連印

6 | 37

第六回当社大勘定御届

運輸会社

当社明治十年第六回下半年大勘定ノ義、本年一月廿九日ヲ以株主ノ總會ヲ相行ヒ、逐一諸帳簿ト突合候処、別紙詳細書之通相違無之ヲ証シ候ニ付、純益之分株高ハ分割配當仕候間、此段御届奉申上候也、

右

監督

明治十一年二月七日

栗原 隆三

副社長

青柳詢一郎

社長

遠藤 聰知

山梨県令藤村紫朗殿

(朱)

「第一〇九二号

書面開置候事、

明治十一年二月八日

山梨県令藤村紫朗

」

6-38

第六回明治十年

下半年大勘定

株金四千七百六拾円

此株四百七拾六株

当季純益金六百貳拾四円九拾八錢八厘

壹株当り

金壹円三拾壹錢三厘

受方

株金四千七百六拾円

借入金六百円

預り金千八百五拾五円貳拾五錢五厘

船方預り金貳百五拾壹円七拾九錢四厘

学校献金預り金貳拾円

清水出張所損金支消預り金三拾貳円

予備金百六拾貳円拾八錢四厘

当季予備金四拾壹円七拾七錢六厘

水道支消取立金三百八拾貳円九拾貳錢八厘

当季純益預金三百七拾三円〇八錢八厘

蒲原出張所純益預り金貳百拾九円四拾貳錢

清水出張所純益預金三拾貳円四拾八錢

總計金八千七百三拾円九拾貳錢五厘

渡方

蒲原出張所渡金千五百五拾円

清水出張所渡金七百円

諸貨物立換金貳千九百六拾五円七拾貳錢七厘

貸金千九百三拾九円三拾貳錢九厘

諸納屋其他代金六百三拾五円〇九錢三厘

貨幣有高金千三百四拾円七拾七錢六厘

總計金八千七百三拾円九拾貳錢五厘

損益勘定

益ノ部

入塩手数料金五百貳拾八円四拾壹錢五厘

諸貨物手数料金七百拾四円拾九錢九厘

利子溜り金百九拾七円九拾貳錢八厘

各分社手数料十分一収入金百〇壹円四拾三錢七厘

印紙売捌手数料金拾円

蒲原出張所純益金貳百拾九円四拾貳錢

清水出張所純益金三拾貳円四拾八錢

總計金千八百〇三円八拾七錢九厘

損ノ部

利払金百〇七円〇貳錢五厘

会社諸役員月給金四百貳拾貳円四拾五錢

監督月給金百拾貳円〇六錢七厘

監督派出日当金拾三円拾錢

諸役員派出日当金五拾円四拾五錢

傭人賃金百五拾貳円八拾五錢

當費金貳百貳拾七圓拾七錢三厘  
 清水出張所損耗支消金三拾貳圓  
 當小學校獻金貳拾圓  
 通計金千三百三拾七圓拾壹錢五厘  
 當季予備金四拾壹圓七拾七錢六厘  
 當季純益金六百貳拾四圓九拾八錢八厘  
 通計金六百六拾六圓七拾六錢四厘  
 總計金千八百〇三圓八拾七錢九厘

諸貨物取扱全數

食鹽拾萬五千六百〇六俵  
 此手數料額金五百貳拾八圓〇三錢  
 魚 壹萬六千八百三拾四俵九分四厘  
 此 同 金百六拾八圓三拾四錢九厘  
 穀 三萬七千八百七拾九俵  
 此 同 金三百〇三圓〇三錢貳厘  
 砂糖貳千五百八拾四俵六分五厘  
 此 同 金貳拾圓六拾七錢七厘  
 烟草百八拾三俵八分  
 此 同 金壹圓四拾七錢  
 茶 貳百五拾〇俵六分九厘  
 此 同 金貳圓〇〇六厘  
 藍玉拾六俵  
 此 同 金拾貳錢八厘  
 綿 貳百六拾貳俵五分  
 此 同 金貳圓拾錢  
 雜荷三萬貳千三百三拾貳俵三分六厘  
 此 同 金貳百五拾七圓〇五錢九厘  
 總計拾九萬五千七百四拾九俵九分四厘  
 手數料合金千貳百八拾貳圓八拾五錢壹厘  
 外同未納越高金百〇六圓四拾壹錢五厘  
 合金千三百八拾九圓貳拾六錢六厘

内手數料現收入

食鹽手數料金五百貳拾八圓四拾壹錢五厘  
 諸荷手數料金七百拾四圓拾九錢九厘  
 通計金千貳百四拾貳圓六拾壹錢四厘  
 差引  
 金百四拾六圓六拾五錢貳厘

未納

當運輸會社并清水港出張所・蒲原浜出張所明治十年下半年、今般諸帳簿整查ノ  
 上、大勘定計算別紙詳細仕訳書記載ニ於テ、違算相違等無之ニ付、純益ノ金員  
 八分割配當可致社中決議候、依テ為後証連署致置候也、

明治十一年一月廿九日

社中連署印

6-39

明治十一年運輸會社役員投票点表



## 運輸会社諸記 十一号

遠藤 聰知

7-1

## 荷物船積受書之事

一 当今不二川運輸会社盛大相成候二付、両河岸船方一同篤ト協議ヲ遂ケ、下リ諸荷物船積方ノ義、駿州行荷物ハ勿論、東西川内村々揚ケ荷等ニ至ルマテ、仮令壹箇ニ滿タサル荷物ト雖トモ、会社ノ差図ヲ受運送無差支、私共急度積受、且御規則条々堅相守可申義、一同協議行届キ、両河岸睦ミ合勉強力ヲ起シ、運輸会社幾々繁盛ノ基ヲ計リ度存候間、何卒社外之船方へハ下リ荷物壹箇成トモ被為積候テハ、私共難渋相成候間、此段更ニ御廃止シ被下度、尤モ社外ノ船方ニ於テハ能荷主ト馴合居、買荷物杯ト偽リ候者モ有之候哉モ難計、捻テ会社へ輸出入ノ荷物ハ、両河岸限リ積入相成候様、社中御執計ニ預リ度、然ル上ハ私共粉骨碎身ヲ不厭厚ク周旋仕、運送聊差支無之様積受可申、万一荷物相嵩運送指支候節ハ、他河岸ノ船方へ被為積候テモ、其節ニ至リ聊苦情申間敷候、依之荷物積受証書、如件、

鰍沢河岸船方

明治八年三月十九日

樋口久右衛門

遠藤捻右衛門

海野政右衛門

深澤定右衛門

高橋縫右衛門

中込音兵衛

青柳河岸船方惣代

渡辺 林蔵

不二川運輸会社

正副社長御中

(朱)「荷物船積方請書ヲ以申出之趣承届候間、猶船積差支無之様、厚注意有之度候也、

明治八年三月廿二日

7-2

保護願

今般富士川運輸会社御創立ニ付テハ、私トモ義同川ニ抛リテ營業仕候義ニテ、会社ノ保護ヲ受サルヲ得ス、依テ仲間一同協議ヲ遂ケ候処、従来船方仲間ニ於テ凡九百円余負債有之、是まで仲間ニ於テモ負債返済ノ方法ヲ設ケ取計来リ候処、方法ノ不良ニ候哉、未タ一トシテ負債返済ノ廉無之、仍テ此儘荏苒致候へハ負債相嵩候外無之ニ付、今般更ニ負債消却其他船積川堀金等方法施設ノ義、当会社へ及依頼度、然ル上ハ来ル四月一日ヨリ出船ノ時ニ負債消却ノ為メ船每何程ツ、ト相定、会社ニ出金置錢致候義ハ、会社ノ御差図ニ依テ聊無違背急度出金可仕候間、其積金ヲ以テ方法ヲ御施設被下、負債其他川堀金船税ニ至ルまで支消相成候様致度、尤会社ノ御良法ニ依テ速ニ負債返済相成候上ハ、猶会社ノ御指揮ヲ奉シ、船每ニ一ト上下何程ツ、会社へ出金シテ、無盡蔵ノ贏利相計度、此段及依頼度願上候也、

明治八年三月

深澤定右衛門

中込音兵衛

樋口久右衛門

遠藤宗右衛門

高橋縫右衛門

田原源右衛門

一ノ瀬卯左衛門

樋口入左衛門

樋口國右衛門

樋口 政平

依田藤右衛門

御届

鰺沢河岸

船方惣代

安藤太郎右衛門

右船方一同代言ヲ以申上候、私共儀古来ヨリ引続キ船稼營業罷在候処、旧跡ヨリ追々諸入費等相嵩ミ多分之金員恩借仕候得共、利金上納手当之義者年々御廻米御川下ケ之節、右運賃金ノ内置錢ト唱へ、出船之都度相当之勿錢ヲ以聊無差支上納罷在候処、御維新以降御米川下ケ等無之義ニ付、一時利私之手当ヲ失ヒ、追々等閑相成候ニ付、方今ニ至リ利金之義モ多分未納ニ相成、一同心痛罷在、猶此儘打過候而ハ自然難洪ニ陥リ、船方法方難相立情実モ有之候間、今般一同協議之上一時改正仕、別紙之通法則相設ケ候上ハ、前借用返済之義モ当明治九年ヨリ同十一年寅年迄三ヶ年ノ内元金返済仕、尚利金之義ハ引続キ同十二年ヨリ明治十五年巳年迄三ヶ年之内不殘返済仕候、依之詳細仕訳書相添、此段御届申上候、以上、

鰺沢河岸

船方惣代

安藤太郎右衛門

船頭

一ノ瀬卯左衛門

外百人

方法書

一当河岸船数凡百艘余ニ御座候間、出船之都度置錢ト唱へ、壹艘ニ付金貳拾四錢ト相定メ、此内金貳拾錢ツ、会社へ預ケ置、此金計算仕訳、左之通りニ御座候、

此訳

金七錢三厘

金拾貳錢七厘

二口メ金貳拾錢也

上下通船御切符料

是ハ借用返済之手当預備

但シ、借用手当之義ハ、壹艘ニ付壹ヶ年三拾貳艘廻ト見込ニ此金四百〇六円

四拾錢ナリ、此分前借用返納手当御座候、

金四錢也 是ハ船方惣代ニテ預リ置候分

此訳

金貳錢 是ハ船頭惣代給料手当、尤船増減或ハ運送方ニヨルヘシ

金貳錢 是ハ積金三十二艘廻リトシテ、金六拾四錢ナリ

合金百貳拾八円也

此仕訳

金六拾四円也 是ハ船方惣代給料ニ充ツヘシ

金三円也 是ハ毎年三月八月両度水神祭典入費ニ充ツヘシ

金五円也 是ハ角ノ倉祭典入費ニ充ツ

金五円也 是ハ毎年一月一日鬮引入費并船中安全祈禱之当

金七円也 是ハ毎年七月施饑餽入費

金拾円也 是ハ恐時出会入費ニ充ツ

引テ金三拾四円也 残り金

一金七拾五円也

是ハ例年七面大明神千部修行手当トシテ出船之都度壹艘ニ付白米五合六夕

七才、每船舟持問屋ハ置米之分、凡此代価金三錢ト積リ、壹ヶ年概畧拾

五艘廻リト見込、壹艘ニ付金七拾五錢、但、現在船百艘積リ、

此仕訳

金壹円也 是ハ七面山奉納ニ充ツヘシ

金八円也 是ハ身延奥院へ奉納例年之通り充ツヘシ

金五拾錢也 是ハ七面山麓防へ奉納

金貳円也 是ハ身延高座石へ奉納

金壹円五拾錢也 是ハ七面山代參人給料奉納ノ分

金貳拾五円也 当村七面明神千部中諸入費ニ充ツヘシ

引テ金三拾七円也 殘金也

二口合金七拾壹円也

此分不殘借用返済手当

但、堀川手当之義ハ当河岸壹艘ニ付金五拾錢ツ、十月一日ヨリ同十二月三十日迄会社へ預置候事、

東西河内領附船之義ハ、出船毎壹艘ニ付金六錢ツ、受取、前同断堀川瀬渡  
之手当ニ充ツヘシ、

前書之通法則相立候上ハ、船方一同營業安心ノ目途ト奉存候間、御聞届相成候  
上ハ、速ニ施行仕度、且亦旧跡借用証書之義認メ、甚夕疎漏ニ付、今般御規則  
ニ基キ更ニ書改メ、一同連署ハ勿論、御主紙貼用之上、証書差出申度、依之此  
段伺上候、以上、

右

鰻沢河岸船稼人

百式名総代

安藤太郎右衛門

運輸会社

正副社長御中

7-5

運輸会社役員御届

蔵方

田原 善造

同 海野次左衛門

同 早川 久作

勘定方補兼蔵方

海野 米造

蒲原出張所

勘定方

樋口 静一

同蔵方

中島半兵衛

明治十一年当社役員社中投票ニ依テ、前記之通決定仕候間、此段御届奉申上候  
也、

運輸会社々々長

遠藤 聰知

明治十一年二月七日

山梨県令藤村紫朗殿

副社長

青柳詢一郎

(朱)

「第一〇九四号

書面聞置候事、

明治十一年二月八日

山梨県令藤村紫朗

7-6

運輸会社社長副社長御届

運輸会社々々長

遠藤 聰知

同勘定方兼務

副社長

青柳詢一郎

明治十一年当社々々長・副社長撰挙ノ義、社中一般投票ヲ行ヒ候処、前記之者投  
票点多数ニ付、社長・副社長ニ決定致シ、即別紙投票点表相添、御届奉申上候  
也、

第十五区鰻沢

運輸会社

山梨県令藤村紫朗殿

山梨県  
運輸会  
社之章

(朱)

「第一〇九五号

書面聞置候事、

明治十一年二月八日

山梨県令藤村紫朗

別紙投票点表ハ(諸記十号ノ末ニ有之)

明治十一年二月四日

第二課長福地隆春

令

大書記官

一等屬

富士川ニ依リ物貨運搬營業取締方ニ付回議案

富士川物貨運搬取扱ハ専ラ運輸会社ニ於テ方法規則相立、其節経伺之上目今施行罷在候ヘトモ、未タ尽サ、ル処モ有之ニ付、猶一層貨主ノ安全ヲ保持スル為、保險請負ノ方法ヲ為相立、物貨取扱之取締相付度、依テ別紙内務伺案概則トモ相伺候也、

明治十一年二月四日

(朱)「第百五号」

内務省伺案

富士川物貨運搬營業概則施行之義ニ付伺

本県下ノ如キハ山嶽全管ヲ围绕シテ、諸物貨ノ運搬ハ悉ク人馬ニ依リ、数重ノ山嶺ヲ踰越シテ漸ク管外ニ達スルヲ得、其不便ヲ極ムル、皆人ノ知ル所ナリ、唯県下ヨリ静岡県下駿州ノ海湾ニ達スル富士川一線ノ水路僅ニ通船ノ便アリテ、之ヲ他線路ノ人馬ニ依テ山嶺ヲ踰越スルモノニ比スレハ、亦便且捷ナリト謂フ可シ、然レトモ該川ノ急激ニシテ危険ナルヤ、船艇常ニ覆没ノ患害アリテ、諸物貨ノ損害ハ勿論至重ノ人命ヲ殞傷スル、年或ハ幾回ナルヲ知ラス、其惨况美ニ言フニ忍サルモノアリ、故ニ去ル明治八年四月中経伺ノ上該川通船規則ヲ施行スト雖トモ、右ハ唯通船取締ノ一片ニ係ルモノニシテ、運搬營業ノ取締上ニ不及、營業規則及ヒ保險請負等ノ方法ナキヨリ、人員ノ殞傷・物貨ノ損害ハ人員ノ不幸・貨主ノ損失ニ帰シ、營業者ト船頭トニ於テハ之ヲ他人ノ痛痒ニ付シ、漠然トシテ憂戚ヲ加ヘサルカ如シ、右兩業者トモ名ハ物貨ヲ取扱フ者ニシテ、其実ハ物貨ヲ運搬スル器械ニモ劣ル程ノ所業有之、故ニ此ノ如キ便捷ノ船路モ終ニ此弊害ヲ来シ、此不便ヲ極ムルニ至ル、之ヲ他ノ山路踰越ノ不便ニ比スルモ、却テ彼ニ便ニシテ此ニ險ナルカ如シ、然ル所以ノモノハ至竟運搬營業ノ規則一定セス、保險請負ノ方法ヲ施設セサルノ致ス所ナリ、前頭ノ如ク各線路トモ悉ク運搬ノ不便ヲ極ムルカ為メ、管内從來幾多ノ物産アリト雖トモ、其不便ニ障碍遮断セラレ、渾テ其真価ヲ保有スル能ハス、故ニ人民ニ於テモ僅ニ管内

ノ需用ニ供スル迄ノ卑屈ニ安シ、繁殖輸出ノ希望ヲ沮喪スルヲ以テ、小ハ人民ノ貧富ニ係リ、大ハ地方ノ盛衰ト物産ノ隆替トニ係ル可キ一大難関ニテ、実ニ痛心焦慮ノ至ニ不堪候、方今右等ノ弊害ヲ矯正シテ、人民ノ殞傷貨物ノ損失ヲ保護シ、又物産ノ繁殖ヲ賛成スルハ緊要ノ急務ト被相考候間、此段別紙之通該川貨物取扱概則ヲ設ケ致施行、一層該川ノ取締相付度、此段相伺候也、

明治十一年二月六日

山梨県令藤村紫朗

内務卿大久保利通殿

富士川物貨運搬營業概則

第一条

富士川ニ捩テ諸物貨運搬ノ營業ヲ為スモノハ、県庁ノ允可ヲ得タルモノニ限ルヘシ、

第二条

前条營業者ハ、相当保險請負ノ準備及該方法規則等整備スルニアラサレハ、允可セサルヘシ、

第三条

允可ヲ得タルモノハ、保險請負準備抵当トシテ、準備相当ノ動産又ハ不動産ヲ県庁ヘ納置クヘシ、

第四条

允可ヲ得タル營業者ハ、果シテ保險請負ノ規則ヲ実践シ、準備ヲ完具スルカ、其他取扱向ノ景況調査ノ為メ臨時官員ヲ派遣ス可シ、

第五条

前条調査ノ際、万一保險請負ノ規則実践セサルカ、又ハ貨物運搬ノ取扱上ニ於テ不正ノ所業アリト確認スルトキハ、時機ニ依リ其營業ヲ停止ス可シ、

第六条

富士川ニ依リ諸物貨ヲ運搬スル船艇ヲ所有スルモノ、又ハ船乗リヲ業トスルモノハ、允可ヲ得タル營業者ニ附属シテ營業スヘシ、

第七条

通船規則第六条ニ掲載スル過怠料ハ、免許ヲ得タルモノニ於テ其責ニ任ス可シ、

7-8

御検印願ノ義ニ付御伺

第十五区鰍沢

運輸会社

当社於テ漸々小廻船造立致シ御検印奉請候義ハ、別紙之通り願書ヲ以御検印奉出願候テ宜敷義ニ候哉、此段奉伺候也、

右

社長

遠藤 聰知

聰知

明治十一年二月三日

山梨県令藤村紫朗殿

(朱)

「第壹〇三六号

書面之趣ハ戸長奥印之上可伺出事、

明治十一年二月六日

山梨県令藤村紫朗印

運輸会社々々長

遠藤 聰知<sup>印</sup>

長官御宛

7-10

御願

第十五区鰍沢

運輸会社

黒沢河岸当社出張所開設以來ノ諸帳簿調理清算トシテ、当社ヨリ派遣目今整查致シ居、然ルニ三ヶ年以來ノ清算ニ付、緻密ヲ要シ居候得共、万一不整理之廉出来候テハ不相成候ニ付、御多端之御中奉願候義恐懼之至リニ候得共、同出張所へ御官員御出役整查御検認奉願、社中ノ嫌疑無之様致シ度奉存候間、前陳御洞察之上至急御出役被成下置度、此段奉願候也、

右

社長

遠藤 聰知

副社長

青柳詢一郎

明治十一年二月十二日

山梨県令藤村紫朗殿

7-9

小廻船御検印願

(朱)「第何号」

船長 舳梁ヨリ  
船長 舳梁マテ 七間壹艘

右船今般新造仕候間、御検印被成下度奉願候、以上、

第十五区

鰍沢河岸

運輸会社

社印

明治何年何月何日

前書之通相違無之候也、

右村

戸長

運輸会社々々長

遠藤 聰知<sup>印</sup>

長官御宛

7-11

御願

第十五区鰍沢

運輸会社

釜無川通り之義、従来通船相開、諸貨物運搬罷在候処、全体同川ノ義ハ小水ニシテ数ヶ所ノ曲流且数条ニ分派シテ、通船スルモ全年三分一二過ス、依テ運搬ノ便ヲ得ル不能、加之曳船ハ船夫之勞ヲ不貳力勉為致候得共、牛車ノ泥濘ヲ行カ如シ、下船モ又曲流分派ノ小水ヲ擦行スルニ付、軽量ノ諸貨物積入ルト雖トモ船底ヲ磨耗スル事毎度免ル、事ナシ、依テ今回同川筋御見分奉願御指揮ヲ乞ヒ、洲浚掘割之術ヲ起シ、曲屈ヲ鑿リテ直流シ、数派ノ支流ハ一線流ニ纏メ、

右

社長

遠藤 聰知

副社長

青柳詢一郎

明治十一年二月十二日

山梨県令藤村紫朗殿

釜無川通り御見分願

第十五区鰍沢

運輸会社

釜無川通り之義、従来通船相開、諸貨物運搬罷在候処、全体同川ノ義ハ小水ニシテ数ヶ所ノ曲流且数条ニ分派シテ、通船スルモ全年三分一二過ス、依テ運搬ノ便ヲ得ル不能、加之曳船ハ船夫之勞ヲ不貳力勉為致候得共、牛車ノ泥濘ヲ行カ如シ、下船モ又曲流分派ノ小水ヲ擦行スルニ付、軽量ノ諸貨物積入ルト雖トモ船底ヲ磨耗スル事毎度免ル、事ナシ、依テ今回同川筋御見分奉願御指揮ヲ乞ヒ、洲浚掘割之術ヲ起シ、曲屈ヲ鑿リテ直流シ、数派ノ支流ハ一線流ニ纏メ、

釜無川通り之義、従来通船相開、諸貨物運搬罷在候処、全体同川ノ義ハ小水ニシテ数ヶ所ノ曲流且数条ニ分派シテ、通船スルモ全年三分一二過ス、依テ運搬ノ便ヲ得ル不能、加之曳船ハ船夫之勞ヲ不貳力勉為致候得共、牛車ノ泥濘ヲ行カ如シ、下船モ又曲流分派ノ小水ヲ擦行スルニ付、軽量ノ諸貨物積入ルト雖トモ船底ヲ磨耗スル事毎度免ル、事ナシ、依テ今回同川筋御見分奉願御指揮ヲ乞ヒ、洲浚掘割之術ヲ起シ、曲屈ヲ鑿リテ直流シ、数派ノ支流ハ一線流ニ纏メ、

釜無川通り之義、従来通船相開、諸貨物運搬罷在候処、全体同川ノ義ハ小水ニシテ数ヶ所ノ曲流且数条ニ分派シテ、通船スルモ全年三分一二過ス、依テ運搬ノ便ヲ得ル不能、加之曳船ハ船夫之勞ヲ不貳力勉為致候得共、牛車ノ泥濘ヲ行カ如シ、下船モ又曲流分派ノ小水ヲ擦行スルニ付、軽量ノ諸貨物積入ルト雖トモ船底ヲ磨耗スル事毎度免ル、事ナシ、依テ今回同川筋御見分奉願御指揮ヲ乞ヒ、洲浚掘割之術ヲ起シ、曲屈ヲ鑿リテ直流シ、数派ノ支流ハ一線流ニ纏メ、

釜無川通り之義、従来通船相開、諸貨物運搬罷在候処、全体同川ノ義ハ小水ニシテ数ヶ所ノ曲流且数条ニ分派シテ、通船スルモ全年三分一二過ス、依テ運搬ノ便ヲ得ル不能、加之曳船ハ船夫之勞ヲ不貳力勉為致候得共、牛車ノ泥濘ヲ行カ如シ、下船モ又曲流分派ノ小水ヲ擦行スルニ付、軽量ノ諸貨物積入ルト雖トモ船底ヲ磨耗スル事毎度免ル、事ナシ、依テ今回同川筋御見分奉願御指揮ヲ乞ヒ、洲浚掘割之術ヲ起シ、曲屈ヲ鑿リテ直流シ、数派ノ支流ハ一線流ニ纏メ、

通船ノ全便ヲ成シ度奉存候間、何卒前陳ノ趣旨御洞察之上、釜無川通り御見分被成下度、且前件御許容被成下候上ハ、鰍沢河岸ヲ根始トシテ、夫ヨリ同川ノ末流ヲ漸々溯リ水原ニ至ルノ順序ヲ以御見分被成下度、此段奉懇願候也、

右

明治十一年二月十三日

社長

遠藤 聰知

副社長

青柳詢一郎

山梨県令藤村紫朗殿

7-12

御伺

第十五区鰍沢

運輸会社々長

遠藤 聰知

人民一般願伺届等ハ、其村担当戸長奥書之上差出シ可申御制規ハ服膺致シ居候得共、富士川小廻船其他漁船等有税ニ関シ候分ハ、先般船税取立上納方当社へ御委任相成候ニ付、右ニ関シ候願伺届等ハ戸長ノ奥書不申受候テ可然哉、当社ニ於テ小廻船新造御検印願之義ハ、戸長奥書不申受奉出願御許可ヲ得、然シテ戸長方へ届而已ニテ可然哉、右両件奉伺候也、

右

明治十一年二月十三日

遠藤 聰知

山梨県令藤村紫朗殿

(朱)「第壹三式九号

書面伺之趣ハ、両条共戸長奥印之上可願出事、

明治十一年二月十六日

山梨県令藤村紫朗□

7-13

御検印願ノ義ニ付伺

山梨県第十五区鰍沢

運輸会社

当社於テ漸々小廻船造立致シ御検印奉請候義ハ、別紙之通り願書ヲ以御検印奉出願候テ宜敷義ニ候哉、此段奉伺候也、

右

社長

遠藤 聰知

前書奉伺候ニ付、即奥印仕候、以上、

右村担当

戸長

中込太郎左衛門

山梨県令藤村紫朗殿

(朱)「第壹二〇三号

書面造船検印願書式、附箋之通訂正可致事、

明治十一年二月十三日

山梨県令藤村紫朗□

7-14

小廻船御検印願

(朱)「第何々号」

(朱貼紙)「但運輸会社所有」

船長 舳梁ヨリ 七間壹艘  
艫梁マテ

右船今般新造仕候間、御検印被成下度奉願候、以上、

(朱貼紙)「右社

何誰印」

第十五区鰍沢

運輸会社 社印 (朱)

前書之通相違無之候也、

明治何年何月何日

(朱貼紙)「第何区戸長

何村担当

運輸会社社長 遠藤聰知 (朱)

長官御宛

何誰印

明治十一年二月十九日

山梨県令藤村紫朗

7-15

御届

第十五区鰺沢

遠藤 聰知

右ノ者義、今回社中投票ヲ行ヒ当社社長ニ決定致候間、此段御届奉申上候也、

第十五区鰺沢

荷質貸付会社

社印

明治十一年二月十八日

山梨県令藤村紫朗殿

(朱)「第壹四〇八号

書面聞置候事、

明治十一年二月十九日

山梨県令藤村紫朗

」

7-16

招牌掲方ニ付伺

第十五区鰺沢

荷質貸付会社

当社ノ義昨明治十年七月中御許可ヲ得開業致シ居、右ニ付別紙如図招牌相掲ケ候テ宜敷義ニ候哉、此段奉伺候也、

右

社長

遠藤 聰知

明治十一年二月十八日

山梨県令藤村紫朗殿

(朱)

「第壹四〇九号

書面伺之通、

荷質貸付会社

山梨県令藤村紫朗

7-17

当青柳運輸会社大勘定御届

運輸会社

正副社長

当運輸会社明治十年下半年大勘定ノ義、今般社中一同集会上、逐一諸帳簿ト突合候処、詳細書之通相違無之二付、純益之分悉皆株高ハ分割配当仕候間、此段御届奉申上候、以上、

右

副社長

磯野 忠博

同

青柳詢一郎

社長

遠藤 聰知

山梨県令藤村紫朗殿

(朱)

「第壹六五六号

書面聞置候事、

明治十一年二月廿八日

山梨県令藤村紫朗

」

7-18

第四回明治十年下半年大勘定

株金千七百六拾七円五拾銭

此株数百七拾六株七分五厘

内

金千七百四拾四円 現収入  
金式拾三円五拾銭 同未済

連月累株千〇式拾株

当季純益金百七拾六円

壹株当り金拾七銭貳厘五毛五絲

満半季金壹円〇三銭五厘三毛

受方

株金千七百四拾四円

支消取立金四百八拾六円拾五銭三厘

預り金七百三拾九円八拾壹銭一厘

船方預り金百五拾三円八拾八銭八厘

借入金百四拾八円六拾九銭六厘

予備金貳拾五円四拾七銭貳厘

当季予備金拾八円五拾六銭七厘

總計金三千三百拾六円五拾八銭七厘

渡方

蒲原渡金貳百円

旧修繕費金貳百四拾壹円拾四銭

当季同金百七拾円九拾三銭六厘

蒲原貸金拾六円

難場瀬湊金貳拾三円九拾七銭六厘

置付物代金拾五円七拾銭五厘

獅々浜石碑建立金四拾円

支消渡金三百三拾六円九拾九銭五厘

船方貸金四百五拾円

貸金千〇七拾四円九拾銭四厘

諸貨物立換金七百四拾六円九拾三銭一厘

貨幣有高金百六拾四円九拾六銭六厘

總計金三千三百拾六円五拾八銭七厘

損益勘定

益ノ部

入塩手数料金五拾七円六拾壹銭五厘

諸物貨手数料金貳百六拾三円九拾六銭

人員手数料金六円〇八銭

利子溜金百五拾五円八拾九銭八厘

蒲原純益金貳拾六円貳拾六銭

總計金五百〇九円八拾壹銭三厘

損ノ部

利子払金貳拾壹円七拾五銭

傭人足賃払金貳拾円貳拾九銭五厘

当費金五拾円四拾九銭

明俵代金六円貳拾五銭

会社諸役員給料金貳百貳円六銭壹厘

役員派出日当金拾壹円四拾銭

藏敷地税金壹円

学校献金貳円

總計金三百拾五円貳拾四銭六厘

差引金百九拾四円五拾六銭七厘

当季予備金拾八円五拾六銭七厘

当季純益金百七拾六円

諸貨物取扱全数

食塩壹万〇七百七拾七俵

此手数料額金五拾三円八拾八銭五厘

穀 六千五百貳拾貳俵

此 同 金五拾貳円拾七銭六厘

豆 八拾七俵

此 同 金六拾九銭六厘

綿 千〇三拾四俵五分

此 同 金八円貳拾七銭六厘

菓 千百三拾壹俵

此 同 金九円〇四錢八厘

魚 三千八百式拾七俵式分七厘

此 同 金三拾八円式拾七錢三厘

砂糖 三千五百四拾五俵壹分四厘

此 同 金貳拾八円三拾六錢一厘

茶 五百七拾貳俵八分六厘

此 同 金四円五拾八錢三厘

藍玉 五拾七俵三分

此 同 金四拾五錢八厘

雜荷壹万四千百拾貳俵九分四厘

此 同 金百拾貳円九拾錢三厘

總計 四万六千六百六拾七俵〇一厘

手數料 合金三百〇八円六拾五錢九厘

前回 越高金貳拾六円〇九錢九厘

總計 金三百三拾四円七拾五錢八厘

内現 收入

食塩 金五拾七円六拾壹錢五厘

諸荷 金貳百六拾三円九拾六錢

差引 金拾三円拾八錢三厘 未納

7-19

当社青柳出張所役員御届

副社長 磯野 忠博

勘定方 秋山 省一

同補 秋山 宏一

蔵方 志村 忠甫

蔵方 志村 忠甫

蔵方 志村 忠甫

蔵方 志村 忠甫

明治十一年当社青柳出張所副社長以下撰挙之義、社中一般投票ヲ行ヒ候処、前記之者投票点多數ニ付、副社長以下ニ決定致シ、即別紙投票点表相添御届奉申上候也、

運輸会社々長 遠藤 聰知

山梨県令藤村紫朗殿

明治十一年二月廿七日

7-20

明治十一年青柳出張所役員撰挙点表

明治十一年青柳出張所役員撰挙点表				
副社長	勘定方	勘定方補	蔵方	人名
四十四				磯野忠博
一				秋山源兵衛
一				秋山政藏
三	三十七	十八	三	秋山元藏
	十	十四	三十四	秋山省一
	十二	十五	三十一	志村忠甫
			四十六	秋山宏一
				仙洞田丑松

山梨縣令藤村紫朗	石川運轉會社	一	二十六	磯野大繁行
			三十二	磯野貫友
		二	二	深澤源作
				磯野定之助
		一		秋山辰次郎
				石川半三郎
第壹六五八号	書面聞置候事			
明治十一年二月廿八日				

(朱)「第壹六五八号」  
書面聞置候事、

明治十一年二月廿八日

山梨県令藤村紫朗

7-21

船税取立方ニ付御伺

第十五区鰍沢

運輸会社

本年甲第四十四号・同第四十五号ヲ以船税上納ノ期限御改正之御達シ奉拝承候、富士川小廻船税取纏メ上納之義ハ、明治七年十月船税取立方当社へ御委任相成候趣旨ニ基キ、御改正ノ御制規ヲ以テ当社ニ於テ悉皆取纏メ上納致シ候テ可然哉、此段奉伺候也、

右

社長

遠藤 聰知

山梨県令藤村紫朗殿

(朱)

「第壹八九号」

書面伺之通、

明治十一年三月八日

山梨県令藤村紫朗

7-22

裁判言渡書

東京府第四大区二小区北神保町七番地

寄留静岡県土族明楽允治父隠居

原告

明楽 和貴

同府六大区二小区大和町壹番地平民

原告

武田 弘造

静岡県第三大区壹小区駿河国庵原郡蒲原宿

平民平岡久兵衛外五人総代人

山梨県第二十四区甲斐国八代郡御代咲村平民

被告

古屋 典義

私立会社設立違約ノ訴訟、静岡裁判所ノ裁判不服ノ趣ヲ以テ控訴及フ次第、審理ヲ遂ケ判決スル、左ノ如シ、

第一条

原告於テ明治五年十月被告共ト協議ノ上、駿河国蒲原宿ヨリ甲斐国鰍沢へ通船シテ国益ヲ起サン事ヲ計画シ、第一号・第二号・第三号証ノ如ク契約シ、第四号証ノ如ク仮約定及ヒ、第五号・第六号・第七号証ノ通り、山梨・静岡ノ両県庁へ願立シテ被告共ノ専断ヲ以テ、第十号証ノ通り認替、尚第十一号証ニ於テモ被告ノ専断ヲ以テ契約及ヒ、最初ノ方法ヲ変シ原告ノ意ニ悖リタルニ付、最前ノ方法ニ復スヘキ旨、屢掛合ヒ及ヒシニ、被告取敢サルニ付訴セシニ、静岡裁判所ニ於テハ請求スル所ノ目的ニ達スヘキ線路兩岐ニ涉ルヲ以テ、一件結

局ノ是非曲直ハ姑ク措キ、今先ツ其申供上ノミニ就キ、原告ノ請求不条理ニシテ採用スルニ足ラサルモノト判決セラレタレトモ、原告ノ訴訟ハ前文述ル如ク第十号ノ願書第十一号ノ為取換書ハ被告ノ専断ナレハ、第五号ヨリ第七号迄ノ願書及ヒ規則ニ基キ復旧ノ儀ヲ請求スルノ趣意ニシテ、静岡裁判所ノ裁判ハ不服ニ付、控訴セル云々陳述スルト雖トモ、該事業タルヤ官許ヲ受クヘキモノニシテ、私ノ契約ノミヲ以テ執行ナルヘキモノニアラサレハ、第一号ヨリ第四号迄ノ証アルモ、是ハ此レ未必ノ契約ニシテ、確定ノモノニアラサレハ、被告専断ヲ以テ第十号・第十一号証ノ如ク、願書認替及ヒ、為取換ヲ為スモ、該事業ハ官許ヲ得テ設置セシモノナレハ、第一号ヨリ第四号迄ノ証アルモ、今日ニ至ツテ其事業ノ方法ヲ變更ナスヘキ効力ヲ有セサルナリ、況ヤ第十一号証ニ於ケルヤ、被告差出ス甲乙第三号証ヲ看ルニ、原告ハ当時出甲ナシ難キ云々、建築取掛リ日限確定築造中規則并ニ運輸賄ノ定則其外品々為取替ノ義有之、実ニ肝要ノ場合ニ至リ候趣、御尤ニ奉存候、右廉々ハ各様方思召通り御取極云々トアリテ、第十一号証ノ為取替ヲナスモ、被告ノ専断ナリトハ看做シ難キニ於テヤ、

## 第二条

原告於テ第八号証ノ如ク、第五号ノ願書へ指令ナリタルモノト心得タル云々、第九号証ニ依テ申述スルト雖トモ、乙第一号証ノ如ク武藤藤太ヨリ願書認替ノ上差廻方申越云々、山梨県當時権令藤村紫朗へ面会ノ節、認替ノ願書披見ノ義ヲ申入タル云々、認替ノ願書ハ第十号証ノ通りニシテ、明治七年十月中蒲原宿ニテ写取ル云々、原告申供シテ被告差出ス第二号証ノ如ク認替ノ願書廻シ方ヲ原告ノ内武田弘造ヨリ申遣シ、及ヒ被告差出ス乙第二号証ノ如ク願意許可ノ歛ヒ状アリ、是ニ由テ之レヲ推考スルニ、願書ノ文意ヲ詳知セサルモ、第八号証ハ改正ノ願書ヘ対シ指令ナリタルモノナル事ハ、原告於テモ知得ナスヘキ道理ニシテ、第五号証ノ願書へ指令ナラサル事ハ、瞭々トシテ論ヲ俟タサルナリ、

## 第三条

原告於テ第一条・第二条ニ掲ケタル証拠ノ外、乙第二号ヨリ乙第九号迄ノ書面ヲ提供シテ証左トナスト雖トモ、該争訟ヲ判決スルノ要点タルヘキモノ非ラサルナリ、

## 第四条

被告差出ス第五号証ヲ視ルニ、原告ノ意ニ悖リタリトテ退社ナスヘキト断言セリ、然ルニ今又復旧ヲ需ムルモ、前条々ノ理由ニ付原告ノ申分難相立候事、

明治十一年二月廿八日

東京上等裁判所

7-23

御届

第十五区鰺沢

運輸会社

今回当社建築ニ付、従前御廻米問屋ニ於テ設置ノ会所（間口三間・奥行三間）壹棟代価金九円ヲ以売却致シ、右代金ハ当社ニ積置年々増殖ノ方法ヲ成シ可申候、且将来御廻米取扱ニ付、今般売却ノ建物入用ノ義モ出来候ハ、右金ヲ以古形同様ニ新築致シ可申候ニ付、此段御届及ヒ候也、

右

社長

遠藤 聰知

明治十一年三月十七日

当村担当戸長

中込太郎左衛門殿

(朱)

「右届出之趣承諾致候也、

担当戸長

明治十一年三月十七日

中込太郎左衛門□

7-24

船税取立方ニ付聞申

第十五区鰺沢

運輸会社

船税取立ノ義、小廻船并漁船所有人本村へ宛徴収方督促致候処、中二ハ区長方へ上納致し候趣申越候村々も有之、孰是区々相成、到底上納ノ期遷延及ヒ候哉ニ相考候間、前陳御洞察之上当社ニ於テ悉皆取纏メ上納可相成旨、各区長へ御達シ被成下置度、此段奉聞申候也、

右

明治十一年三月十四日  
山梨県令藤村紫朗殿

社長  
遠藤 聰知

(朱)  
「第式一七式号  
書面之趣聞届候事、

明治十一年三月十九日

県令藤村紫朗代理

山梨県大書記官西村亮吉

7-25

御届

運輸会社蔵方

田原 善造

右之者義、御課勸業場蒸気鐘東京ニ於テ受取、海上運漕方取計トシテ本日派遣  
為致候間、此段御届申上候也、

右社長

遠藤 聰知

明治十一年三月卅一日

山梨県第二課御中

7-26

丙第三十号

富士川

運輸会社

其会社及ヒ分社ニ於テ取扱候輸出入物貨ノ増減并船艇ノ出入等要用有之ニ付、  
別紙表目ニ照準分社分共無遺漏取纏メ、本年一二月分ヨリ毎二ヶ月分ツ、翌月  
十五日迄可指出、此旨相達候事、

但、各分社ニ依テ物貨ノ取扱重複候分ハ、甲河岸ヲ經由シタル物貨ヲ乙河岸  
ニテ取扱フノ類、登録ニ不及候事、

山梨県令藤村紫朗代理

7-27

明治十一年一月二月甲斐国河岸場一覽表

(雜型のみ)

明治十一年三月廿七日

山梨県大書記官西村亮吉

計	岸	河	何	村	何	郡	何	國	河		出		輸		入	
									積高	艘数	積高	艘数	品名	数量	原價	要示先
何程									何程		何程		何程		何程	
何程									何程		何程		何程		何程	
何程									何程		何程		何程		何程	
何程									何程		何程		何程		何程	
幾品									米		米		茶		茶	
何程									何程		何程		何程		何程	
何圓									何圓		何圓		何圓		何圓	
									駿州		駿州		甲府		甲府	
幾品									茶		茶					
何程									何程		何程		何程		何程	
何圓									何圓		何圓		何圓		何圓	
									甲府		甲府					

7-28

一覽表下調

印八凡ノ印

一艘前下年  
二十五度上下  
積り上  
区信算平均六円  
下り区信算平均  
七十五分後

一覽表下用

入社 人負	本社 地名	株高 金	入費	役員 惣額	給料	船數	區賃 揚高	乗客 數	純益	本社 場所	河岸 場數	本社 出張所
八四	鯉澤	四三〇ノ	一三八三ノ 五二八	七	一〇五〇ノ 九五四	二〇八	三五〇ノ 二〇六七九	一一三三テ	一	本社	一	本社
五五		一七六七ノ 五〇〇	二〇二テ 五三九	六	六九六ノ 四一八	九七	一六三六テ 七五〇	三三九八	三五五ノ 九一三	青柳	一	
三一		六六〇ノ	八七〇四七	三	一六テ 一九七	一三一	二二〇六テ 二五〇	七九一	六九八九テ	黒澤	一	
一		二〇ノ	テ	一	三〇ノ			四八〇	テ七〇	岩間		
三		三〇ノ	二〇ノ	一	三〇ノ			八〇〇	三三三〇	鴨狩		
一		一〇ノ	二〇〇	一	二〇ノ			二〇〇	一〇ノ	西島		
一		一〇ノ	一〇ノ	一	一テ五〇			二四〇		手打澤		
三		五〇ノ	一〇ノ	二	五〇ノ			二四〇	二八六テ	切石		
一		一〇ノ		一	四二四〇			一〇〇		田原		
一		一〇ノ		一	七三三〇			一〇〇		伊沼		

一覽表

運賃表

一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一〇ノ	一〇ノ	一〇ノ	一〇ノ	三〇ノ	一〇ノ	一〇ノ	三〇ノ	一〇ノ	一〇ノ	一〇ノ
五七四〇	八〇〇			七〇ノ	四〇ノ		三〇ノ	四	六	
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一〇ノ	一〇ノ	三〇ノ	一〇ノ	三〇ノ	三〇ノ	一三〇	三〇ノ	三〇ノ	六六六〇	七三三〇
七二〇	一〇		三六〇	七〇〇		一〇〇	七二〇	六〇〇	一〇〇	三〇〇
			五四〇	二五三〇	八二七〇		七八四〇	一九二〇		
中野	大島	清子	大野	波木井	下山	帯金	飯富	波島島	宮本	百市場



香川県

運輸會社

一		一	一	三〇	一	一	一	一	一	一
一〇ノ		一〇ノ	三〇ノ	六〇ノ	三〇ノ	五〇ノ	二〇ノ	一〇ノ	二〇ノ	一〇ノ
				八四〇	六〇ノ		二〇ノ			
一		一	一	四	一	二	一	一	一	一
二〇ノ			二〇ノ	三三六	三〇ノ	三〇ノ	三〇ノ	一七三〇	二〇ノ	二〇ノ
一〇ノ			二〇ノ	一八七ノ	一三六〇	一八四〇	一五三〇		一三六〇	一三〇〇
北田	亦島	新濱	吉原	岩間	松岡	岩本	沼久保	貫下	星山	長貫

一	三	一	一	一	二〇	一	一	一	二	一
一〇ノ	三〇ノ	二〇ノ	四〇ノ	二〇ノ	八〇ノ	三〇ノ	一〇ノ	二〇ノ	二〇ノ	一〇ノ
ノ五八〇	三ノ五二〇	一〇ノ三三〇	一ノ五二〇		一ノ五九〇	三ノ三三〇	ノ五八〇	六ノ五八〇	二ノ七四〇	
一	一	一	一	一	三	二	一	一	一	一
	三〇ノ	二〇ノ	三〇ノ	六四〇	一八〇ノ	一テ	一テ	三〇ノ		
	五ノ	二テ	四ノ		一〇ノ	三テ	テ	四		
山崎	石和	川田	藤合	上常根	二川	乙黒	上野	市川	興津	所屋原

山崎系

山崎系

合計

				三二二			三五	一	一
				嫩澤					
				一〇六五 二八四			五七六四	一〇〇	一〇〇
				三二五七 八九五			一一一四 四九七	一四六 三三四	一〇八〇
				八二			六	一	一
				四〇二 八一			六三 六四	一一 〇六	一〇
				四三六					
				七三 五七					
				三三 二一					
				二五 七九			一七 五三	四 六	
				五二					
				四			〇	〇	
				張 四			浦原	清水	國府

7  
29

御届

鰺沢  
運輸会社

当社一ヶ年一覽表、別紙之通相製シ御届奉申上候也、

右

社長

遠藤 聰知

副社長

青柳詢一郎

明治十一年四月四日

山梨県第二課

御中

7  
30

運輸会社一覽表

入社人員 三百拾貳名

本社地名 第十五区鰺沢河岸

株金高 金壹万〇百八拾五円貳拾八錢四厘

平均入費 金三千貳百五拾七円八拾九錢五厘

役員ノ惣額 八拾貳名

給料 金四千〇貳拾壹円八拾壹錢壹厘

船艘ノ数 四百三拾六艘

運賃揚り高平均 金七万三千五百七拾五円

乗客ノ数 三万貳千三百拾八人

純益金貳千五百四拾貳円七拾九錢四厘

分社設立ノヶ所 五拾貳ヶ所

出張所設立ノヶ所 四ヶ所

河岸場ノ数 四ヶ所

但本分社出張所共

本分社出張所共

同

同

同

同

同

同

同

7  
31

御届

鰺沢  
荷質貸付会社

当社一ヶ年一覽表、別紙之通相製シ御届奉申上候也、

右社長

明治十一年四月五日

山梨県第二課

御中

7  
32

荷質貸付会社一覽表

入社人員六名

株金九千六百拾貳円

入費金拾九円九拾六錢貳厘

役員 社長一名

給料金百貳拾円

貸出金高金九千貳百三拾貳円

純益金七百三拾四円貳拾八錢四厘

貨幣有高金三百八拾円

7  
33

病院基本金利子之義ニ付伺

栗原 信近

鰺沢村荷質借付会社ヨリ病院基本金貸附利子抵減之義ニ付、別紙之通申出候得共、該貸付利子之義ハ、最初拙者へ取扱ヲ被命候節ハ、月壹分一厘ヲ御序ニ納メ、貸付方ハ月壹分壹厘ヨリ貳厘迄下ナシ、其間金ヲ以諸費ヲ償来リ候処、昨明治十年六十六号ノ公布ニ因リ、月壹分壹厘ハ其公布ニ抵触致シ候ニ付、利子改革之義ヲ同年十二月十七日ヲ以上申仕、其後御定則之利子ヲ以貸付候様御允許ヲ忝シ取扱罷在候、然ル上ハ拙者ノ取扱上ニ於テ如此情願アルモ、引下ケ可

遣方法無之、殊ニ該社貸付金ノ如キハ、最初ヨリ御県庁之御引合ニ関リ、他之  
貸付ト異リ、利子低減ノ上御貸付相成候程之義ニ付、其御厚情ハ矢張今日ニ至  
リ候而モ御存意可有之義トモ臆想仕候間、他之貸付利子ト同視モ難相成、仍テ  
是迄取扱向ヲ具陳仕、御指揮奉待上候也、

明治十一年四月十一日

右  
栗原 信近

県令藤村紫朗殿代理

山梨県大書記官西村亮吉殿

(朱)

「第三〇八三号

書面貸付金ハ病院ノ都合も有之、利子低減ノ義難聞届候条、此旨可申聞事、  
明治十一年四月十六日

県令藤村紫朗代理

山梨県大書記官西村亮吉□

7 | 34

荷質貸付会社設立ニ付

拝借金ノ利子御引下ケ願

第十五区

鰍沢村

荷質貸付会社々長

遠藤 聰知

同社中

青柳詢一郎

中島 致恭

雨宮英一郎

遠藤太右衛門

島田 義浩

昨明治十年五月荷質貸付会社設立ニ付、拝借金願上、即時開業罷在候、抑此会  
社ノ性質タル、曩ニ富士川運輸会社開設以降官御保護ノ厚キト同社規則之当ヲ  
得ルトニ抛リ、諸貨物ノ運搬一ノ淹滞ナキハ不俟論、加之運賃モ亦從テ低廉ニ

至リ、其方法稍完全ノ域ニ進マントス、然ル処該社事業中ニ荷質貸付荷為換等  
ノ方法無之ニ付、昨十年五月其方法ヲ起シ、官ノ御許可ヲ得テ拝借金願上、開  
業以來其事業ノ實際ヲ経験スルニ、両社併行車ノ両輪ノ如ク、実ニ偏廢スヘカ  
ラサル者ト謂フヘシ、故ニ荷質貸付会社設立ノ旨趣ハ、敢テ高利ヲ貪ラス、便  
利ヲ諸貨主ニ與ヘ、一ツハ以テ融通ノ道ヲ開キ、一ツハ以テ運輸会社ヲ贊助ス  
ルノ至念ヨリ醸成シ設立スルモノニ付、其貸付モ成丈低利ヲ以テ貸付方施行罷在、  
然ル処本年本県甲第二百五十三号利息制限ノ御達拝承、之ヲ以テ考フルニ、  
不義ノ高利ヲ貪ホル者ヲ制シ、金融之道ヲ洞開セントノ御趣意ト感銘致シ、依  
テハ本社ノ貸付モ其御趣意ヲ奉体シ、猶此上一層低利ヲ以テ貸付、飽マテ諸貨主  
ノ至便ヲ成シ度、然ニ曩ニ拝借金ノ利子月壹分ヲ以テ御貸下ケ相成、今回利息制  
限千円以上年壹割分ノ御達ニ付、拝借金ノ利子ト御制限ノ利子ト同等ニシテ、  
拝借之分ハ全金無間断月壹分ノ利子ヲ相納メ、貸付金ハ一ヶ年中順環貸付ヲ為  
スト雖トモ、創業ノ際ニ付、或ハ游金モ有之、到底御制限ノ利子年式割ヨリ壹  
割分ヲ平分シテ貸付ルト見ルモ、矢張拝借金対等ノ利子ナラテハ收入不致、  
尤今一兩年ヲ經テ追々盛大ニ相成候上ハ、多分ノ収利モ有之見込ナレトモ、目  
今ノ処着手ノ日猶浅キヲ以テ、未夕見込通參リ兼候都合モ有之、前陳ノ實際ニ  
テ甚困却罷在候間、事情御洞察之上、其御筋へ可然御申立被成下、御貸下ケ金  
員ノ利子何程歟御引下ケ被成下候道ハ有之間敷哉、此段願上候也、

右

明治十一年四月五日

島田 義浩

遠藤太右衛門

雨宮英一郎

中島 致恭

青柳詢一郎

遠藤 聰知

学校基本金貸付御掛

栗原信近殿

7 | 35

拝借金利子上納

一金式円八拾錢

但、明治十年一月廿四日ヨリ同月三十一日迄日数八日分、拝借金千五百

円ノ利子

一金百拾五円五拾銭

但、明治十年二月ヨリ同年十二月迄拾壹ヶ月分、拝借金千五百円ノ利子

合金百拾八円三拾銭

右拝借金之利子、今回上納仕候也、

運輸会社々々

明治十一年四月八日

遠藤 聰知

山梨県第二課御中

7-36

御 届

鰍沢河岸

船方惣代

安藤太郎右衛門

青柳河岸

船方惣代

深澤庄右衛門

黒沢河岸

船方惣代

齊藤元右衛門

今回船乗業者一同、別紙之通誓約致候間、此段御届及ヒ候也、

右

明治十一年三月廿三日

安藤太郎右衛門

齊藤元右衛門

運輸会社御中

(朱)

「書面之趣承り置候也、

明治十一年三月廿四日

運輸会社

7-37

誓約書

一 登リ諸荷物ノ義、当分壹艘式拾俵積之事、

一新規船乗營業仕度者ハ、本村戸長許ヨリ該營業致シ度旨ノ添書ヲ乞ヒ、船方

總代ノ手ヲ経テ、鰍沢・青柳・黒沢三河岸運輸会社ノ内所屬タル事ヲ証シ營

業スヘシ、尤所屬ノ義ハ三河岸ノ内本人ノ適宜ニ任ス、

但、本人戸長ノ手ヲ経テ申出ルト雖トモ、船方惣代試檢ノ上該業不熟練ナ

ル者ハ其業ヲ許サス、猶他船ノ水主トナリ修業為致熟練ヲ待テ開業スヘ

シ、

一 蒲原出張所ヨリ登荷物河岸出シノ節、小出シ金（食塩壹艘ニ付金貳銭、諸荷

物同断ニ付金四銭）差出ス可カラス、若本条ヲ違背スル者アルニ於テハ、金

壹円ノ過怠金差出ヘシ、

一年々川湊金其他臨時費等ハ、従前之通必ス運輸会社ヘ収ムヘシ、

但従前ノ課出方法改正ノ節ハ、猶協議ノ上惣代ヨリ通知スヘシ、

一 船税ノ義ハ、元河岸（鰍沢・黒沢・青柳河岸）発船ノ毎度、金拾銭ツ、八度

ニ運輸会社ヘ必ス直ニ上納スヘシ、

一 通船營業水主ノ者不正ノ所業ヲナス者ハ、速ニ營業差止ムヘシ、

一 不正ノ所業ヲ醸生シ、然シテ他ノ船ニ乗換營業致シ度者アルト雖トモ、無謂

乗換營業為致間敷候、

一 鰍沢運輸会社并青柳・黒沢両出張所ハ元河岸ニ付、他ノ出張所并分社ヨリ諸

物貨積請上下（譬ヘハ二川分社ヨリ切石分社ヘ宛テ直ニ運送スルモノヲ指ス、

余ハ之ニ準ス）トモ、三河岸運輸会社ヘ依テ送券書換ヲ請運送スヘシ、万

一 三河岸運輸会社ニ依ラス曳通シ・乗通シノ所業致シ候者ハ、同業中ニテ其本

人ヲ責付ノ上、該業差止ムヘシ、

右条々固守致シ、将来決テ違背致ス間敷、万一違背スル者ハ前条ノ御処分被下

候トモ聊異存申間敷候、依テ違背無之為メ各記名押印後証ニ供スル者也、

明治十一年三月廿二日

船乗營業

一同連署

御届

第十五区鰺沢

運輸会社

当社所属船乗営業ノ者一同、別紙之通誓約致シ、当社へ申出候間、此段御届奉申上候也、

右

社長

明治十一年四月廿一日

遠藤 聰知

副社長

青柳詢一郎

山梨県令藤村紫朗殿

(朱)

「第三式六老号

書面聞置候事、

明治十一年四月廿二日

県令藤村紫朗代理

山梨県大書記官西村亮吉

御届

今回別紙之通船乗営業之者一同誓約致シ候間、此段本紙相添御届申上候也、

船方惣代

鰺沢河岸

安藤太郎右衛門

同

青柳河岸

深澤庄右衛門

同

黒沢河岸

齋藤元右衛門

御中

誓約書

富士川通船諸物貨運送営業ノ義、運輸会社設立開業ヨリ同社規則ヲ固守致シ、所属船ニ相願營業致シ来リ候処、多数ノ船頭ナル故万一同社ノ指揮ヲ奉セサル者無之為メ、今回猶船頭一同申合セ、弥将来同社ノ指揮決テ違背致間敷段、誓約ヲ成シタル条件、左ニ掲ク、

第一条

富士川通船營業ノ義ハ、運輸会社ノ諸貨物運搬ノ為造船營業スル者ニ付、船乗營業人ハ悉皆同社へ申出、同社ノ名義ヲ以テ検印相願、營業スヘシ、

第二条

富士川通船諸貨物積請上下運搬ノ義、運輸会社ハ勿論、同出張所并分社ニ限り、他ノ場所ヨリハ荷物等決テ積請運送致ス間敷候、

第三条

将来、新規造船富士川通船諸貨物運送營業致シ度者ハ、鰺沢運輸会社、青柳・黒沢両出張所之内、附船タル事ヲ其本人ノ望ミニ任セ、船方惣代へ申出誓約ヲナシ、然シテ其総代ヲ経テ運輸会社へ申出、此誓約書へ記名調印致シ、營業致スヘシ、

第四条

前条運輸会社并同出張所分社ノ名義無之場所ヨリ積荷不致所以ハ、運輸会社并同出張所分社ヨリ出入ノ諸貨物ヲ運搬ノ為メ設クル船ニ付、必ス他ノ場所ヨリ聊タリトモ船積運搬致スヘカラス、

第五条

本年三月十三日、富士川物貨運搬營業概則御達シ相成候ニ付テハ、同御規則并通船御規則等船乗營業ノ私共一同必ス遵奉致スヘシ、

第六条

通船御規則ヲ違犯致シ候ハ、私共同業中ノ心得違ヨリ醸生スル者ニ限り候得共、其責任ハ運輸会社へ及ボシ候儀ニ付、決テ違犯セサル様可致、万一通船御規則ヲ故造ヨリ犯シ候者ハ、御処分ノ過怠料金額ノ一倍ヲ運輸会社へ急度相納

ムヘシ、

第七條

右誓約致シ候上ハ、運輸会社ノ指揮ハ勿論、船方惣代之指揮ヲ不用、且不正ノ所業有之者ハ、直ニ船方惣代ヨリ其条件ヲ本人ヘ責付ノ上、富士川通船營業ヲ差止ムヘシ、

但、船方惣代ノ責付不及節ハ、運輸会社ヘ申出処分ヲ受クヘシ、

右ノ件ニ将来必ス違背スヘカラサルヲ証シ、一同誓約ノ上、各記名調印致シ候、万一前条違背且履行不致者ハ、御社ニ於テ前条之御処分被下候、其節聊異存申間敷候、依テ誓約書差上置候也、

明治十一年三月廿二日

船乘營業人

一同連印

8

(表紙)

明治十五年一月ヨリ

同年六月マテ

諸記

第二十号

遠藤 聰知

8-1

建屋使用約定書

静岡県下庵原郡清水町受新田

字向島

四十八番地ノ内

一官舎 壹棟

右ハ、運輸会社ヨリ博運会社役員出張候ニ付テハ、居住処ニ使用被成候共、聊否不申候、依之為後証差出シ置候也、

清水港

博運会社総代

明治十四年十二月卅一日

鈴木 與平

鈴木 圭三

山本三四郎

運輸会社総代

青柳詢一郎殿

栗原 隆三殿

8-2

駿河国庵原郡清水受新田

字向島  
四十八番地之内  
一平 蔵 式軒

但 老号 間口十三間 此建坪五十二坪  
奥行 四間

二号 間口 拾間 此建坪三十坪  
奥行 三間

此売渡代金五百円也

右ハ、我等所持之建物、今回都合ニ寄前書之金員ヲ以、貴殿へ売渡代金正ニ受  
取申候処確明也、此建物之義ニ付、本人・保証人ハ勿論、他ヨリ苦情ケ間敷義  
毫毛無御座候、依之保証人連署建物売渡之証、如件、

山梨県運輸会社副社長

明治十四年十二月卅一日

売主 青柳詢一郎

同社員

保証 栗原 隆三

清水港博運会社総代

鈴木 與平殿

山本三四郎殿

野村通太郎殿

鈴木 圭三殿

8-3

明治十四年十二月三十一日売渡

山梨県下南巨摩郡

静岡県下庵原郡清水受新田

歟沢村

四十八番地ノ内建物

運輸会社

副社長

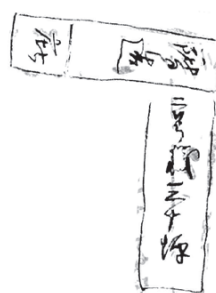
青柳詢一郎

榎

(不鮮明部分)

(二号蔵三十坪)

(一号蔵五十二坪)



ナ



右売渡人

青柳詢一郎印

山本三四郎殿

鈴木 與平殿

野村通太郎殿

鈴木 圭三殿

前書之通り相違無之候也、

清水受新田

戸長

鈴木 平六印

8-4

運輸会社清水出張所

用具売払品名

一時計

一

一朱肉

一印箱トモ

- 一 算盤 四面
- 一 机 六ツ
- 一 フラフ棹及鉄車及小道具トモ 一梳
- 一 日章旗 一梳
- 一 帳場隔子 三ツ
- 一 衝大小 三丁
- 一 土蔵鍵 四ツ
- 一 錢函 壹ツ
- 一 煙草盆 壹ツ
- 一 火入 壹ツ
- 一 焼古手 式丁
- 一 三尺桧戸棚 壹
- 一 火鉢五ツ及ヒ小錢函式ツ
- 一 ランプ 四ツ
- 一 立ランプ 壹
- 一 糊刷及ヒ小刀 五丁
- 一 招牌板 壹枚
- 一 金七拾円
- 一 硯箱 七ツ
- 一 硯水入 七ツ
- 一 双帳箆筒 壹ツ
- 一 ブリキ茶入 壹ツ
- 一 戸棚 壹ツ
- 一 壹升櫛 壹ツ
- 一 壹斗桶 壹ツ
- 一 米斛トウシ 壹ツ
- 一 瓦斯燈 壹ツ
- 一 長火鉢 壹ツ
- 一 行燈 三ツ
- 一 店火鉢 壹ツ
- 一 帳棚 四ツ
- 一 傘 五本
- 一 あんか 五ツ
- 一 棒杭 壹本

8-5

分社設立届

南巨摩郡

鯉沢河岸

富士川運輸会社

富士川沿西八代郡羽鹿島村・楠甫村両村へ分社ヲ設立シテ、其地接近ハ勿論、其他輸出入之諸貨物運搬ヲ取扱候ハ、至便ト存候間、同村ニ於テ入社人ヲ募リ、分社設立致シ候間、此段御届奉申上候也、

社長

遠藤 聰知

明治十五年一月七日

山梨県令藤村紫朗殿

同日同文言ヲ以テ、西八代郡長依田孝殿へモ届出テタリ、

8-6

社名	社名
富士川運輸会社	鯉沢河岸
地名着地	地名着地
鯉沢河岸	鯉沢河岸
明治七年一月廿九日	明治十年七月四日
明治八年二月一日	明治十年七月十五日
資本金	資本金
壹千圓	七千圓
業体	業体
貨物運送	貨物運送
社長人名	社長人名
遠藤聰知	遠藤聰知

右両表、明治十五年一月十一日、当村役所へ届出テタリ、

8-7

始末書

山梨県南巨摩郡鯉沢河岸

富士川運輸会社

副社長

青柳詢一郎

同

監督

栗原 隆三

右申上候、静岡県下有渡郡清水町受新田、山梨県官有地及官舎之義、明治九年十月中拝借相願、当運輸会社出張所ヲ設ケ、明治十年三月中東京三菱汽船会社卜定約取結、東京・横浜間之貨物海上運搬致来リ候処、其後明治十四年三月中横浜・静岡等之有志者同心協力、以テ汽船会社（静隆社）ヲ設立シ、清川丸・

三保丸・静岡丸三蒸汽ヲ以清水港ヨリ東京・横浜間ニ運漕之業相開候ニ付、先般我出張所ニテ整約スル、三菱社ハ同港運輸ノ途相絶候ニ付、無抛右静隆社へ委託致シ、先以無差支營業仕來候処、不計キ同年六月中清水港へ博運会社ナル同業社開設相成、専ラ我出張所ト運搬營業上ノ競争ヲ喚起セシニ、博運会社於テハ右静隆社ト連合定約取結ヒ、他社之荷物運搬ヲ止メ候ニ付、是カ為メ我出張所之貨物汽船積之途相絶候処、茲ニ静岡県下清水港山本左十郎取扱之駿河丸・川崎丸之二蒸汽船、当時遠州地方行航海相成居候ニ付、右船主及取扱人ト整約取結ヒ、甲信兩國之一大便利ヲ起シ居候処、豈図ランヤ、同年十二月中両蒸汽船共難破ニ罹リ、沈没及ヒ、亦々汽船積之途相絶、今ヤ清水出張所閉不閉之極ニ至リ候間、社中集會之上博運会社へ合併之義可然成ニ評決シ、而シテ私共兩人合併委員トシテ出港任、別紙写之通定約取結ヒ、本年一月五日帰社及、社中へ披露致候処、合併之真意ヲ失シ候而已ナラス、特別ヲ以御貨付相成候官有地及官舎式棟ヲ、拙者共ヨリ貸渡シ、加フルニ運輸会社出張所之名称相廢シ候始末、社長并社中ヨリ不条理之件ニ嚴談中、本県勸業課ヨリ社長御呼出之上、今回博運会社江官有地ヲ貸渡セシ条約ハ不条理ニ付、右約定ヲ解約スル歟、或ハ返上可致旨被仰渡、茲ニ至リ始メテ為スカラサル定約タル事ヲ承知仕、今回解約且改正等為掛合、社長共々出港解約之論弁數回ニ及ヒ、先方於テモ為スカラサル之定約タル明知致シ居リナカラ、解約改正ヲ忌避被致、先般私共ヨリ差出シタル不条理之約定書ヲ以奇貨トシ、御県庁ヨリ官有地返上可致トノ御談示有之候義モ承伏不致、何分解約之運ヒニ不至、是ニ至ツテ益々前非ヲ悔悟仕、恐縮ヲ不顧、前陳縷述仕候間、何卒深ク御洞察之上、先般之定約ヲ解正、理ヲ拳ケ条約取結候様静岡県庁へ御照會之上、博運会社々長へ御説諭被成下置度、此段以始末書奉懇願候也、

右

栗原隆三代兼

青柳詢一郎

明治十五年二月十八日

山梨県令藤村紫朗殿

(朱)

「第七二一号

書面願之趣、難聞届候事、

但、其社名称ヲ廢シ不用ニ属スル上ハ、地所・建物共返納スルハ当然ニシテ、其社ヨリ他へ貸渡シ候義ハ不都合ニ付、速ニ返納可致事、

明治十五年二月廿三日

山梨県令藤村紫朗□

8-8

駿州清水港本県御所轄官有当社拝借地之義、過年博運会社ト合併致シ候ニ付テ、本年二月中副社長青柳詢一郎ヨリ縷述奉懇願候処、当社出張所之名称ヲ廢ス上ハ、地所速ニ返地可致旨御指令奉拜承、猶今回返地之御督促ニ預リ奉恐縮候、右ハ過年博運会社ト合併定約ハ実ニ誤謬ニ歸シ候ニ付、飽まで解約ニ刻苦致シ居、猶此上ハ静岡県へ事情懇願仕、解約之運ヒニ可仕決心ニ付、願上候モ恐懼之至リニ奉存候得共、今暫ク御返地之義、御猶予被成下置度、奉悃願候也、

富士川運輸会社々長

明治十五年三月廿日

遠藤 聰知

山梨県勸業課長

渡部省三殿

新水道支消金取立調書之義ハ、目下蒲原出張所昨年下半年清算中ニ付、右精算済之上ハ、速ニ調書ヲ以御届可奉申上候也、

8-9

御 願

南巨摩郡鰍沢村

富士川運輸会社

荷質貸付会社

当社之義、昨明治十四年中實際表御届方、本月廿日迄御猶予相願置、然ル処、尔今計算済ニ至ラス、恐縮之至リ存候得共、来ル四月二日迄尚御猶予被成下置、此段奉願候也、

社長

明治十四年三月廿三日

遠藤 聰知

南巨摩郡長

依田孝殿

(朱)「清水港博運会社ト当運輸会社同所出張所ト取結ヒタル定約一件、不都合ニ付解約云々、林闔氏ハ協議ヲ掛ケタル書取、明治十五年三月十一日ナリ、」

## 合併論之原因經由

富士川運輸会社(諸貨物運搬取扱専務) 出張所之位置

静岡県下蒲原湾

同 清水港

清水港ニ於テモ、諸貨物運搬取扱専務之会社、名称博運会社ハ、昨明治十四年六月開業シタリ、

右会社設立セルニ付、当出張所ト既ニ競争之萌ヲ生ス、此競争之影響ヲ蒲原当出張所ヘモ及ホス勿論ニ付、自然各所ヘ競争之影響ヲ及ホス上ハ、孰レ歟倒レル事ヲ察知シ、其競争之念ヲ切斷スルニハ、当清水出張所ト同所博運会社ト合併スルニシカスト想像シ、然シテ清水港博運会社ト当出張所ト合併定約シテ和親ヲ結ビ、同博運会社ト蒲原当出張所ト連絡スル上ハ、共ニ親睦シテ運輸ノ便ヲナス、火ヲ視ルヨリ明ナリ、其旨趣ヲ以合併之論ヲ引起セリ」

右旨趣ナルヲ以、富士川運輸会社社中之總會ヲ施行セリ、其決議左ニ、合併論ハ至極穩當ニ付、合併スル事宜シ、然シテ合併之要領左ニ、

合併ハ対當之權利ヲ有スヘシ、

又出張所之名義ハ飽マテ存置スヘシ、然セサレハ当出張所設置之地ハ、山梨県官用地拝借ニ係ルモノナレハ、名称ヲ廢スルハ其影響ヲ拝借地ニ及ホシ、自然返地スルノ場合ニ立至ル勿論ニ付、名称ハ存置スヘシ、

又若シ不得已場合ニ至リ、当出張所之名称ヲ削ルノ場合ニ立至ル事アルトキハ、名称ヲ存置スル丈ケノ特別權利ヲ有スルトキハ格別ノ事、

青柳詢一郎ノ合併為定約派出ノ節ハ、前決議之条々ハ深く承知、且陳含メ置ケリ、

同人定約派出中、一応之照会モ本店ヘ向ケ無之事、

同人定約面ヲ見レハ、社中總代ノ肩書ヲナシタリ、然レ共社中惣代ノ委任致シタル事ナシ、

静岡県下清水港博運会社ト同所向島山梨県官用地ヲ拝借シ設立シタル運輸会社出張所ト合併シタル約定ハ不完全ノ契約ニ付、改正ヲ要セシ掛合ノ顛

末、

明治十五年一月中、清水港運輸会社出張所ノ名称ヲ廢シ、同所博運会社江合併

セシハ、其節派出セシ副社長青柳詢一郎并同出張所詰栗原隆三、両氏ノ独斷ニ

出テ、本店社長ニ一応ノ照会モ無之、不完全ノ約定ナレハ、自然両社親睦シテ此約ヲ履行スル事難キ事ト、山梨県庁於テハ官用地ヲ自假ニ貸渡シタル事ヲ御聞込相成、運輸会社ヘ返地ナス可キ事ヲ御談シ相成タルニ付、同月廿五日株主總會ヲ開キ、右約定改正之事ヲ決議ナシタルヲ以、二月五日運輸会社々々長遠藤聰知・青柳詢一郎同道、清水港ヘ出張ナシ、博運会社々々長山本三四郎・副社長鈴木与平ノ両氏ヘ条約改正ノ主意ヲ再応熟談ナシ、加ルニ博運会社トノ合併ノ節周旋セシ田野雄平・塩坂某ヲ以猶悞談セシ始末、左ノ如シ、

当明治十五年一月中、青柳詢一郎外一人運輸会社株主總代ノ名義ヲ以博運会社ト合併セシ条約ハ、不完全ノ約定ナルニ付改正ヲ要ス、係ル不權衡ノ条約ナレハ、素ヨリ会社合併ノ主意ヲ失シ、加ルニ官用地ヲ其節出張人ノ獨斷ヲ以貸渡セシハ、其実ナス可カラサルノ契約ニシテ、地主ノ承諾ヲ得サレハ、地所貸借ノ順序ヲ誤リタルモノニ付、到底改正ナサ、ルヲ得ス、彼我公平ノ約定書ニ改正ナシ度旨ヲ縷々熟談及ヒタルニ、山本・鈴木ノ両氏於テモ、素ヨリ不完全ノ約定タル事ハ了知シ、地所借貸云々ニ付ハ、山梨県ノ忘許アラサレハ、其功ナキモノ旨ヲ其節出張人青柳詢一郎ヘ内儀ヲヨヒタルニ付、追テ直拝借云々ヲケ条ニ入タル旨ヲ答ヘ、如何ニモ不完全ノ約定トハ承知シ居リナカラ、彼レ等ニ於テハ先般ノ条約書ヲ奇貨トシ居ルヲ以、何分熟談不整シテ、同十一日彼ノ地ヲ引払タルナリ、

(朱)「此書取出ヘ約定書其他之書類ヲ添ヘタリ、」

## 811

## 第十四回当社勘定御届

南巨摩郡鰍沢河岸

富士川運輸会社

当社第十四回明治十四年下半季勘定之義、本年三月廿九日ヲ以株主ノ總會ヲ行ヒ候処、別冊詳細書之通相違無キヲ証シ候ニ付、純益金之分株高ヘ配当仕候間、此段御届奉申上候也、

社長

遠藤 聰知

明治十五年四月廿七日

山梨県令藤村紫朗殿

富士川運輸会社第十四回半季實際表

明治十四年七月ヨリ十二月ニ至ル半季間、實際施行シタル諸勘定ヲ精査スル、  
左ノ如シ、

株金	一〇、五四〇	〇〇〇
預備金	一、七〇三	二三九
借入金	九、七九五	〇〇〇
預り金	九、〇四七	六六九
差配人身許金	四四〇	〇〇〇
船方預り金	四五五	三九八
基興預り金	四八	六一六
割賦預り金	一九	〇四二
保険料金	五七六	九六八
当季益金	八一二	八四三
總計	三三、四三八	七七五
貸方		
諸荷物立換金	一六、〇二一	八〇四
貸金	四、八七八	五五四
蒲原出張所資本渡金	二、〇〇〇	〇〇〇
清水出張所資本渡金	八〇〇	〇〇〇
第十銀行株金	一、五〇〇	〇〇〇
建築費金	九五〇	〇〇〇
正金有高	七、二八八	四一七
總計	三三、四三八	七七五
損益勘定		
入之部		
食塩手数料金	八四〇	九二三
諸荷手数料金	一、四〇八	〇三五
利子金	四一二	三三三
印紙売捌徳金	一〇	〇〇〇
蒲原出張所純益金	二〇〇	〇〇〇

清水出張所純益金	一二〇	〇〇〇
第十銀行純益金	一二七	五〇〇
歳敷料金	三五八	五〇〇
雑益金	一	二一〇
總計	三、四七八	五〇一
損益勘定		
出之部		
營業税金	三	二四八
角倉祭典費金	二四	八八七
利払金	一、〇〇一	六五九
役員月給金	五四三	五〇〇
諸役員派出日当金	一一九	〇〇〇
監督月給金	三〇	〇〇〇
同派出日当金	一四	〇〇〇
傭人日当金	二三八	四三五
小学校献金	二〇	〇〇〇
大豆其他荷物弁償金	五五	七〇五
納屋并矢来其他修繕費金	一三六	〇〇三
正租金	一七	六八八
道普請入費金	六五	二〇五
甲府荷主集会費金	四〇	三一五
諸費金	三五六	〇一三
小計	二、六六五	六五八
後季繰越金	一	二六三
当季割賦金	八一	五八〇
但、割賦高株数千〇五拾四株、即ち壹株ニ付 金七拾七錢(年壹割五分四厘)		
小計	八一	八四三
總計	三、四七八	五〇一

諸荷物取扱全数表

品名	数量	手数料額金
鹽	一一九、五九四	四〇
穀	一五、四七七	八〇
魚	一七、九九〇	五〇
石油	九、六七五	九〇
砂糖	二、七四二	八〇
鐵	二、五八五	〇〇
青筵	四三〇	七〇
天草	二三四	〇〇
烟草	二七五	三〇
綿	三〇七	〇〇
雜荷	三五、七七一	〇六
計	二〇五、〇八四	四六
手数料總額金		二、四一一
同前季取立未済金		二〇〇
計		二、六一二
食塩手数料現収入金	八四〇	九二五
諸荷手数料現収入金	一、四〇八	〇三五
取立未済金	三六三	六五九
計	二、六一二	六一七

右ハ今回諸帳簿整査ヲ遂クル処、前記清算表ニ於テ聊相違無之、依テ右ヲ証明スル為メ、各記名押印スル者也、

明治十五年三月廿九日

中島 致恭  
 遠藤太右衛門  
 雨宮英一郎  
 島田 義浩  
 原田 幸八  
 中村 清七  
 中込 文吉  
 青柳甚右衛門

青柳徳左衛門  
 井上長右衛門  
 原 弥一兵衛  
 磯野 忠博  
 原田弥一右衛門  
 伴野伴右衛門  
 芦澤重兵衛  
 田原 善造  
 雨宮 實藏  
 望月周兵衛  
 矢崎栄次郎  
 戸田 直藏  
 藤井 敬忠  
 遠藤 弥吉  
 望月弥平太  
 青柳喜兵衛  
 矢崎 利作  
 矢崎与一右衛門  
 野澤 和平  
 志村 平八  
 依田紋左衛門  
 青柳与次兵衛  
 青柳岩太郎  
 坂本 茂七  
 雨宮弥兵衛

8  
14

富士川運輸会社蒲原出張所  
 第十回半季實際表

明治十四年七月ヨリ十二月ニ至ル半季間、實際施行シタル諸勘定ヲ精査スル、左ノ如ク、

		借方	
株金		四、六三〇	〇〇〇
借り入金		二、二九五	〇〇〇
預り金		三、二九〇	一一一
保険料預り金		三一九	八五七
水道支消金預り		一、五五三	〇九八
諸建築消却金		六〇	〇〇〇
後季繰越金			六九八
当季純益金		四六三	〇〇〇
総計		一三、六一一	七六四
		貸方	
荷物立換金		三、三四七	六八〇
貸金		三、七五〇	二九八
諸建築金		六〇〇	〇〇〇
正金有高		四、九一三	七八六
総計		一三、六一一	七六四
		損益勘定	
		入之部	
食塩手数料金		四八三	四一七
諸荷手数料金		一、四一〇	四五四
蔵敷料金		一四三	八三八
利子金		二四八	四九一
支消金取立手数料金		五二	〇〇〇
雑益金		一四	八〇〇
総計		二、三五三	〇〇〇
		出之部	
利払金		三三九	七一六
役員月給金		三一五	〇〇〇
役員増給金		三三	〇〇〇
諸役員派出日当金		六七	七〇〇
備人日当金		二四四	七〇〇
小学校献金		一二	五〇〇

		岩淵架橋一件臨時費金	
納屋損料金		四八	一三六
郵便切手買上ケ電信料		三〇	〇〇〇
荷物弁償金		一七	九〇〇
両替損金		二三	八五五
大綱買上ケ代価金		七	五四九
水道修繕金		五〇	〇〇〇
当費金		二八六	九九〇
小計		三五二	二五六
諸建築費消却金		一、八二九	三〇二
後季繰越金		六〇	〇〇〇
当季割賦金		四六三	〇〇〇
		但、割賦高株数四百六拾三株、即チ	
		老株二付金老円(年式割)	
小計		五二三	六九八
総計		二、三五三	〇〇〇
8-15			
諸荷物取扱全数表			
品名	数量	手数料額金	
食塩	三一、一九五	〇〇	二一八
全水神継キ	七、三四二	〇〇	二五
全十月後	四七、八七一	〇〇	二三九
魚類	一二、一一一	六〇	二四二
石油	九、九八二	八〇	一七九
天草	三、三〇一	八〇	五九
砂糖	三、三五七	〇〇	六〇
鉄類	二、五五〇	〇〇	四五
茶	五九五	一〇	七一
穀類	四九六	五〇	八
豆類	四三四	八〇	七

煙草	五二四〇〇	九	四三二
材木	一三、六六三	七〇	二四五
三ツ又	九六四	八〇	一七
紙	八三八	九〇	一五
綿	一六	三〇	二九三
雜荷	二五、六八三	七〇	四六二
計	一六〇、九二九	一〇	一、八四八

總手数料額	一、八四八	二一九
前季取立未済金	六三	八六七

計	一、九一二	〇八六
食塩手数料現収入金	四八三	四一七
諸荷物手数料現収入金	一、四一〇	四五四
取立未済金	一八	二一五
計	一、九一二	〇八六

右ハ今回諸帳簿整査ヲ遂ル処、前記清算表ニ於テ聊相違無之、依テ右ヲ証明スル為メ、各記名押印スル者也、  
明治十五年三月十八日

十株以上株主  
連署

富士川運輸会社清水出張所  
第十回半季實際表

明治十四年七月ヨリ十二月ニ至ル半季間、實際施行シタル諸勘定ヲ精査スル、左ノ如シ、

株金	九〇〇	〇〇〇
預り金	六一八	三八〇
預備金	四八	六四八

純益金	一五六	八六二
總計	一、七二三	八九〇
貸方	七八二	二一四
諸荷物立換金	九〇	〇〇〇
貸金	五五六	四七一
諸建築代金	二九五	二〇五
金銀有高	一、七二三	八九〇
總計	一、七二三	八九〇

損益勘定  
借方

諸荷物手数料金	三二九	三〇六
藏敷金	八一	五三二
口銭金	五七	四五四
利子金	四六九	二一一
總計	四六九	二一一
損益勘定	四	二〇〇
貸方	一八	〇〇〇
会社税金	一三八	九五〇
月給及ヒ日当払金	一六	五〇〇
諸帳簿紙墨等代金	六六	六〇〇
臨時雇人日当払金	一七	五〇〇
諸器械代金	一六	八〇〇
諸修繕費金	七	五〇〇
新聞代価金	八	七五〇
郵便切手印紙代金	一一	二五〇
石炭油種油代金	六	二九九
当費金	三一二	三四九
小計	二一	八六二
当季預備金	一三五	〇〇〇
純益賦割金	三	〇〇〇

但、割賦株高数九拾株、即チ  
壹株ニ付金壹円五拾錢(年三割)

小計  
總計

一五四 八六二  
四六九 二一一

8  
17

諸荷物取扱全数

輸入部

数量

手数料額金

品名 数量

七三五

穀 四九〇〇

六七五

烟草 四五〇〇

一 一二五

紙 七五〇〇

一 一八〇

三ツ又 三、六一二〇〇

五四 一八〇

材木 二、〇八二二五

三一 二三三

綿 四五〇〇

六一 六七五

雜荷 一、七九二二〇

二六 八八三

計 七、七〇〇四五

一一五 五〇六

品名 数量

手数料額金

魚 一、〇七二二〇

二一 四四四

石油 四、五〇五〇〇

六七 五七五

砂糖 一、二二四〇〇

一八 三六〇

鉄 三、七二二四五

五五 八三六

天草 七五〇〇

一 一二五

雜荷 二、五八七五〇

三八 八一二

計 一三、一八六一五

二〇三 一五二

手数料勘定

手数料総額金

三二八 六五八

同前季取立未済金

二六 〇九七

計

三四四 七四九

手数料現収入金

三二九 三〇六

内 取立未済金

一五 四四三

計

三四四 七四九

右ハ、今回諸帳簿整査ヲ遂ル処、前記精算表ニ於テ聊相違無之、依テ右ヲ証明スル為メ、各記名押印スル者也、

明治十五年三月廿九日

8  
18

清水博運会社ト当清水出張所ト

合併セシニ付当社之損害ヲ来タス要領左ニ

博運会社ト合併スル旨趣タル清水港ニ於テ、当出張所ト博運会社ト両立スル上ハ、多少競争ヲ生スル、勿論博運会社ハ他ニ分支社無之只一個ナリ、当社ハ他ニ支社出張所数多ニ付、同港之一出張所ヲ合併シテ和親ヲ結ビ、蒲原出張所ヘ聯絡ヲ通シ、蒲原当出張所ヨリ清水ヘ宛テ諸貨物運搬ハ悉皆博運会社ヘ向ケ清水博運会社ヨリ蒲原ヘ宛テ諸貨物運搬ハ悉皆当出張所ヘ向ケ運搬スヘキノ第一着眼ナル（此明文定約書ニ記載ナキ第一ノ誤謬ナリ）事ヲ口頭ニテ約シ置キ、然ル処博運会社ニ於テハ、不人情ニモ合併スルノ後ハ当蒲原出張所ヘ諸貨物ヲ運搬セス、陰ニ蒲原拡張会社ト又々申合アルモノカ、同社ヘ諸貨物運搬ヲ曲テナセリ、依テ視レハ定約ノ真理ヲ失シ、合併セシヨリ反対シテ諸貨物ヲ他ニ運搬致サレ、当社蒲原出張所ノ損害ヲ受クル大ナリ、右ニ連続スル損害モ又多々ナリ、前陳ハ要領ヲ記載スルモノニ付、運搬開陳之書類ト併セ御尊覽願上候、（卷一「右者清水一件、十五年四月二日甲府林園ヘ照会候拾送ナリ、」

8  
19

伏テ辭職ヲ乞フ

拙者義、当社々長ヲ勤続スル、茲ニ七年之星霜ヲ経歴シ、職務ヲ全フセント欲シ、日夜孜々苦刻スルモ、性素短才、然ルニ其間不可堪之困難数度ニ遇ヒ、然リト雖トモ、社中諸君之補助ヲ得テ、倒ル、ノ危恐ヲ免レ、昨年末ニ至リ辭職スルノ時期至レリト既ニ決心セリ、然ル処不幸ニシテ其時ニ臨ミ、又々同業社タル拡張会社開業ナセリ、依テ船業者分離其他不可言之紛紜ヲ生シ、終ニ辭職ノ時ヲ煙滅シ今日ニ至リ、猶紛紜之止ムナリ、実ニ短才我輩ノ不可堪之職務ニシテ、若シ一歩ヲ謬レハ社中諸君之名義ヲ潰スノミナラス、土地ノ衰頽ヲ惹起

シ、彼是前後想像スレハ、職ニ在ツテハ安眠スルヲ得ス、辭職セント欲スル、短才ノ我輩ヲ不捨諸君ノ補翼ヲ充フルアリ、如何セン茲ニ至ツテ辭スルニ迷フ、然リト雖トモ役員ノ永勤スルハ慣弊ノ基ト疑団ナキニシモアラス、之レ理ノ然ラシムル処、是レ辭職スルニシカス、此ニ途ヲ以テ決心ニ迷フ、幸ヒ本日ハ役員撰挙ニ際セリ、諸君我輩ノ胸熏ヲ洞察セラレ、總社中へ前陳之旨趣ヲ陳告セラレ、速ニ職ヲ免シ、我輩ニ安堵ノ道ヲ充ヘラレン事ヲ、若シ事情ノアルアラハ、速ニ明論ヲ垂レ、我輩ノ迷霧ヲ解カン事ヲ伏テ冀望ス、恐々謹言、

明治十五年三月廿九日

遠藤 聰知

島田義浩殿

井上七右衛門殿

原 弥一兵衛殿

戸田直藏殿

原田幸八殿

8-20

明治十四年從一月 至十二月

荷質貸付会社出納實際報告表

借方

株金	七、〇〇〇	〇〇〇
貸付金	九六二	五〇〇
利子ノ歩合	月壹割貳分五厘	
雑益	三七八	〇〇〇
總計	八、三四〇	五〇〇
貸方		
貸付金	七、〇〇〇	〇〇〇
利益金分配当	一、二六〇	〇〇〇
給料及ヒ旅費賞与金其他消耗品費	五〇	〇〇〇
十二月末差引残金翌年ニ越高	三〇	五〇〇
總計	八、三四〇	五〇〇

右之通相違無之候也、

南巨摩郡鯉沢村

明治十五年四月一日  
山梨県令藤村紫朗殿

社長

遠藤 聰知

8-21

明治十四年從一月 至十二月

富士川運輸会社出納實際報告表

借方

株金	總高壹万〇五百四十円ノ内収入之分	四、三二〇	〇〇〇
定期預り金		四八	六一六
利子ノ歩合	年壹割貳分		
当座預り金		一〇七、三八八	四二五
無利子			
貸付金	利子ノ歩合	八一七	〇〇七
貸付金	月壹割貳分五厘	一一〇、九九五	五一八
貸金戻り金		二四、九〇九	八五七
積金		二、八一五	四五八
雑益		五、九二六	〇五五
總計		二五七、二二〇	九三六
貸方			
貸付金		一三六、一九五	八七六
利益金分配高		一、七六〇	一九八
給料及ヒ旅費賞与其他消耗品費		二、九九〇	六五九
本社所有品家屋土蔵諸機械備品共		九五〇	〇〇〇
預り金及ヒ一時借用金払戻シ高		一〇六、三二一	一七三
雜費		一、七一四	六一三
十二月末差引残金翌年ニ越高		七、二八八	四一七
總計		二五七、二二〇	九三六

右之通相違無之候也、

社長

遠藤 聰知

明治十五年四月一日  
山梨県令藤村紫朗殿

自明治十二年八月三十日至同十四年十二月三十一日  
運輸会社ニ於テ取扱候船方置錢支出入勘定書

明治十二年

一金貳百五拾四円九拾錢五厘

是者十二年八月三十日調査ニテ残り金額

一金百七拾五円六拾七錢四厘

是ハ明治十二年八月三十日ヨリ同十二月三十一日ニ至ル

鰍沢箱原羽鹿島村ヨリ収入金額

一金五拾七円三拾貳錢

是ハ明治十二年八月三十日ヨリ同十二月三十一日ニ至ル

川内館地附船ヨリ収入金額

一金八拾錢 中村義平次ヨリ収入船税

一金百拾貳円八拾貳錢

是ハ明治十二年七月一日ヨリ十二月三十一日ニ至ル

船方總代給料トシテ取立金額

總計金六百壹円五拾壹錢九厘

此内支払

金三百八拾五円七拾九錢七厘

十二年八月三十日ヨリ十二月三十一日ニ至ル

諸入費及国地方税別冊ニ詳細有之

差引

金貳百拾五円七拾貳錢貳厘

十二年へ繰越金額

明治十三年

一金貳百拾五円七拾貳錢貳厘

十二年ヨリ繰越金額

一金七百六拾三円八拾貳錢

是十三年一月ヨリ十二月三十一日ニ至ル壹ヶ年間

鰍沢箱原羽鹿嶋ヨリ取立之金額

一金百九拾四円六拾四錢三厘

富士川運輸会社

明治十五年役員御届

社長

遠藤 聰知

勘定方兼

副社長

青柳詢一郎

勘定方

新津米造

藏方

田原善造

海野次左衛門

芦澤伊作

雨宮新造

早川和一郎

蒲原出張所

副社長

樋口静一

社中総代

遠藤太郎右衛門

井上長右衛門

中込文吉

明治十五年三月廿九日

明治十五年当社役員前員之通投票ニ依リ決定仕候間、此段御届奉申上候也、

山梨県令藤村紫朗殿

是ハ右同断壱ヶ年間川内館地附船ヨリ取立之金額  
一金壹円貳拾錢

樋口卯八・一ノ瀬卯左衛門ヨリ船税金収入

一金拾壹円三拾四錢

望月新吉破船ノ節入費ノ為ニ金貳拾円貸遣シ候処、頭書之通差引残り

一金貳拾円三拾五錢

十二年中マテ小室納金トシテ一錢ツ、取立之分残り

一金六拾三円八拾五錢

十三年中定例堀川請負金取立之分

總計金千貳百七拾円九拾貳錢五厘

此内支払

金千百五拾八円貳拾三錢壹厘

十三年中諸払金別冊ニ詳細有之

差引金百拾貳円六拾九錢四厘

是ハ十四年へ繰越金額

明治十四年  
一金百拾貳円六拾九錢四厘

十三年ヨリ繰越金額

一金八百六円四拾錢

明治十四年一月ヨリ十二月三十一日ニ至ル壱ヶ年間

鰺沢箱原羽鹿島ヨリ収入金額

一金貳百拾四円六拾七錢

右同断壱ヶ年間川内館地附船ヨリ収入金額

一金貳拾三円七錢貳厘

十三年中定例堀川金取立残り

一金六拾三円七拾五錢

十四年中定例堀川取立之内

一金貳円八厘

十二年中置錢不足ノ補トシテ取立

一金五拾貳円六拾五錢

十四年中破船流失船等へ補助金手当

壱俵引ト唱へ一艘ニ付五十錢ツ、取立之分

總計金千貳百七拾五円三拾四錢四厘

此内支払

金七百五拾貳円九拾錢六厘

十四年中渡金別冊ニ詳細有之

差引金五百貳拾貳円四拾三錢八厘

十四年十二月三十一日改残り

此内

金五拾壹円九拾八錢

収入相済 即チ十三年中流失船破船等へ補助金百七拾八円九拾錢貸与候  
処、納金百貳拾六円九拾貳錢収入ノミ、依テ差引頭書之通ニ不足ス、

金百八拾円

定例堀川残り

差引

金貳百九拾円四拾五錢八厘

運輸会社預リ

8 | 24

明治十三年中船方置錢詳細表

度数

金額

過不足

金額

人名

明治十三年中船方置所詳細表

度數	金額	人名
三〇	五七〇〇	高井元市
二一	四二四〇	雨宮新平
三七	七〇三〇	海野直藏
三五	六六五〇	海野市吉
二〇	三八〇〇	相口市八
二九	五五一〇	佐田常吉
三一	五八九〇	高井常吉
三五	六六五〇	相口永七
三〇	五七〇〇	田原源次
三〇	五七〇〇	相口國吉
三〇	五七〇〇	相口文四郎
三一	五八九〇	海野仲吉
三〇	七二二〇	相口徳吉郎
四一	七七九〇	澤倉定次郎
二九	五五一〇	安春卯作
三九	七四一〇	高井長四郎
三七	七〇三〇	相口清三郎
四〇	七六〇〇	高井和吉
二八	五三二〇	高井和吉

不足金額

山梨縣

運輸會社

度數	金額	人名
三八	七二二〇	高井常吉
二二	四一八〇	高井卯作
三六	六八四〇	神田兵吉
三七	七〇三〇	高井常吉
四二	七九八〇	相口市八
四四	八三六〇	相口市吉
三四	六四六〇	高井常吉
四〇	七六〇〇	高井常吉
三九	七四一〇	高井常吉
三五	六六五〇	高井常吉
三三	六二七〇	高井常吉
二八	五三二〇	中江市
五	九五〇	高井常吉
二八	五三二〇	高井常吉
二九	五五一〇	高井常吉
四〇	七六〇〇	高井常吉
三一	五八九〇	高井常吉
一六	三〇四〇	高井常吉
二二	四一八〇	高井常吉
三〇	五七〇〇	高井常吉
二八	五三二〇	高井常吉
二八	五三二〇	高井常吉



一五二〇	六六〇	三〇〇〇	四九四〇	五三二〇	二八五〇	二二二〇	二六六〇	四九四〇	一八〇〇	三六一〇
八	四	一六	二六	三二	一五	二一	一四	二六	二二	一九
石坂文造	澤田平三郎	澤田長十郎	石坂利平	石坂梅吉	石坂平次	石坂仁吉	石坂安造	石坂源吉	石坂正吉	山下仙吉郎

梨縣

運輸會社

四七五〇	六〇八〇	四五六〇	二六六〇	一五二〇	一四四〇	一五二〇	四七五〇	五三二〇	一九〇	六〇八〇
二五	三二	三四	一四	八	六	八	三五	三八	一	三二
石坂安藏	石坂富造	石坂源吉	石坂政三郎	石坂正吉	石坂源吉	石坂源吉	石坂源吉	石坂源吉	石坂源吉	石坂源吉

梨縣

運輸會社

度数

金額

過不足

金額

人名

明治十四年中船方置錢詳細表

三九	五五二〇	信白増五郎
三二	六〇八〇	信白主 造
三一	六〇八〇	信白新造也
三六	五八九〇	信白清子郎
三一	六八四〇	信白市吉郎
三三	六〇八〇	信白信 者
三三	五七〇	信白王吉作
一一	二二八〇	信白清 者
三〇	五七〇〇	志務榮太郎
三一	五八九〇	信白吉三郎
三〇〇三	七六〇八二〇	

明治十四年中船方置錢詳細表

度数 金額 過不足 金額

人名

山梨縣

運輸會社

三三	六三七〇	信白徳吉郎
三二	六〇八〇	信白三吉郎
二七	五一三〇	信白徳吉郎
四二	七九八〇	信白清 者
三〇	五七〇〇	信白元一
三七	七四三〇	信白直藏
三六	六八四〇	信白直藏
四二	七九八〇	信白直藏
三三	六二七〇	信白直藏
四〇	七六〇〇	信白直藏
三一	五八九〇	信白直藏
三三	六二七〇	信白直藏
四〇	七六〇〇	信白直藏
三六	六八四〇	信白直藏
三三	六二七〇	信白直藏
四一	七七九〇	信白直藏
一〇	一九〇〇	信白直藏
三五	六六五〇	信白直藏
四三	八一七〇	信白直藏
三八	七二二〇	信白直藏

山梨縣	三九	三五	三六	三三	四〇	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三
山梨縣	七四一〇	六六五〇	六八四〇	六二七〇	七六〇〇	六〇八〇	一九〇〇	六八四〇	六〇八〇	六〇八〇	六〇八〇	六〇八〇	六〇八〇	六〇八〇	六〇八〇	六〇八〇	六〇八〇	六〇八〇	六〇八〇	六〇八〇
運輸會社	神田 兵吉	佐野 宗吉	高井 松作	佐野 宗吉	佐野 宗吉	佐野 宗吉	佐野 宗吉	佐野 宗吉	佐野 宗吉	佐野 宗吉	佐野 宗吉	佐野 宗吉	佐野 宗吉	佐野 宗吉	佐野 宗吉	佐野 宗吉	佐野 宗吉	佐野 宗吉	佐野 宗吉	佐野 宗吉

山梨縣	三五	四三	二	三四	三九	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三
山梨縣	六六五〇	八一七〇	三八〇	六四六〇	七四一〇	六〇八〇	七二二〇	四五六〇	六四六〇	五七〇〇	六四六〇	六四六〇	六四六〇	六四六〇	六四六〇	六四六〇	六四六〇	六四六〇	六四六〇	六四六〇
運輸會社	神田 孝吉	佐野 宗吉	佐野 宗吉	佐野 宗吉	佐野 宗吉	佐野 宗吉	佐野 宗吉	佐野 宗吉	佐野 宗吉	佐野 宗吉	佐野 宗吉	佐野 宗吉	佐野 宗吉	佐野 宗吉	佐野 宗吉	佐野 宗吉	佐野 宗吉	佐野 宗吉	佐野 宗吉	佐野 宗吉

三	四	八	一	三	四	三	三	四	四	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	
六四六〇	七七九〇	九一二〇	七七九〇	六〇八〇	九一二〇	五八九〇	五八九〇	七六〇〇	七六〇〇	七〇三〇	六八四〇	六四六〇	六四六〇	七六〇〇	六二七〇	七二二〇	八七四〇	七四一〇	六二七〇	七四一〇	三二二〇
早川良吉	澤村富吉	田原政次郎	海野徳三郎	海野長吉郎	五條甚吉郎	早川巳之作	柳澤源十郎	吉原福吉郎	中井儀平	早川良吉	澤村富吉	田原政次郎	海野徳三郎	海野長吉郎	五條甚吉郎	早川巳之作	柳澤源十郎	吉原福吉郎	中井儀平	早川良吉	澤村富吉

山梨縣

運輸會社

三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
四三七〇	六六五〇	六六五〇	五八九〇	六六五〇	七四一〇	四九四〇	六〇八〇	七四一〇	七〇三〇	七六〇〇	六八四〇	六八四〇	七二二〇	五三三〇	七〇三〇	七七九〇	五八九〇	九六九〇	五七〇〇	七七九〇	七〇三〇
早川良吉	澤村富吉	田原政次郎	海野徳三郎	海野長吉郎	五條甚吉郎	早川巳之作	柳澤源十郎	吉原福吉郎	中井儀平	早川良吉	澤村富吉	田原政次郎	海野徳三郎	海野長吉郎	五條甚吉郎	早川巳之作	柳澤源十郎	吉原福吉郎	中井儀平	早川良吉	澤村富吉

山梨縣

運輸會社



秋山安兵衛  
西八代郡黒沢村  
丸山與一左衛門  
井上 安蔵

全 鴨狩津向村東西河内船方総代

全 共和村船方総代  
河西 信吉

全 若林 市造  
若林 柔右衛門

全 大河内村

芦澤祖一郎  
望月作右衛門

富士川拔達会社々長代

監督 服部新兵衛

全 運輸会社々長代

勘定方 新津 米造

全 青柳会社副社長代

全 秋山 省三

全 黒沢運輸会社

全 望月吉右衛門

8-26

(朱)「甲府紅梅町代言人林闔へ宛テ差出ス詳細書

明治十五年四月廿七日

清水港博運会社ト当清水出張所ト

合併スルニ付、不権衡不完全之要領左ニ

不権衡之主的

第一清水博運会社ト当社清水出張所ト合併ノ旨趣ナルヲ、定約中当社出張所ノ

名称ヲ廃ス明文有之、是レ不権衡ト存ス、

代言人ハ、合併ノ文字アルトキハ、両社ノ名称ヲ存掲スヘキモノト考フ、

第二当清水出張所ノ土蔵・納屋等代金五百円ニテ博運会社へ売却セシハ、之レ

合併ノ旨趣ニ乖戾スルモノト相考フ、何トナレハ、合併スル上ハ敢テ売却スルニ不及、両社互ニ任用スルハ当然可ナルモノト相考フ、  
不完全ノ主的

第一官有地ヲ当社ニ於テ拝借御允許相成ルノ旨趣タル、本県庁ニ於テ運輸之業務ヲ好シ特旨ヲ以、無地料ヲ以御貸渡シ相成ルモノヲ、毫末モ官へ上申セズ博運会社へ又貸セシハ、実ニ誤謬不完全ノ甚シキモノト存ス、

第二蒲原出張所ヨリ清水港へ向ケ運搬スルノ諸貨物ハ、悉皆清水博運会社へ宛テ、清水博運会社ヨリ蒲原へ向ケ運搬スル諸貨物ハ、悉皆蒲原出張所へ宛テ運搬スヘキノ明文ナキハ、實際ニ依リ不完全ノモノトス、  
過日モ本文ハ縷々開陳セリ

8-27

食塩保険受負料、五月一日ヨリ四拾俵ニ付拾壹錢ノ割、

右蒲原出張所へ四月廿七日通知、夫今岩淵へ者蒲原へ通告ノ事ヲ依頼セリ、

8-28

弁明書

今回当社諸帳簿為御検査、御官員御派出之上、御疑問之件々左ニ弁明仕候、  
通船切符各船頭へ売下ケ方、通船切符一枚ニ付三錢六厘之処、右へ手数料ヲ加ヘ売下ケ之御疑問有之、右ハ当社於テハ、切符一枚ニ付三錢六厘之外、毫末モ手数料等ヲ加ヘ売下ケ之義更ニ無之、既ニ御派出御官員ニ於テ切符売下ケ元帳御検査有之処、三錢六厘之外些手数料相加ヘ候義無之ハ明瞭セリ、  
静岡県下庵原郡内房村地先字後口川洲渡之入費等官給有之ヲ、又船頭へ賦課スルノ御疑問有之、右ハ従来難場開鑿之義ハ悉皆官給ヲ以其切ヲ渡ヘ、然ルニ昨

十四年三月中出願致シ候後口川ニ至リテハ、通常ノ洲渡ニ付、是迄船頭一同ニテ負担スヘキ慣例之処、右洲渡ハ非常大金ヲ要シ候見込ニ付、山梨・静岡両御県庁へ向テ難場開鑿へ御組込、官給ヲ以洲渡被仰付度奉出願候処、両御県庁ニ於テ御立会御見分之上、實際多額ヲ要スル事情御洞察之上、両度ニ金百六拾円御下賜相成候ニ付、歟沢・黒沢・青柳三河岸船頭惣代へ、右御下賜金百六拾円

御願

南巨摩郡鰍沢河岸  
富士川運輸会社

静岡県下清水港当社拝借地之義、過日同港博運会社ト合併セシニ付、返地可致御指令拜承、即時御返地可仕候処、博運会社トノ合併定約ハ誤謬ナルニ付、鮑マテ解約ノ運ニ従事シ、名称回復致し度、目下近藤喜則外一名ヲ以、示談トシテ清水港へ出張致居候次第第二付、御返地之義、来ル五月三十日まで御猶予被成下置度、此段奉願候也、

社長

遠藤 聰知

明治十五年四月廿七日

山梨県令藤村紫朗殿

山梨県下鰍沢河岸富士川運輸会社清水出張所ト

静岡県下清水港波止場博運会社ト合併スル条件左ノ如シ

第一条

富士川運輸会社<sup>永太</sup>清水出張所ト清水港博運会社ト合併シ、諸貨物運搬ノ取扱ヲ一ニスヘシ、

第二条

両社合併スル上ハ、両社ノ名称ヲ店前ニ掲クヘシ、

第三条

両社資本金高ヲ左ノ通相定、損益ノ賦課此額ニ依ルヘシ、

博運会社資本金九千五百円也

運輸会社出張所資本金五百円也

第四条

富士川運輸会社拜借庵原郡清水町受新田字向島山梨県官有地官舎共、合併社ノ貨物取扱ヒ所ニ相用ユヘシ、

但シ、官御入用有之節ハ、何時ニテモ返納スヘシ、

第五条

博運会社所有地其他納屋共、前同様合併社ノ貨物取扱ヒ所ニ用ユヘシ、

開鑿御見分願

南巨摩郡鰍沢河岸

富士川運輸会社

昨明治十四年一月中開鑿出願御許可ヲ得候西八代郡栄村之内十島組地先字坊主岩開鑿之義、当時ヨリ着手為致候処、請負職工之者病氣等ニテ遷延致シ、目下皆出来相成候間、何卒御見分被成下置度、奉願候也、

社長

遠藤 聰知

明治十五年四月廿七日

山梨県令藤村紫朗殿

(朱)

「第壹六八八号

書面開届候事、

但、見分日限之義ハ追テ勸業課ヨリ可相達事、

明治十五年五月二日

山梨県令藤村紫朗

第六條

富士川運輸会社蒲原出張所ト清水博運会社トノ間、海上諸貨物運搬等兩社專ラ親和ヲ厚クシ、輸出入トモ悉皆兩社限り取遣スヘシ、

但シ、各荷主直接或ハ繼所名宛有之分ハ此限ニアラス、同業社ノ依頼ニハ必ス応スヘカラス、

右条々定約スル上ハ、互ニ違背スヘカラスト雖トモ、實際施行上不得已差支ノ廉アル時ハ、兩社協議之上改正スル事アルヘシ、依之各自記名押印之上、互ニ交附スル者也、

静岡県下清水湊

波止場博運会社惣代

明治十五年六月七日

鈴木 与平

同

山本三四郎

同

野村通太郎

同

鈴木 圭三

山梨県下鵜沢河岸

富士川運輸会社々長

遠藤 聰知

栗原 隆三

保証

近藤 喜則

8-32

山梨県下鵜沢河岸富士川運輸会社清水出張所ト静岡県下博運会社ト合併スルニ付、本紙約定之外添約スル条件、左ノ如シ、

第一條

富士川運輸会社清水出張所ノ納屋ニテ棟ハ、代金五百円ニテ博運会社ヘ売渡シ、其金額ヲ以本紙第三条ノ資本金額トシ、都テ波止博運会社ノ規則ニ随フヘシ、

第二條

役員勤仕ノ義ハ、事務ノ繁閑ニヨルト雖トモ、当分運輸会社ヨリ名勤仕セシメ、甲信兩國出入ノ諸貨物ヲ重ニ取扱ハシムヘシ、

但シ、給料ハ合併社ヨリ支給スヘシ、

第三條

富士川運輸会社清水出張所ハ、博運会社ト合併之約ヲ擾リニ解キ、独立シテ此業ヲ営ム事アルヘカラス、

但シ、博運会社於テモ、本条同様合併之旨意ヲ固守シ、独立營業ハ致サ、ルヘシ、

第四條

兩社合併親和ノ上、諸貨物運搬ノ業ヲ旺盛ナラシムルハ理ノ然ラシムル処ト雖トモ、若シ不幸ニシテ維持スル不能トキハ、協議ノ上此約ヲ解クヘシ、右条々添約スル上ハ、互ニ違背スヘカラス、為後証各自記名押印之上、互ニ交附スル者也、

静岡県下清水湊

波止場博運会社惣代

明治十五年六月七日

鈴木 与平

同

山本三四郎

同

野村通太郎

山梨県下鵜沢河岸

富士川運輸会社々長

遠藤 聰知

栗原 隆三

保証

近藤 喜則

8-33

御届

庵原郡清水町受新田字向寫山梨県官有地ニ設置シタル富士川運輸会社清水出張所相廢シ候義、本年一月五日御届仕候処、今般再運輸会社清水出張所ノ名称ヲ起シ、博運会社ト合併定約仕、廻漕貨物取扱ヒ候間、此段御届申上候也、

山梨県下 鵜沢河岸

富士川運輸会社々長代

明治十五年六月十日

栗原 隆三

静岡県下 清水港

博運会社総代

山本三四郎

庵原郡長吉川宜英殿

前書届出候二付、奥書候也、

庵原郡清水町受新田

戸長 土屋松太郎

8  
34

契約書

今般山梨県甲斐国拡達会社ヨリ、新水道支消金取立方ヲ引受ケ、尔今拡達社附屬船ヲ水道へ通船許容セラレン事ヲ水道会社へ申込有之ト雖トモ、水道社中ハ発起以来富士川運輸会社ト親睦合議ノ上、官ニ請願シテ水道開鑿費ノ消却方ハ運輸会社ニ於テ負担、且支消金取立方ヲ担任セリ、然ルヲ去ル明治十一年十月中、送達会社ナルモノ甲州鵜沢駅ニ本社ヲ設立シ、駿州岩淵ニ分社ヲ置キ、富士川通船ノ業ヲ起セシヨリ、運輸会社ト送達会社トノ競争ハ變シテ水道支消金取立ノ妨害トナリ、不得止當時支消金取立ヲ中止セシヲ以テ、水道開鑿費ハ之レカ為メ本金へ利子相高ミ、独り水道会社ノ困難ニ立至リ、依テ昨十四年七月水道会社ト運輸会社ト協議ノ上、水道開鑿費支消金取立方ヲ改正、条約之上漸ノ取立ニ着手ナシタルニ、尚又同年十二月中送達会社ヲ回復シテ、鵜沢へ拡達会社ナルモノ設立ナリタルヨリ、再ヒ支消金取立ノ妨害ヲ視ルニ至リタリ、因之視之ハ、今ノ拡達会社ハ曩ノ送達会社ノ再興ナル論ヲ俟タス、依テ水道社中ハ仮令拡達社ニ於テ支消金取立ヲ引受ルモ、同社附属船ハ決シテ入船致サセ間敷旨ヲ決議シ、之レヲ拒絶候事、前件ノ如ク、送達会社ノ由来ヨリ新水道会社ト運輸会社トノ発起以来ノ顛末ヲ縷述シテ、水道会社ト運輸会社ト互ニ十分義務ヲ盡ス為メ、左ノ契約ヲ固守履行ナス可キ事、

第一条

新水道支消金取立方ハ、明治十四年七月中新水道会社ト運輸会社ト約定セシ取立方ヲ履行ナス可キハ勿論、運輸ト新水道ト永ク親睦シテ、互ニ義務ヲ盡ス可キモノトス、

第二条

甲州鵜沢塩商人ハ、運輸会社ノ重立タル株主ナルモノ故、後來総テ蒲原新水道ヲ経テ食塩ヲ輸出シ、岩淵河岸へハ決シテ出荷致ス可カラサル様、運輸会社於テ食塩商人ト定約ヲ取結フヘシ、時宜ニ依リ蒲原ヨリ岩淵へ出荷スルモノアルトキハ、運輸会社ニ於テ其高ヲ取調、水道会社当務ノ検印ヲ請、支消金ヲ取立タル上、出荷スルモノトス、

第三条

新水道会社ハ、拡達社附属船ノ通路ヲ拒絶ナシタル上ハ、後來如何ナル妨害モ難計モノナレハ、運輸会社ハ新水道会社ノ義務ヲ重シ、新水道ノ維持ヲ図ルヘキモノトス、

但、本条拒絶シタル為メ起ル障碍事件ノ諸入費ハ、運輸会社ヨリ総金額ノ七分（仮令ハ金拾円ナレハ金七円）ヲ出金シ、水道会社ヨリ三分（仮令ハ金十円ナレハ金三円）ヲ出金シ、俱ニ盡力スルモノトス、

第四条

水道修繕費ハ、是迄水道社中ノ負担ナレトモ、之レヲ廢シ、以来修繕費金仕出之内、運輸会社於テ一ケ年金百五拾円ヲ出金シ、新水道会社ニ於テ其残額ヲ出金ナシ、決シテ修繕ヲ怠ル可カラス、

第五条

新水道支消金取立方ハ、以来新水道会社役員一名運輸会社蒲原出張所へ出張シテ、上下船積荷送り券面ヲ調査シ、船夫ヨリ支消金ヲ取立ル為メ、左ノ印章ヲ彫刻シ、支消金取入済之証トスルニヨリ、押印無之分ハ運輸会社ニ於テ諸掛リ及ヒ運賃等船夫へ渡サ、ルモノトス、若シ誤テ相渡シタルトキハ、運輸会社ノ弁償タル可シ、

但、本条ノ如ク水道会社ニ於テ支消金ヲ取立ル上ハ、昨十四年約定中支消金取立高百分ノ五（運輸会社へ収入ナス可キ分）ノ手数料ハ自今廢止スルモノトス、

富士川新水道会社

新水道支消金収入済

富士川新水道会社之印章

第六条

支消金ハ、従前富士川全川路ニ係ル上下諸荷物ニ賦課シ、取立来リタルニ、拡達社設立以來新水路ヲ經過スル貨物ノミニ割賦シ取立ツルト雖トモ、後來拡達社ノ閉店ニ至ルトキハ、昨十四年七月ノ約定ニ基キ、富士川全川路ニ係ル諸貨物ニ賦課シ、本年ヨリ向六ヶ年ヲ期シ支消金ヲ取立ツルモノトス、

但、本条ノ如ク富士川全川路ニ係ル諸貨物ヨリ支消金ヲ取立ツルトキハ、十四年ノ約定ニ基キ、運輸会社ヘ支消金取立高ノ百分ノ五手数料ヲ差出ス可シ、

第七条

前条ノ如ク約定スルト雖トモ、若シ拡達社及ヒ其他支消金取立、且運輸会社ヘ妨害障碍トナル会社ヲ設立スルモノアルトキハ、新水道会社ト運輸会社ト協議ノ上、両社ハ之レヲ拒絶スルハ勿論ナルニヨリ、新水路ニ係ル諸貨物ノミニ賦課シテ、支消金ヲ取立ツルトキハ、新水路ハ水道社中ノ所有地ナルヲ以テ、支消金高ノ多寡ハ水道会社ト運輸会社ト合議ノ上之レヲ定ムルト雖トモ、年々水路修繕費ノ多額ヲ要セサレハ、通船スル事能ハサルニヨリ、水道開鑿費支消及ヒ報酬金悉皆相済候後ト雖トモ之レヲ取立、別紙株高二配当分割スルモノトス、但、本条ノ如ク取立ツルト雖トモ、若シ不時之天災等ニテ大雨出水シ大破壊ニ至ルトキハ、同様株金高二賦課シテ出金スルモノトス、

第八条

前条之如ク契約スルト雖トモ、実地施行上之都合ニヨリ、両社協議ノ上改正増補スル事アル可シ、右ハ両社商議ノ上、契約ノ証トシテ各記名調印ノ上、互ニ交附スル者也、

新水道会社

山梨県東八代郡上黒駒村

武藤 藤太

同 県西山梨郡住吉村

坂本 敬義

明治十五年六月十一日

右代兼

山梨県甲斐国東八代郡

御代咲村

古屋 典義

静岡県庵原郡蒲原駅

塩坂長兵衛

佐藤信次郎

平岡 晴次

富士川運輸会社々々長

遠藤 聰知

同 運輸会社

蒲原出張所株主惣代

谷 伊兵衛

長野嘉七郎

樋口 静一

8 | 35

新水道開鑿資本金表

一金千五百円	坂本 敬義
一金千五百円	古屋 典義
一金千	武藤 藤太
一金千五百円	塩坂長兵衛
一金千	平岡久兵衛
一金五百	佐藤信次郎
一金貳百五十拾円	平岡久兵衛
	佐藤信次郎
一金六百円	三浦 千尋
一金七拾円三錢九厘	平岡久兵衛・塩坂長兵衛・佐藤信次郎
一金七拾三円四拾八錢六厘	塩坂長兵衛
一金三百五円九拾八錢八厘	平岡久兵衛
一金六拾九円	山本忠左衛門 外式人

一金四百八拾五円

佐藤信次郎

「塩坂長兵衛」(貼紙消去)

「塩坂長兵衛」(貼紙消去)

潰地代価元金

一金四拾七円七拾貳銭四厘

塩坂勉太郎  
但塩坂長兵衛  
地代金元金

塩坂長兵衛

潰地代価元金

一金貳拾七円四拾四銭八厘

佐藤信次郎

潰地代価元金

一金百貳拾九円拾六銭九厘

平岡久兵衛

小以メ金九千四百〇八円三拾八銭四厘

新規補助社入之部

一金百円

名取善十郎

一金百円

新海 吉哉

一金百円

尾澤 孝治

一金五拾円

高橋 安平

一金百円

内田作右衛門

一金百円

丹澤 以正

一金百円

栗原信近男

栗原 鍋平

一金百円

相川信義女

間瀬 光慶

一金百円

相川 いと

一金貳百円

松村 有信

一金三百円

田中次左衛門

一金三百円

遠藤 聰知

一金千貳百円

青柳詢一郎

一金三百円

小林小太郎

一金貳百円

磯野 忠博

一金貳百円

小林七左衛門

小以メ金三千六百円

一金貳百円

新海幸五郎

一金貳百円

小澤 舟治 外

金壹万三千〇〇八円三拾八銭四厘  
新水道会社

山梨県東八代郡黒駒村

武藤藤太

同 県西山梨郡住吉村

坂本敬義

右代兼

古屋 典義

静岡県庵原郡蒲原駅

塩坂長兵衛

佐藤信次郎

山梨県鮎沢

平岡 晴次

遠藤 聰知

8 | 36

御 伺

昨明治十四年九月今同年十二月迄、蒲原新水道支消金收出残額、別紙之通り有之、然ル処新水道社中ヨリ残額金受取方屢々申出有之ニ付、直ニ同社中へ金額相渡し候テ可然哉、  
右奉伺候也、

富士川運輸会社々々長

遠藤 聰知

山梨県令藤村紫朗殿

明治十五年五月三十日

8 | 37

明治十四年九月十日ヨリ同十二月三十一日マテ、当出張所および岩淵分社ニテ取立候食塩諸荷物支消金調書

一金千五百五拾三円〇九銭八厘

此 記

金千〇四拾四円〇九銭一厘

当社取立高

金五百〇九円〇〇七厘

岩測分社取立高

支払方

金七拾七円六拾五銭

是ハ支消金取立手数料百分ノ五

金貳百円

是ハ九月ノ十二月迄四ヶ月間修繕費立換

金六拾八円八拾五銭三厘

是ハ壹番水門東之方上置根埵メ修繕費金百四拾六円六拾一銭六厘ノ内

官金七拾七円七拾六銭貳厘御下ケ賜リ候ニ付、殘金ハ支消金之内ヲ以仕払可申事、

金七拾七円七拾六銭三厘

是ハ十四年九月・十月兩度修繕請負外ニ付、支消金之内ヲ以仕払可申事、

金貳拾壹円五拾銭

是ハ九月中水神河原堀割兩度之分、運輸・水道折半割合、

小以メ金四百四拾五円七拾六銭六厘

金三百五拾六円七拾三銭

是ハ中郷村示談金返済之節、明治十二年十一月中字土銀行ノ借入金

元利とも支消金取立ノ内ヲ以返金候、

金百三拾五円五拾四銭九厘

是ハ明治十三年二月廿一日平岡久兵衛殿貸渡し候元利金、

小以メ金九百三拾八円〇四銭五厘

差引金六百拾五円〇五銭三厘

右之通相違無御座候也、

明治十五年五月

運輸会社

御中

富士川運輸会社

蒲原出張処

8-38

富士川運輸会社蒲原出張所食塩賄方連合賄方ヲ相廢シ、更ニ別紙方法ヲ以、左ノ人名ニ於テ各自賄方仕候間、此段御通知申上候也、

運輸会社

明治十五年六月十二日

蒲原出張所

塩賄人

齊藤善右衛門

大石 権吉

坪内 利吉

望月平右衛門

沼尻 長平

8-39

食塩賄方改正仕訳書

一 塩戻シ目、従前六十目戻シへ四十目ヲ増シ、正俵壹俵百目戻シ之事、

一 賄料（船ケ運賃繩立繩墨其他手数料藏敷ヲ云）毎船積請之船夫ヨリ、直ニ請

取可申事、

一小俵金三錢六厘

賄料

此仕訳

金壹錢四厘

清水湊ノ船ケ運賃正俵六貫目壹俵

金五厘

会社手数料

金貳厘五毛

藏敷料

金五厘五毛

繩立人足賃

金壹厘五毛

小出し賃

金壹厘五毛

荷卸場附賃

金壹厘五毛

薦切人足賃

金四厘五毛

繩墨丹柄其他一式

小計金三錢六厘

但シ、岩測分社へ船陸運送之分ハ手数料之半額申請候事、

右之通、

新水道社中申合約定書

一新水道発起人持株ハ、猥リニ他人へ譲リ渡スヘカラス、若不得止事情有之トキハ、社中へ申出、其情実ヲ聞糺、譲受人之身元ヲ篤ト取調、水道会社及ヒ運輸会社へ妨害障碍トナラサルモノト見認ムルトキハ、社中ノモノ連署ノ上、讓渡ス可キモノトス、

一前条ノ如ク約定ナシタル上ハ、社中へ密々ニテ讓渡スモノハ、譲リ受渡シノ権力ナキモノトス、

但、同社中へ譲リ渡スハ、此限りニアラス、右之通り申合約定セシ上ハ、互ニ違背ナス可カラス、因テ各々記名調印致シ、後日ノ証ニ供スルモノ也、

新水道社中

静岡県庵原郡

蒲原駅

明治十五年六月十二日

塩坂長兵衛

佐藤信次郎

平岡 晴次

山梨県東八代郡

御代咲村

古屋 典義

同県下

鰺沢村

遠藤 聰知

東八代郡

上黒駒村

武藤 藤太

西山梨郡

住吉村

坂本 敬義

会第十二号

新水道支消金、同社中ヨリ請取方申出候ニ付、処分方御伺出相成候処、右ハ最前新水道社中へ御貸与相成候主意ハ、一時支消金取立中止ノ際、旧興益社ヨリ借用金第十国立銀行へ償却方困難ノ趣ヲ以テ出願ニ対シ特別ノ御詮議ヲ被盡候訳ニ有之、就テハ拝借金証書之義ハ、別紙写之通り指出置候文中ニ支消金取立方法相立之上ハ、運輸会社ヨリ其時ニ上納云々ト有之候上ハ、無論該社員へ可相渡筋ニ無之、直々上納相成候様致度、尤今般御伺書ニ対シ、取立金仕訳帳ヲ閱ミスルニ、修繕費其他償却金支出之廉相見へ、是等ハ一旦県庁ノ允許ヲ得タルモノニ有之ヘク哉、将夕從前新水道社中ニ於テ仕来候比例ニ抛リ候状、果シテ然ハ尤不都合之様被相考候、如何トナレハ運輸会社ハ支消金取立方ノ新水道社中手数料収入依頼ヲ受ケ候迄ニシテ、其修繕等ニハ関係無之モノニ可有之、且運輸会社ニ於テ修繕等負担可致訳ニ候トモ、從前ノ振合ト相違シ、兼テ御貸与金可有之ニ付、其時々御伺出之上、経費支出方許可得筋ニ有之、之ニ因テ考合候ニ、本行金千五百円余ハ、一旦上納相成候上、修繕御下付方御出願可相成義、至当之義ニ付、来ル十日迄者相違全額金一先御上納相成度、此段及御照会候也、

明治十五年六月三日

勸業課長渡部省三

富士川運輸会社々々長

遠藤聰知殿

一金貳千九拾四円五拾四銭 無利息ニシテ本年八月ヨリ来明治十四年七月迄、

式ヶ年置居、同年八月ヨリ明治十九年七月迄之全

五ヶ年賦返納可致約、

此抵当

西山梨郡住吉村ノ内旧上村坂本敬義所有地第三百四十二番分

第貳千四百七十七番迄、合六十四筆、

田畑反別合貳町四反四畝拾三步、但別冊小拾帳相添

此地価金八百八拾三円貳拾三銭

東八代郡上黒駒村ノ内ニテ武藤藤太所有地第四百四十五番ヨリ  
第四百八十五番迄、合三十七筆、

田畑反別合壹町九反式畝八歩 但別冊小拾帳相添

此地価金千三百拾七錢三厘

合反別四町三反六畝式十壹歩

地価金千九百拾六円四拾四錢三厘

此売価金式千七百円也

右ハ、拙者共発起セシ富士川新水道開鑿入費ハ、運輸会社ニ於テ支消金取立償却中之処、鰍沢河岸へ内外用達会社出来セシヨリ運輸会社ニ於テ支消金取立不相成、即今債主へ償却方ニ差支、困却之余リ前書之金額拝借願上、御聞届被下、金式千九拾四円五拾四錢正ニ受取奉拝借候処、相違無御座候、然ル上ハ前頭年賦之通、向明治十九年七月迄ニ悉皆返納可仕候、万一右返納滞候節ハ、前書之抵当売鬻致シ、皆納可仕候、尤今後運輸会社ニ於テ支消金取立之方法相立候上ハ、同会社ヨリ取立金ヲ以、無相違返納可致候、依之無利息年賦拝借金証券券負債主・保証人連署奉差上置候処、如件、

山梨県西山梨郡住吉村第七十番地

明治十二年八月

負債主 坂本 敬義

同東八代郡上黒駒村第壹番地

同 武藤 藤太

同郡御代咲村第七十六番地

同 古屋 典義

富士川運輸会社々長

証人 遠藤 聰知

同 青柳詢一郎

同 磯野 忠博

山梨県令藤村紫朗殿

前書之通、相違無之候也、

右住吉村戸長

第八月

田中 義珍

右上黒駒村

戸長代書役

8-43

蒲原新水道株式譲渡シ定約

蒲原新水道会社株式ヲ今回譲受渡シニ付、所有ノ権限ヲ分ツ、茲ニ甲州社中(甲州社中ト唱フルハ、武藤藤太・坂本敬義・古屋典義、其他新社入名取善十郎外拾八名ヲ云フ)・蒲原社中(蒲原社中ト唱フルハ、塩坂長兵衛・佐藤信次郎・平岡晴次、其他三浦千尋外三人ヲ云フ)之株式所有権ヲ区分シ、甲州社中之所有権ヲ五分、蒲原社中之所有権ヲ五分ト定ム、

但、株式帳ノ金高二依レハ、甲州社中新旧ヲ合スレハ凡六分以上ノ所有権アリト雖モ、酌量概定シテ、本条ノ所有権ト定ム、

蒲原新水道会社甲州社中(前条ノ人名)ノ株式悉皆并新水道発起ノ権ヨリ地券証(新水路及ヒ水道ニ属スル地)ニ至ル迄ノ所有権ヲ金四千六百七拾五円ヲ以テ富士川運輸会社へ譲リ渡スヘシ、

但、地券証其他書換等ハ、可願出分ハ悉ク譲渡人ニ於テ手順ヲ盡スヘシ、且新水道社中定約書其他緊要之書類ハ取調ノ上、運輸会社へ引渡ス可シ、富士川運輸会社ニ於テハ、前条之金額ヲ以テ、蒲原新水道所有権(前条明文之通り)ノ五分ヲ譲リ受クヘシ、金額受渡シ方、左ニ、

一 新水道会社甲州社中ニ於テ、山梨県庁ヨリ拝借金式千〇九拾六円四拾壹錢八厘之内、明治十四年八月分年賦金四百拾九円式拾八錢四厘返納、殘金千六百七拾七円拾三錢四厘ハ、新水道社中拝借金之証書権利ヲ其儘据置、明治十五年八月ヨリ、来ル十九年八月迄、年賦返納ハ富士川運輸会社ニ於テ引受、返納ナス可シ、

一金七百式拾円ハ、此条約施行之当日譲受人ヨリ譲リ渡シ人へ相渡ス可シ、一金式千式百七拾七円八拾六錢六厘ハ、明治十五年十二月分同十九年十二月まで、一ケ年金四百五拾五円五拾七錢三厘ツ、五ケ年賦ヲ以テ譲受人ヨリ譲リ渡シ人へ相渡ス可シ、

新水道発起人(武藤藤太・坂本敬義・古屋典義)ノ所有権ヲ譲リ渡シタル上ハ、富士川運輸会社(譲リ受人)ニ於テ新水道ニ係ル一式ノ公用并社用萬端ノ事務ヲ引受履行ス可シ、

但、山梨県庁ヨリ拝借金殘額金千六百七拾七円拾三錢四厘ニ係ル事務ハ、





一株金五千六百四拾円

此連月累株三千三百五拾株

一純益金四百七拾四円五拾八錢三厘

連月尅株当り金拾四錢壹厘六毛六六六

満尅株当金八拾五錢

借方

株金五千六百四拾円

借入金千五百五拾六円

預り金九千五百五拾七円七拾三錢八厘

予備金三百五拾九円五拾七錢八厘

当季予備金百拾五円六拾五錢八厘

当季純益金四百七拾四円五拾八錢三厘

賞与金四拾円

總計金壹万七千三百四拾三円五拾五錢七厘

貸方

蒲原株金貳百円

第十銀行株金五百円

旧修治金六百九拾四円四拾九錢四厘

難破開鑿金四拾三円貳拾三錢八厘

新納屋建築金貳百〇八円貳拾五錢

貸金壹万三千四百貳拾九円六錢貳厘

質物立換金貳千零八円拾六錢四厘

紙幣有高金貳百六拾四円貳拾四錢九厘

總計金壹万七千三百四拾三円五拾五錢七厘

損益勘定

入方

食塩手数料金四拾壹円八拾七錢

諸荷手数料金六百六拾五円八拾五錢五厘

乗船切符料金八円六拾六錢

利子溜り金六百三拾九円四拾七錢五厘

第十銀行益金四拾貳円五拾錢

蒲原益金拾五円四拾錢

總計金壹千四百拾三円七拾六錢

出方

役員給料金貳百貳拾円

役員派出日当金五拾貳円八拾錢

人足賃払金九拾三円四拾八錢四厘

利子払金三百八円廿五錢八厘

当費金百五円九拾七錢七厘

学校献金三円也

小計金七百八拾三円五十一錢九厘

当季予備金百拾五円六拾五錢八厘

当季純益金四百七拾四円五拾八錢三厘

賞与金四拾円也

總計金壹千四百拾三円七拾六錢

8 | 52

十四年度下半年季諸荷物取扱表

食塩四千八百八拾七錢

手数額金貳拾九円三拾錢九厘

苦菰代金拾貳円五十六錢一厘

穀荷貳千三百三拾壹俵

手数額金四拾壹円九拾五錢八厘

魚類四千六百五拾五俵七分

手数額金九拾三円九十一錢四厘

砂糖七千五百〇三俵五分

手数額金百三拾五円六錢三厘

茶荷六百七拾貳俵三分

手数額金拾貳円拾錢壹厘

豆類五拾七俵

手数額金壹円〇貳錢六厘

藍玉四百四拾六俵六分

手数額金八円〇三錢九厘  
烟草千三百貳拾六俵

手数額金貳拾六円八拾六錢八厘

綿荷貳百八拾俵

手数額金五円〇四錢

雜荷貳萬〇三百八俵六分

手数額金三百六拾五円五拾五錢五厘

綜計四萬千七百六拾七俵七分

此手数額金七百三拾円六拾三錢四厘

前期未納越高金拾六円廿八錢三厘

合計金七百四拾六円九拾壹錢七厘

内現収入

食塩手数料金四拾壹円八拾七錢

諸荷手数料金六百六拾五円八拾五錢五厘

未納越高金三拾九円九拾九錢貳厘

合計金七百四拾六円九拾壹錢七厘

8-53

御願

南巨摩郡鰍沢河岸

富士川運輸会社

静岡県下清水港字向島本県官用地官舎之義、明治九年十月当社出張所建設二付、當時拝借奉出願候処、当社之業体ヲ御推察被成下、無地料ヲ以拝借御許容相成リ、昨十四年迄引続營業致シ来リ、然ル処同年十二月中ニ至リ、不幸ニモ当社連絡之蒸氣船二艘トモ沈没致シ（本年二月廿八日青柳詢一郎之始末書ニ縷術）、一時航海運漕之道ヲ絶ヘ、不得已同港同業之博運会社ト合併之定約ヲ成シ候処、此定約タル合併ノ本旨趣ニ乖リタル段、出張人青柳詢一郎・栗原隆三之專斷誤謬ニ出テ、權利ヲ失シ、当社出張所ノ名称ヲ廢ス而已ナラス、拝借地ヲ又貸スルノ定約ヲ結了シ、不完全モ又甚シ、依テ其後誤謬不權衡タル旨趣ヲ以、私共清水港へ出張、博運会社々々長等へ解約、又ハ改正之義懇談及ヒ候処、其節ハ同社ニ於テ何分誤謬不完全之定約ヲ奇貨トシ、解約改正之運ヒニ至ラス、困却之

余リ、不得已青柳詢一郎外一名ヨリ始末書ヲ以奉懇願候処、名称ヲ廢ス上ハ、速ニ官地并官舎トモ即時返納可致旨御指令相成、恐愕不過之、百方計画ニ困候、全体此定約タル官ニ經伺モ不仕、首免私共於テ出張人へ指揮之不完全ヨリ誤謬之定約ヲ成シ、拝借地ニ対シ、其不都合言フニ、絶ヘタル次第ニ至リ、身軀相谷リ、既ニ解約ヲ法庭ニ訴ヘント欲スル際、睦合村近藤喜則ナル者博運会社ト当社トノ中間ニ立テ理害を証明相成候ニ付、博運会社ニ於テモ漸々其理ニ伏シ、先キノ定約ヲ解キ、今回更ニ別冊之通定約致シ候間、何卒前陳之旨趣御洞察之上、寛大之御尊慮ヲ以、明治九年十月拝借御許容相成候同港向島本県官用地・官舎トモ其儘繼續御貸渡シ被成下置度、此段奉懇願候也、

社長

明治十五年六月廿四日

遠藤 聰知

山梨県令藤村紫朗殿

〔第二七一九号〕

書面願之趣、特別之詮議ヲ以テ聞届候条拝借証書可指出事、

但、条約改正之都度可届出事、

明治十五年七月五日

山梨県令藤村紫朗印

別冊者博運会社ト取結ヒタル本定約而已ノ全文ナリ、

8-54

盟約証

当博運会社ノ儀、去明治十三年六月中、社益一・二等專業ニ区分配当方約定ヲ為シ、続テ明治十四年十月中当社ノ都合ニヨリ指名ヲ以テ荷主ヨリ別段依頼有之荷物ニ限り社中各自へ為取扱候処、今般更ニ都合モ有之候間、社益一・二等配当ノ区分ヲ廢シ、各自取扱荷物約定ニ基キ、自今取扱人ヨリ左ノ割合口錢ヲ差出サシメ、尚其約定ノ旨意ヲ固フス、

一 汽船積口錢、運賃高金一円二付五錢、内二錢社益・三錢取扱人、

一同揚口錢、同一箇ニ付壹錢五厘、皆社益、

一 帆走和船積揚口錢、取上ケ高、四分社益・六分取扱人、

但、本案収入法ハ、汽船ハ静隆社、帆走及大廻ハ船宿へ依頼シ、博運会

社へ直ニ差出シ可申、小廻船ハ一ヶ月毎ニ取調、各自ヨリ会社へ差出シ可申候、

一上ケ荷運賃掛リハ、各自ヨリ其船ニ直ニ払渡スヘシ、

一汽・和兩船ノ別ナク、諸揚積荷物、博運会社宛ハ勿論、荷主ヨリ別段指名無之分ハ、総テ会社ニ於テ取扱ヲ為スベシ、

如斯約定スル上ハ、益会社ノ保獲盛大ナラン事ヲ謀リ、前条各款必違背致ス間敷候、若此約定ニ従ワサル者ハ、縦令荷主ヨリ何等ノ囑托アルモ、其旨ニ応セス、却テ取前盟約及ヒ規則ヲ確守可致候、依之社中連署、後日ニ証スルモノ也、但、本條款ニヨリ荷主揚積業ヲ致ス者ハ、其旨別ニ以書面会社へ可届出、

明治十五年六月

和田 勘藏

間瀬卯兵衛

青木 久吉

山梨九兵衛

風間邦之助

芹沢 文吉

柴田五左衛門

北村仁平二

遠藤重三郎

望月万右衛門

松浦安兵衛

樋口亥三郎

吉川源太郎

杉山作平二

沢埜 虎造

川口 清二

遠藤 市造

外木平十郎

日比忠三郎

三浦宇右衛門

山本三四郎

鈴木 与平

山本長兵衛

北村喜世松

喜多村仁三郎

日比幸二郎

石ノ 源七

深江 仙助

中泉 昇平

中井俊之助

小川藤兵衛

天埜九右衛門

北村新兵衛

保田 七郎

八木甚四郎

山本六左衛門

塩崎善太郎

月浦与四郎

塩崎兵四郎

山田 惣七

山田次三郎

山本佐十郎

鈴木 平六

山本九兵衛

松浦市兵衛

荒木 直吉

山本太右衛門

山本 新助

松永 けい

池田甚三郎

保田 七郎

土谷源兵衛

池田 次助

石埜長十郎

坪井平五郎

山田源兵衛

野村通太郎

鈴木 圭三

以上

8  
55

御 届

南巨摩郡鯉沢村

富士川運輸会社

蒲原ノ新水道支消金取立方ニ付、昨十四年七月中新水道会社卜別冊謄写之通、仮定約ヲ結了致シ候間、御聞置被成下度、此段御届奉申上候也、

社長

明治十五年六月卅日

遠藤 聰知

山梨県令藤村紫朗殿

別冊者、明治十四年七月廿六日取結ヒタル仮定約全文ナリ、

富士川運輸合資会社  
利益金配当及損益金 精算表

明治四十四年九月 委員

9-1

明治四十四年自一月至十二月

壹箇年間決算報告書

収入之部

- 一金貳拾錢也 前期繰越金
- 一金四百円也 蒲原運輸解散割戻金
- 一金六円四拾錢 四十五年六月五日日市川銀行利子
- 一金六円九拾五錢 四十四年十二月七日同銀行利子
- 一金貳百貳拾円也 四十四年請負料
- 計金六百參拾參円五拾五錢

支出之部

- 一金壹百円也 四十四年度町役場敷地倉庫料
- 一金拾円五拾錢 同年九月總會費
- 一金九拾九錢 罫紙帳簿三冊代金払
- 一金六円六拾九錢 地租及法人税
- 一金六円三拾錢 小林林平謝礼甲斐縮巻反
- 計金百貳拾四円四拾八錢

差引

金五百〇九円〇七錢

内

- 金五拾円也 本館建物ヨロビ越シ並ニ床下土出シ石入材料一切
- 金貳拾五円也 本館外側洪水取付一切

金貳拾円七拾錢 九月廿三日暴風ノ為本館並ニ倉庫屋根手入  
差引

金四百拾三円三拾七錢

内

- 金四百円也 株主配当 但シ、壹株ニ付金五拾錢
- 金拾三円三拾七錢 后期繰越金
- 計

9-2

一遠藤三郎請負期限満期ニ付、大正二年壹月ヨリ同四年十二月迄、參箇年間、  
壹箇年請負料金貳百貳拾円ヲ以テ、遠藤三郎・海野次左衛門兩人継続請負承  
諾之事、  
右之通候也、

大正元年十月廿二日

委員

- 原田 幸八 印
- 原田弥市右衛門 印
- 中込 文吉 印
- 雨宮 伊八 印
- 青柳 禮之 印
- 秋山八十郎 印

9-3

配当金領収株主人名

- 一八拾四株 此配当金四拾貳円也 雨宮英一郎 印
- 一八拾株 此配当金四拾円也 遠藤 三郎 印
- 一八拾株 此配当金四拾円也 原田 幸八 印
- 一四拾六株 此配当金四拾円也 中込 文吉 印

- 此配当金貳拾參円也  
一四拾株 嶋田 正巳<sup>印</sup>
- 此配当金貳拾円也  
一參拾八株 井上長右衛門<sup>印</sup>
- 此配当金拾九円也  
一參拾五株 青柳 禮之<sup>印</sup>
- 此配当金拾七円五拾銭  
一參拾五株 新津 米造<sup>印</sup>
- 此配当金拾七円五拾銭 請取候也  
一參拾五株 中村カメヨ
- 此配当金拾七円五拾銭  
一參拾參株 原田弥市右衛門<sup>印</sup>
- 此配当金拾六円五拾銭  
一參拾株 秋山八十郎<sup>印</sup>
- 此配当金拾五円也  
一貳拾五株 折居彦十郎<sup>印</sup>
- 此配当金拾貳円五拾銭  
一貳拾貳株 海野次左衛門<sup>印</sup>
- 此配当金拾壹円也 受取候也  
一貳拾株 芦澤 伊作<sup>印</sup>
- 此配当金拾円也  
一貳拾株 原 準太郎<sup>印</sup>
- 此配当金拾円也  
一貳拾株 伴野和三部
- 此配当金拾円也 十月廿四日代人矢崎トメジ<sup>印</sup>  
一貳拾株 雨宮 伊八<sup>印</sup>
- 此配当金拾円也  
一拾六株 望月 市造<sup>印</sup>
- 此配当金八円也 十月廿四日受取申候也<sup>印</sup>  
一拾五株 深澤 徳平<sup>印</sup>
- 此配当金七円五拾銭 第十月廿四日受領<sup>印</sup>  
一拾四株 原弥市兵衛<sup>印</sup>
- 此配当金七円也 代人嶋田延八十月廿四日受取<sup>印</sup>  
一拾壹株 中嶋 致恭<sup>印</sup>
- 此配当金五円五拾銭 受領<sup>印</sup>  
一拾株 志村 和作<sup>印</sup>
- 此配当金五円也 受取<sup>印</sup>  
一拾株 青柳聰太郎<sup>印</sup>
- 此配当金五円也 正二受取候也  
一八株 依田久太郎<sup>印</sup>
- 此配当金四円也 受取<sup>印</sup>  
一六株 野澤 市蔵<sup>印</sup>
- 此配当金參円也  
一六株 遠藤 安吉<sup>印</sup>
- 此配当金參円也 十月廿四日正二領収  
一五株 早川 治一<sup>印</sup>
- 此配当金貳円五拾銭 十月廿四日正二領収  
一五株 井上龜次郎<sup>印</sup>
- 此配当金貳円五拾銭 大正元年十月廿四日受取候也  
一五株 中込善左衛門<sup>印</sup>
- 此配当金貳円五拾銭 十月廿四日領収<sup>印</sup>  
一四株 秋山ソネジ<sup>印</sup>
- 此配当金貳円也<sup>印</sup>  
一參株 河住忠右衛門<sup>印</sup>
- 此配当金壹円五拾銭  
一貳株 矢崎 久平<sup>印</sup>
- 此配当金壹円也 請取  
一貳株 坂本 茂七<sup>印</sup>
- 此配当金壹円也<sup>印</sup>  
一貳株 雨宮 芳蔵<sup>印</sup>
- 此配当金壹円也 受取  
一貳株 依田 米作<sup>印</sup>
- 此配当金壹円也 大正元年拾月廿四日  
一壹株 青柳太八郎<sup>印</sup>

此配当金五拾銭<sup>印</sup>

一 壹株 青柳 榮吉<sup>印</sup>

此配当金五拾銭<sup>印</sup> 代人芦沢伊作

一 壹株 早川和一郎<sup>印</sup>

此配当金五拾銭<sup>印</sup>

一 壹株 樋口長三郎<sup>印</sup>

此配当金五拾銭

一 壹株 橋爪 昌成

此配当金五拾銭<sup>印</sup>

一 壹株 依田忠次郎<sup>印</sup>

此配当金五拾銭 大正元年拾月廿四日

一 壹株 井上徳十郎<sup>印</sup>

此配当金五拾銭

一 壹株 高木多氣三<sup>印</sup>

此配当金五拾銭

一 壹株 依田 源八<sup>印</sup>

此配当金五拾銭

一 壹株 海野 只市<sup>印</sup>

此配当金五拾銭

一 壹株 遠藤 民平<sup>印</sup>

右之通候也、

大正元年十月廿二日

9-4

大正元年一月ヨリ大正二年六月マデ

壹ヶ年半決算報告書

収入之部

一金参百参拾円也 大正元年度分・大正二年半期分請負料

一金九円五十銭 会社建築費残額

一金二十四銭 大正二年六月原田様ヨリ入金

計金参百参拾九円七十四銭

支出之部

一金壹百円也 大正元年度分役場へ収め金

一金六円八十一銭 宅地租法人家屋税

一金二十銭 桐苗植込人夫賃

一金参円七十五銭 桐苗百五十本代金

一金五十銭 堀上ヶ人夫賃

一金四円二十四銭五厘 宅地租法人家屋税

計金壹百拾五円五十銭五厘

差引金貳百貳拾四円貳拾参銭五厘

以上、

9-5

大正二年七月ヨリ大正三年六月マデ

壹ヶ年間決算報告書

収入之部

一金貳百貳拾円也 一ヶ年間請負料

一金貳拾円也 蒲原運輸会社清算準備金配当金

計金貳百四拾円也

支出之部

一金壹百円也 大正二年四月ヨリ大正三年三月マデ役場へ収め金

一金壹円八十八銭 大正二年度第一期分地租割

一金貳円五十七銭 大正二年度第二期畑租雑地租

一金壹円五十二銭五厘 大正二年度第二期県税地租割

一金貳円五十七銭 大正二年度第二期畑租雑地租

一金参円六十四銭 大正二年度法人家屋税町税雑種税

一金六十七銭五厘 大正二年度第二期宅地租

一金壹円五十三銭五厘 大正三年度県税地租割

一金六十七銭五厘 大正三年度地租附加税全期分

一金二円五十七銭 大正三年度第一期畑租雑地租

一金三円六十四銭 大正三年度第一期県税法人家屋税  
 計金壹百貳拾貳円四十八銭  
 差引

金壹百拾七円五十銭

以上、

9-6

大正三年七月ヨリ大正四年十二月マデ

壹ヶ年半決算報告書

収入之部

一金壹百參拾円也 大正三年七月ヨリ大正四年十二月マデ請負料の内

大正三年・大正四年度役場へノ納め金差引

一金貳円貳拾七銭 大正四年度下半年市川銀行利子

一金貳円四拾六銭 大正五年度上半年市川銀行利子

計金壹百參拾四円七十四銭

支出之部

一金壹円五十三銭五厘 大正三年第二期県税地租割

一金貳円五十七銭 大正三年第二期畑租雑地租

一金參円六十四銭 大正三年第二期県税法人家屋税

一金壹円十五銭五厘 大正四年地租附加税全期分

一金壹円四十七銭五厘 大正四年第一期県税地租割

一金三円六十四銭 大正四年第二期県税地租割

一金三円六十四銭 大正四年第一期県税法人家屋税

一金三円六十四銭 大正四年第二期県税法人家屋税

一金二円四十六銭 大正四年第一期畑租雑地租

一金二円四十六銭 大正四年第二期畑租雑地租

一金六十七銭五厘 大正四年第一期宅地租

一金六十七銭五厘 大正四年第二期宅地租

一金貳円也 大正元年本社宅修繕の時茶菓子代金

一金貳円也 大正三年出水本社修繕費

一金壹円三十銭 社宅倉庫瓦差かへ人夫賃

一金五十銭 同人足一人  
 一金五十銭 瓦三十枚代金  
 計金參拾壹円七十銭  
 差引

金壹百〇參円〇參銭

以上、

9-7

大正五年一月ヨリ十二月マデ

壹ヶ年間決算報告

一金壹百七十円也 大正五年度請負料

一金貳円參拾九銭 壹月ヨリ十二月マデ市川銀行利子

計金壹百七十二円參拾九銭

支出之部

一金五拾円也 大正五年四月ヨリ大正六年三月マデ役場へ収金

一金六拾七銭五厘 大正五年度第二期宅地租

一金六十七銭五厘 大正五年度第一期宅地租

一金壹円六十三銭 大正五年第一期地租割

一金壹円六十三銭 大正五年第二期地租割

一金壹円十五銭 地租割附加税全期分

一金貳円四十六銭 大正五年度第一期畑租雑地租

一金貳円四十六銭 大正五年度第二期畑租雑地租

一金三円六十四銭 大正五年第一期県税法人家屋税

一金三円六十四銭 大正五年第二期県税法人家屋税

計金六十七円九十六銭

差引

金壹百〇四円四十三銭

以上、

大正元年一月ヨリ大正五年十二月マデ  
五ヶ年間総決算報告

収入之部

- 一金拾参円参拾七銭 前期繰越金
- 一金貳百貳拾四円貳拾参銭五厘 大正元年一月ヨリ大正二年六月マデ決算
- 一金壹百拾七円五拾貳銭 大正二年七月ヨリ大正三年六月マデ決算
- 一金壹百〇参円〇参銭 大正三年七月ヨリ大正四年十二月マデ決算
- 一金壹百〇四円四十三銭 大正五年度決算
- 一金六円三十銭 市川銀行利子
- 一金三十四銭 市川銀行利子
- 一金三十五銭 市川銀行利子
- 一金壹円七十四銭 市川銀行利子
- 計金五百七拾壹円参拾壹銭五厘

支出之部

- 一金五拾円也 海野氏退社慰勞贈與金
- 差引
- 一金五百貳拾壹円参拾壹銭五厘
- 内金
- 一金壹百貳拾円也 倉庫修繕費
- 金四百円也 株主配当金 一株に付五十銭
- 差引
- 金壹円参拾壹銭五厘 後期繰越金

一 遠藤三郎請負期限満期に付き、大正六年一月より大正八年十二月まで、参ヶ年間参ヶ年請負料（役場への納め金・敷地料・倉庫料減額分金五拾円也は、請負者の所得とする故）金壹百七拾円也を以つて継続請負承諾の事、右之通りに候也、

大正六年

委員

原田 幸八 印

配当金領収株主人名

- 一八拾四株 此配当金四拾貳円也 印 受取 雨宮英一郎 印
- 一八拾株 此配当金四拾四円也 印 遠藤 三郎 印
- 一八拾株 此配当金四拾四円也 印 原田 幸八 印
- 一四拾六株 此配当金四拾参円也 印 中込 文吉 印
- 一四拾株 此配当金貳拾四円也 印 島田 正巳 印
- 一参拾八株 此配当金拾九円也 印 井上長右衛門 印
- 一参拾五株 此配当金拾七円五十銭也 印 青柳 礼之
- 一参拾五株 此配当金拾七円五十銭也 印 新津 米造 印
- 一参拾五株 此配当金拾七円五十銭也 印 四月十二日領収候也 中村カメヨ
- 一参拾参株 此配当金拾六円五十銭也 印 原田弥一右衛門 印
- 一参拾株 此配当金拾五円也 印 秋山八十郎 印
- 一貳拾五株 折居彦十郎 印

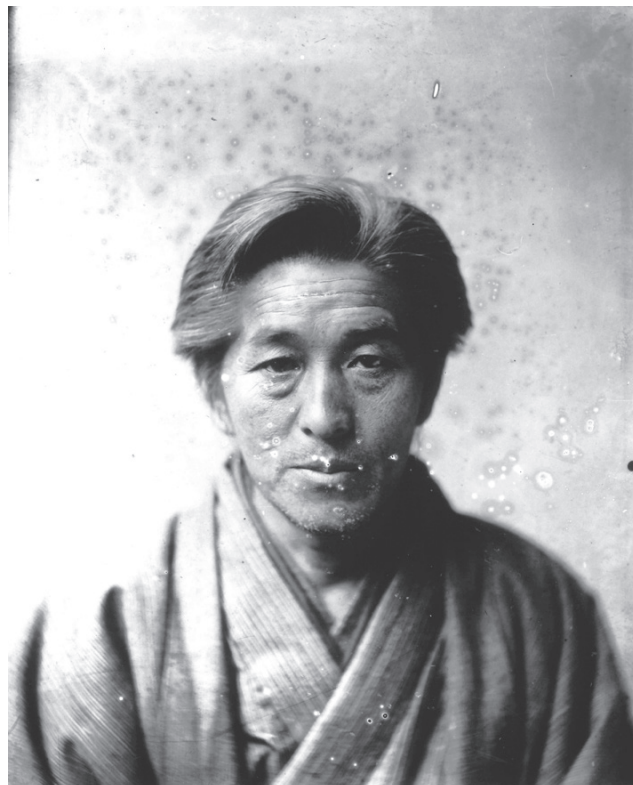
原田弥一右衛門 印  
秋山八十郎 印  
青柳 禮之 印  
雨宮 良輔 印  
中込 文吉 印

- 此配当金拾貳円五十銭<sup>印</sup>  
一貳拾貳株 海野治左衛門<sup>印</sup>
- 此配当金拾壹円也 四月十二日領収候也  
一貳拾株 芦澤 伊作<sup>印</sup>
- 此配当金拾円也<sup>印</sup>  
一貳拾株 原 準太郎<sup>印</sup>
- 此配当金拾円也 受取  
一貳拾株 雨宮 良輔<sup>印</sup>
- 此配当金拾円也<sup>印</sup>  
一貳拾株 伴野和三郎<sup>印</sup>
- 此配当金八円也  
一拾六株 望月 市造<sup>印</sup>
- 此配当金七円五十銭也  
一拾五株 深澤 徳平<sup>印</sup>
- 此配当金七円也  
一拾四株 原弥一兵衛<sup>印</sup>
- 此配当金五円五十銭  
一拾壹株 中島 致恭<sup>印</sup>
- 此配当金五円也  
一拾株 志村 和作<sup>印</sup>
- 此配当金五円也  
一拾株 青柳總太郎<sup>印</sup>
- 此配当金四円也  
一八株 依田久太郎<sup>印</sup>
- 此配当金參円也  
一六株 野澤 市蔵<sup>印</sup>
- 此配当金參円也  
一六株 遠藤 安吉<sup>印</sup>
- 内貳円五十銭 四月十二日領収候也  
一五株 早川 治一<sup>印</sup>
- 此配当金貳円五十銭  
一五株 井上龜二郎<sup>印</sup>
- 此配当金貳円五十銭  
一五株 中込善左衛門<sup>印</sup>
- 此配当金貳円也  
一四株 秋山ソネジ<sup>印</sup>
- 此配当金壹円五十銭  
一參株 河住忠右衛門<sup>印</sup>
- 此配当金壹円也  
一貳株 矢崎 久平<sup>印</sup>
- 此配当金壹円也  
一貳株 坂本 茂七<sup>印</sup>
- 此配当金壹円也<sup>印</sup>  
一貳株 雨宮 芳三
- 此配当金壹円也  
一貳株 英一郎<sup>印</sup>受取
- 此配当金壹円也  
一貳株 依田 米作<sup>印</sup>
- 此配当金五十銭也  
一壹株 青柳太八郎<sup>印</sup>
- 此配当金五十銭  
一壹株 青柳 栄吉<sup>印</sup>
- 此配当金五十銭  
一壹株 早川和一郎<sup>印</sup>
- 此配当金五十銭  
一壹株 樋口長三郎<sup>印</sup>
- 此配当金五十銭  
一壹株 橋爪 昌成
- 此配当金五十銭<sup>印</sup>  
一壹株 遠藤三郎受取<sup>印</sup>
- 此配当金五十銭  
一壹株 依田忠二郎<sup>印</sup>
- 此配当金五十銭  
一壹株 井上徳十郎<sup>印</sup>
- 此配当金五十銭  
一壹株 高木多氣三
- 此配当金五十銭<sup>印</sup>  
一壹株 遠藤三郎受取<sup>印</sup>
- 此配当金五十銭  
一壹株 依田 源八<sup>印</sup>





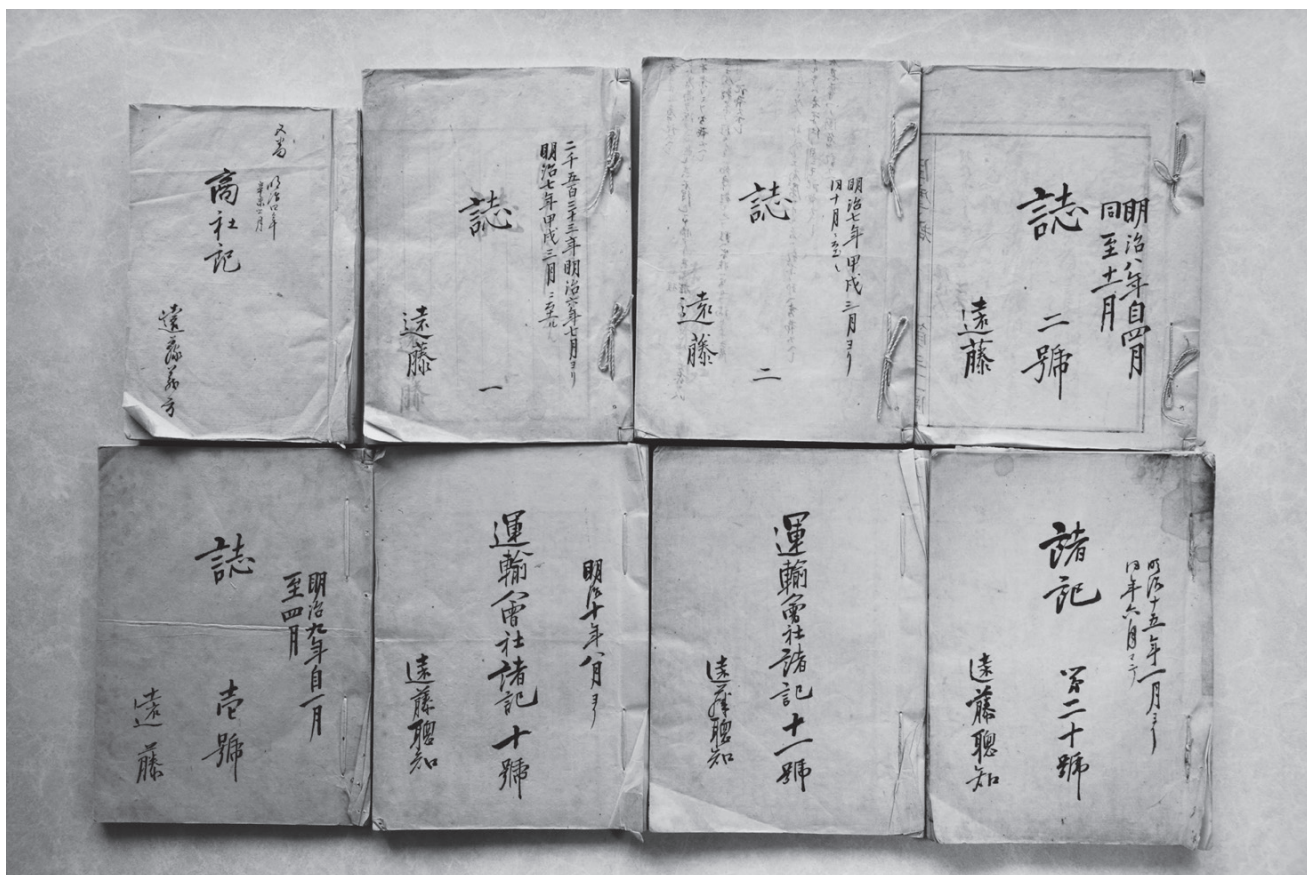
富士川運輸会社 社屋か



晩年の遠藤聰知



鮎沢河岸の荷置台



再発見された『遠藤聰知 記録』

## 遠藤隆夫さん

この写真は、富士川運輸会社三代目社長 遠藤三郎さん夫妻を中心に、近所の親しい人々が集まって撮影された一枚である。上部の人名を書いておいてくれたのは、三郎さんの姉の孫娘 原規子（のりこ）さんである。

この写真の中央の子供が、遠藤隆夫さんである。原さんは、大正十三年（一九二四）生まれの隆夫さんが二歳くらいであるとみて、大正十五年頃の写真と推定されたのだろう。誠にありがたい、貴重な記録である。

本書の文献や写真は、遠藤隆夫さんの収集に大きく依存している。それを富士川町教育委員会に寄贈してくださったのが、隆夫さんの弟 長次郎さんの妻 遠藤明子さん。写真や遠藤家のデータをご提供いただいたのが、隆夫さんの姪 加部公子（かべ きみこ）さんである。

そのうちの二十冊に及ぶスタックブックにコピーされた『遠藤聰知記録』を、再コピーして二冊のバインダーに再編したのが富士川町教育委員会の望月大輔さん。それをひたすらパソコンに入力してくださったのが内田五十鈴さんである。また、今回は大小様々な図表を十七点、そのままスキヤナーで取り込んで表示した。サンニチ印刷の編集の方にもご苦労をかけた。この他にも、多くの方々のご援助をうけ、何とか本書をまとめることができた。入稿直前、実物が出現したことも、嬉しい驚きであった。

遠藤隆夫さんのめざした家史と本書は、かなり隔たりがあるかも知れないが、その共通の出発点として、この写真を掲げておきたいと思う。

大正十五年頃 遠藤家前庭

上南町

志村武

入所

遠藤リョウの父

遠藤三郎

長男 隆夫

○○○○

遠藤ぼよこ

鬼島

明神町 砂子屋

戸田泰明

海野よしけ

上南町

柳井 主計の祖母



協力者 遠藤 明子

加部 公子

内田五十鈴

新津 健

長澤 麻理

望月 香織

松田香代子

富士川町教育委員会  
担当 望月 大輔

富士川町郷土資料叢書 7

富士川水運資料③

遠藤明子氏寄贈

富士川運輸会社社長

遠藤 聰知 記録

二〇二三年（令和四年）十一月三十日発行

〒四〇〇一〇六〇一

富士川町鰯沢一六三九一

発行 富士川町教育委員会

印刷 株式会社サンニチ印刷



